BULLETIN of
Archaeological Research Center
Okayama University
2010

Archaeological Research Center, Okayama University
3-1-1 Tsushima-Naka Kita-ku Okayama-city, 700-8530 Japan
http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　紀　要　2010

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要
2010

2012年3月
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2010

2012年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

2010（平成22）年度は、鹿田キャンパスを中心に、古代以来の土地区画制度である条里制や、有力な荘園であった「鹿田荘」についての理解が大きく進んだ一年でした。

鹿田地区では、岡山大学病院の正面玄関を中心に環境整備が実施され、徒歩でのアプローチはガラスの庇で雨を避けることができるようになりましたが、この工事に先立つ調査で、小さい発掘ながら大きな発見を得ることができました。第21次調査A・B地点と名付けられた、一辺10mにも満たない小さな二つの発掘区で、両方を結ぶとわずかに「く」の字に屈曲する溝がみつかったのです。注意をしなければそのままで終わってしまう屈曲でしたが、これこそ岡山平野の北半に広がる正方位に近い条里と、やや傾いた「鹿田条里」との接点であり、両者の関係をつかむ大きな手がかりが得られました。

こうした発見もふまえ、2011（平成23）年１月には、「謎の荘園 鹿田荘―集落･条里･領域―」と題して第12回岡山大学キャンパス発掘成果展が開催され、シンポジウムではこの地域の発掘調査を実施している岡山県教育委員会や岡山市教育委員会の方々とともに、それぞれの遺跡の実態や動態を比較検討することができ、参加された多くの方々からも好評の声が聞かれました。鹿田荘の謎は、解明に向かって大きく動いているように感じられます。展示とシンポジウムにご協力いただきました皆様に厚くお礼申しあげます。

この年度が終わりに近づくころ、東日本が甚大な災害に襲われました。遺跡に残されていた過去の津波の痕跡を発掘していた研究者の間では、もっと警鐘を鳴らしておくべきだったと悔やむ声も聞かれます。岡山平野の遺跡にはそれほど激しい災害の痕跡は確認されていませんが、弥生時代の終わりごろに広い範囲を襲った洪水の痕跡をはじめとして、水害は比較的頻繁に生じていたようです。しかし、水田を埋め尽くし甚大な被害をもたらした洪水も、一方では土砂の堆積によって新しい耕地を生みだし、災害に立ち向かう新しい技術が農業の発達を支えていったようにみえます。「鹿田条里」の地域も、そうして生みだされた＜再開発地域＞の新興拠点として新しい物資流通を担っていったものと思われます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
センター長（理事）　北　尾　善　信
副センター長（大学院社会文化科学研究科教授）　新　納　　泉

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010

目　　次

第Ⅰ部　2010年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの諸活動･業務報告

第１章　津島岡大遺跡の調査研究

第１節　発掘調査の概要…… 1
１．津島岡大遺跡第33次調査（薬学部）……（野崎貴博）1
２．津島岡大遺跡第34次調査（国際交流会館）……（光本　順）7
第２節　試掘・確認調査の概要…… 7
１．国際交流会館新営予定地……（岩崎志保）7
２．生協プレハブ設置予定地……（野崎）10
第３節　立会調査の概要……（野崎）11
１．調査の実施状況…… 11
２．薬学部改修電気設備工事…… 12
３．その他の調査地点…… 13
第４節　津島岡大遺跡の研究…… 17
縄文時代後期～「突帯文期」におけるマメ・イネ圧痕 ……（山本悦世）17

第２章　鹿田遺跡の調査研究

第１節　発掘調査の概要…… 27
１．鹿田遺跡第20次発掘調査Ｃ・Ｄ地点（中央診療棟）……（岩﨑）27
２．鹿田遺跡第21次発掘調査（外来診療棟周辺他環境整備）……（光本）30
第２節　試掘・確認調査の概要…… 31
１．岡山県地域医療総合支援センター予定地……（野崎）31
第３節　立会調査の概要…… 33
１．調査の実施状況……（野崎）33

第３章　調査資料の整理・研究および公開・活用

第１節　調査資料の整理・研究……（野崎）36
１．調査資料の整理…… 36
２．調査資料の保存処理…… 36
第２節　調査成果の公開・活用…… 36
１．公開・展示……（光本）36
２．資料・施設等の利活用……（野崎）38
第３節　2010年度調査研究員の個別研究活動…… 41
１．科学研究費…… 41
２．論文・資料報告…… 41
３．研究発表など…… 41

４．講演など…… 41
５．資料収集・実態調査…… 42

第４章　2010年度における調査・研究のまとめ……（野崎）43

付　編
１．岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程…… 44
２．2010年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織…… 46
３．岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項…… 46

第Ⅱ部　岡山大学構内遺跡発掘調査報告

第１章　津島岡大遺跡第34次調査
第１節　調査の経緯と経過……（光本）67
１．調査に至る経緯…… 67
２．調査体制…… 67
３．調査の経過…… 68
第２節　調査の記録…… 69
１．調査地点の位置…… 69
２．層序と地形…… 69
⑴　層序…… 69
⑵　地形…… 73
３．遺構と遺物…… 73
⑴　弥生時代の遺構・遺物…… 75
ａ．畦畔…… 75
ｂ．溝…… 75
⑵　近世の遺構・遺物…… 76
ａ．土坑…… 76
⑶　包含層出土遺物・遊離遺物…… 81
第３節　自然科学的分析……（㈱古環境研究所）82
１．植物珪酸体分析…… 82
２．花粉分析…… 86
第４節　結語……（光本）90

第２章　鹿田遺跡第21次調査
第１節　調査の経緯と経過……（光本）95
１．調査に至る経緯…… 95
２．調査体制…… 95
３．調査の経過…… 95
第２節　調査の記録…… 98
１．調査地点の位置…… 98

２．第21次調査Ａ・Ｂ地点…… 99
⑴　層序と地形…… 99
ａ．層序…… 99
ｂ．地形…… 101
⑵　遺構と遺物…… 102
ａ．平安時代の遺構・遺物…… 103
ｂ．鎌倉時代の遺構・遺物…… 104
３．第21次調査Ｄ地点…… 106
⑴　層序と地形…… 106
ａ．層序…… 106
ｂ．地形…… 107
⑵　包含層出土遺物…… 108
第３節　自然科学的分析……（能城修一）109
１．鹿田遺跡第21次調査で出土した木製品の樹種…… 109
第４節　結語……（光本）110
写真図版…… 111

挿　図　目　次

第Ⅰ部

第１章

図１　調査地点の位置…… 2
図２　土層柱状図…… 3
図３　縄文時代の遺構平面図…… 4
図４　弥生～古代の遺構平面図…… 5
図５　中世の遺構平面図…… 6
図６　調査地点の位置…… 7
図７　土層柱状図…… 8
図８　調査地点の位置…… 10
図９　土層断面図…… 11
図10　土層断面図…… 12
図11　土層柱状図…… 13
図12　土層柱状図…… 13
図13　2010年度の調査地点【１】
－津島地区－…… 15～16
図14　調査遺跡の位置…… 17
図15　レプリカ作成作業風景…… 18
図16　圧痕土器と圧痕写真１…… 21
図17　圧痕土器と圧痕写真２…… 22
図18　圧痕土器と圧痕写真３…… 23

第２章

図19　調査地点の位置…… 28
図20　土層断面図…… 29
図21　第20次調査Ｃ・Ｄ地点遺構全体図…… 30
図22　調査区の位置…… 31
図23　土層断面図…… 32
図24　土層柱状図…… 34
図25　2010年度の調査地点【２】
－鹿田地区－…… 35

第３章

図26　展示会風景・シンポジウム風景…… 38
図27　第12回成果展アンケート結果…… 38

第Ⅱ部

第１章

図28　津島岡大遺跡構内座標と各調査地点…… 68
図29　調査地点の位置…… 69
図30　調査区区割りと土層断面の位置…… 69
図31　調査区土層断面（１）…… 70
図32　調査区土層断面（２）…… 71
図33　検出遺構全体図…… 74
図34　溝１～６…… 76
図35　土坑１～８全景…… 77
図36　土坑（１）…… 77
図37　土坑（２）…… 78
図38　土坑（３）…… 79
図39　土坑出土遺物…… 80
図40　包含層出土遺物および遊離遺物…… 81
図41　土壌サンプル採取地点…… 82
図42　津島岡大遺跡第34次調査：南区南壁における植物珪酸体分析結果…… 83
図43　津島岡大遺跡第34次調査の植物珪酸体（プラント・オパール）…… 84
図44　津島岡大遺跡第34次調査：南区南壁における花粉ダイアグラム…… 87
図45　津島岡大遺跡第34次調査の花粉・寄生虫卵…… 87

第２章

図46　調査状況…… 96
図47　発掘調査地点と構内座標…… 97
図48　調査地点位置図…… 98
図49　21Ａ・Ｂ地点の調査区の土層（１）…… 100
図50　21Ａ・Ｂ地点の調査区の土層（２）…… 101
図51　近現代の井戸…… 102
図52　21Ｂ地点河道内遺物出土状況…… 103
図53　河道内出土遺物…… 103
図54　21Ａ・Ｂ地点の鎌倉時代遺構…… 104
図55　溝１…… 105
図56　21Ｄ地点の調査区の土層…… 107
図57　21Ｄ地点平面図…… 108
図58　21Ｄ地点出土遺物…… 108
図59　鹿田遺跡第21次調査で出土した木材の光学顕微鏡写真…… 109

表　目　次

第Ⅰ部

第１章

表１　2010年度津島地区調査一覧…… 14
表２　圧痕調査一覧…… 19

第２章

表３　2010年度鹿田地区調査一覧…… 34

第３章

表４　津島岡大遺跡第32次調査分析一覧…… 36
表５　第９期のPEG保存処理工程…… 36
表６　2010年度非常勤講師への委嘱依頼内容…… 39

第Ⅱ部

第１章

表７　検出遺構一覧…… 73
表８　土坑分類表…… 80
表９　津島岡大遺跡第34次調査における
　　植物珪酸体分析結果…… 83
表10　津島岡大遺跡第34次調査における
　　花粉分析結果…… 86

第２章

表11　本調査地点と第１次調査地点の標高差… 102
表12　Ａ・Ｂ地点検出遺構一覧…… 102
表13　鹿田遺跡第21次調査で出土した木材の
　　樹種…… 109

写　真　図　版

図版１　土器・木製品・石製品…… 111

付　表　・　付　図

付表１　1982年度以前の構内主要調査（1980 ～ 1982年度）…… 48
付表２　2009年度以前の構内主要調査（1983 ～ 2009年度）…… 48
付表３　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要（2010年度現在）…… 56
付表４　埋蔵文化財調査室刊行物…… 58
付表５　埋蔵文化財調査研究センター刊行物（2011年３月まで）…… 58

付図１　岡山大学の位置と周辺の遺跡分布…… 60
付図２　津島地区全体図…… 60
付図３　2009年度までの調査地点【１】－津島地区－…… 61 ～ 62
付図４　2009年度までの調査地点【２】－鹿田地区－…… 63
付図５　2009年度までの調査地点【３】－三朝地区－…… 64
付図６　2009年度までの調査地点【４】－東山地区－…… 64
付図７　2009年度までの調査地点【５】－倉敷地区－…… 64

例　言

１．本書の書名は『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』とする。
２．本書は二部構成とし、第Ⅰ部には岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの2010年度における諸活動記録をまとめた「2010年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの諸活動･業務報告」、第Ⅱ部には当該年度に実施した津島岡大遺跡第34次調査および鹿田遺跡第21次調査の正式報告である「岡山大学構内遺跡発掘調査報告」を掲載した。

第Ⅰ部

2010年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの諸活動･業務報告

例　言

1．第Ⅰ部は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学構内において2010年４月１日から2011年３月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果およびセンターの活動についてまとめたものである。
2．第Ⅰ部において報告している津島岡大遺跡は岡山市北区津島中一丁目１－１、二丁目１－１、三丁目１－１、鹿田遺跡は岡山市北区鹿田町二丁目５－１に所在する。
3．本文は岩崎志保・野崎貴博・光本順・山本悦世が分担執筆し、執筆者名は目次および文末に記した。
4．編集は新納泉副センター長・山本悦世調査研究室長の指導のもと、野崎が担当した。

凡　例

1．岡山大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、2002（平成14）年４月１日から施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用し、構内座標を次のように定めている。
　1）津島地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北を基軸とし、(X，Y）=（－144,156.4617m，－37,246.7496m）を起点とする構内座標を設定する。構内座標の内部は一辺50mの方格で分割した区画を用いる。
　2）鹿田地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北より東に15°振り出した座標軸を基軸とし、(X，Y）=（－149,456.3718m，－37,646.7700m）を起点とする構内座標を設定する。構内座標の内部は一辺５mの方格による地区割りを用いる。
　3）挿図中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、その他は磁北を用いる。
2．調査名称は、「発掘調査」に分類したものについては、遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものについては、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは、「試掘･確認調査」に分類する。
3．土層註記では、鉄分をFe、マンガンをMnで表記した。
4．遺物の総量は１箱27ℓ容量の箱に換算して表記した。
5．付表２に記載した既往の調査一覧については、掘削深度が中世層以下に達した調査を対象とし、その他については除外した。未掲載分も含め、すべてのデータは、当センターにおいて保管している。
6．本文などで使用している調査番号は表と一致する。
7．付図２は、岡山市域図を複写したものである。

第１章　津島岡大遺跡の調査研究

第１節　発掘調査の概要

１．津島岡大遺跡第33次調査（薬学部講義棟新営、調査番号１、津島南BB・BC17・18区）

ａ．調査の成果

縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺構・遺物を検出した。

縄文時代では、中期～後期にかけての土層の堆積状況および中期の遺物包含層・遺構・遺物を確認した。縄文中～後期にかけては砂質土が厚く堆積しており、中期以降の急速な沖積化の進行をしめす。中期の遺構･遺物は、これまで数地点で確認されていたが、本調査により、さらに西へ分布が広がることとなった。弥生時代では、土坑群および地形の方向に沿った溝群等を検出した。古墳時代～古代では、総柱建物、道路状遺構、溝等を検出した。総柱建物は津島岡大遺跡では初例となる。道路状遺構は中世遺構面においても確認された。

本調査区で確認された古代および中世の道路状遺構には、①素掘りの並行する溝と溝間の路面で構成されるもの、②「波板状凹凸面」を下部構造に有するもの、③浅く掘りくぼめた溝の底面にいくつもの小穴を連ね、溝状のくぼみや小穴の中に砂を充填して埋め戻すもの、があり、時期の異なる道路状遺構の構造を比較検討できる資料が得られた。

調査期間　2010年７月16日～11月11日（表土掘削：６月29日～７月９日、発掘調査：７月16日～11月11日）

調査面積　972.2㎡

調査担当　野崎　貴博（助教、調査主任）・池田　晋（助教）

遺構・遺物

【遺構】　縄文時代中期：ピット１、縄文時代後期：炭・焼土散布域４、ピット１、弥生時代：溝14、土坑19、ピット17、古墳時代後期～古代：道路状遺構３、ピット列４、溝３、総柱建物１、土坑２、中世：道路状遺構５、ピット22、近世：耕作痕

【遺物】　縄文時代：縄文土器･石器、弥生時代：弥生土器、古墳時代後期～古代：須恵器（総量12.6箱）

そ の 他　2010年10月26日に現地説明会を開催、見学者140名

ｂ．調査に至る経緯と経過

⑴　調査に至る経緯

薬学部講義棟新営計画が具体化し、新営地には津島南地区西半に位置する薬学部棟西側の緑地が割り当てられた。新営地周辺における発掘調査、試掘・確認調査、立会調査の成果から、縄文時代後期～近世にいたる各時期の遺構・遺物の分布が予測されたため、施設の建設に先立ち発掘調査を実施することとなった。

⑵　調査の経過

発掘調査に先立ち、６月29日から７月９日の期間で近・現代の造成土と攪乱埋土を除去した。その際、旧陸軍歩兵第十聯隊兵舎建物の基礎を確認し、撤去した。

発掘調査は７月16日より開始した。攪乱内の清掃と並行して２層（近代層）の掘り下げを実施し、以降、近世、中世と遡りながら調査を進めた。８月下旬からは６層上面で中世の遺構群の調査を進め、道路状遺構等を確認した。９月中旬から10月は中世～古代層の掘り下げを行い、８～10層上面で弥生時代～古代の遺構を検出した。10月下旬からは９層（黒色土層）を掘削し、10層上面で縄文時代後期の起伏のある地形と炭や焼土の散布域、ピッ

トを確認した。

10層上面で検出された遺構はわずかであり、側溝や攪乱部分からも10層に属する遺物はなかったため、この層が縄文時代後期段階の基盤層と予想されたが、同層の性格を最終的に確認するため、南側微高地では南半部、北側微高地では東西・南北方向に幅３ｍのトレンチを設定し、0.2～0.3mの厚さで掘削した。その結果、遺構・遺物は確認されず、10層は当該期の基盤層であると判断した。

さらに10層以下の土層の堆積状況を確認する目的で調査区北半東側の攪乱部分に設定したトレンチにおいて、10層上面から約0.5m下位に広がる12層で縄文時代中期の土器・石器が検出された。

そこで遺物出土地点を中心とした調査区北半中央部に東西約24m、南北約15mのトレンチ（北半中央トレンチ）と、調査区各所に土層観察および遺構･遺物の分布範囲の確認を目的とするトレンチを９か所設定した。間層となる10・11層は無遺物層と判断できることから、可能な範囲で重機を利用しつつ、12層の調査を行った。

その結果、遺構分布は炭・焼土を含むピット１基と稀薄であること、出土遺物は縄文時代中期の土器片６点、石器２点とわずかであること、遺構･遺物を検出した12層はトレンチ内におさまる限定的な土層であることが確認できたため、調査範囲をさらに拡張する必要はないと判断した。

掘削作業は11月11日に終了、12日に記録作業やサンプリング他の作業を行い、すべての調査を終了した。

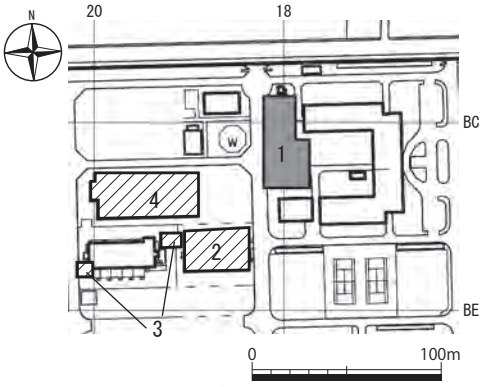
なお、10月23日には古代の道路状遺構の成果を中心とした現地説明会を開催し、約140名の参加者を得た。

ｃ．調査の概要

⑴　調査地点の位置（図１）

本調査地点は、津島南地区西半、津島地区構内座標ではBB17・18、BC17・18区に位置する。周辺で実施した発掘調査は、南西に第８次調査Ａ地点（遺伝子実験施設）、第16次調査（動物実験棟）、第30次調査（岡山大インキュベータ）が、東に第26次調査（事務局本部棟）および第27次調査（創立五十周年記念館）がある。

これらの周辺調査のうち、最も近接している第30次調査地点では、縄文時代後期の土坑・ピット、弥生時代の溝群、古墳時代後期の溝、古代の道路状遺構、中世の条里関連遺構（溝・耕作痕）が確認されている。



1：本調査地点
2：第８次調査（遺伝子実験施設）
3：第16次調査（動物実験棟）
4：第30次調査（岡山大インキュベータ）

図１　調査地点の位置（縮尺1/4,000）

⑵　層序（図２）

本調査区で確認された土層は大きく14層に大別される。以下に各層の概要を記載する。

１層：1907（明治40）年の旧日本陸軍による第十七師団駐屯地造成以降、現在に至るまでの造成土である。明治期の造成土は明黄橙褐色花崗岩バイラン土の真砂土を主体とする。現地表面の標高は約3.8mである。

２層：淡灰色粘質土で、1907年までの近代耕作土層である。径１cm未満の小礫を多く含む。上面高は約3.1mである。

３層：淡灰黄褐色砂質土で、近世の土層である。上面に鉄分の沈着がみとめられる。径１cm大の小礫を含む。上面高は約2.95～3.05mである。

４層：淡灰茶褐色砂質土で、近世の耕作土層である。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しい。土色・土質等により、３層に細分できる。上面高は約2.8～2.9mである。

５層：淡黄灰褐色砂質土である。上面に鉄分の沈着が著しく、マンガンの凝集も認められる。径１cm大の小礫を含む。４層との層理面付近で永楽通宝が出土していることから、中世でも後半段階の耕作土と考えられる。上面高は約2.6～2.7mである。

６層：明灰色弱粘質土である。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しい。地点によって細～粗砂を多く含む。層中に中世の遺物を包含しており、中世段階に形成された土層と考えられる。上面で中世の遺構を検出した。上面高は約2.5～2.6mである。

７層：明灰色粘質土である。粘性が強い。鉄分の沈着、マンガンの凝集が認められる。層中に古代の遺物を包含しており、古代の土層と考える。上面高は約2.5mである。

８層：暗黄褐色弱粘質土である。下層の９層上面が低く下がるたわみ部分にのみ観察される土層である。鉄分の沈着が著しく、マンガンの凝集も認められる。古墳時代後期の溝の埋没後に堆積した土層であり、古代の土層と考えられる。上面高は約2.3～2.4mである。

９層：暗褐色砂質土で、鉄分の沈着、マンガンの凝集が顕著に認められる。津島地区では「黒色土」と呼称している鍵層で、上面が弥生時代の前期にあたると考えている土層である。上面高は約2.1～2.5mである。

10層：淡黄灰褐色砂質土を主体とする縄文時代後期の基盤層である。マンガンの凝集が著しい。上面高は約1.65～2.5mである。

11層：黄茶褐色砂質土で、全体的によごれの少ない土層である。上面高は約1.7～2.4mである。

12層：茶褐色土で、縄文時代中期の遺物包含層である。北半中央トレンチにのみみられる土層で、周囲にむかって漸移的に色調が薄れ、砂質を増す。上面高は約1.8～1.9mである。

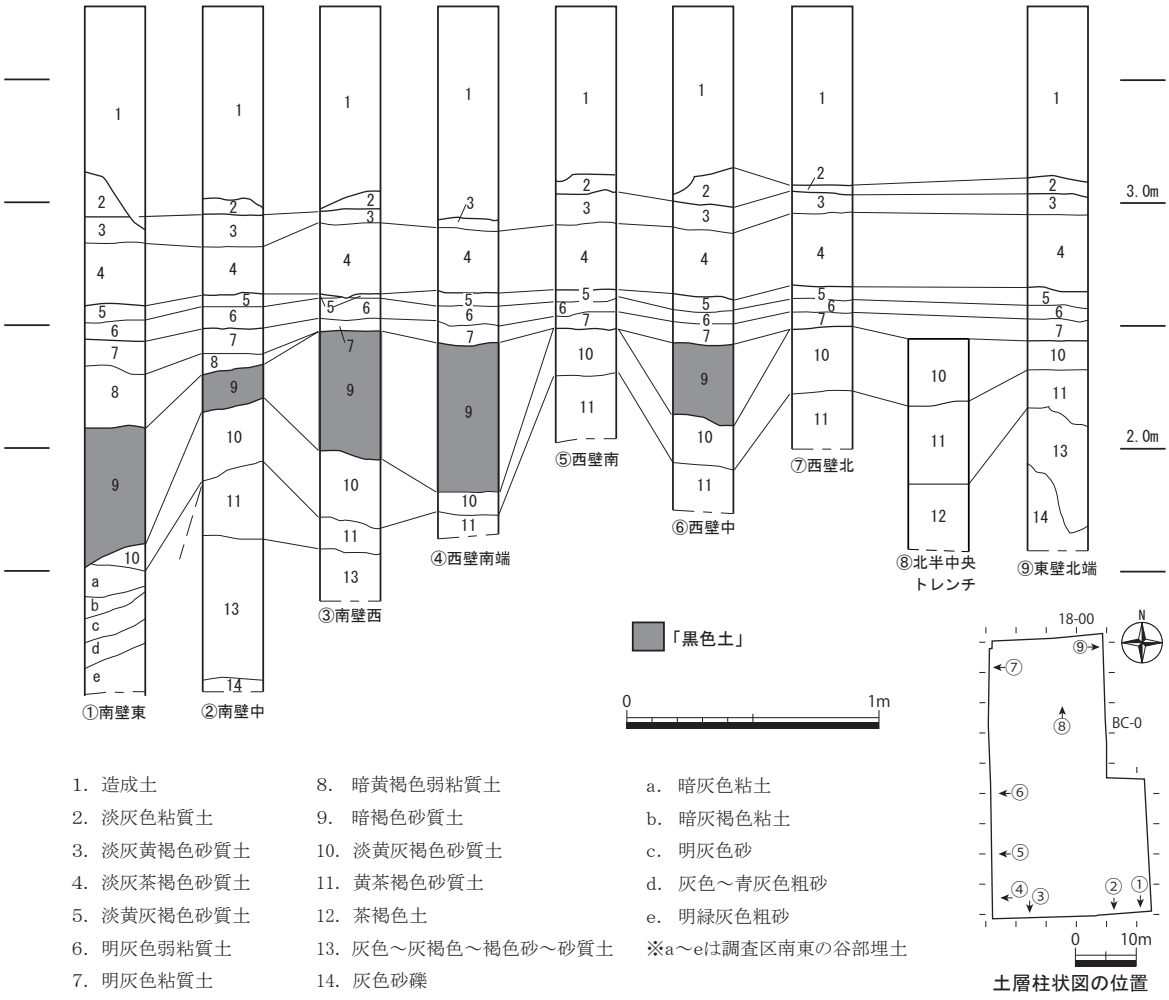


図２　土層柱状図（縮尺1/30）

13層：灰色～灰褐色～褐色の色調を呈する砂～砂質土である。調査区各所に設定した深掘りトレンチにおいて11層下面で確認された。北半中央トレンチでのみ認められた12層が周囲に向かって退色し、砂質を増した土層であり、砂質を強く帯びる特徴をもつ。地点によって細分が可能である。上面高は1.6～2.2m前後であり、北から南に向かって低くなる傾向にある。

14層：灰色砂礫層である。径２～10cm前後の礫を主体とする。上面高は1.05～1.95mである。14層の高まりが認められる地点では微高地の形成がすすんでおり、縄文時代中期の包含層である12層は14層の高まる範囲に形成されたものである。

⑶　遺構・遺物

＜縄文時代中期＞　北半中央トレンチでピット１基を検出した。規模は径0.35m、深さ0.53mである。周辺には径約1.3mにわたって炭や焼土の小粒が散布しており、ピット周辺における火の使用が想定される。また、北半中央トレンチの東側でも少量の炭化物や焼土粒を含む弱い赤変域がみられた。

出土遺物は、土器６点、石錘１点、サヌカイト剥片１点である。南西深掘りトレンチから出土した縄文土器１点以外はすべて北半中央トレンチからの出土である。

＜縄文時代後期＞　10層上面で確認された縄文時代後期の地形は、東北東－西南西方向を基調とする幅の狭い小微高地とその周囲に入り込む低位部により小さな起伏を有する。微高地は後世の削平をうけており、本来有していた高さは不明である。遺構は中央部に延びる低位部の東半で炭や焼土の散布域４か所、南側微高地の西寄りでピット１基を確認した。

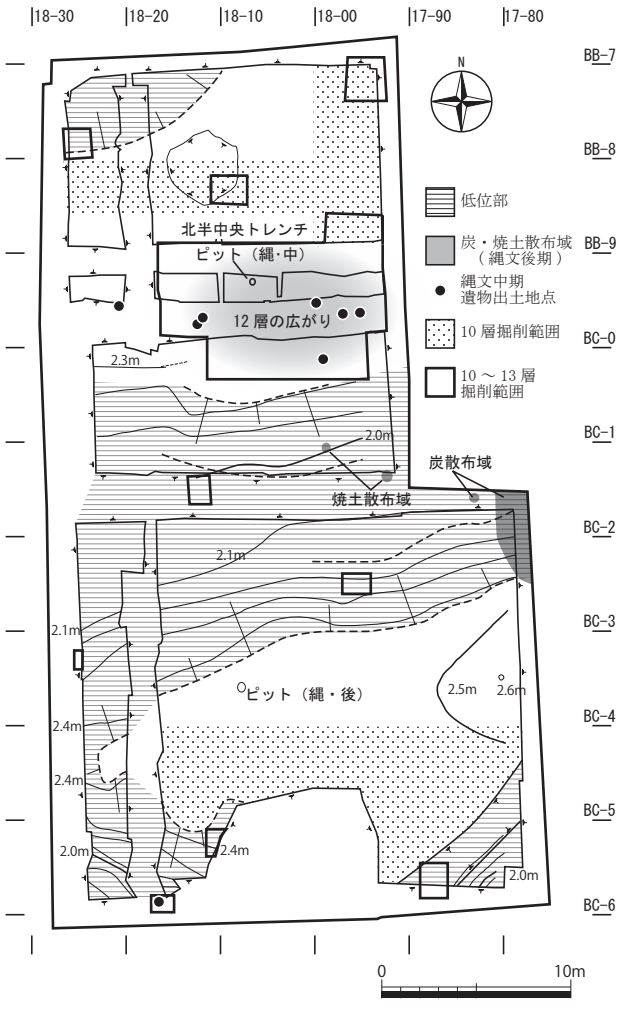


図３　縄文時代の遺構平面図（縮尺1/400）

焼土散布域は２ヶ所で、いずれも被熱による弱い変色域が認められた。径は0.3～0.5mと小規模である。炭や焼土の含有量が少なく、恒常的な火処としての使用を想定できない。炭散布域は径0.4m前後の小規模なもの、約2.5×1.5mの範囲に広く散布するものがある。被熱による変色や焼土をともなっておらず、周辺から流入した炭の可能性が高い。

遺物は少量の土器・石器が出土した。

＜弥生時代＞　９・10層上面で溝14条、土坑19基、ピット17基を確認した。

溝はいずれも北東－南西方向のもので、９層の堆積域やその縁辺部にあたる調査区北～中央、調査区南東角に掘削される。９層は10層段階にみられた低位部上にのこる土層であり、溝の掘削には旧地形が影響を及ぼしたことがうかがえる。出土遺物から弥生時代後期に属すると考えられる。

調査区南東角の溝群は７条の溝が切り合っており、繰り返し掘削された状況がみられた。これらの溝の断面形はいずれも丸いボウル状を呈している。これに対し、調査区中央以北の溝は切り合い関係をもたない溝が５条並行して掘削され、その

断面形は、ほとんどが逆台形である。これらの溝群は位置・再掘削の有無・断面形等の差を有する２群に大別できる。

土坑は調査区南東部で検出した。遺物の出土が僅少で、時期の判定は難しいが、多くの土坑が弥生後期の溝群に切られており、弥生後期以前のものと考えられる。平面形は円形、方形に分類できる。規模は、円形が径0.4～0.7m、方形が長軸長0.9～1.7mであり、顕著な差を示す。

ピットは調査区北側の微高地上において確認した。いずれも黒色土の埋土を有する。分布は不規則で、有意なまとまりを見出せない。

＜古墳時代後期～古代＞　道路状遺構３、ピット列４、溝３、総柱建物１、土坑２を確認した。道路状遺構は並行する数本の溝で構成される。

道路状遺構１は南北方向に並行する２条の溝で構成される。側溝となる溝の芯々間の幅は約2.3m、溝に挟まれた路面幅は約1.2mである。古墳時代後期の溝27を切っており、古墳時代後期を上限とするが、埋土が淡灰色粘土で７層に近い特徴を有することから、古代に属する遺構と考えられる。

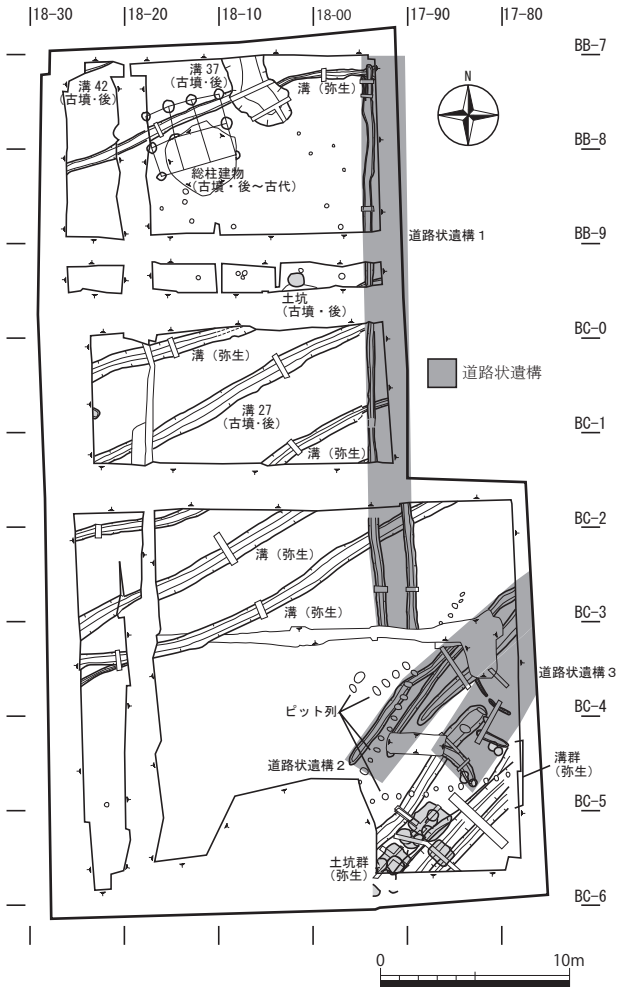


図４　弥生～古代の遺構平面図（縮尺1/400）

道路状遺構２は北東－南西方向に並行する３条の溝で構成され、そのうち２条は切り合い関係を有している。補修等による再掘削の可能性もあり、本来は２条の溝が側溝として機能した道路状遺構と考えたい。その場合、溝の芯々間の幅は約2.2m、路面幅は約1.2mとなる。埋土はいずれも灰色を呈する弱粘質土で、古代に属すると考えられる。

道路状遺構３は北西－南東方向に並行する浅く短い４条の溝で構成される。溝の間隔は約0.5～0.6mである。この溝群を道路の下部構造である「波板状凹凸面」と考えれば、方向は北東－南西となり、本調査区における条里地割に斜行する他の道路状遺構と同方向となる。また、「波板状凹凸面」を構成する溝の長さが路面幅を示すとすれば、約2.4～2.5mとなる。埋土はいずれも灰色～明灰色砂質土である。その色調から、古代の範疇でとらえることができると考えられる。

以上、本調査地点における古代の道路状遺構には、①側溝としての機能をもつ２条の並行する溝で構成されるもの（道路状遺構１・２）、②道路の下部構造と考えられる「波板状凹凸面」を有するもの（道路状遺構３）の２類型が存在していることが明らかとなった。

ピット列のうち３列はおおむね北東－南西方向、１列はほぼ東西方向を志向している。ピットの径は約0.3～0.5m、深さ0.05～0.1mである。これらは道路状遺構を構成する溝群を切っており、道路が廃絶された後の所産である。ピット列の性格は明らかでない。

溝は調査区北半で確認した。溝27・42は北東－南西方向に掘削される。９層が堆積する調査区北西角および調査区中央に位置しており、旧地形の影響をうけたものである。規模・断面形が明らかな溝27は幅約１m、断面形

は逆台形を呈する。溝37は調査区北側の微高地上で検出した。北西－南東方向を志向し、低位部にむかって掘削される。幅は約2.2m、断面形はボウル状を呈し、底面には凹凸を有する。溝27・37・42からは古墳時代後期の須恵器が出土しており、当該期の所産と考えられる。

土坑は調査区北半微高地上および調査区南半東壁でそれぞれ１基ずつ確認した。いずれも埋土は淡灰色粘質土である。調査区北半微高地の土坑からは古墳時代後期の須恵器が出土した。

総柱建物は調査区北側の微高地上で検出した。中央から南半を近代以降の攪乱で破壊されている。建物の規模は２×３間（3.5×4m）である。長軸の方向は、東北東－西南西であり、微高地の延びる方向にほぼ並行している。柱穴は９本確認した。平面形は円形で、径は0.5～0.6m前後、深さ0.4m前後である。時期は柱穴から出土した古墳時代後期の須恵器小片を上限とするが、それ以上の特定は難しい。

＜中世＞　６層上面で道路状遺構を構成すると考えられる５群の溝群、ピット22基を検出した。道路状遺構は、並行する数本の溝群およびピット列で構成されるものを認定した。

道路状遺構４は調査区北半中央で検出した。東西方向の溝群で、５条が切り合っている。溝13以外は浅い皿状の断面形を呈する深さ約0.1～0.2mの溝で、底面に小ピット列が連なる。溝13は幅1.7m、深さ0.4mの溝で、深いボウル状の断面形を呈する。この溝のみ規模・断面形が異なる。

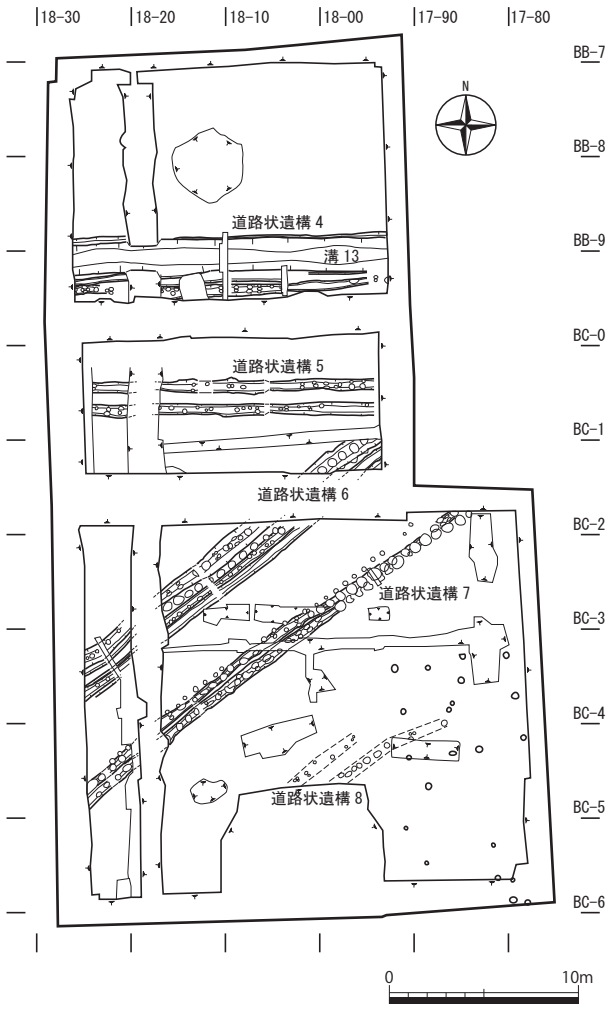


図５　中世の遺構平面図（縮尺1/400）

道路状遺構５は調査区中央で検出した。東西方向の溝群で、２条の溝が切り合い関係を有さずに並行する。浅い皿状の断面形を呈し、底面に小ピット列が連なる。

道路状遺構６は調査区中央で検出した。北東－南西方向の溝群で、４条の溝が切り合っている。溝３・４・６は底面にピット列が連なる。削平により溝３は調査区北東部ではピット列として検出した。

道路状遺構７は調査区中央で検出した。北東－南西方向の溝群で、３条の溝が切り合っている。いずれも底面にピット列が連なる。削平をうけており、溝１・２の北東側および溝７はピット列として検出した。

道路状遺構８は調査区南部で検出した。上部は削平をうけており、ピット列として検出した。検出面では切り合い関係は認められなかった。底面にピット列が連なる構造の溝が並行していたものと考えられる。

以上、６層上面で検出された道路状遺構は、いずれも浅く掘りくぼめた溝の底面に多数の小穴を連ねたもので、中には砂が充填される。路面の水はけなど、地盤の改良をはかったものとみられる。

ピット群は調査区南東で確認した。径0.2～0.3m、深さ0.15～0.4mで、いずれも小規模なものである。この範囲にのみ分布するが、建物としての

まとまりを確認するにはいたらなかった。

＜近世＞　近世の遺構は３層上面で東西方向の畝を検出した。畝の高まり部分は近代の耕作により削平されているものの、高まり間の窪みがのこされていた。窪みの幅は約0.5mである。

なお、上記の内容は暫定的なものであり、今後の整理･検討を経て刊行する本報告をもって正式なものとする。

（野崎　貴博）

２．津島岡大遺跡第34次調査（国際交流会館新営工事、調査番号２、AU・AV13・14）

津島岡大遺跡第34次発掘調査（国際交流会館新営）の調査成果については、本書第Ⅱ部第１章において正式報告として記載した。（光本　順）

調査期間　2010年７月30日～９月28日（機械掘削と並行して発掘調査を実施､機械掘削は９月７日に終了）
※平面的調査としては中世上面で調査を終了。

調査面積　1,590㎡

調査担当　光本　順（助教、調査主任）、山本悦世（教授）

遺構・遺物

【遺構】　平面調査：近世土坑10基　断面調査：弥生時代前期溝６条・畦畔３か所（１面）

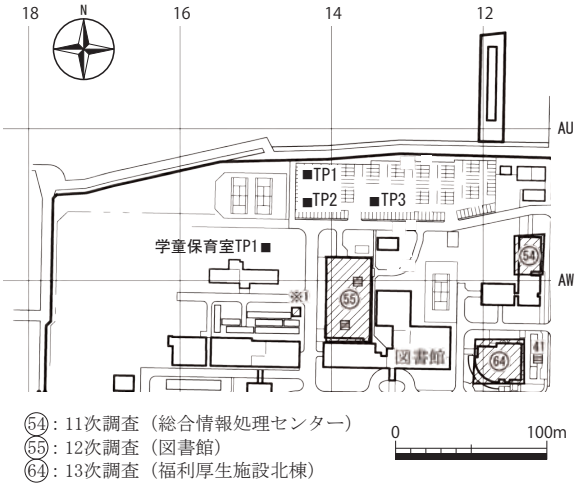
【遺物】　近世陶磁器、石製品、中世土器、須恵器　（総量１箱）

第２節　試掘・確認調査の概要

１．国際交流会館新営予定地（調査番号３、津島北AU13・14区）

ａ．調査に至る経緯と調査の経過

2009年度末に岡山大学津島地区に国際交流会館の新設が計画された。新営予定地は､津島キャンパスの北西部、附属図書館の北側に位置する駐車場である。当該地点の近くでは､津島岡大遺跡第12次調査（附属図書館）[1]、2009年度学童保育室試掘・確認調査[2] 等が実施されている。これらの調査成果では縄文時代後期以降、近世･近代までの各時期の遺構･遺物が確認されている。主な遺構としては、第12次調査地点の弥生時代前期の水田畦畔、古代における条里の坪境の溝と考えられている東西方向の大溝があげられる。この大溝は古代以降、近代にいたるまで、区画の溝として機能していたことが判明している。一方、学童保育室予定地の調査では、縄文時代後期～近代まで14枚の土層堆積状況を確認した。このうち標高1.9mで確認されている暗黒褐色粘質土層は、津島一帯で確認されている弥生時代



㊹：11次調査（総合情報処理センター）
㊺：12次調査（図書館）
㊹：13次調査（福利厚生施設北棟）

図６　調査地点の位置（縮尺1/5,000）

早期～前期の「黒色土」層にあたるものと考えられる。この層以下は湿地状堆積と見られる。

以上の二地点の土層堆積状況から、本調査地点では弥生時代前期以前は低位部にあたることが予測されたが、詳細なデータはないことから、計画建物予定地内の３ヵ所に試掘坑を設定し、確認調査を行うこととした。

調査は2010年４月23～28日に、調査員一名が担当して実施した。

ｂ．調査の概要

３ヵ所の試掘坑のうち北西部をＴＰ１､南西部をＴＰ２、南東部をＴＰ３とする（図６）。

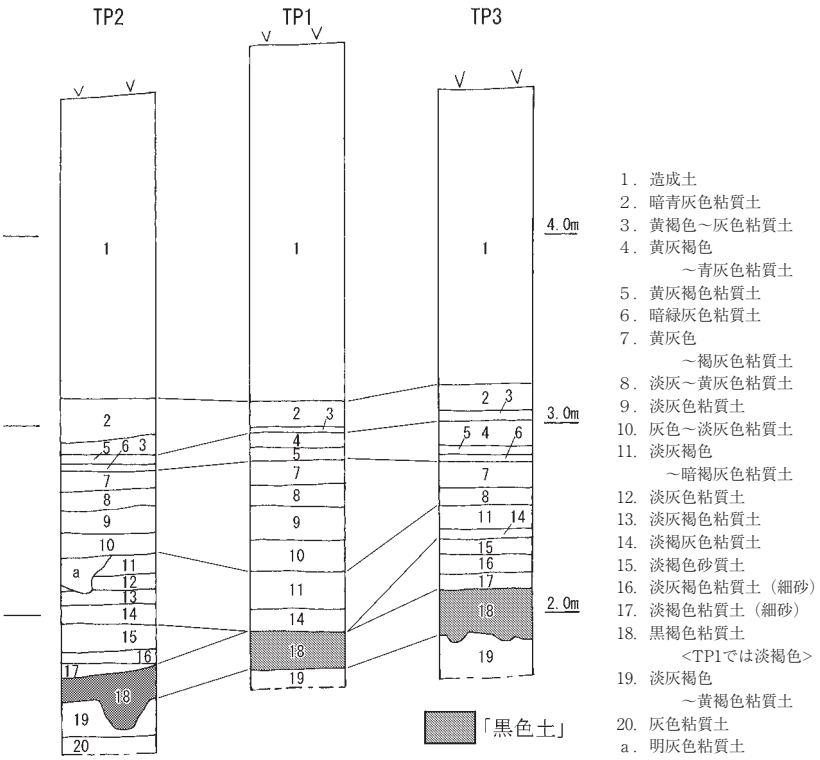


図７　土層柱状図（縮尺1/40）

⑴　**層序**（図７）

１層：造成土である。上面の標高4.72～5.1ｍを測る。

<近代>（ＴＰ１：２・３層、ＴＰ２:２･３層、ＴＰ３:２･３層）

２層：暗青灰色粘質土で、上面の標高3.1～3.2ｍを測る。ＴＰ１では粗砂が含まれる。

３層：暗灰色を呈する粘質土層である。上面の標高2.95～3.07ｍを測る。

<近世>（ＴＰ１：４・５層、ＴＰ２：５・６層、ＴＰ３：４～６層）

４～６層は黄褐色系の粘質土を主体としており、鉄分・マンガンの沈着により分層される。ＴＰ３では灰～青色系の土色を呈し、何らかの要因でグライ化しているものと考えられる。

４層：ＴＰ１・２では黄褐色粘質土でマンガン・鉄分、細砂を含む。ＴＰ３では灰色粘質土である。上面の標高2.97～3.01ｍを測る。

５層：黄灰褐色を呈する粘質土でマンガンを少量、鉄分を含む。ＴＰ３では青灰色粘質土である。上面の標高2.85～2.88ｍを測る。

６層：ＴＰ３で確認した暗緑灰色粘質土である。上面の標高2.80ｍを測る。４～６層は近世と考えられる。

<中世>（ＴＰ１･ＴＰ２：７～10層、ＴＰ３：７・８層）

７層：黄灰色～褐灰色粘質土で、マンガン少量、鉄分を含む。ＴＰ３では灰色が強い色調を呈する。上面の標高2.78～2.80ｍを測る。

８層：淡灰～黄灰色を呈する粘質土で、マンガン・鉄分を含む。ＴＰ３ではグライ化が認められ、若干青みを帯びている。上面の標高2.65～2.68ｍを測る。

９・10層はＴＰ１・２で確認され、ＴＰ３では認められなかった。

９層：淡灰色粘質土で、マンガン、鉄分を少し含む。上面の標高2.53～2.56ｍを測る。

10層：灰色～淡灰色粘質土である。ＴＰ２では若干青みを帯びる。上面の標高2.38～2.44ｍを測る。９・10層に

ついては若干グライ化が認められ、あるいは溝の埋土の可能性も考えられるが、今回の試掘坑内では確認できていない。

<古墳時代～古代>（ＴＰ１：11・14層、ＴＰ２：11～14層、ＴＰ３：11・12層）

11層：灰色粘質土で、古代の耕作土層と考えられる。ＴＰ１・２では標高2.22～2.33mであるが、ＴＰ３では2.55mと高い。

12層：淡褐灰色～暗褐灰色粘質土である。ＴＰ２では標高2.21m、ＴＰ３で標高2.41mである。

13層：淡灰色粘質土で、上面の標高2.13mを測る。

14層：淡褐灰色粘質土で、鉄分を多く含む。上面の標高2.02～2.05mを測る。12～14層は古代あるいは古墳時代層とみられるが、確定はできなかった。

<弥生時代>（ＴＰ２：15・17層、ＴＰ３：15～17層）

15層：淡褐色砂質土で、ＴＰ２で標高1.95m、ＴＰ３で標高2.39mを測る。

16層：淡灰褐色粘質土で、細砂を含む。ＴＰ２で上面の標高1.80m、ＴＰ３で標高2.30mを測る。

17層：淡褐色粘質土で、細砂を含む。ＴＰ２で上面の標高1.73m、ＴＰ３で標高2.22mを測る。

<弥生時代早～前期>（18層）

18層：黒褐色粘質土で、いわゆる「黒色土」層にあたる。上面の標高はＴＰ２で1.73m、ＴＰ１で1.91m、ＴＰ３で2.13mを測る。弥生時代早期～前期とされる。ＴＰ１では色調が淡褐色と薄まり、ＴＰ２と比較すると粘性が若干弱くなっている。

<縄文時代後期以前>（19・20層）

19層：淡灰褐色～黄褐色粘質土である。ＴＰ１では炭化物、灰色粘土ブロックを含む特徴から、遺構埋土の可能性があるが、試掘坑範囲内では確定はできなかった。ＴＰ２の標高1.56m、ＴＰ１では標高1.70m、ＴＰ３では標高1.90mである。標高の低いＴＰ２では灰色が強まり、粘性も高くなる。一方、標高の高いＴＰ３では黄褐色を呈する。

20層：ＴＰ２で確認した灰色粘質土層である。上面の標高1.38mである。

⑵　地形

南北方向の地形についてＴＰ１・ＴＰ２の成果をみると、縄文後期層ではＴＰ２からＴＰ１に向けて、つまり北に向かって若干地形が高くなり、18層（「黒色土」）上面でもその状況は変わらない。一方東西方向については、ＴＰ２とＴＰ３では東側が高く、西に下がる地形である。比高差は19層（縄文時代後期以前）で約50cm、18層上面（弥生時代前期）で40cmである。その後、15～17層（弥生時代）では砂質を主体とする土層の堆積により、低位部が埋まっていった状況がみられる。微高地にあたるＴＰ３にも15～17層の堆積は見られるが、ＴＰ１では、18層の直上に14層の堆積が確認され、古代あるいは古墳時代に弥生時代の土層は削平されている。古代あるいは古墳時代層下面（ＴＰ１・２：14層、ＴＰ３：12層）の標高差も併せると、その時期にＴＰ１・２とＴＰ３の間では段があるものと予想される。この差は７層（中世層）上面には５cm程度とほぼ解消され、以後、近世・近代ではほぼ水平堆積が認められる。

以上のように本調査地点の縄文時代以来の旧地形は、ＴＰ３付近には微高地状の地形が広がり、ＴＰ１・２側は低位部となっていることがわかる。第12次調査（図書館）地点と比較すると、同地点北端での「黒色土」上面の標高は2.0m、ＴＰ２で1.7m、ＴＰ１で1.9m、ＴＰ３で2.13mである。同地点北端から南東方向のＴＰ３にかけて2.0～2.1mの微高地が広がり、これより北西方向に向けて低位部となる地形と考えられる。ＴＰ３一帯には、第12次調査地点と同様、弥生時代前期の水田の存在も予測される。

ｃ．まとめ

本調査地点の成果から、縄文時代～近代にかけての土層堆積状況を確認し、津島キャンパスの北西端部の旧地

形を復元するためのデータを得ることができた。特に「黒色土」の上面レベルが第12次調査地点北端と近似する状況から、調査地点南東部（ＴＰ３付近）では弥生時代前期の水田畦畔の存在が予測され、また北西部では低位部が拡がることがわかった。

なお、本試掘・確認調査の成果をうけ、同年７月から津島岡大遺跡第34次調査を実施しており、その報告を本書第Ⅱ部第１章に掲載している。（岩崎　志保）

註　1）岩崎志保2003「津島岡大遺跡第12次調査」『津島岡大遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊
2）岩崎志保2010「１．学童保育室新営予定地」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

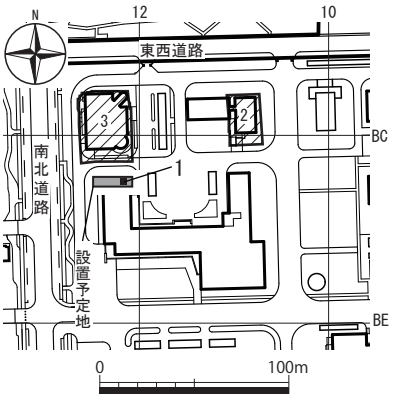
２．生協プレハブ設置予定地（調査番号４、津島南BC12区）

ａ．調査の経緯

岡山大学生協が物販のためのプレハブ設置を計画した。予定地は岡山大学津島南地区東半の北西角にある福利厚生施設(ピーチユニオン）の南に位置する緑地帯である。周辺では津島岡大遺跡第10次調査（保健環境センター)、第14次調査（福利厚生施設）を実施しており、第10次調査地点では弥生時代や古墳時代の集落、第14次調査地点では弥生時代の水田や古墳時代から中世の溝が確認されている。

今回、プレハブという簡易建物で、包含層に影響のおよぶ深度の掘削はなく、敷地面積は約100㎡と狭小であったため、発掘調査の必要は無かったが、周辺調査区における遺構・遺物の検出状況を鑑みて、当地点についても状況把握が必要と判断し、試掘・確認調査を行うこととした。

調査は予定地の東寄りに試掘坑１か所（東西2.0m、南北1.2m）を設定、調査員１名が担当し、2011年１月17日に実施した。



1: 本調査地点
2: 第 10 次調査（保健管理センター）
3: 第 14 次調査（福利厚生施設南）

図８　調査地点の位置（縮尺1/4,000）

ｂ．調査の概要

⑴　**層序**（図９）

本調査地点では以下の13層を確認した。これらの土層の諸特徴は、隣接する第14次調査地点南壁の土層とほぼ対応しており、その成果に基づき各土層の時期を推定した[1)]。

１層：明黄褐色マサ土を主体とする近･現代の造成土である。上面高約4.5m、層厚約0.9mである。

２～７層は、鉄分やマンガンが帯状に凝集すること、各層が水平堆積を示すことから、耕作土と考えられる。

２層：灰茶褐色砂質土で、上面で南北方向の畑の畝を確認した。砂質が強く、小礫を多く含む。上面高約3.6m、層厚約0.15mである。近代の耕作土である。

３層：茶褐色砂質土で、上面高約3.45m、層厚約0.15mである。

４層：淡茶褐色砂質土で、マンガンを多く含む。上面高約3.3m、層厚約0.1mである。３・４層は近世の耕作土である。

５層：灰褐色弱粘質土で、マンガンを多く含む。上面高約3.2m、層厚約0.1mである。

６層：暗灰褐色弱粘質土で、上面高約3.1m、層厚約0.05mである。５・６層は中世の耕作土と考えられる。

７層：明灰色弱粘質土で、鉄分の沈着が顕著である。須恵器小片が出土したが、細片のため時期は明らかでな

い。上面高約3.05m、層厚約0.05mである。

８層：灰褐色粘質土で、鉄分、マンガンを多く含む。上面高約3.0m、層厚約0.05mである。

９層：暗灰褐色砂質土で、マンガンを多く含む。北東から南西方向へ向かって下がる部分に認められる。暗灰褐色弱粘質土ブロックを多く含むことから、何らかの要因で緩い傾斜地に再堆積した土層の可能性がある。上面高約2.95m、層厚約0.1mである。

10層：黄茶褐色～茶褐色粗砂である。マンガンを多く含む。縄文時代後期の基盤層と考えられる。上面高約2.85～2.95m、層厚約0.05～0.15mである。

11層：灰茶褐色粗砂である。凝集の著しいマンガン塊が観察された。マンガン塊は９層から垂下する樹根の痕跡と思われる灰色粘土ブロックの周辺に形成されている。上面高約2.8m、層厚約0.1～0.35mである。

12層：茶褐色粗砂で、マンガンを多く含む。10～12層の変化は漸移的で、層理面が不明瞭な部分もある。上面高約2.45～2.7m、層厚は0.35m以上である。

13層：明灰茶褐色砂礫層である。砂礫層を構成する円礫は径３～10cm程度である。上面高約2.35～2.55m、層厚は0.2m以上である。

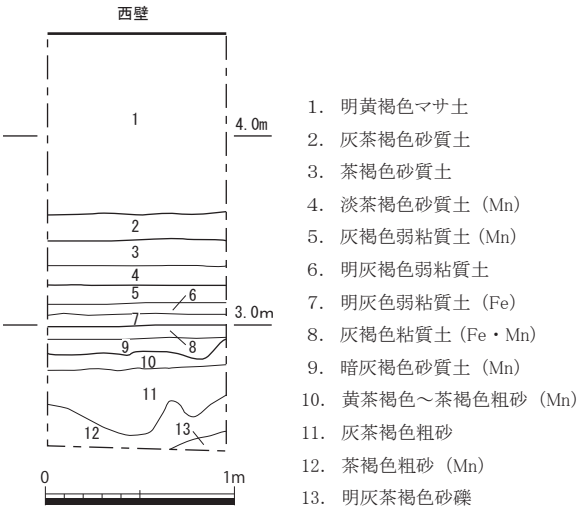


図９　土層断面図（縮尺1/40）

⑵　遺構・遺物

本調査区では遺構は確認されなかった。遺物は７層中から須恵器小片１点が出土した。

ｃ．まとめ

本調査で確認された土層は、当地点の北に位置する第14次調査の土層に対応しており、同地点に広がる微高地はさらに南に続くものとみられる。また、同地点では、調査区の西半に北東－南西方向の谷が入り込むこともわかっており、本調査区のさらに西に第14次調査地点の谷がのびているものと考えられる。

以上、本調査の結果、第14次調査の成果を追認・補強するデータ、津島岡大遺跡のほぼ中央部における地形復元のデータを得ることができた。（野崎）

註　１）横田美香・岩崎志保1997『津島岡大遺跡９』岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第13冊

第３節　立会調査の概要

１．調査の実施状況

2010年度の立会調査として、津島地区では15事業で47件を実施した。本年度の事業は新規の建物建設（薬学部講義棟・国際交流会館）に伴うものと、外灯整備やゲート取設工事など、津島地区構内の安全管理対策事業に伴うものが大半を占める。近年の立会調査件数増加の一因となっていた耐震改修工事は薬学部以外では行われなかったが、他の事業が実施され、立会件数が大幅に減少することはなかった。

工事掘削によって中世層以下の包含層および特徴的な土層を確認した立会調査には以下の２事業がある。

本節では、縄文時代の土層および中世以前の包含層を確認した調査について個別に報告し、その他の調査につ

いては中世以前の包含層を確認したものについて触れておく。

その他、津島キャンパス北側に位置する半田山において、土砂流失防止を目的とした法面整備工事が実施されている（調査番号27）。自重で支持するふとん籠を設置するもので、根切りをほとんど伴わない施工法である。立ち会った際には、すでに土砂流失により地山が露出しており、遺構･遺物も確認されなかった。

２．薬学部改修電気設備工事（調査番号34、津島南BC･BD18）

ａ．調査地点の位置

薬学部本館の改修工事および新館の建設にともなう環境整備事業として、周辺の外灯整備が行われた。本調査地点は第30次調査地点の東、第33次調査地点南の植え込みに位置する。特に第30次調査地点では、東西方向に掘削された近世･近代の里境溝が確認されており、本調査地点でも検出されることが予想された。

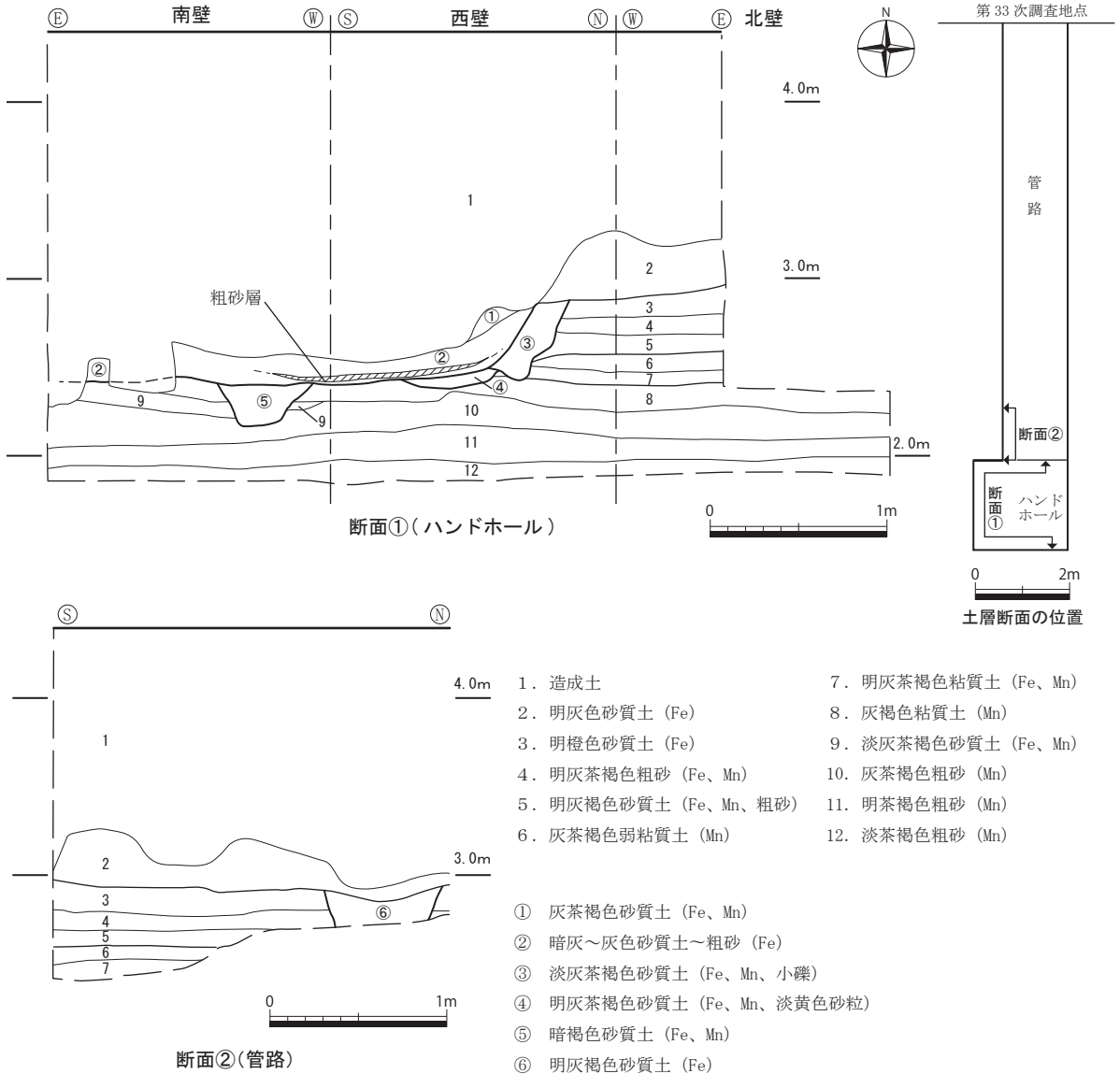


図10　土層断面図（縮尺1/40）

ｂ．調査成果（図10）

本調査区は第30次調査地点から南にのびる約９ｍの管路とその南に設定されたハンドホール部分からなる。管路部分では、ほとんどが近世層までの掘削にとどまっているが、南から約１ｍの範囲で古代・中世層と考えられる６・７層まで掘削がおよんでいる。また、南から約1.5mの位置では近世に属する溝を確認した。

ハンドホール部分では、現地表面から約2.6m、縄文時代後期の基盤層下まで掘削がおよぶ。ここでは縄文時代から近代に属する土層および近世･近代の溝１条を確認した。

【層序】　１層は近代の造成土で、条里の里境溝を埋めている。２層は近代の耕作土である。３～５層は砂質土や粗砂が主体となる近世の土層である。６層は灰茶褐色粘質土で中世の土層である。７層は明灰褐色粘質土で、第30次・33次調査地点の成果を参考にすれば、古代の土層に比定できよう。８層は灰褐色粘質土で、弥生～古墳時代の包含層と考えられる。９層はハンドホール地点南壁で部分的に確認された灰茶褐色砂質土である。10～12層は茶褐色系の色調を呈する粗砂層で、縄文時代後期以前の土層に比定される。

【遺構】　東西方向に掘削された溝２条を確認した。管路部分のものは幅約0.65m、深さについては、掘削深度が浅く、底面を確認できていないため不明である。ハンドホール部分で確認した溝は、幅約1.4m以上、深さ約0.6ｍをはかる。溝の位置、規模、堆積状況などから、第30次調査地点で検出した近世･近代溝に連接するものである。

３．その他の調査地点

本年度の立会調査のうち、上記以外で中世以前の包含層を確認したものとして外灯整備工事（教育学部）<調査番号８>、国際交流会館排水桝掘削工事<調査番号37>がある。

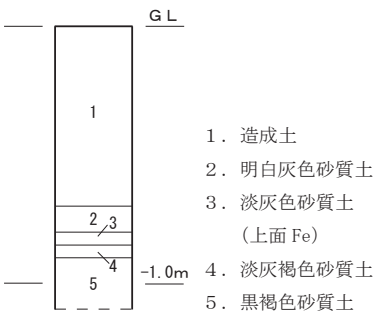


図11　土層柱状図（縮尺1/30）

<調査番号８>　本調査地点では現地表面より0.9m掘削したところで、弥生時代前期の土層と考えられる黒褐色砂質土を確認した。直上には中世～近世の土層とみられる淡灰褐色砂質土があり、中世～近世段階に削平をうけたものと考えられる。黒褐色砂質土は、現地表（標高約4.5m）下約0.9mであり、津島地区のなかでは浅い深度で確認されている。この点は教育学部周辺におけるこれまでの成果[1)]を追認するものである。

註　１）岩崎志保2008「３．公共下水道接続工事（教育学部）に伴う立会調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』など

<調査番号37>　本調査は津島岡大遺跡第34次調査終了後、調査区内に排水桝を設置するため、1.5m四方で４か所を掘削したため実施した。津島岡大遺跡第34次調査は、新設建物の基礎による破壊のおよばない中世層上面で発掘を停止している。本調査における４地点の掘削はいずれも中世層上面からで、掘削深度は0.55mである。

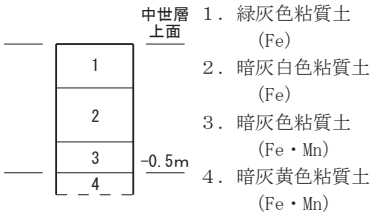


図12　土層柱状図（縮尺1/30）

土層はいずれの掘削箇所も４層に分層される。１層は緑灰色粘質土で鉄分を多く含む。２層は暗灰白色粘質土で鉄分を多く含む。３層は暗灰色粘質土である。４層は暗灰黄色粘質土で鉄分を多く含む。土層の時期は、発掘調査の成果から、１層が中世、４層が弥生時代後期と考えられる。

遺構はいずれの掘削箇所においても確認されていない。　（野崎）

表１　2010年度津島地区調査一覧

種類	番号	構内座標	調査名称		調査期間	掘削深度（GL-m）	造成土厚（m）	内容
発掘	1	BB17･18、BC17･18	薬学部講義棟【津島岡大遺跡第33次発掘調査】		7.16～11.11	2.74	0.7	縄文時代中期～近世の遺構･遺物。縄文時代中期のピット、弥生時代の土坑･溝、古墳後期～古代の総柱建物、古代･中世の道路状遺構
	2	AU･AV13･14	国際交流会館【津島岡大遺跡第34次発掘調査】		7.30～9.28	2.3～3.5	1.1～2.0	弥生時代前期畦畔・溝、近世土坑群
試掘･確認	3	AU13・14	国際交流会館予定地		4.23～28	3.4	1.6～1.9	縄文層まで掘削
	4	BC12	生協プレハブ予定地		2011.1.17	2.2	0.9	縄文層まで掘削
立会	5	AX･AY00	外灯整備工事	新技術研究センター	4.19	1.15	－	近世層確認
	6	AU03		馬場	4.19	1	－	造成土内
	7	AU04･05		工学部	4.20	1.2～1.3	－	近代層確認
	8	AZ06		教育学部	4.23	1.1	0.7	黒色土確認
	9	AZ07		自然生命科学研究支援センター	4.26	1.2	－	既設内
	10	AZ08･09、BA09		理学部	4.28	1.15～1.25	1	近世層確認
	11	AW12		図書館	4.30、5.6	1.25	－	造成土内
	12	BA13･14		文･法･経済学部	5.6～12	1.3	－	造成土内
	13	BD03･04、BE02		プール	5.13、14	1.15～1.3	1.1	近代層確認
	14	BE12		清水記念体育館	5.24	1.25	－	造成土内
	15	BB18･19･20		薬用植物園	5.25	1.2～1.35	0.9	近世層確認
	16	BE17･18		農学部	5.26	1.15～1.2	－	造成土内
	17	BB14･15		創立五十周年記念館	5.27、28	1.1～1.6	1.15	近世層、近代石組用水路確認
	18	BB･BC17	総合研究棟Ⅱ期（薬学系）埋文調査に伴う支障管移設工事	電気	5.17～20	管路0.7～0.85、ハンドホール1.26	0.7	近世層確認
	19			ガス	5.18、20	0.75～1.1	0.85	近世層確認
	20			給水	5.2	1.5	－	既設内
	21			樹木移植	6.23	0.3～0.45	－	造成土内
	22			矢板打ちに伴う支障物確認	6.25	1.6	－	既設内
	23			生活排水･実験排水	7.5、9	0.87～1.4	0.8	古代層確認
	24	BF08	一般教育棟駐車場給水管改修工事		5.26	0.9	－	既設内
	25	AX13	図書館漏水修理工事		8.1	0.75	－	造成土内
	26	BG11	テニスコート陥没復旧工事		11.2	1.9	－	既設内、砲弾他、岡山西署回収
	27	AO12	半田山法面整備工事		11.17	0.5	－	遺構･遺物なし
	28	AX～AZ06	ゲート取設工事	東門	12.14～17	管路0.82～0.9、ハンドホール0.9	0.85	近世層確認
	29	BC･BD12、BD11、BD･BE10		大学会館南	12.20～22･24･27･28、2011.1 .17･18	管路0.76～0.87、ハンドホール0.96～1.05	0.95	近代層確認
	30	BD13･14･15、BC15、BE15		本部棟西～南	2011.1.5～27	管路0.78～1.0、ハンドホール0.99～1.02	－	造成土内
	31	BB16		薬学部前	2011.1.11	0.6	－	造成土内
	32	BA13		西門	2011.1.12	0.85	－	造成土内
	33	BB16･17、BC17	薬学部本館改修工事	外部PS基礎設置工事	12.6･8･17	0.5～0.9	－	既設内
	34	BC･BD18		電気設備工事	12.15･17･22、2011.1.11･13、2.1	管路0.7～1.28、ハンドホール2.0	1.1	（管路）中世層確認、（ハンドホール）縄文時代層確認、近世･近代里境溝確認
	35	BB17		外灯設置工事	2011.2.2･3･8･14～16	管路0.63～0.74、外灯基礎1.08～1.34	0.85	（管路）近世･近代層、（外灯）中世層確認
	36	BF15	農学部水道管復旧工事（緊急対応）		2011.1.17	1.1	－	既設内
	37	AU･AV13･14	国際交流会館	排水桝掘削工事	10.12	（中世層）－0.54～0.59	－	弥生包含層確認
	38	AV13		給水･ガス引き込み	2011.1.18･20	1.55	－	造成土内
	39	AV13	国際交流会館	電気工事	2011.1.28、2.28、3.1	0.85～1.1	－	造成土内
	40	AU･AV13･14		汚水･雨水配管工事	2011.2.8～28	1.4～2.07	1.6～1.95	近世層確認
	41	BC12	生協プレハブ設置工事		2011.1.19、2.14、3.2	0.76～1.06	－	既設内
	42	BC15	グッドジョブ支援センター	プレハブ設置工事	2011.1.19	0.52	－	造成土内
	43			給排水･ガス管布設工事	2011.2.24、3.2～8	0.7～1.2	－	既設内
	44			電気設備工事	2011.3.2～4	0.62～1.95	－	既設内
	45	BD･BE13･14、BD19	ゲート取設環境整備工事	農学部樹木移設	2011.1.20	0.5～0.8	－	造成土内
	46	BD･BE13		農学部案内板移設	2011.1.24	0.93	－	造成土内
	47	AX02･03		剣道場北擁壁	2011.2.1	0.5	－	造成土内
	48	AW･AX04		工学部テニスコートフェンス･門扉	2011.2.8･9	0.87～1.26	0.87	近世層確認
	49	BD13		農学部前雨水桝	2011.2.18	0.65	－	造成土内
	50	AX05	工学部自転車小屋基礎工事		2011.3.22	0.58	－	造成土内
	51	BA10	理学部水道管漏水調査（緊急対応）		2011.3.22～25	0.96～1.7	－	既設内

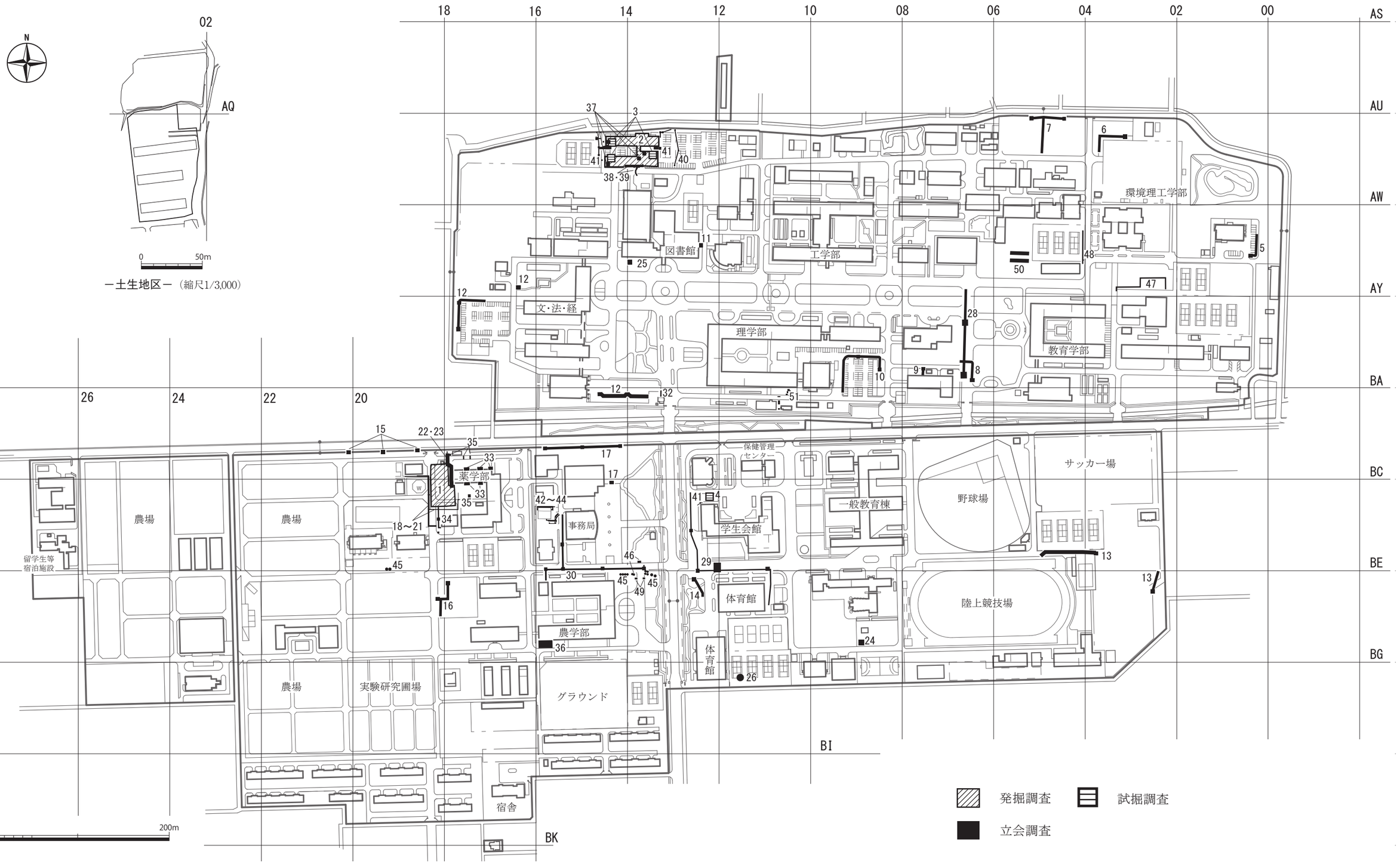


図13　2010年度の調査地点【１】ー津島地区ー（縮尺1/4,000）

第４節　津島岡大遺跡の研究

縄文時代後期～「突帯文期」におけるマメ・イネ圧痕
－圧痕レプリカ法による岡山南部平野における調査成果から－

はじめに

縄文時代の植物利用に関する研究において、植物遺存体分析からのアプローチは一つのおおきな柱となっている。そのなかで、コンタミネーションの問題を極力排し、より確実性の高い手法として注目されるのが圧痕レプリカ法である。この手法による研究は多くの成果をあげ、縄文時代ではイネに関する議論や、列島内でのマメ栽培の可能性についての積極的評価を生み出している（中山　2009、小畑　2010）。また、「突帯文期」[1]ではイネに加えてアワ・キビなどの雑穀資料の報告も各地で増加し、農耕開始期の問題に重要な資料を提供している。

今回調査を行った遺跡が分布する地域でも、イネを中心に穀物の証拠を求める研究や関連資料の報告が積極的に行われてきた（高橋　1992・1997他）。ここでは、こうした岡山県の南部平野を対象に行った圧痕レプリカ法による調査成果の一部を報告したい。調査では縄文時代後期～弥生時代前期の遺跡を対象としたが、その中で縄文時代後期～「突帯文期」の成果をまとめる。現段階では、植物の種についての同定が十分でない資料も多く、今後の検討課題も多いが、特にマメ・イネを中心に、それ以外の資料も多少加えて報告する。

１．土器圧痕の調査

ａ．調査対象遺跡の位置（図14）

岡山県の南部平野に位置する５遺跡（津島岡大遺跡、百間川沢田遺跡、南溝手遺跡、窪木遺跡、上東中嶋遺跡）の資料調査を行った。その中で圧痕の種類を同定できたのは、窪木遺跡以外の４遺跡である。

津島岡大遺跡と百間川沢田遺跡（岡山市）は岡山県の中央部を南流する旭川下流域の遺跡であり、同川を挟んで立地する。一方、南溝手遺跡と窪木遺跡（総社市）、そして上東中嶋遺跡（倉敷市）は、旭川より西側を南流する足守川流域に分布する遺跡で、前２遺跡は互いに接する位置にあることから、一連の遺跡の広がりと認識できる。また、上東中嶋遺跡からは約10㎞北側、つまり内陸側の平野部に位置する。

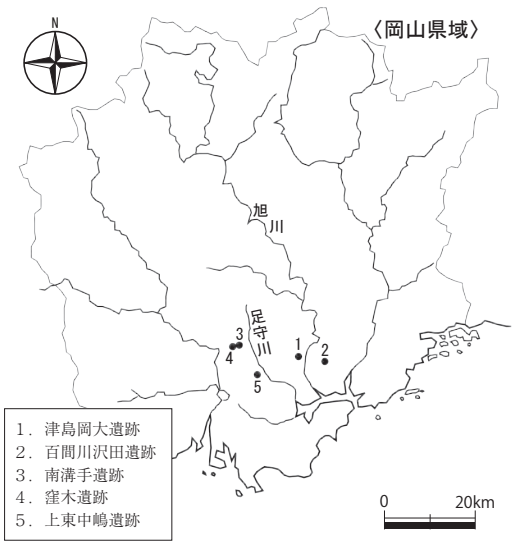


図14　調査遺跡の位置

ｂ．調査方法（図15）

調査方法は圧痕レプリカ法を実施した。調査は対象資料について、できるだけ多くの破片の表面観察を行い、可能性のある土器を抽出することから始めた。抽出した土器の圧痕を観察した後、決定した資料の圧痕部分に剥離剤を塗布し（図15－１）、硬化剤を混ぜたシリコン樹脂を注射器によって注入した（同－２・３）。次に、電子顕微鏡用のピンに増粘剤を混ぜ込んだシリコンを塗りつけ（同－４）、圧痕部に注入済みのシリコン上に押しつけて接着させる（同－５・６）。シリコン樹脂部分が硬化した後、

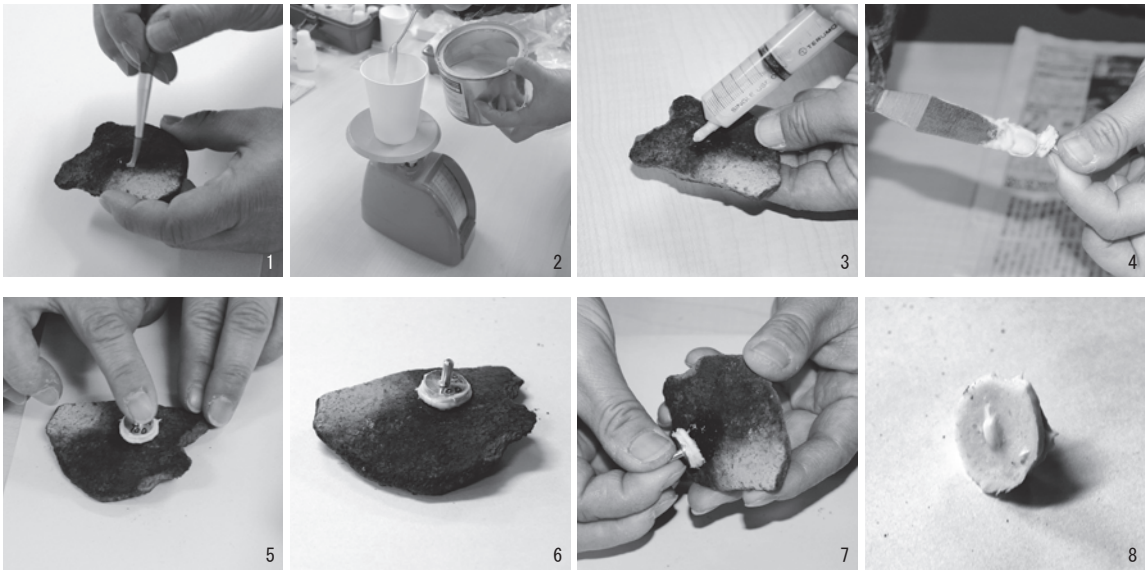


図15　レプリカ作成作業風景

ピンを土器から外して圧痕内のシリコン型を取り出す（同－７・８）。それを走査型電子顕微鏡で観察して種を同定する。

この一連の作業は、型取りまでを、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターをはじめとする資料保管場所で行い、走査型電子顕微鏡撮影および種の同定については、熊本大学文学部小畑弘己研究室に依頼する形をとった。

２．各遺跡の概要と調査成果

⑴　津島岡大遺跡（岡山市北区津島中）

【遺跡の概要】　旭川下流域西岸に位置し、北側の半田山丘陵を背に海に向かって広がる平野の北端となる扇端部に立地する。1983年以降、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施し、縄文時代中・後期、そして「突帯文期」[2]以降の発掘調査成果が報告されている。その中で、植物遺存体の資料としては、突帯文土器のイネ圧痕（第２次調査）や縄文時代後期中葉土器胎土中のイネのプラント･オパール（藤原　1994）、そして縄文時代後期あるいは「突帯文期」の貯蔵穴などから抽出された植物種実（沖･山本　1994、沖　1996）があげられる。

【対象資料の概要】　調査対象とした遺物は、同遺跡の第２次･第３次･第５次･第６次･第９次･第15次･第17次･第22次[3]の各調査における縄文時代後期と「突帯文期」の土器、そして弥生時代前期土器の一部である（表２）。それらは、貯蔵穴などの遺構に加え、河道や微高地部の包含層から出土しており、調査点数は総数34555点にのぼる。その内訳は、縄文時代後期前葉が9507点、同中葉が13738点、津島岡大式（平井勝　1992）を中心とした「突帯文期」が5290点、弥生時代前期が1497点、縄文後期前葉～弥生前期で未分類のものが4523点である。接合個体も大形破片も１㎝程度の小破片も１点と数えており、一概に量の比較はできないが調査量の参考としたい。

【調査結果】　本遺跡で圧痕の可能性があった土器片は86点で、その中で動・植物と認識されたのは36点であり、調査点数が少ない第２次調査を除くと、圧痕土器の抽出率は、地点や時期別ともに0.07～0.13％であり、おおむね0.1％前後と言える[4]。

本報告対象時期で植物の種が同定されたのは、縄文時代後期中葉のダイズ属ダイズ（第５次調査）、「突帯文期」のササゲ属アズキ（第６次調査）とイネ（第２次調査）の各１点である。その他に、不明植物･種子が25点、昆虫あるいは蛹が１点、巻き貝１点のほか不明１点があげられる（表２）。

表２　圧痕調査一覧

遺跡名	所在地住所	調査総点数	調査対象時期	内訳点数	型取り数	動・植物圧痕点数	主な圧痕の種類	掲載No	掲載写真番号	報告書名	所蔵機関
津島岡大遺跡第２調査地点	岡山市北区津島中	76	「突帯文」	－	1	1	イネ	4	図16－13～16	岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ	A
津島岡大遺跡第３調査地点		5357	縄文後期前葉 「突帯文」	1134 4223	10	2 0	不明種子			津島岡大遺跡３	
津島岡大遺跡第５調査地点		13738	縄文後期中葉	－	44	18	ダイズ属ダイズ 不明種子、葉片 巻き貝	1 10～12 16・17	図16－１～４ 図17－37～48 図18－61～68	津島岡大遺跡４	
津島岡大遺跡第６調査地点		4523	縄文後期前葉 「突帯文」 弥生前期	－	3	0 1 0	ササゲ属アズキ	3	図16－９～12	津島岡大遺跡６	
津島岡大遺跡第９調査地点		2367	縄文後期前葉 弥生前期	870 1497	9	1 5	不明種子 イネ４点、不明種子			津島岡大遺跡10	
津島岡大遺跡第15調査地点		3087	縄文後期前葉 「突帯文」	2096 991	5	3 1	不明種子	13	図18－49～52	津島岡大遺跡14	
津島岡大遺跡第17調査地点		1178	縄文後期前葉	－	12	4	昆虫１点、不明種子	18	図18－69～72	津島岡大遺跡16	
津島岡大遺跡第22調査地点		4229	縄文後期前葉	－	2	0				津島岡大遺跡16	
小計		34555			86	36					
百間川沢田遺跡	岡山市中区沢田	22742	縄文後期中葉 「突帯文」 弥生前期	13258 9484	29	8 （縄文２含） 6 2	ツルマメ１点、不明種子 イネ２点、不明種子 イネ、不明種子	2・14 5・6	図16－５～８ 図18－53～56 図16－17～24	百間川沢田遺跡３・４	B
南溝手遺跡	岡山県総社市南溝手	2005	縄文後期中葉 縄文後期後葉 「突帯文」	－	7	1 1 2	サンショウ？ イネ イネ、不明種子	15 9 8	図18－57～60 図17－33～36 図17－29～32	南溝手遺跡１・２	C
窪木遺跡	岡山県総社市窪木	5380	縄文晩期～「突帯文」	－	1	1	不明種子			窪木遺跡１・２	
上東中嶋遺跡	岡山県倉敷市上東	236	「突帯文」	－	4	3	イネ１点、不明種子	7	図17－25～28	上東中嶋遺跡	B
総数		64918			127	60					

・報告書名：文末の「遺跡の参考文献」参照
・時　　期：報告書の記載を尊重したが、晩期後葉あるいは末葉・弥生時代早期の記載は「突帯文期」と変更した。

所蔵機関　A：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
B：岡山県古代吉備文化財センター
C：総社市教育委員会

＜**ダイズ属ダイズ**＞（図16－No１、１～４）　圧痕は深鉢口縁部付近の外面に確認された。圧痕の大きさは5.11㎜×1.71㎜×5.39㎜を測る。これは「ワクド石タイプ」（山崎　2005ａ・ｂ、中沢・丑野　2005）と呼ばれ、近年の研究から栽培種であるダイズ属ダイズのヘソ部分と評価された（小畑・佐々木・仙波　2007）ものと一致する。出土地点は第５次調査地点の河道である。共伴土器の時期は縄文時代後期中葉（彦崎Ｋ２式の前）に位置づけられる（阿部　1994）。また、共伴土器片における炭化物の炭素年代測定値結果からは、おおよそ3800calBP前後（約1850calBC前後）の数値がでており、彦崎Ｋ２式との近似性が指摘されている（工藤　2011）[5)]。

＜**ササゲ属アズキ**＞（図16－No３、９～12）　圧痕は浅鉢胴部断面に確認された。大きさは6.8㎜×3.8㎜を測る。第６次調査地点の河道から出土し、層位的に縄文後期の可能性を有すが、形態的に「突帯文期」と考えられる。

＜**イネ**＞（図16－No４、13～16）　圧痕は突帯文土器の深鉢外面に残される。口縁部の破片である。圧痕の大きさは籾の部分で6.2㎜×2.9㎜、小穂軸部分を入れると長さは6.8㎜となる。第２次調査地点の包含層から出土しており、突帯文土器終末期にあたる沢田式のやや古い段階に位置づけられている（栄　1986）が、逆に、沢田式に続く突帯文土器最終末の可能性も考えられる（中村　2006）。

＜**その他**＞（図17－No10～12　37～48、図18－No13・16～18　49～52・61～72）　７点を掲載した。内訳は第５次調査の植物種子３点（図17－No10～12）、貝類および不明なもの２点（図18－No16･17）、第15次調査の植物種

子１点（図18－No13）、第17次調査の昆虫あるいは蛹１点（図18－No18）である。第５次調査資料は縄文時代後期中葉、第17次調査資料は後期前葉に属する。第15次調査資料は小片だが共伴遺物から後期前葉の可能性が高い。

圧痕は、No10～13・17は深鉢胴部あるいは口縁部付近の内面、No16は深鉢口縁部断面、No18は深鉢底部外面にそれぞれ検出された。No10･11は8.7㎜×4.1㎜と9.5㎜×4.2㎜をそれぞれ測り、丸みをもつ大ぶりな形態を示す。No12は4.4㎜×1.8㎜で先端が尖る。No13は3.2㎜×２㎜を測り、小粒で丸みをもつ。No16は5.6㎜×４㎜（最大幅）を測る巻き貝である。No17は直径4.8㎜で渦巻き状の形態が見て取れる。貝類とは同定されていないが、筆者としてはその可能性も残したい。No18は10㎜×4.7㎜（最大幅）を測る。丸みをもち昆虫か蛹とされる。

⑵　**百間川沢田遺跡**（岡山市北区沢田）

【遺跡の概要】　旭川下流域東岸に位置する。岡山県教育委員会の調査から、縄文時代後期～中世の集落や耕作域が報告される。縄文時代後期中葉には操山山塊の裾部に貯蔵穴群が形成され、「突帯文期」には河道を中心に豊富な遺物が出土する。弥生時代前期の水田も注目される。

【対象資料の概要と調査結果】　調査した土器は縄文時代後期中葉（四元式）（平井勝　1993）が3258点、「突帯文期」（沢田式）（平井勝　1988･1992）を中心に弥生時代前期を含むものが9484点である（表２）。前者は貯蔵穴およびその被覆土層から、後者は土坑および河道から、それぞれ出土している。

本報告対象時期で種が同定できたものは、縄文時代後期中葉のダイズ属ツルマメ１点、「突帯文期」のイネ２点である。その他に、不明種子が４点（縄文後期中葉３点、「突帯文期」１点）、茎状のものが６点（縄文後期中葉２点、「突帯文期」４点）確認されており、その内の後期中葉の可能性が高い１点をここに掲載する。

＜**ダイズ属ツルマメ**＞（図16－No２　５～８）　深鉢の胴部断面で検出された。圧痕の大きさは5.01㎜×2.42㎜×5.56㎜を測る。長軸値が津島岡大遺跡出土のダイズのヘソ部分の長さと近似しており､大きさの違いは明瞭である。

＜**イネ**＞（図16－No５　17～20、No６　21～24）　No５は、鉢あるいは壺の外面に圧痕が検出された。圧痕の周囲は器表面がはじけた状態を示す。全長は6.9㎜であるが、籾部分は5.7㎜×3.5㎜、小穂軸部分を含む長さは6.1㎜を測る。

No６は浅鉢口縁部の内面に圧痕が検出された。籾部分は６㎜×3.7㎜、小穂軸部分を含む長さは6.5㎜を測る。小穂軸の脇には護頴が見て取れる。

＜**その他**＞（図18－No14　53～56）　No14は、深鉢の胴部外面に圧痕が確認された。圧痕の大きさは2.8㎜×3.2㎜である。種の同定はなされていないが、筆者としては、その特徴からカラスザンショウの可能性を考えたい。

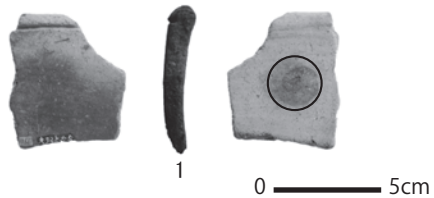
⑶　**南溝手遺跡・窪木遺跡**（総社市南溝手・窪木）

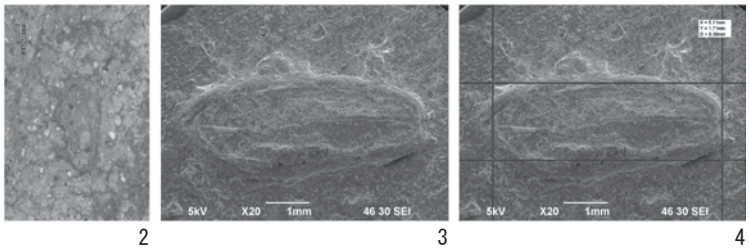
【遺跡の概要】遺跡は東側の丘陵裾部から平野部にかけてひろがる。南溝手遺跡では縄文時代後期および「突帯文期」における植物遺存体の資料報告が比較的多く、イネ圧痕土器２点のほかの縄文後期のマメ炭化種子（松谷　1996）や土器胎土中のイネのプラント･オパール（藤原　1995）が報告されている。

【対象資料の概要と調査結果】　調査した資料は、土器溜まり等の遺構と河道・包含層から出土した遺物である。南溝手遺跡において2005点（縄文時代後期中葉～「突帯文期」）、窪木遺跡では5380点（縄文時代晩期～「突帯文期」）を数える（表２）。前述した既に報告されているイネ圧痕資料の他には植物種子３点（南溝手遺跡２点、窪木遺跡１点）が確認されたのみである。ここでは、南溝手遺跡から、そのイネの既往の報告資料２点とその他種子１点を掲載する。

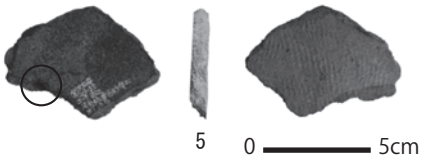
＜**イネ**＞（図17－No８　29～32､No９　33～36）　No８は浅鉢の口縁部､やや内面寄りに圧痕がのこる。６㎜×2.9㎜の大きさを測る。南溝手遺跡河道１の土器群に含まれており、その時期は、津島岡大式の前段階～沢田式の幅で考えられている（平井　1997）。

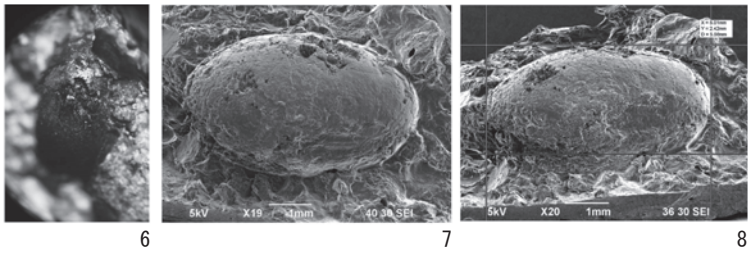
No１　（ダイズ属ダイズ）〈津島岡大５次〉



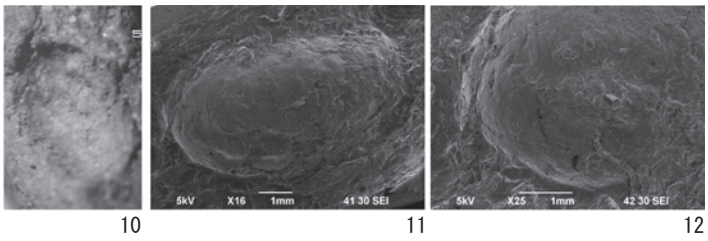


No２　（ダイズ属ツルマメ）〈百間川沢田〉

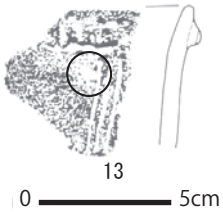


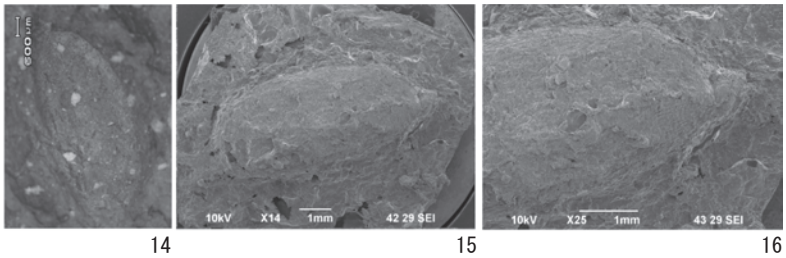


No３　（ササゲ属アズキ）〈津島岡大６次〉

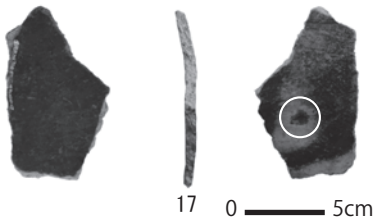


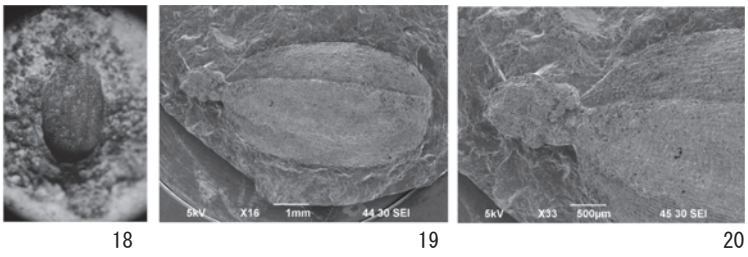
No４　（イネ）〈津島岡大２次〉



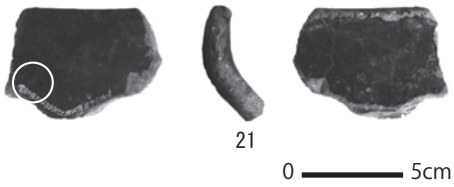


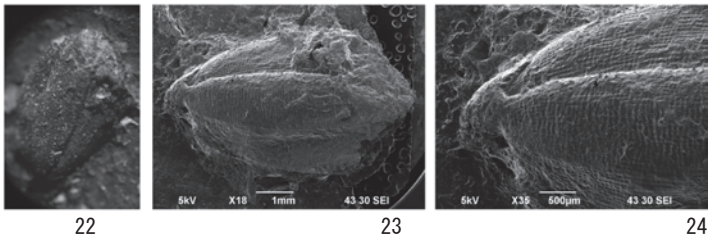
No５　（イネ）〈百間川沢田〉





No６　（イネ）〈百間川沢田〉



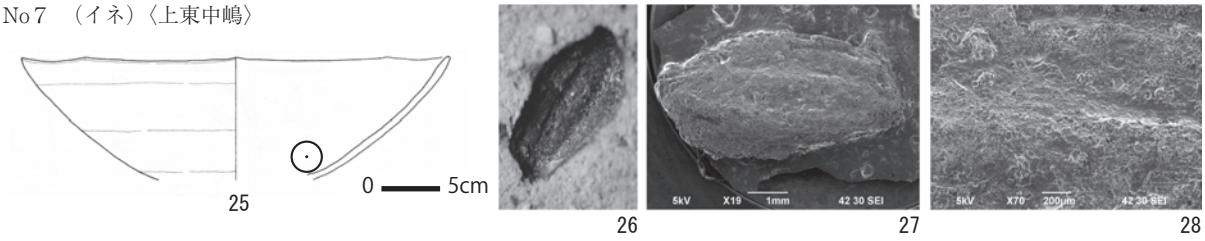


〈　　〉出土遺跡名を示す。（以下、同じ）

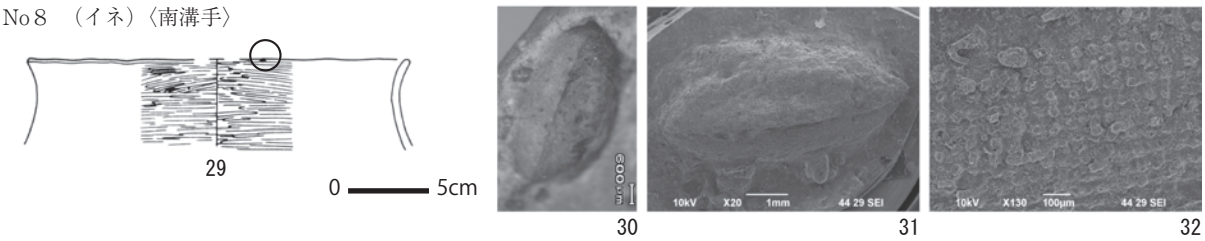
右から３列目：実体顕微鏡写真　右２列：SEM画像（以下、同じ）

図16　圧痕土器と圧痕写真１

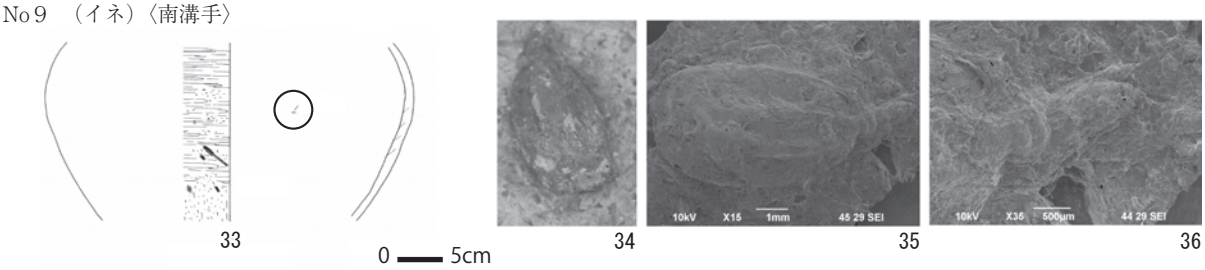
No７　（イネ）〈上東中嶋〉



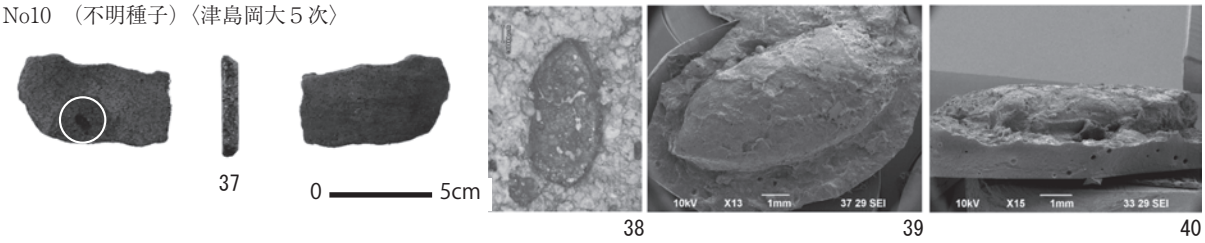
No８　（イネ）〈南溝手〉



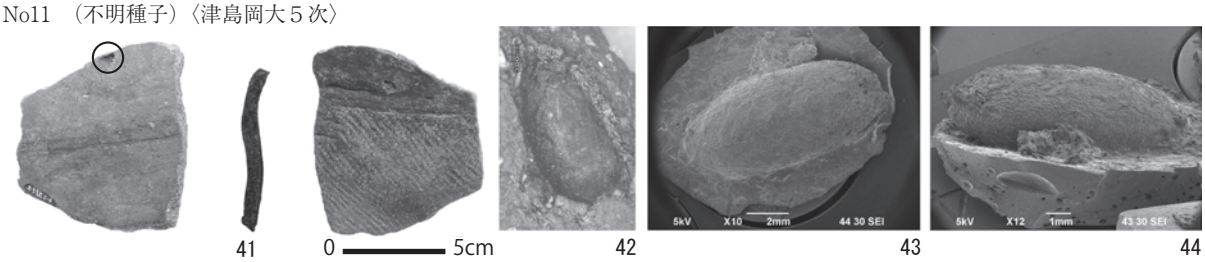
No９　（イネ）〈南溝手〉



No10　（不明種子）〈津島岡大５次〉



No11　（不明種子）〈津島岡大５次〉



No12　（不明種子）〈津島岡大５次〉

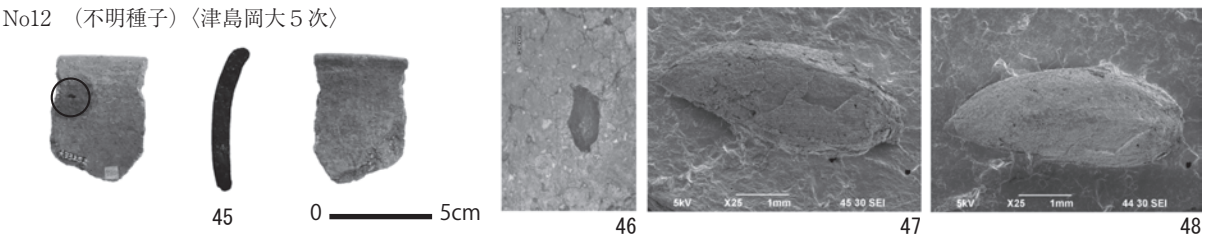
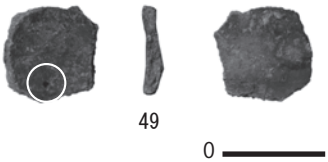
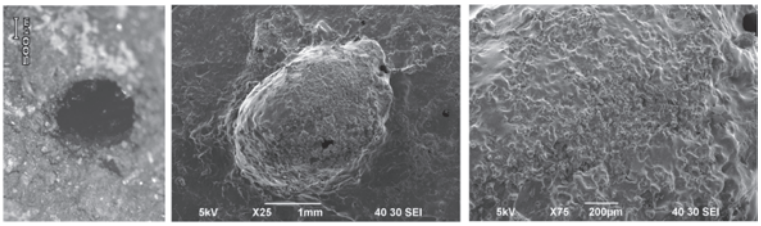


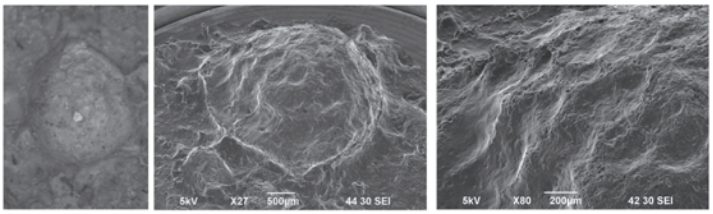
図17　圧痕土器と圧痕写真２

No13 （不明種子）〈津島岡大15次〉

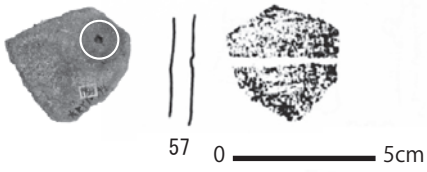


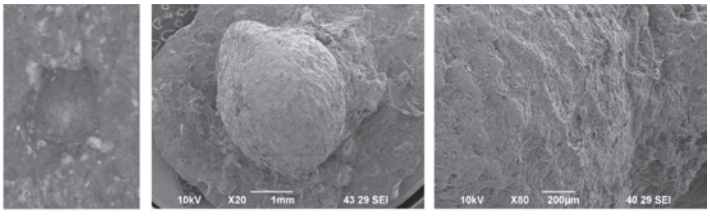


No14 （不明種子）〈百間川沢田〉

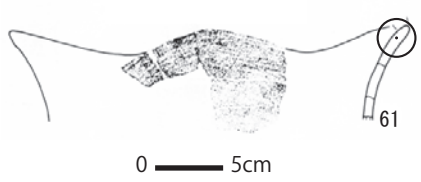


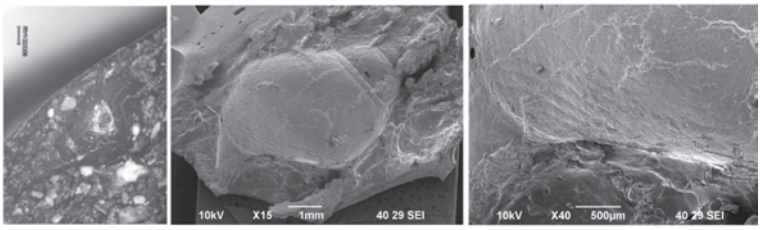
No15 （サンショウ？）〈南溝手〉



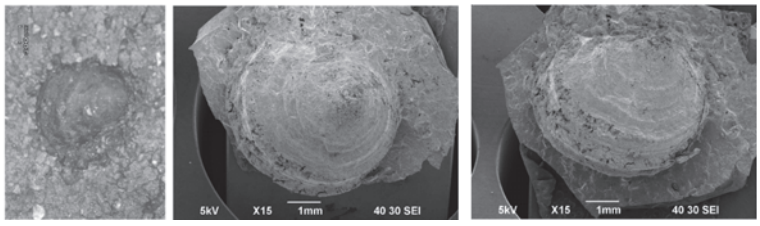


No16 （巻き貝）〈津島岡大５次〉

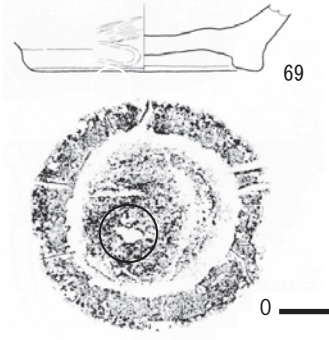




No17 （不明）〈津島岡大５次〉



No18 （昆虫か蛹）〈津島岡大17次〉



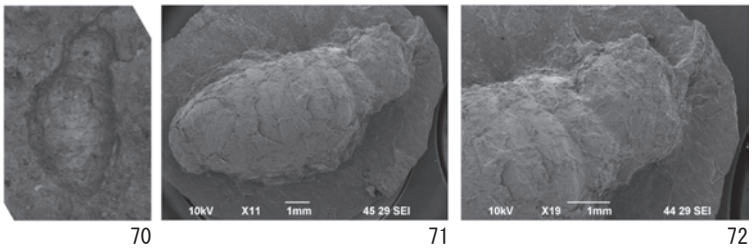


図18　圧痕土器と圧痕写真３

No９は深鉢の胴部内面にのこる圧痕である。本調査では、既往の報告（渡部　1995）では不明確であった小穂軸付近の状態が比較的明瞭に現れている。圧痕の長さは8.4㎜、籾部分の大きさは6.6㎜×3.8㎜、小穂軸部分を入れると長さは７㎜を測る。また、土器胎土中にイネのプラント･オパールが検出された４点の土器の内１点がこの土器である。所属時期は縄文時代後期後葉（福田Ｋ３式）と報告されるが、土器の特徴から新しくなる可能性が議論されている。

⑷　**上東中嶋遺跡**（倉敷市上東）

北側に丘陵を有し、南側への「下がり」部分で深鉢・鉢・壺を含む土器群が出土した。報告では、「突帯文期」である津島岡大式並行期の一群とされる（上栫　2010）。調査資料は236点で、イネ１点と不明種子１点が検出された（表２）。

＜**イネ**＞（図No７－25～28）　浅鉢の胴部内面に圧痕がのこる。圧痕の大きさは5.8㎜×３㎜である。

３．まとめ

本調査において植物の種類が同定されたマメ類とイネについて、問題点と成果にふれてまとめとしたい。

【マメ栽培の問題】

本圧痕調査では、縄文時代後期中葉にダイズ属ダイズとツルマメ、「突帯文期」に属する可能性が高いササゲ属アズキを確認し、岡山南部平野においてマメ利用が行われていたことが裏付けられた。さらに、炭化種子にその対象を広げると、縄文時代後期前葉に津島岡大第６次調査地点でアズキ（沖　1996）が、同後期中葉に彦崎貝塚と「突帯文期」の南溝手遺跡でマメ類が各々報告されている（新山　2006、松谷　1996）。この津島岡大遺跡の資料は、前項で報告したアズキの圧痕資料と同地点で出土している。コンタミの問題も残すが、縄文時代後期以降におけるマメ栽培の可能性を高める資料として参考となろう。

近年の圧痕調査により、縄文時代のダイズは西関東～中部高地と九州への集中が指摘されている（小畑　2010）。両地域の中間に位置する本調査の資料は、資料数のピークが中期と後期後葉に求められる両者を埋める確実な圧痕資料として重要であり、マメ栽培の動向を考える上で手がかりとなろう。

岡山南部平野においてダイズが確認される縄文時代後期は、同地域において明確な住居痕跡をのこす集落の出現や立地などの変化、あるいは石鏃の増加が顕在化する時期である。植物利用では、貯蔵穴による堅果類の保存が開始され、その安定供給の確保が指向される。そうした中で、当時の栽培植物とされるヒョウタン・アサ・アブラナ属・ヤマゴボウなど[6]に比べ、その保存面・栄養面での優位性などからメジャーフードの位置づけもされるダイズ（小畑　2010・2011）をはじめとするマメ栽培の果たした役割について、その後の植物との関わりにおいても注目していきたい。

ただし、本調査では縄文時代後期を遡る調査を行っていないため、その上限については今後の課題である。

【イネの出現期について】

本調査では、４遺跡６点の新規資料・既往報告資料の再確認を行った[7]。１点を除くと全て「突帯文期」に含まれる。土器型式では、津島岡大式前後～沢田式の次段階となるが、津島岡大式は沢田式の古段階か直前に置かれることを考慮すると、沢田式前後の時期を中心に、やや古く遡る可能性を含むという評価になろう。

問題は南溝手遺跡のイネ資料である（図17－No９）。縄文時代後期後葉と報告されているが、土器形態などから「突帯文期」に下がるとの意見があがっている（中沢　2009）。確かに後期土器には見いだせない形態である点はおおむね一致するところである[8]。しかし、「突帯文期」の土器としても決定的とまでは言い難い点は議論の継続からも窺われる。一方、出土土層が晩期中葉（「船津原式」）の土層に切られる[9]という出土状況を重視

するならば、晩期前半～中葉との考え方も可能となる。現状では、同資料の下限は「突帯文期」と評価できるが、上限については晩期前半～中葉の可能性も全く否定はできないことから保留としておきたい。後期の土器や土壌中から報告されているプラント･オパールの問題の評価などと合わせて、慎重な検討が必要と考えている。

本報告は、2008年度～2011年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（Ａ）「レプリカ・セム法による極東地域先史時代の植物栽培化過程の実証的研究」（研究代表：熊本大学小畑弘己教授）の研究成果の一部である。種の同定は熊本大学教授小畑弘己氏によるものである。筆者の意見を記す場合は、文章中にそれを明記した。走査型電子顕微鏡撮影は仙波靖子・真邉彩両氏が行った。また、資料作成には岩﨑志保・山口雄治両氏の協力を得た。皆様にお礼申し上げる。

図16～18の実測図・拓本は、文末「遺跡の参考文献」の１・３・７・10・14からそれぞれ引用し、一部加筆した。図14は岩﨑志保氏の作成である。

なお、津島岡大遺跡出土のダイズ圧痕土器は、2011年に『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』で工藤雄一郎氏により「津島岡大遺跡から出土したマメ圧痕土器の付着炭化物の分析」中に報告された。註５にも記したが、同研究に際して提供した圧痕土器はダイズ圧痕が確認された土器に共伴する土器であり、圧痕の種類は不明なものであることが、紀要刊行後に判明した。ここに間違いを訂正し、謝罪する次第である。

謝辞

資料調査にあたっては、岡山県古代吉備文化財センター・総社市教育委員会・総社市埋蔵文化財学習の館・岡山大学埋蔵文化財調査研究センターから資料提供をいただいた。高田恭一郎・村上幸雄・物部茂樹（敬称略）には調査時に大変御世話になった。記して感謝の意を述べたい。　（山本　悦世）

註　１）同時期の表記については、縄文時代晩期後葉～末葉、弥生時代早期、あるいは突帯文期とされる場合がある。前二者の分類には、弥生時代の開始をいかにみるかという問題が深く関わる。筆者は、弥生時代の開始期については、突帯文土器のどこかの段階にその可能性を考えているが、その中での明確な結論を得ていないため、ここでは「突帯文期」を便宜的に使用する。

２）岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの報告書では、時期の記載が縄文時代晩期末葉あるいは突帯文期から1998年刊行の『津島岡大』10以降は弥生時代早期へと変更している。

３）第３次･15次、第６次･９次、第17次･22次は各々隣接地点で、第２次と第５次地点を加えて５箇所に大別される。

４）集落内での圧痕抽出率は百間川沢田遺跡などでも0.07％程度であり、大きな差はない。ただし、数字では現れないが、津島岡大遺跡第５次調査地点と百間川沢田遺跡は検出頻度が高く、南溝手遺跡・窪木遺跡は低い感想を得た。

５）同研究報告に際して提供した圧痕土器は、当初、ダイズ圧痕の土器と考えていたが、紀要刊行後にレプリカが入れ替わっていたことが判明した。分析資料には炭化物が厚く付着し、ダイズ圧痕土器に共伴する土器であることは確実であるが、同土器の圧痕の種類は不明である。

６）これらは、津島岡大遺跡でもフローテーション法により、縄文時代後期の貯蔵穴の埋土を中心に抽出されている。

７）調査対象地域内では、このほかに福田貝塚で縄文時代後期（福田Ｋ３式）のイネ圧痕資料の報告（高橋　1992）があるが、今回は調査がかなわなかった。

８）千葉豊氏・幸泉満夫氏のご教示による。

９）調査担当者である平井泰男氏のご教示による。

参考文献

阿部芳郎1994「後期第Ⅳ群土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡』４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

上栫武2010「第４章まとめ　１　縄文晩期土器」『上東中嶋遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告226　岡山県教育委員会

沖陽子・山本悦世1994「貯蔵穴出土の種子－小型種子を中心に－」『津島岡大遺跡』４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

沖陽子1996「津島岡大遺跡第６次調査出土種子の分析」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』13　岡山大学埋蔵文化財調査研究

センター
小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子2007「土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培」『植生史研究』15－２　日本植生史学会
小畑弘己2010「縄文時代におけるアズキ・ダイズの栽培について」『考古学・先史学論究』Ⅴ　龍田考古学
小畑弘己2011『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社
工藤雄一郎2011「津島岡大遺跡から出土したマメ圧痕土器の付着炭化物の分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
栄一郎1986「縄文時代晩期の土器について」『岡山大学津島地区遺跡群の調査』Ⅱ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第２冊　岡大学埋蔵文化財調査研究センター
高橋護1992「縄文時代の籾痕土器」『考古学ジャーナル』355　ニューサイエンス社
高橋護1997「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会
中沢道彦・丑野毅2005「レプリカ法による熊本県ワクド石遺跡出土土器の種子状圧痕の観察」『肥後考古』13　肥後考古学会
中沢道彦2009「縄文農耕論をめぐって－栽培種植物種子の検証を中心に－」『弥生時代の考古学５　食糧の獲得と生産』同成社
中村大介2006「岡山平野の突帯文土器の系統と変遷」『津島岡大遺跡』17　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
中山誠二2009「縄文時代のダイズ属の利用と栽培に関する植物考古学的研究」『古代文化』61－３　古代學協會
中山誠二2010『植物考古学と日本の農耕の起源』同成社
新山雅広2006「附章８　彦崎貝塚から出土した炭化種実」『彦崎貝塚』岡山市教育委員会、注19b
平井勝1988「岡山県における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集　古代吉備研究会
平井勝1992「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究』上　山陽新聞社
平井勝1993「縄文後期・四元式の提唱」『古代吉備』第15集　古代吉備研究会
平井泰男1997「縄文時代晩期の土器について」『窪木遺跡』１　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120　岡山県教育委員会
藤原宏志1994「津島岡大遺跡出土土器に関するプラント･オパール胎土分析」『津島岡大遺跡』４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
藤原宏志1995「南溝手遺跡出土土器胎土のプラント･オパール分析結果について」『南溝手遺跡』１　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84　岡山県教育委員会
松谷暁子1996「南溝手遺跡の炭化種子について」『南溝手遺跡』２　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107　岡山県教育委員会
山崎純男2005a「西日本縄文農耕論」『第６回韓･日新石器時代共同学術大会発表資料集　韓・日新石器時代の農耕問題』㈶慶南文化財研究院･韓国新石器学会・九州縄文研究会
山崎純男2005b「西日本縄文農耕論－種子圧痕と縄文農耕の概要－」『第１回西日本縄文文化研究会　西日本縄文文化の特徴』関西縄文文化研究会・中四国縄文研究会・九州縄文研究会
渡部忠世1995「土器片附着の圧痕について」『南溝手遺跡』１岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84　岡山県教育委員会

遺跡の参考文献

＜津島岡大遺跡＞岡山大学埋蔵文化財調査研究センター発行
１．第２次調査：栄一郎編1986『岡山大学津島地区遺跡群の調査』Ⅱ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第２冊
２．第３次調査：山本悦世他編1992『津島岡大遺跡』３　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第５冊
３．第５次調査：阿部芳郎編1994『津島岡大遺跡』４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊
４．第６次調査：山本悦世他編1995『津島岡大遺跡』６　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第９冊
５．第９次調査：小林青樹他編1999『津島岡大遺跡』10　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊
６．第15次調査：山本悦世編2004『津島岡大遺跡』14　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19 冊
７．第17･22次調査：岩﨑志保他編2005『津島岡大遺跡』16　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
＜南溝手遺跡・窪木遺跡・上東中嶋遺跡＞岡山県教育委員会発行
８．平井勝編1993『百間川沢田遺跡』３　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
９．柳瀬昭彦他編1997『百間川沢田遺跡』４　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告119
10．平井泰男編1995『南溝手遺跡』１　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第100
11．平井泰男編1996『南溝手遺跡』２　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107
12．岡田博編1997『窪木遺跡』１　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120
13．平井泰男第1998『窪木遺跡』２　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124
14．上栫武編2010『上東中嶋遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告226

第２章　鹿田遺跡の調査研究

第１節　発掘調査の概要

１．鹿田遺跡第20次発掘調査Ｃ・Ｄ地点

（岡大病院中央診療棟新営：調査番号１・２　鹿田BR･BS12～21・BT～BX12～13区）

ａ．調査の成果

弥生時代後期～近世の遺構・遺物を確認した。

①弥生時代後期～古墳時代初頭

本調査地点一帯では弥生時代後期～古墳時代初頭における１次調査地点を中心とした集落域の地形がわかってきている。本地点においても、それを補強するデータを得ることができた。Ｃ地点の微高地上では古墳時代初頭の井戸１基、焼土土坑１基、土器溜まりを検出した。焼土土坑は小規模ながら作業炉の可能性が考えられ、集落縁辺での活動域のひとつとして注目できる。

②鎌倉時代～室町時代

第18次・第20次調査Ａ地点と接続する区画の溝が東西・南北方向ともに確認された。これらの溝の多くは、「鹿田条里」と言われる現在の地割りに即した、北が東に傾く方位をとる。しかしＤ地点で確認された溝は真北方向を指向するものであり、その時期は鎌倉時代前半に限られる。この方位が異なる溝は、第20次調査Ａ地点でも見つかっており、今回接続する部分を検出したことで時期・構造について再確認できたものである。

③戦国～江戸時代

17世紀初めころまでは、井戸や区画溝の存在から、屋敷地としての機能が伺える。その後、野壺や土坑の存在から、調査地点一帯が耕作地として利用されていたことが考えられる。こうした土坑の集中域の状況等から、その周辺に区割りとなる道の存在する可能性が考えられる。

調査期間　**Ｃ地点**：2010年７月20日～10月８日
（表土掘削：2010年７月７日～９日、発掘調査：2010年７月20日～10月８日）
Ｄ地点：2011年２月21日～３月２日
（表土掘削：2011年２月18日、発掘調査：2011年２月21日～３月２日）

調査面積　**Ｃ地点**：276㎡、**Ｄ地点**：15㎡

調査担当　岩崎　志保（助教、調査主任）

遺構・遺物

【遺構】　**Ｃ地点**：井戸４基・溝10基・土坑６基・ピット約30基・土器集中３箇所・落ち１条
〈内訳〉　近世：井戸３基・土坑４基、中世：溝10条・ピット約30基
弥生時代後期～古墳初頭：井戸１基・土坑２基・土器集中３箇所・落ち１条
Ｄ地点：溝３条、土坑４基

【遺物】　**Ｃ地点**：土器（弥生時代後期～古墳初頭、中世～近世）、石器、木器（下駄、曲げ物他）、土壌サンプル
Ｄ地点：土器（中世～近世）、種子サンプル（近世土坑出土）　（総量78箱）

ｂ．調査に至る経緯と調査経過

⑴　調査に至る経緯

本調査は中央診療棟建設に伴うものである。同予定地では2007年度に第18次調査（面積872.2㎡）、2009年度に第20次調査（Ａ地点・Ｂ地点：面積計3114㎡）を実施しているが、その際に工事の作業上調査が不可能であった部分がＣ・Ｄ地点である（図19）。Ｃ地点は、第18次調査の北辺と東辺を拡張する形の逆Ｌ字形を呈する部分で、面積は276㎡である。Ｄ地点は、20次Ｂ地点の北西部分にあたり、面積15㎡と狭小なものである。

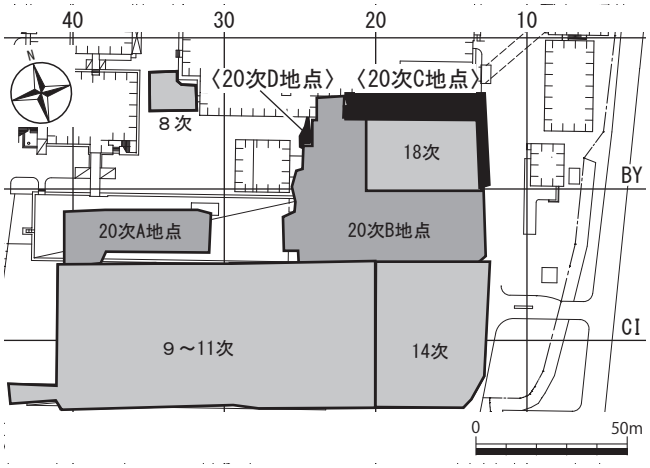


図19　調査地点の位置（縮尺1/2,500）

以下、地点毎に調査の経過を述べる。

⑵　調査経過

【Ｃ地点】

2010年７月７日～９日に表土掘削を行った。Ｃ地点では大きな基礎はなかったが、調査区の南半を東西方向に走る排水菅を表土掘削と同時に撤去する必要があり、東西45m、南北約２ｍの範囲を、ほぼ予定調査深度まで除去した。

発掘調査は2010年７月20日から開始した。逆Ｌ字形を呈する調査区北辺を北区、南北に長い部分を南区として遺物の取り上げや記録を行うこととした。まず攪乱部分の清掃と、既調査と接する壁面の清掃と記録を進めるとともに、近世面から精査を行っていった。近世の遺構として土坑・井戸・ピット、さらに中世面では土坑・溝・ピットを検出した。続いて弥生時代後期～古墳時代初めの遺構（井戸・土坑・土器溜まり･落ち）の調査を終え、10月８日に全ての作業を終了した。

【Ｄ地点】

Ｄ地点は建物予定地内の北西端部にあたり、西側には仮設の渡り廊下が設置されている。2011年２月18日に造成土の除去を行ったところ、包含層の残存状況が良好であることが判明した。調査面積は15㎡である。

発掘調査は２月21日から開始した。近世面では土坑４基、溝（落ち）１条を確認した。次いで中世面では溝２条、ピットを検出し、３月２日に全ての調査を終了した。

ｃ．調査の概要

⑴　層序（図20）

基本土層は以下の通りである。

１層：造成土である。岡山医学専門学校建設（大正六年･1917年）の際の造成土と、以後の堆積土により構成される。上面の標高は2.4mである。

２層：近代土層にあたる。南に隣接する18次調査地点では確認されたが、Ｃ地点では削平されているとみられ確認されなかった。Ｄ地点では北区のごく一部で確認され、上面の標高1.7ｍを測る。

３層：灰色砂質土で、近代の耕作土層にあたる。大半は削平を受けており、一部で確認された。Ｃ地点では北区北壁の16ライン付近、22ライン付近でのみ確認された。上面の標高は1.45ｍを測る。Ｄ地点では北区で確認され、上面の標高1.64mを測る。

４層：やや青みがかった灰褐色粘質土で、鉄分を含む。中世後半までに堆積した土層と考えられる。上面の標高はＣ地点で1.4～1.45m、Ｄ地点で1.55mを測る。

５層：淡褐灰色粘質土で、鉄分・マンガンを含む。中世前半の堆積層と考えられる。上面の標高はＣ地点で1.3～1.35m、Ｄ地点で1.42mを測る。

６層：褐灰色粘質土で、鉄分・マンガンを少し含む。上面の標高1.2m～1.25mを測る。中世前半の土層と考えられる。Ｃ地点西半～Ｄ地点では６a･６b層に分けられる。

６ａ層:淡褐灰色砂質土である。鉄分･白色砂を含む。

６ｂ層：褐灰色砂質土である。

７層：暗褐灰色粘質土～砂質土で、鉄分を少し含む。上面の標高1.1mを測る。古墳時代初頭の時期が考えられる。

８ａ層：暗褐灰色砂質土である。上面の標高1.0mを測る。

８ｂ層：暗灰色粘質土である。上面の標高0.85mを測る。Ｃ地点北西部では粘性があり、黒みを帯びる。

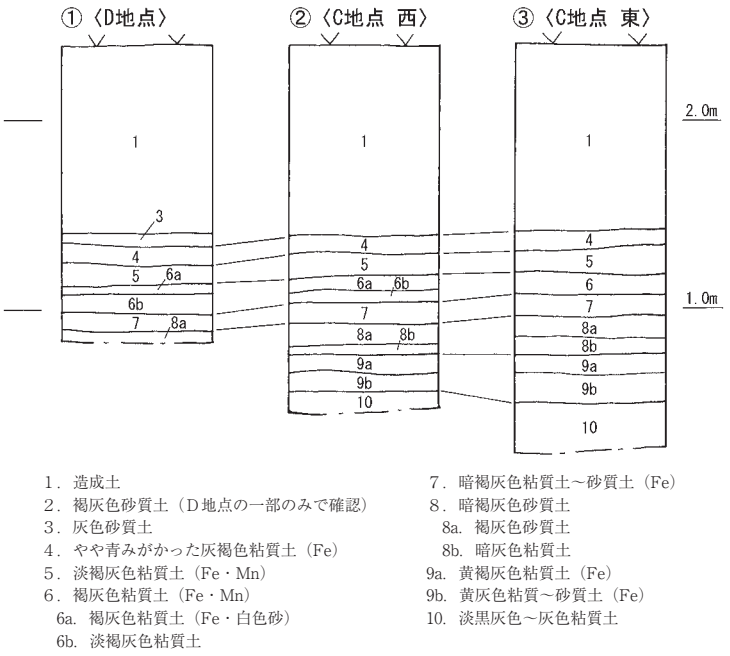


図20　土層断面図（縮尺1/40）

９ａ層：黄褐灰色粘質土である。鉄分の沈着が特徴的である。上面の標高0.75～0.8mを測る。上面では遺構を検出しており、弥生時代後期までの堆積と考えられる。

９ｂ層：黄灰色粘質から砂質土である。鉄分を多く含む。Ｃ地点では上面の標高0.6～0.65m、Ｄ地点では0.75mを測る。

10層：淡黒灰色～灰色粘質土で、上面の標高0.5mを測る。

⑵　**遺構･遺物**（図21）

<弥生時代後期～古墳時代初頭>　７～10層が本時期に対応する。Ｃ地点は北側に広がる微高地端部にあたり、19ラインの西側では北東から南西に向けての落ちが確認された。一方、微高地東側の落ちについては、本調査地点では攪乱のため確認できなかった。

微高地上では古墳時代初頭の井戸１基（SK９）、土坑２基（SK10・11）・土器溜まり１箇所、また微高地端部の斜面で遺物が比較的多く出土している。２基の土坑のうち南側のSK10は被熱痕・焼土塊が認められ、何らかの作業炉の可能性が考えられる。またSK10の北側に位置するSK11では埋土に複数回の炭層の堆積が認められ、SK10との関連が考えられる。

Ｄ地点では遺構は確認されず、遺物も極めて少なかった。

<鎌倉時代～室町時代>　４～６層が本時期に対応する。Ｃ地点で溝10条･ピット約30基、Ｄ地点で溝２条、ピット20基を検出した。

溝の方向は、東西方向１条、南北方向11条であり、いずれも第18次調査・第20次調査Ｂ地点と接続する。このうちＣ地点で検出した東西方向の溝１条（SD４）と南北方向の溝９条は、北方位の軸が東に15度傾く現在の地割りに沿ったものである。SD４からは石帯１点が出土している。鎌倉時代後半のSD１は、幅４m、深さ1.5mの規模で確認される大形の区画溝である。18次地点では南北方向に直行していたが、BTライン付近で東に傾く方向で確認された。本調査区より北側のBSラインが東西方向の区画にあたる可能性があり、その区画との接続部

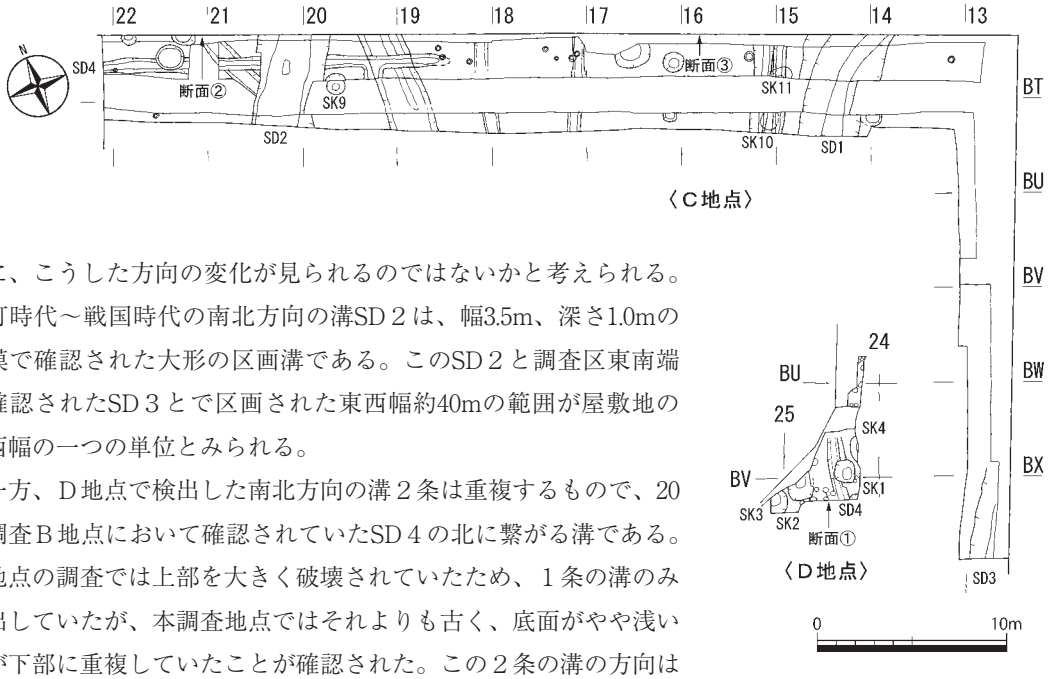


図21　第20次調査C・D地点遺構全体図
（縮尺1/400）

分に、こうした方向の変化が見られるのではないかと考えられる。室町時代～戦国時代の南北方向の溝SD２は、幅3.5m、深さ1.0mの規模で確認された大形の区画溝である。このSD２と調査区東南端で確認されたSD３とで区画された東西幅約40mの範囲が屋敷地の東西幅の一つの単位とみられる。

一方、Ｄ地点で検出した南北方向の溝２条は重複するもので、20次調査Ｂ地点において確認されていたSD４の北に繋がる溝である。Ｂ地点の調査では上部を大きく破壊されていたため、１条の溝のみ検出していたが、本調査地点ではそれよりも古く、底面がやや浅い溝が下部に重複していたことが確認された。この２条の溝の方向は真北に近いことが注目される。また２条の重複が確認されたことで、同じく真北方向を指向する溝（20次調査Ｂ地点溝２・３、２条が重複）と対になる可能性が考えられる。

ピットについてはＣ地点の西側に多い傾向が認められた。

<江戸時代>　３・４層で検出した井戸４基、土坑８基が本時期に属する。井戸のうち、Ｃ地点SK７からは陶磁器のほか、下駄、曲げ物等の木製品が出土している。もっとも新しい時期の遺構はＣ地点SK１であり、木枠が残存していた。出土遺物はわずかに陶磁器片があるのみで、時期としては17世紀代と考えられる。Ｄ地点で検出した土坑４基は径1.2～1.6m、深さ0.6mで、平面形は隅丸方形、隅丸長方形のものがある。これらのうちSK２の底面付近でウリ科植物種子を確認した。

また３層上面での耕作によるカットとみられる段がＣ地点16ライン付近で確認されている。Ｃ・Ｄ地点は江戸時代には耕作地として利用されていたことがうかがえる。（岩崎）

２．鹿田遺跡第21次発掘調査

（外来診療棟周辺他環境整備：調査番号３　鹿田AD・AE30・31、AG・AH30・31、AP・AQ26・27、AS・AT25～28区）

鹿田遺跡第21次調査（外来診療棟周辺他環境整備）の調査成果については、本書第Ⅱ部第２章において正式報告として記載した。（光本）

調査期間　2010年11月18日～12月９日（表土掘削：Ａ～Ｃ地点　11月15～17日、Ｄ地点　11月15・16・25・29日）

調査面積　120.1㎡（Ａ地点：21.2㎡、Ｂ地点：22.0㎡、Ｃ地点：17.5㎡、Ｄ地点：59.4㎡）

調査担当　光本　順（助教、調査主任）

遺構・遺物

【遺構】　Ａ地点：河道（平安時代）、溝状遺構１条（鎌倉時代）
　　Ｂ地点：河道（平安時代）、溝状遺構１条（鎌倉時代）
【遺構】　Ａ地点：土器（平安時代）、瓦質土器、土師質土器、石造物（鎌倉時代）
　　Ｂ地点：陽物形木製品、墨書を有する板材、土師器・須恵器（平安時代）、
　　土師質土器（鎌倉時代）
　　Ｄ地点：弥生時代後期土器　（総量２箱）

第２節　試掘・確認調査の概要

１．岡山県地域医療総合支援センター予定地（調査番号４、鹿田AZ04・BA08区）

ａ．調査の経緯

岡山県地域医療総合支援センター予定地は鹿田地区の北東にあたり、現在は駐車場として整備されている。周辺では第16次調査（立体駐車場）、第19次調査（歯学部渡り廊下）や包含層に達する数件の立会調査を実施しており、弥生～古墳時代の河道や微高地から河道へいたる地形の転換点に構築された遺構を確認している。こうした地形や遺構・遺物の広がりを確認するため、試掘坑を予定地の東西２か所に設定した。

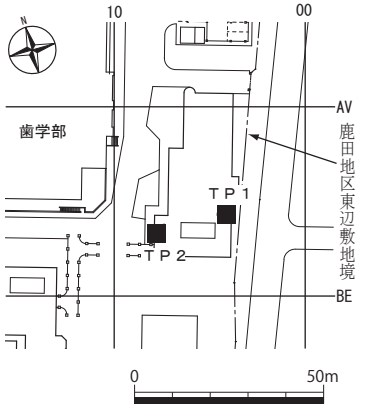


図22　調査区の位置（縮尺1/2,000）

ｂ．調査の成果

⑴　ＴＰ１

予定地の東側に南北４ｍ、東西３ｍの範囲を設定し、包含層である２層以下については南北1.3m、東西1.9mの規模で掘削した。掘削深度は2.3ｍである。

【層序】　ＴＰ１では、近世の遺物を多く含む溝や土坑といった遺構が切りあっており、包含層と思われる土層は遺構の上下でわずかに確認できたのみである。

１層：造成土および攪乱埋土で、近代から現代の土層である。上面の標高は約2.9m、層厚約1.2mである。

２～４層は灰色を基調とする砂質土で、近世～近代の土層と考えられる。粘土ブロックや材木小片等を含む。

２層：暗灰色砂質土である。上面の標高は約1.7m、層厚約0.02～0.05mである。

３層：明緑灰色砂質土である。上面の標高は約1.65～1.7m、層厚約0.05mである。

４層：明黄灰色砂質土である。上面の標高は約1.6～1.65m、層厚約0.05～0.1mである。

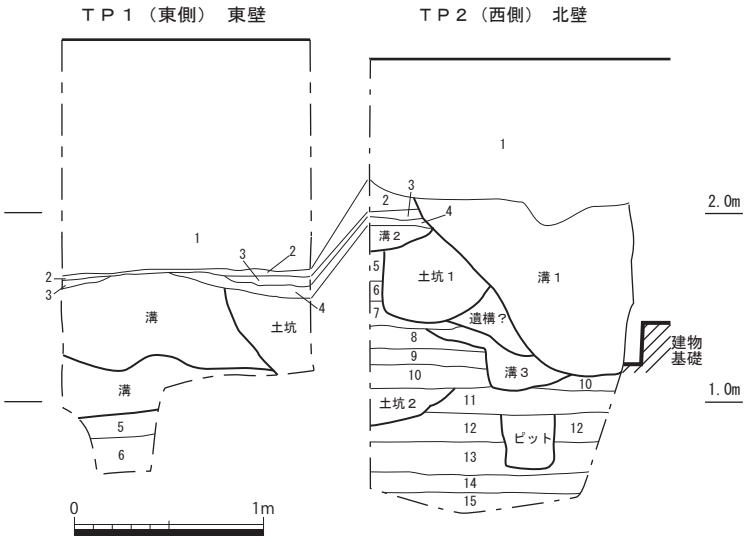
５層：暗茶褐色砂質土で、弥生時代もしくは中世の土層と判断される。径５cm前後の灰褐色粘質土ブロックを含む点から、遺構の埋土である可能性ものこす。上面の標高は約0.92～0.97m、層厚約0.1～0.15mである。

６層：明黄褐色砂質土で、暗灰色粘土ブロックが入る。時期を特定できないが、弥生時代あるいは中世の基盤層と考えられる。上面の標高は約0.8～0.85m、層厚0.2m以上である。

【遺構・遺物】　３・４層下面で土坑１基、溝３条を確認した。遺物は溝から近世陶磁器・瓦等が出土した。

土坑：調査区南東隅底面の平面精査で弧状の掘り方ラインを検出した。掘り方の内側で確認された灰褐色弱粘質土が東壁・南壁に連続し、急な傾斜でたちあがることから土坑と判断した。

溝：南北断面・平面精査により、南北方向の溝３条が切り合いながら掘削されていることが推測された。いずれ



ＴＰ１
1．造成土および攪乱埋土
2．暗灰色砂質土
3．明緑灰色粘質土
4．明黄灰色砂質土
5．暗茶褐色砂質土
6．明黄褐色砂質土

ＴＰ２
1．造成土および攪乱埋土
2．淡灰褐色砂質土
3．淡茶褐色砂質土
4．暗灰色砂質土
5．淡黄褐色砂質土
（灰色砂質土ブロック）
6．明黄橙色砂質土
7．灰黄橙色砂質土
（灰色砂質土ブロック）
8．明茶褐色砂質土
9．黄茶褐色砂質土
10．茶褐色砂質土
11．淡黄褐色砂質土
（灰色粘質土ブロック）
12．茶褐色砂質土
13．灰茶褐色弱粘質土
14．暗灰色粘土
（淡灰色粘土ブロック）
15．淡灰白色粘土

図23　土層断面図（縮尺1/40）

の溝からも近世陶磁器・瓦等の遺物が出土しており、近世溝と考えられる。

⑵　ＴＰ２

予定地の西側に東西2.8m、南北1.9mの範囲で設定し、包含層である２層以下を東西1.3m、南北1.2mの規模で掘削した。掘削深度は2.4mである。

【層序】　ＴＰ２では、東壁上半部が旧建物基礎のために破壊をうけていたものの、のこる３方の壁面では良好に土層が観察できた。

１層：造成土および攪乱の埋土で、近代から現代の土層である。上面の標高は約2.8m、層厚約0.6～0.7mである。

〈２～４層〉　灰～茶褐色砂質土で、鉄分の沈着がほとんどみられない。いずれもしまりの緩い土層である。近世～近代の土層とみられる。

２層：淡灰褐色砂質土で、上面の標高は約2.2m、層厚約0.1～0.2mである。

３層：淡茶褐色砂質土で、上面の標高は約2.0m、層厚約0.05mである。

４層：暗灰色砂質土で、上面の標高は1.98m、層厚0.02～0.05mである。

〈５～７層〉　黄褐色～黄橙色砂質土で、鉄分・マンガンの沈着がみられる。５・７層には灰色砂質土ブロック等の混入がみられる。中世層の可能性がある。

５層：淡黄褐色砂質土で、上面の標高は約1.8m、層厚約0.15mである。

６層：明黄橙色砂質土で、上面の標高は約1.65m、層厚約0.1mである。

７層：灰黄橙色砂質土で、上面の標高は約1.55m、層厚約0.1mである。

〈８～10層〉　茶褐色を基調とする砂質土層である。鉄分・マンガンの沈着は少ない。弥生土器小片をわずかに含む。８層から掘削される溝にも弥生土器が含まれており、弥生時代の土層である可能性が高い。植物の根の生痕とみられる灰色弱粘質土ブロックが垂直方向に顕著にみられる。

８層：明茶褐色砂質土である。上面の標高は約1.4m、層厚約0.15mである。

９層：黄茶褐色砂質土である。上面の標高は約1.3m、層厚約0.1mである。

10層：茶褐色砂質土である。上面の標高は約1.2m、層厚約0.1mである。

11層：淡黄褐色砂質土で、灰色粘質土ブロックを含む。弥生時代の土層と考えられる。上面から土坑が掘削される。上面の標高は約1.1m、層厚約0.15mである。

〈12・13層〉　茶褐色を基調とする土層である。上層の12層は砂質を帯び、下半の13層は弱い粘性を示す。いずれもマンガンを多く含み、灰色粘土ブロックを多く含む。12層からピットが掘削される。

12層：茶褐色砂質土である。弥生時代の基盤層と考えられる。上面の標高は約0.95m、層厚約0.15mである。

13層：灰茶褐色弱粘質土である。上面の標高は約0.8m、層厚約0.2mである。
14層：暗灰色粘土で、鉄分を多く含み、淡灰色粘土ブロックを含む。上面の標高は約0.65m、層厚約0.1mである。
15層：淡灰白色粘土である。鉄分を多く含む。上面の標高は約0.5m、層厚0.1m以上である。
【遺構・遺物】　遺構は断面観察で溝４条、土坑２基、ピット状の落ち込み１基を確認した。溝はいずれも南北方向の溝と考えられる。遺物は溝３から弥生土器が出土した。そのほか、８～10層の掘削において大形の破片を含む弥生土器が出土した。

ｃ．まとめ

今回の調査結果と既往の成果から、本調査地点の地形や弥生時代の集落との関係は以下のように考えられる。

本調査地点の北側で確認されている弥生～古墳時代の河道は、両試掘坑では確認されなかったため、予定地の南半には微高地が広がると予想される。また、両試掘坑の近世・近代の土層・遺構の上面レベルは、西側の方が高く、西から東に下がる地形が復元される。

弥生時代の集落は、鹿田遺跡では本調査地点の西に確認されている。今回、西側に設定したＴＰ２で弥生時代の遺構・遺物が検出されており、この地点が集落に比較的近い位置にあると想定されるが、ＴＰ１の成果を勘案すれば、集落の影響は東にむかって薄れるものと推測される。（野崎）

第３節　立会調査の概要

１．調査の実施状況

鹿田地区における2010年度の立会調査は25件が実施された。そのうち、特徴的な土層を確認したものは５件であり、各地点の壁面での土層観察結果を報告する。なお、ここで報告する以外に中央診療棟埋文調査に伴う支障移設電気設備工事<調査番号７・８>では包含層を確認しているが、本章第１節に発掘調査概要を掲載しているため、ここでは省略する。

ａ．高精度放射線治療棟屋外排水管工事<調査番号６>

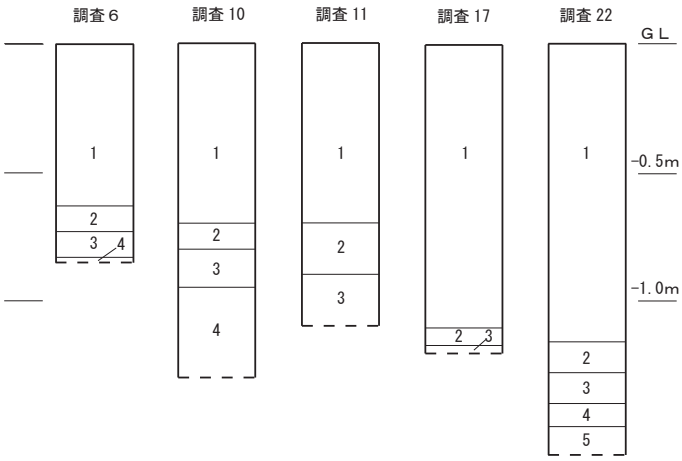
高精度放射線治療棟は鹿田地区中央部、外来診療棟の南に位置する。ここでは掘削の最下層で淡灰色粘質土が検出された。中世または近世の溝の埋土と考えられる。遺物は出土していない。

ｂ．外灯整備工事<調査番号10・11・17>

外灯整備工事は鹿田地区全域で13カ所実施され、そのうちの３地点で近世以前の包含層や特徴的な土層が確認された。<調査番号10>は基礎医学棟の東に位置する。造成土下に青灰色～灰色を主体とする粘質土が確認された。最下の暗青灰色粘土は近世層と考えられる。<調査番号11>は鹿田地区北西の学生ボックスの北に位置する。造成土下に茶灰色および青灰色粘土層が確認され、掘削底面では黄茶灰色粘土が検出された。３層以下は近世層と考えられる。<調査番号17>は基礎研究棟南に位置する。３層（灰色粘質土）中には炭・焼土が含まれる。遺構の埋土の可能性もあるが、掘削範囲が狭く、判断できない。いずれの地点でも遺物は出土していない。

ｃ．保育所改修工事<調査番号22>

保育所改修工事は鹿田地区南、保健学科棟の西に位置する。本地点の掘削は、現地表面から約１ｍで造成土または既掘埋土内におさまっていたが、排水ポンプ槽設置部分（約１ｍ四方）のみ約1.6mを掘削し、包含層を確認した。造成土および既掘埋土が１ｍ以上認められており、近世層はすでに失われているものと考えられる。２～４層は中世以前の土層と考えられるが、遺物が出土しておらず、判断材料を欠く。５層（淡黄灰褐色粘質土）は弥生基盤層とみられる。遺構・遺物は確認されていない。（野崎）



【調査番号６】
１．造成土
２．暗灰色粘質土
３．黄灰色砂混淡灰色土
４．淡灰色粘質土

【調査番号 10】
１．造成土
２．青灰色粘土
３．灰色粘土
４．暗青灰色粘土

【調査番号 11】
１．造成土
２．青灰色粘土
３．茶灰色粘土

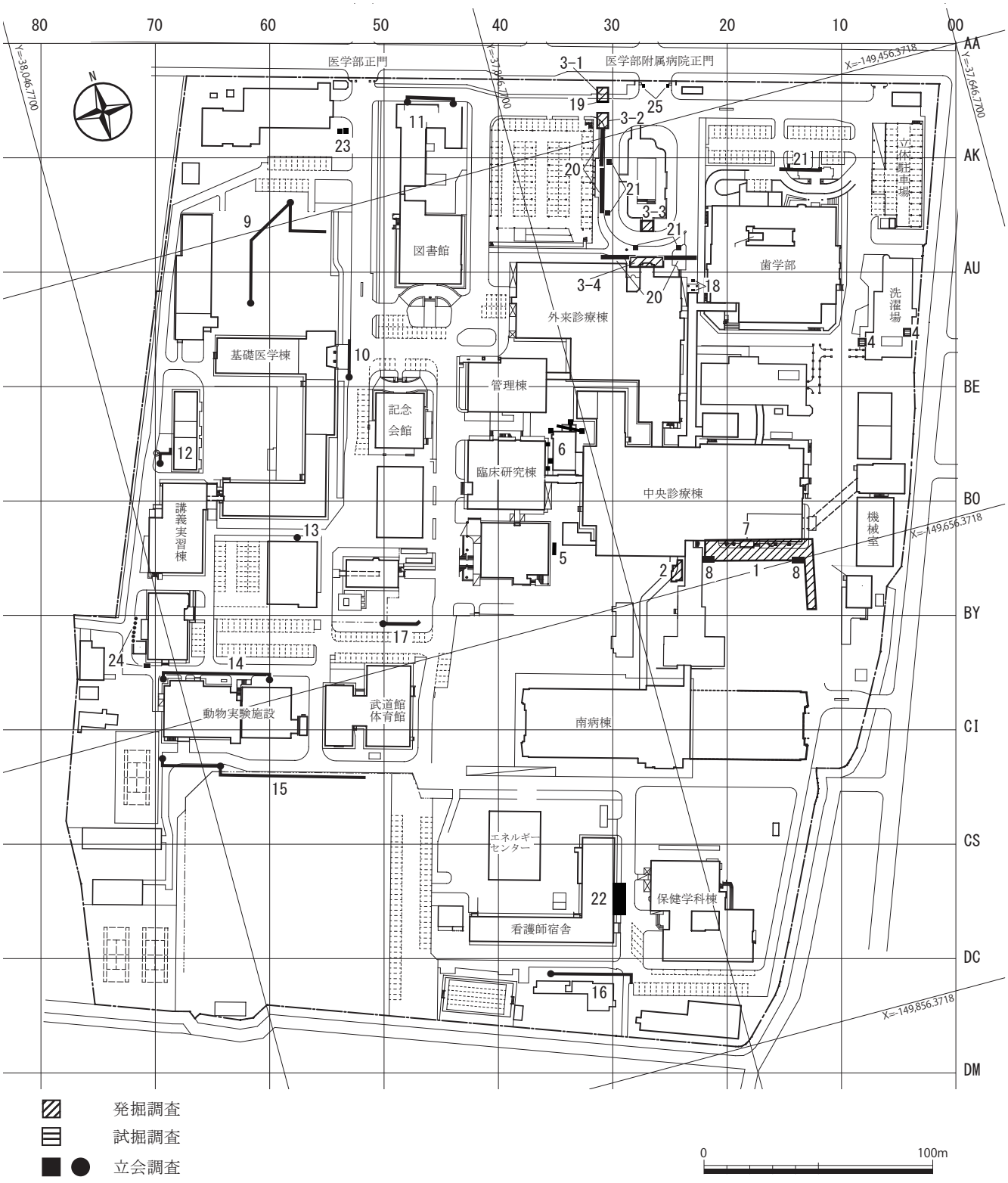
【調査番号 17】
１．造成土
２．黒灰色粘質土
３．灰色粘質土
（炭・焼土）

【調査番号 22】
１．造成土
２．淡緑灰色粘質土
３．淡黄灰色粘質土
（Fe・Mn）
４．あずき色粘質土
（Mn）
５．淡黄灰褐色粘質土
（Fe）

図24　土層柱状図（縮尺1/30）

表３　2010年度鹿田地区調査一覧

種類	番号	構内座標	調査名称		調査期間	掘削深度（GL-m）	造成土厚（m）	内容
発掘	1	BR･BS12～21、BT～BX12～13	中央診療棟【鹿田遺跡第20次発掘調査Ｃ地点】		7.20～10.8	2.0～2.2		弥生時代～近世の遺構･遺物
	2	BT･BU24	中央診療棟【鹿田遺跡第20次発掘調査Ｄ地点】		2011.2.18～3.2	1.6		中世～近世の遺構･遺物
	3－1	AD～AF30･31	外来診療棟周辺他環境整備【鹿田遺跡第21次調査Ａ地点】		11.8～12.9	2.4	1.25	平安時代河道、鎌倉時代溝状遺構
	3－2	AG･AH30･31	外来診療棟周辺他環境整備【鹿田遺跡第21次調査Ｂ地点】			2.6	1.13	平安時代河道、鎌倉時代溝状遺構
	3－3	AP･AQ26･27	外来診療棟周辺他環境整備【鹿田遺跡第21次調査Ｃ地点】			0.8	－	工事掘削深度内が近現代の建物基礎面にあるため、その下部は未調査
	3－4	AS･AT25～28	外来診療棟周辺他環境整備【鹿田遺跡第21次調査Ｄ地点】			2.5～3.4	－	弥生時代包含層確認
試掘･確認	4	AZ04･BA08	岡山県地域医療総合支援センター予定地		2011.1.20･21	東2.3、西2.4	東1.2、西0.6	近世溝･弥生基盤層確認
立会	5	BR･BS35	中央診療棟西側排水管取替工事		5.6	0.9	0.7	近代層確認
	6	BH32～35、BI～BL35	高精度放射線治療棟屋外排水管工事		5.14～19	0.75～0.9	0.6	中～近世の遺構？
	7	BR14～16･19･22	中央診療棟埋文調査に伴う支障移設電気設備工事	アース極設置工事	5.31、6.1･4	0.9～1.8	1.1	包含層確認
	8	BT13･14･21･22		矢板打ち時の支障物確認	6.30	1.1～1.8	－	既設内
	9	AN58、AO58･59、AP58～60、AQ55～58、AR～AW61	外灯整備工事	基礎医学棟北側駐車場	8.9	1.25～1.3	0.7	近代層？確認
	10	BA～BD52		基礎医学棟東側通路	8.11	1.3	1.25	近世層？確認
	11	AE43～47、AF43･47		図書館･学生ボックス･中庭および北側通路	8.17	0.9～1.1	0.7	近世層確認
	12	BJ68･69、BK69		ボイラー室西側通路	8.19	1.2	－	既設内
	13	BR57		基礎研究棟北側通路	8.20	1.2	－	既設内
	14	BD59～69		自然生命（動物部門）北側通路	8.23	1.2	1.1	近代層上面確認
	15	CK69、CL57～69、CM52～56		グランド北側通路	8.25	1.2	1.2	近代層上面確認
	16	DD28～35、DE28		看護師宿舎南駐車場	8.25	1.2	1.2	近世層？上面確認
	17	BY46～50		研究棟南側駐車場	8.31	1.2	1.2	遺構埋土？確認
	18	AU･AV22･23	外来診療棟周辺	環境整備その他工事	10.18	0.65	－	既設内
	19	AF30･31		矢板打ちに伴うガス管確認工事	11.12	1.15	－	近代層確認
	20	AH～AO30･31、AS22～25･28～30		環境整備工事	12.16･20、2.4	0.52～1.7	－	既設内
	21	AK･AK30、AL11～15、AR24･27･28		電気設備工事	12.20、2.4	0.96～1.1	0.9	近代層確認
	22	CV～CY28･29	保育所改修工事		11.4	1.6	1.15	弥生基盤層確認
	23	AH53	医学資料室ガス管改修工事		12.16	1.1	－	既設内
	24	BC70･BY～CA71	岡山メディカルイノベーションセンター		2011.1.14	0.58～0.97	－	既設内
	25	AE25･27	大学病院入口車止めポール設置工事		2011.2.4	1.08	－	造成土内



※番号は表３の調査番号に対応する。

図25　2010年度の調査地点【２】－鹿田地区－（縮尺1/2,500）

第３章　調査資料の整理・研究および公開・活用

第１節　調査資料の整理・研究

１．調査資料の整理

調査資料の整理について、津島岡大遺跡では第32次調査（教育学部剣道場）出土遺物の洗浄・註記・接合および土壌サンプルの洗浄を行った。鹿田遺跡については、第９次調査、第14次調査（岡大病院病棟）の接合、第17次調査（医学部基礎棟）・第18次調査（岡大病院中央診療棟）出土遺物の洗浄、第19次調査（岡大病院渡り廊下）の貝塚採取サンプルの洗浄および出土貝資料の分類を行った。

報告書の作成については、2009年度末までに編集作業までを終えていた鹿田遺跡第13次および第15次調査（総合教育研究棟）の報告書を刊行した。津島岡大遺跡第32次調査（教育学部剣道場）については2010年度に報告書作成作業を開始し、刊行した。

自然科学的分析では、『津島岡大遺跡20』作成に関わるものとして、表４の分析を実施し、同書に分析結果を掲載した。

表４　津島岡大遺跡第32次調査分析一覧

分析資料	分析の種類	分析者・分析機関	主　な　結　果
自然木（縄文時代・河道）	樹種同定	能城修一	コナラ属アカガシ亜属・ケヤキ
アンペラ（縄文時代・貯蔵穴）	樹種同定	㈱吉田生物研究所	イネ科タケ亜科
流木（縄文時代・河道）	放射性炭素年代測定（AMS）	㈱古環境研究所	4125±25年BP
花粉（調査区壁面から採取）	花粉分析	㈱古環境研究所	近世：アブラナ科（栽培植物）卓越、寄生虫卵検出
植物珪酸体（調査区壁面から採取）	植物珪酸体分析	㈱古環境研究所	縄文時代後期～弥生時代早・前期：湿潤な環境

２．調査資料の保存処理

ａ．木製品のPEG保存処理作業

本年度の調査資料の保存処理として、木製品のPEG保存処理事業を実施した。昨年度末に処理を開始した第９期の処理工程で、保存処理の対象となった遺物は、津島岡大遺跡第22次調査の木製品（平安時代の大溝出土）と同30次調査の杭（近世・近代の用水路出土）である。

表５　第９期のPEG保存処理工程

期	年月日	作業内容
第９期	2010年２月５日	濃度40％：処理開始
	2010年６月14日	濃度50％
	2010年７月14日	濃度60％
	2010年10月12日	濃度70％
	2010年11月19日	濃度80％
	2011年２月４日	濃度90％

ｂ．アンペラの高級アルコール含浸処理

津島岡大遺跡第32次発掘調査の縄文時代貯蔵穴から出土したアンペラについて、㈱吉田生物研究所に高級アルコール含浸処理を依頼、実施した。（野崎）

第２節　調査成果の公開・活用

１．公開・展示

ａ．第12回岡山大学キャンパス発掘成果展『謎の荘園 鹿田荘―集落・条里・領域―』の概要

2011年１月６日（木）～10日（月・祝日）の５日間、第12回岡山大学キャンパス発掘成果展『謎の荘園 鹿田荘―集落･条里･領域―』（本センター主催）を実施した。この成果展は展示とシンポジウムによって構成される。

展示会は岡山大学創立五十周年記念館１階交流サロンを会場とし、376名の参加者を得た。シンポジウムは展示会最終日の１月10日に同記念館２階会議室で実施し、124名が参加した。以下では、その成果について報告する。

第12回岡山大学キャンパス発掘成果展
『謎の荘園 鹿田荘―集落・条里・領域―』

展示期間：2011年１月６日（木）～10日（月・祝日）
展示会場：岡山大学創立五十周年記念館１階交流サロン

主な展示パネル構成

開催にあたって
・文献から見た鹿田荘
（久野修義・岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）
第１の謎―どこまで広がる?!鹿田荘
・岡山平野の条里と鹿田荘
・鹿田荘の景観復元
平安時代前半：９世紀―鹿田荘成立まもない頃
平安時代中頃：10～11世紀―鹿田荘の隆盛と抗争の時代
平安時代末：12世紀―中世鹿田荘に向けて
鎌倉時代後半：13世紀後半～14世紀前半―大規模開発の時代
・各遺跡の位置と概要
・解き明かされる700年の営み―鹿田遺跡（岡大）27年の発掘成果
・謎の10世紀を解き明かす―鹿田遺跡（県立岡山病院）
・鹿田荘の心臓部か、港湾施設か?!―大供本町遺跡
・変遷する集落
・トピック展示　物流ネットワークと鹿田荘
土器から見た時代の移り変わり
第２の謎―鹿田荘の条里プラン
・鹿田遺跡（岡大）の条里プラン
・床面展示　12世紀の条里プラン
13～14世紀の条里プラン
・映像展示　条里プランの時期別変化
謎解きは続く

発掘速報
・鹿田荘の終焉
・新発見! 鹿田荘の北端

オンザジョブトレーニングの成果から
学生による展示企画
弥生時代後期の貝塚―鹿田遺跡の貝塚からみた弥生時代の人々

ｂ．展示会・シンポジウムの内容

⑴趣旨　本展示会・シンポジウムは、藤原摂関家の殿下渡領である鹿田荘にスポットを当てたものである。岡山大学鹿田キャンパスは、鹿田荘の比定地として知られる一方で、岡山県教育委員会および岡山市教育委員会による近年の発掘調査では、鹿田キャンパス周辺でも古代・中世遺跡の広がりが確認されてきた。鹿田荘の考古学的実像について、異なる機関の調査成果を総合しながら明らかにするという、これまで十分になされてこなかった課題に取り組むことを、本企画の大きな目的とした。

⑵展示会　今回の展示会の大きな特徴のひとつは、本センターの調査資料とあわせて、岡山県教育委員会・岡山市教育委員会の協力のもと、鹿田キャンパスとその周辺における古代・中世集落の考古資料をはじめて一堂に集めた点にある。具体的には、岡山市鹿田遺跡（県立岡山病院）地点（調査：岡山県古代吉備文化財センター）、および大供本町遺跡（調査：岡山市教育委員会）の資料を借用した。展示会では、鹿田キャンパスとこれら２遺跡の調査成果を相互に比較しながら、テーマとした鹿田荘の集落構造や条里・領域の問題について議論するための基礎的情報と考古資料を提示するよう心がけた。

展示構成は、囲みの通りとなる。展示の前半は、鹿田荘の領域や集落構造の問題について取り上げた。ここでは、イラストを用いた鹿田遺跡の時期別の景観復元を基礎としつつ、鹿田遺跡とその周辺遺跡からみた鹿田荘に関する考古学的研究の個別的論点を提示した。展示後半では、鹿田キャンパスにおける鹿田荘の条里プランについて復元した成果を、床面に構内地図を引き延ばして展示を行った。なお今回は、当センターで2010年度に実施した構内出土文化財を用いたオンザジョブトレーニングの一環として、大学院社会文化科学研究科院生による鹿田遺跡出土遺物の整理報告と展示もあわせて実施した。

⑶シンポジウム　企画全体の趣旨に照らし、シンポジウムは鹿田キャンパスとその周辺遺跡の調査成果について、機関の垣根を越えて議論し、考古学からみた鹿田荘の実像に迫ることを目的とした。そのために、当センター職員による鹿田キャンパスの調査成果に加え、岡山市鹿田遺跡（県立岡山病院）の調査報告を岡山県古代吉備センター・亀山行雄氏に、大供本町遺跡の調査成果を岡山市教育委員会・高橋伸二氏に依頼した。個別の内容については『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』第46号に要旨が掲載されているが、鹿田荘の集落構造の時期的変化や荘園の範囲および条里の問題、あるいは荘園の中心的施設はどの地点に想定されるのか等、三機関の研究者が集うことでなしうる議論が活発に展開した。

ｃ．アンケート結果から

展示会に際してアンケートを実施した（回収数160枚、回収率42.6％）。その結果をみると、学内での展示会の際のリピーター率は30～40％台が主流であるが、今回、リピーター率（60％）が非常に高かった点は特徴的であ

る。その要因には開催実績とともに、鹿田荘に関する総合的な企画となったことが挙げられよう。男女比は男性が78％、女性が22％と、男性数が極めて多い印象があるが、20代の学生を中心とする層に関しては異なる。年齢構成については､60代･70代が主体をなす（54％）が､40代･50代も一定の割合（27％）が認められる。来場者の感想としては、鹿田荘の景観復元図や条里復元図に人気があった他、合わせて展示を行った土器・陶磁器、学生の企画展示も支持を集めた。また「文字数が一般の博物館に比べて多いものの、それも大学ならではの特徴」という意見もみられた。

シンポジウム『謎の荘園 鹿田荘―集落・条里・領域―』

開催日　2011年１月10日（月・祝日）
会　場　岡山大学創立五十周年記念館　大・中・小会議室

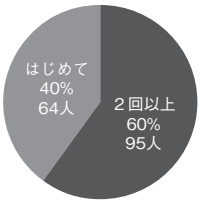
タイムテーブル

13：00～	開会挨拶	北尾　善信　当センター長
		新納　泉　　当センター副センター長
13：10～13：50	報告１「10世紀の鹿田荘―県立岡山病院の調査から」	
		亀山行雄　岡山県古代吉備文化財センター
13：50～14：30	報告２「鹿田荘の中核か?!―大供本町遺跡の様相」	
		高橋伸二　岡山市教育委員会
14：40～15：20	報告３「移りゆく荘園景観―岡大鹿田キャンパスの調査から」	
		岩崎志保　当センター
15：30～16：30	パネルディスカッション	
		パネリスト　亀山行雄・高橋伸二・岩崎志保
		司　　会　　山本悦世　当センター
16：30	閉会	

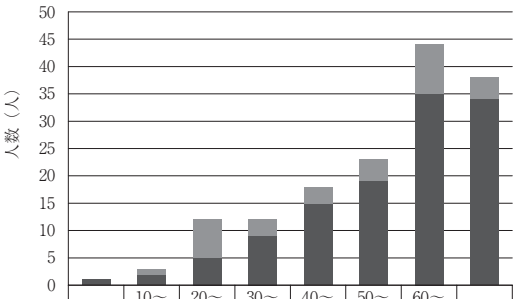
d．まとめ

今回の企画は鹿田荘に関する考古学的成果について、機関の垣根を越えた議論の場を創出するというねらいから出発した。その成果は今後の鹿田キャンパスでの調査研究にも活かしうるものとなった。これまでも講演会については幾度か実施してきたが、シンポジウム形式に関しては今回が初めてであった。当日の満席となった会場が関心の高さを物語るならば、今後も学術的かつ地域に根ざした展示・公開の工夫を継続したい。　（光本）

図26　展示会風景（上段）・シンポジウム風景（下段）



１．リピーターの割合（n=159）



年齢	～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～
■女	0	1	7	3	3	4	9	4
■男	1	2	5	9	15	19	35	34

２．来場者の年齢・性別（n=151）

図27　第12回成果展アンケート結果

２．資料・施設等の利活用

a．教育機関への支援（授業などの受け入れ）

⑴　**博物館実習**：８月２～11日（補講：９月７・８、27・28日）

例年通り、岡山大学文学部が開講している学芸員資格取得のための講義（博物館実習）の受け入れを行った。

期間は８月２～11日で、そのなかの８日間である。受講生全体を１班10名前後とする４班に分けて、各班２日間の受講日程を組んだ。

実習１日目は、同期間中に実施していた津島岡大遺跡第33次調査・鹿田遺跡第20c次調査現場における発掘調査の体験である。これは博物館における一次資料の収集に相当する部分の学習を目的としたものである。２日目は、考古資料の取り扱いに関する専門的知識の修得を目指した構成とした。出土遺物の洗浄・註記・接合などは資料の整理が進められる過程を追体験するものである。また、貝塚出土貝類の分別作業は脆弱な有機質の遺物の観察と取り扱いを修得するものであり、多様な考古資料を取り扱う実習となった。

⑵　**中学生の職場体験**：岡山市立中央中学校　2010年11月16～18日（２名）
岡山市立高松中学校　2010年11月19日（５名）
岡山市立岡北中学校　2011年２月２～４日（３名）

本年度は、岡山市内の中学校３校から「中学生の職場体験」の受け入れ依頼があった。期間は１～３日で、計10名の生徒が本センターでの職場体験を行った。

作業内容は、土器・石器の洗浄・註記・復元にくわえ、種子・骨・貝といった有機質遺物を含む遺物整理に関する業務、図書整理、展示室の清掃など日常的に行っている業務のほか、発掘器材の洗浄、展示会アンケートの集計作業など、職場体験実施時に行っていた臨時的な業務を組み込んだ。

⑶　**岡山大学内の授業などの受け入れ**

津島岡大遺跡第33次調査の発掘調査現場では、本学の文学部が行っている講義の一環としての現地見学が行われた。

⑷　**岡山県生涯学習大学**

岡山大学文学部では、岡山県事業「岡山県生涯学習大学」を受け入れており、本センターも構内遺跡の調査研究成果とそれに関する内容の講義を担当し、2010年８月28・29日に実施した。受講者は34名である。28日は津島岡大遺跡・鹿田遺跡における縄文～弥生時代の調査成果についての講話および岡山大学考古資料展示室においての遺物見学ののち、屋外実習として津島岡大遺跡第33次調査の発掘調査現場を見学し、遺跡の調査方法や記録のとり方を体験した。29日は鹿田遺跡を中心とする鹿田庄に関する講話ののち、津島キャンパスにのこる戦跡を見学した。また、出土遺物の観察法実習として、土器（縄文土器・須恵器）の拓本・スケッチをとった。

⑸　**2010年度非常勤講師への委嘱依頼**

岡山大学文学部長より、表６の要領にて博物館実習における非常勤講師への委嘱依頼をうけ（2010年４月12日）、承諾した。

表６　2010年度非常勤講師への委嘱依頼内容

職　名	氏　名	担当科目	委　嘱　期　間	備　考
教　授	山　本　悦　世	博物館実習	平成22年４月１日～平成23年３月31日	通年（水曜日３・４・５限）
助　教	岩　崎　志　保	博物館実習	平成22年４月１日～平成23年３月31日	通年（水曜日３・４・５限）
助　教	野　崎　貴　博	博物館実習	平成22年４月１日～平成23年３月31日	通年（水曜日３・４・５限）
助　教	光　本　　順	博物館実習	平成22年４月１日～平成23年３月31日	通年（水曜日３・４・５限）
助　教	池　田　　晋	博物館実習	平成22年４月１日～平成23年３月31日	通年（水曜日３・４・５限）

⑹　**オンザジョブトレーニング**

本年度の新たな取り組みに、本学学生を対象とした「学内出土文化財を活用したオンザジョブトレーニングの試み」がある。本事業の主な目的は、学生が実際の職場の雰囲気にふれながら、職員との協業・実務を経験することにより社会性が育成されること、岡山大学構内遺跡出土文化財を取り扱うさまざまな仕事を通じ、学内文化財や歴史への関心・親近感が醸成されることであり、教育的な色彩を有する事業として始めた。また、学生が整理作業等を補佐することにより、センター全体の業務の円滑な推進を図った。

本年度、同事業に参加した学生・大学院生は、大学院社会科学研究科大学院生（考古学）７名、大学院自然科

学研究科大学院生（地質学）２名、理学部学生（地質学）１名である。このような学生の専門分野を考慮し、考古学専攻生については、主に発掘調査および出土遺物の整理作業、地質学専攻生については、構内遺跡出土石器の登録・収納作業にあたることとした。

考古学専攻生が行った整理作業のなかで、弥生時代の貝塚出土の貝（鹿田遺跡第19次調査出土）の洗浄・分類については、整理で得られたデータをとりまとめ、その成果は本センターが主催した展示会や学会でのポスター発表へとつながった。本事業で取り組んだ基礎的な整理作業を研究へと昇華させたものといえる。また、地質学専攻生についても、石器を間近に観察できたことが人と石との関わりを考える機会となった。異なる研究分野での体験が自身の研究の視野を広げることに結びついた。これらの成果は本事業の教育的な目標を達成したものであり、教育の場としての本センターの可能性を示すものである。今後も学生の教育に資する経験の場を幅広く提供できるように努めたい。

⑺　その他

展示室等の見学・視察

<考古資料展示室>：73名

・九州歴史資料館　西谷正さんほか25名（2010年７月）
・生涯学習大学34名（2010年８月）
・高校生４名（2010年８月）
・職場体験中学生10名（2010年11月・2011年２月）

<常設展示室>：22名

・津島小学校５名（児童１名･保護者４名、2010年４月）
・一般７名（2010年４・９・12月、 2011年１・２月）
・職場体験中学生10名（2010年11月・2011年２月）

ｂ．調査・研究への支援

⑴　資料調査

・岡山大学津島キャンパス構内の戦跡関連資料調査：岡山大学大学院　小西里沙（2010年４月）
・津島岡大遺跡第10･19次調査出土の鉄滓･製鉄関連遺物：岡山県古代吉備文化財センター　上栫武（2010年５月）
・津島岡大遺跡第５次調査出土圧痕土器付着炭化物提供：国立歴史民俗博物館　工藤雄一郎（2010年７月）
・津島岡大遺跡第５・15・17・22次調査出土石鍬：広島大学大学院　矢部俊一（2010年12月）
・津島岡大遺跡第32・33次調査出土縄文後期土器：京都大学　千葉豊（2011年１月）
・津島岡大遺跡第３・15・23次調査出土突帯文土器：山口県埋蔵文化財センター　小南裕一（2011年１月）
・津島岡大遺跡第５次調査出土縄文土器、第15・32次調査出土アンペラ：愛媛大学　幸泉満夫（2011年２月）
・津島岡大遺跡・鹿田遺跡の古代・中世土器：中世土器研究会10名（2011年３月）
・鹿田遺跡第１・５・６次調査出土メロン種子：総合地球環境学研究所　田中克典・岡山大学農学部　加藤鎌司（2011年３月）

⑵　図書の貸出等の協力

図書の外部貸出：21件（岡山大学文学部学生ほか）

ｃ．資料の提供・貸し出し

⑴　出版物等への資料提供

・日本文教出版『岡山の甲冑』（臼井洋輔著）…『鹿田遺跡Ⅰ』掲載の木製短甲１点
・㈱ジャパン通信情報センター『文化財発掘出土情報』2010年10月号…津島岡大遺跡第32次調査の現説資料・遺構写真

ｄ．マスメディアへの公開

・ＮＨＫ：番組「きわめる」への取材協力
・株式会社共同テレビジョン『～時代劇おもしろ雑学～　虎之巻』津島岡大遺跡第５次調査出土漆塗り櫛の画像
・山陽新聞社：２件　展示会関連記事

・oniビジョン：１件　鹿田庄について　（野崎）

第３節　2010年度調査研究員の個別研究活動

１．科学研究費

山本悦世：基盤研究（Ａ）「レプリカ・セム法による極東地域先史時代の植物栽培化過程の実証的研究」
（研究代表者：小畑弘己）研究分担者
基盤研究（Ｂ）「縄文時代後期における稲作農耕空間の探求」
（研究代表者：田崎博之）連携研究者・研究協力者
野崎貴博：若手研究（Ｂ）「吉備地域における群小墳の展開過程からみた古墳時代社会構造の研究」研究代表者
基盤研究（Ａ）「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」
（研究代表者：新納　泉）研究分担者
光本　順：若手研究（Ｂ）「人物埴輪からみた古墳時代のジェンダー構造に関する実証的研究」研究代表者
基盤研究（Ａ）「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」
（研究代表者：新納　泉）研究分担者

２．論文・資料報告

山本悦世：「曲物製作における技術的特徴」『鹿田遺跡』６
光本　順：『鹿田遺跡』６（編集）
「土器溜まり考」『鹿田遺跡』６
池田　晋：『津島岡大遺跡』20（編集）

３．研究発表など

光本　順：「統一テーマ『階層性と社会構造』をめぐって」考古学研究会第56回研究集会コーディネーター
（岡山大学、４月17・18日）
「古墳時代土器溜まりの研究―岡山市鹿田遺跡をモデルとして―」考古学研究会岡山例会
（岡山大学、11月13日）
山本悦世：「遺構から見た中四国地方の縄文集落像」第21回中四国縄文研究会島根大会シンポジウム司会
（出雲市、７月４日）

４．講演など

山本悦世：「岡山平野の稲作事始め－津島遺跡の発掘調査－」古代吉備国を語る会夏季特別講演会、古代吉備国を語る会（岡山市立中央公民館、2010年８月22日）
「岡山平野の歴史と文化－人びとの暮らしの始まりと自然への挑戦－」岡山大学文学部公開講座「岡山から考える」（岡山大学、2010年８月28日）

「岡山平野の歴史と文化－平安から鎌倉へ－」岡山大学文学部公開講座「岡山から考える」（岡山大学、2010年８月29日）

岩崎志保：「移りゆく荘園景観－岡大鹿田キャンパスの調査－」『シンポジウム　謎の荘園　鹿田荘－集落・条里・領域－』（岡山大学、2011年１月９日）

５．資料収集・実態調査

山本悦世：科学研究費に基づく土器圧痕調査（総社市、岡山市）
科学研究費に基づく文京遺跡の調査（松山市）
構内遺跡出土資料に関する資料調査（近江八幡市、奈良市）

岩崎志保：構内遺跡出土資料関連調査（奈良市、近江八幡市）、中国東周～漢代出土資料調査（名古屋市、神戸市）

野崎貴博：百舌鳥古墳群出土埴輪資料の実見（大阪府）、中・後期古墳群の踏査（大阪府）

光本　順：科学研究費（若手Ｂ）に基づく人物埴輪に関する資料収集・見学（天理市、大阪市、松阪市、宮崎県新富町、高崎市、埼玉県、福島県）
科学研究費（基盤Ａ）に基づく古墳時代石棺に関する資料収集・見学（大分市、福井市、高崎市）
分銅形土製品に関する資料収集・見学（赤穂市）

池田　晋：岡山平野の条里遺構の資料収集、百舌鳥古墳群の整備状況の実態調査（大阪府）

第４章　2010年度における調査・研究のまとめ

調査　2010年度は津島地区２件、鹿田地区２件、合計４件の発掘調査を実施した。発掘調査の実施期間は津島岡大遺跡第33次調査（薬学部講義棟新営）が７～11月、同第34次調査（国際交流会館新営）が７～９月、鹿田遺跡第20次調査Ｃ･Ｄ地点（中央診療棟新営）が７～10月・2011年１月、同21次調査（外来診療棟環境整備）が12月であり、３件が同時進行する過密スケジュールであった。

主な調査成果として、津島岡大遺跡第33次調査では、縄文時代中期の遺構・遺物と包含層および古代～中世の構造上の差を有する道路状遺構を確認した。鹿田遺跡第21次調査で検出した南北方向にのびる中世の道路状遺構は、現在の街区に合致するかたちで屈曲しており､現在、岡山市北半部にのこる正方位の条里と鹿田遺跡周辺にのこる斜行条里との接点を示すものとして注目される。

試掘・確認調査は津島地区で２件、鹿田地区で１件を実施した。このうち、津島地区１件、鹿田地区１件は発掘調査が必要な建物建設に起因するものであり、津島地区のもう１件は簡易建物の計画された地点における状況確認を目的としたものである。立会調査は津島地区で47件、鹿田地区で21件を実施した。津島地区では建物建設が行われた薬学部講義棟・国際交流会館周辺での設備工事に伴うものが多数を占めた。

研究　2010年度の刊行物として、発掘調査報告書１冊（『鹿田遺跡』６）、紀要１冊（『紀要2009』）、センター報２冊（『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報44号』、『同45号』）を刊行した。発掘調査報告書では、古墳時代の大規模な土器だまりおよび平安～鎌倉時代の集落を中心とする報告を行った。併せて土器だまり・曲物に関する２本の考察を掲載している。科学研究費補助金は、若手研究（Ｂ）２件が研究代表者として採択され、基盤研究（Ａ）３件が研究分担者として配分をうけた。

公開・教育　2010年度は「謎の荘園　鹿田荘」と題する展示会とシンポジウムを併せて開催した。展示会およびシンポジウムでは、鹿田荘にかかわる発掘調査を行ってきた岡山県古代吉備文化財センター、岡山市教育委員会の協力を得て、各機関所蔵遺物の出品および発掘担当者による調査報告と討論を行うことができた。発掘調査成果の公開としては、津島岡大遺跡第33次調査における現地説明会が挙げられる。

教育機関への支援として、例年通り博物館実習、中学生の職場体験を受け入れたほか、今年度は岡山県の事業である「岡山県生涯学習大学」を受け入れた。また、新たな試みとしては、オンザジョブトレーニングが挙げられる。これは本学学生が当センターの業務に携わりながら、職員との協業や実務経験を通して社会性を習得することや、身近な文化財を取り扱う作業体験から歴史への関心を醸成することを目指す、教育的な側面を有するものである。また、センター業務の推進という面でも効果的な取り組みであった。そのほか、本学で開講されている講義の受け入れも行っており、今年度の教育支援活動は例年以上に充実したものであったといえる。

まとめ　2010年度は４件の発掘調査を実施し、調査研究員の大半が発掘調査に従事することとなった。公開・教育活動についても例年以上の事業を実施しており、年間を通して業務の繁忙な状況が続いた。

その他、これまで長年の懸案事項であった資料の保管について、2010年度後半期に工学部16号館を借用することとなり、資料の一部を移動・収蔵した。年度末には文・法・経済学部講義棟において収蔵することとなり、工学部16号館の収蔵資料を再度移動した。これにより当面のスペース不足の問題は解消することができたが、今後の調査によってさらなる資料の蓄積が見込まれる。今後、センター施設全体の計画的な改善・更新をすすめるなかで、資料の保管スペースについても適切な場を確保していく必要がある。　（野崎）

付　編

１．岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

⑴　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

（平成16年４月１日
岡大規程第93号）

（趣旨）

第１条　この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大学則第１号。以下「管理学則」という。）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第２条　センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

一　埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

二　発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。

三　埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。

四　その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

（自己評価等）

第３条　センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

２　前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

（教育研究等の状況の公表）

第４条　センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

（センター長）

第５条　センターにセンター長を置く。

２　センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第３号）第５条第１項第５号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

３　センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

（副センター長）

第６条　センターに副センター長を置く。

２　副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

３　副センター長は、センター長の職務を助ける。

４　副センター長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（調査研究室）

第７条　センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

２　調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

３　室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

４　室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

５　室長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

６　調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第８条　センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

２　専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

３　専門委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（管理運営の基本方針等）
第９条　センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。
（運営委員会）
第10条　センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。
２　運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。
（事務）
第11条　センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。
（雑則）
第12条　この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。
附　則
この規程は、平成16年４月１日から施行する。

⑵　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規

（平成16年４月１日　学長裁定）

（趣旨）
第１条　この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第２項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。
（審議事項）
第２条　運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。
（組織）
第３条　運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
一　埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
二　埋蔵文化財調査研究センター副センター長
三　岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名
四　センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者１人
五　センターの調査研究室長
六　施設企画部長
２　前項第３号の委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。
（委員長）
第４条　運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。
２　委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。
３　委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。
（委員以外の者の出席）
第５条　委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。
（事務）
第６条　運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。
附　則
この内規は、平成16年４月１日から施行する。

２．2010年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

⑴　センター組織

〈埋蔵文化財調査研究センター長〉北尾善信：併、財務・施設担当理事
　運営委員会
〈副センター長〉新納　泉：併、大学院社会文化科学研究科教授
〈調査研究専門委員〉
沖　陽子：環境管理センター長
今津勝紀：大学院社会文化科学研究科准教授
鈴木茂之：大学院自然科学研究科准教授
〈調査研究室長〉山本悦世：専、埋文センター教授
〈調 査 研 究 員〉池田　晋・岩崎志保・野崎貴博・光本　順：専、埋文センター助教
〈非 常 勤 職 員〉井上佐智・西本尚美
井口三智子・内田優子・大橋紗恵子・木下洋子

⑵　運営委員会

【委員】

北尾善信　財務・施設担当理事（センター長）
新納　泉　大学院社会文化科学研究科教授（副センター長）
久野修義　大学院社会文化科学研究科教授
柴田次男　大学院自然科学研究科教授
大塚愛二　大学院医歯薬学総合研究科教授
沖　陽子　環境管理センター長（調査研究専門委員）
山本悦世　埋蔵文化財調査研究センター教授（調査研究室長）
山下隆幸　施設企画部長

【2010年度協議・報告事項】

第69回　2010年７月29日　**議　　題**　・平成21年度決算について
　報告事項　・平成22年度予算（案）について
　・発掘調査について
　・教員の採用について
第70回　2011年１月24日　**協議事項**　・助教の採用について
　・平成23年度予算（案）について
　・平成23年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について
　報告事項　・発掘調査について
　・第12回岡山大学キャンパス発掘成果展について

３．岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年５月15日
埋蔵文化財調査研究センター長
施設部長

Ⅰ．請負業者が留意すべき事項

１．請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
２．発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。

3．工事用電力の保安責任者をおくこと。
4．非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5．重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

Ⅱ．発掘現場で注意すべき事項

1．服装・装備・用具等
1）安全で機能的な服装にする。
2）平坦面から２m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
3）ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
4）グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
5）スコップ・草削りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
2．掘削
1）のり面の角度
造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。
堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。
発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。
2）のり面の保護
のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
3）深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）
遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。
なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。
3．高所（高さ２m以上の場所）での作業
1）作業中には安全帯を使用する。
2）架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
3）２段以上の架台は、分解して移動させる。
4．発掘用機械類の操作
（ベルトコンベアー・ポンプ等）
1）調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
2）ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
3）ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。
4）原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
5）ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。
（重機関係）
1）重機の免許所有者以外は運転しない。
2）運転者は、周囲の安全に注意する。
3）稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
5．健康管理
1）作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

Ⅲ．その他

1）作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
2）調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の２の１）～３）どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

付　　表

付表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	地区名		種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積（㎡）	文献	備考
1980	鹿田		立会	歯	同附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8		
1981	津島南	BD26	〃	農	寄宿舎新営	〃			
	津島北		〃	文法	合併処理槽施設	〃			
	津島北		〃	文法経	合併処理槽施設	〃			
	津島南	BD09、BC09～11	〃		基幹整備（共同溝取付）	〃			
	津島南	BD～BE04～07	〃		陸上競技場改修（配水管施設）	〃			
	鹿田		〃	医病	高気圧治療室新営	〃			
	〃		〃	〃	動物実験棟新営	〃 岡山県教育委員会			大学が市教委への確認調査の依頼をせずに掘削。その後、岡山市・岡山県教委が残存壁面等の調査を実施
	〃		〃	〃	病理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
	〃		〃	医	運動場改修	〃			
1982	津島	AV06・10、AW05・14、AX08、BD07、BE10	試掘		排水基幹整備	〃			津島AW14区で弥生時代包含層確認、協議→津島岡大遺跡第１次調査へ
	津島北	AW14	発掘	法文	排水集中槽（NP－１）埋設	岡山大学	24.0	3	**小橋法目黒遺跡：津島岡大第１次調査**
	津島南		試掘	学	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北	AY15・16	〃	法経	校舎新営	〃	7.0		
	鹿田		〃	医	標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃		〃	医病	外来診療棟新営	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃		立会	医	動物実験施設関連排水管・ガス管埋設	岡山県教育委員会		1	
	鹿田	AE～AN22、AE22～26	〃	歯	電話ケーブル埋設	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

文献
1．光永真一　1983「岡山大学医学部附属病院動物実施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会
2．河本　清　1983「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会
3．吉留秀敏　1985『岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第１集　岡山大学埋蔵文化財調査室

付表２　2009年度以前の構内主要調査（1983～2009年度）

＊凡例
・総合番号：調査の地区別通し番号（立会調査は選択的に保存）
・津島岡大遺跡第１次調査は本機関設置以前の調査であることから、総合番号を※１として区別している。
・発掘調査には番号に○を付している。
・確認調査のうち、その後の発掘調査範囲内に入った場合は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含まれた場合には総合番号に（　）を付している。
・立会調査で、付表に保存する基準：①中世土層以下を確認した調査　②明確な遺構・遺物を確認した調査
・番号：年度別報告番号
・文献：付表４・５の番号に対応する。

付表２－(1)　発掘調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調査名称	調査期間	面積（㎡）	概要	文献
*1	1982	－	AW14	小橋法目黒遺跡（津島岡大遺跡第１次調査） ：排水集中槽（NP－１）埋設	10.28～11.24	24	弥生時代中期・古代溝	3
①	1983	11	BE14･18、BF17･18、BG14 BH14･15	**津島岡大遺跡第２次調査** ：排水管埋設	84.1.9～3.5	265	弥生時代早～前期集落	4
②	1983	12	BH13	**津島岡大遺跡第２次調査** ：合併処理槽埋設	11.14～11.22 84.1.9～3.5	276	弥生時代早～前期水田関連遺構（溝他）	4
⑮	1986 1987	2 1	AV00、AW00･01	**津島岡大遺跡第３次調査** ：男子学生寮	12.1～87.6.18、 8.24～9.5	1550	縄文時代後期～弥生時代早期の貯蔵穴と河道および集落、弥生時代の前期～近代の水田・溝、古代の条里関連溝	19
⑯	1986	3	BF･BG09	**津島岡大遺跡第４次調査** ：屋内運動場	87.1.19～1.22	70	弥生時代前期の溝、中世河道	6
26	1988	1	AY06～08、AZ06･07	**津島岡大遺跡第５次調査** ：自然科学研究科棟	6.27～89.3.19	1537	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と河道・弥生時代末～近世の水田関連遺構	27
27	1988 1989	2 1	AV･AW04･05	**津島岡大遺跡第６次調査** ：生物応用工学科棟	9.20～89.5.31	600	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、古代条里関連溝、弥生時代前期～近世の水田・溝	35

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	調査期間	面積（㎡）	概　　要	文献
28	1988	3	AV･AW05･06	**津島岡大遺跡第７次調査** ：情報工学科棟	10.12～89.3.31	800	縄文後期集落、弥生時代前期～近世水田	35
39	1990	1	AY･AZ08	**津島岡大遺跡第５次調査** ：自然科学研究科棟	4.3～4.21	90	古墳時代後期の溝	27
44	1991	2	BD18･19	**津島岡大遺跡第８次調査**（Ａ地点） ：遺伝子実験施設	7.23～12.25	650	縄文時代の土坑、弥生時代～近世の溝	32
45	1991	3	BH13	**津島岡大遺跡第８次調査**（Ｂ地点） ：合併処理槽	7.23～12.2	140	弥生時代溝、古代～近世水田	32
50	1992	1	AU～AW04	**津島岡大遺跡第９次調査** ：生体機能応用工学科棟	7.1～93.1.29	650	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、弥生時代～近世の水田址	47
51	1992 1993	2 1	BB～BC10～11	**津島岡大遺跡第10次調査** ：保健管理センター	93.2.1～3.31、 4.17～7.31	400	弥生時代後期～古墳時代集落、近世耕作関連遺構	64
54	1993	2	AV～AW11～12	**津島岡大遺跡第11次調査** ：総合情報処理センター	9.14～94.1.11	640	縄文後期遺構	36
55	1993 1994	3 1	AV～AW13～14	**津島岡大遺跡第12次調査** ：図書館	94.2.9～3.31、 4.1～11.30	1472	弥生時代前期水田、弥生時代時代中期～古墳時代溝、 古代～近世溝（条里関連）	64
64	1994 1995	2 1	AW～AX11～12	**津島岡大遺跡第13次調査** ：福利厚生施設北棟	10.6～11.30、 95.7.10～10.4	816	縄文時代後期ピット、弥生時代水田、弥生～古墳時代溝、近代耕作面	41
69	1995	2	BB～BC12･13	**津島岡大遺跡第14次調査** ：福利厚生施設南棟	10.25～96.2.14	856	弥生時代前期水田、弥生～古墳時代の溝	46
70	1995 1996	3 1	AW00･01	**津島岡大遺跡第15次調査** ：サテライトベンチャービジネスラボラトリー	96.1.16～4.25	1600	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と河道、縄文時代後期集落、弥生時代前期水田、古墳～中世水田・溝	38 72
74	1996	2	BD19～20	**津島岡大遺跡第16次調査** ：動物実験棟新営	5.7～15	30.3	Ａ地点：縄文時代と古墳時代の土坑 Ｂ地点：中世の溝、古代の柱穴列、弥生時代の水田	44
75	1996	3	AW02～04	**津島岡大遺跡第17次調査** ：環境理工学部新営	5.21～97.1.9	1451	縄文時代後期の集落、弥生時代の溝・水田、古代の水田	44
85	1998	2	BB11	**津島岡大遺跡第18次調査** ：福利施設（南）新営に伴うポンプ槽取設	4.7～4.10	16	古代の溝状遺構	53
86	1998	3	AZ09･10	**津島岡大遺跡第19次調査** ：コラボレーション･センター	7.27～99.2.18	1019	縄文後期遺構、弥生前期の河道、古墳時代･中世の溝、近世道路状遺構・溝	65
87	1998	5	AY07	**津島岡大第20次調査** ：校舎（Ⅰ期）新営に伴うポンプ槽取設	10.19～28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
88	1998	6	AX09	**津島岡大遺跡第21次調査** ：エレベーター設置	11.6～24	30.2	縄文時代中期土坑、弥生時代早期～前期溝、古代土坑・溝	65
89	1998 1999	8 2	AW02･03	**津島岡大遺跡第22次調査** ：校舎（Ⅱ期）	99.3.1～7.12	773.5	縄文後期河道・集落、弥生時代河道・水田畦畔、古墳時代溝、古代～近世溝（条里関連）・水田畦畔	53
104	1999 2000	5 1	AZ15･BA14	**津島岡大遺跡第23次調査** ：総合研究棟	00.2.3～7.28	1339	縄文時代後期河道・杭列、弥生前期河道・堰・溝、弥生中期～近世溝	80
111	2000	3	AZ14	**津島岡大遺跡第24次調査** ：総合研究棟渡り廊下建設	12.5～14	34.2	縄文時代後期河道・杭列	80
112	2000	4	BA15	**津島岡大遺跡第25次調査** ：散水施設設置	01.1.29～31	20	中世～近世の溝・杭	61
113	2000 2001	5 1	BC～BD14～15	**津島岡大遺跡第26次調査** ：事務局	01.3.26～9.30	1550	縄文～弥生時代の河道・貯蔵穴・土坑・炉、近世の溝・堰	76
121	2001 2002	2 1	BB～BC14～15	**津島岡大遺跡第27次調査** ：創立五十周年記念館	02.2.1～6.24	1648	縄文時代後期の炉、弥生時代・古墳時代の溝、中世の畦畔（条里関連）	68
127	2002	2	AW～AY06～08	**津島岡大遺跡第28次調査** ：自然科学系総合研究棟	4.30～9.20、 11.28～03.1.15	1798	弥生時代前期の畦畔、中世～古代の畝・溝	87
128	2002	4	BF16	**津島岡大遺跡第29次調査** ：共同溝	9.18～10.3	62.6	弥生～古墳時代の溝・ピット	71
163	2007	1	BC19･20	**津島岡大遺跡第30次調査** ：岡山大インキュベータ	8.1～12.17	1035.4	縄文～近代の遺構・遺物、古代の道路状遺構、弥生～古墳の溝	93
168	2008	1	AX04	**津島岡大遺跡第31次調査** ：岡山大学生協東福利施設	6.17～8.22	212	弥生時代前期の畦畔、古代の道路状遺構、縄文～近世の遺物	95
184	2009	1	AX02	**津島岡大遺跡第32次調査** ：武道場新営	7.16～10.13	383	縄文時代後期～近世の遺構・遺物、縄文時代後期貯蔵穴	100

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	調査期間	面積（㎡）	概　　要	文献
①	1983 1984	9	AU～BD28～40	**鹿田遺跡第１次調査** ：外来診療棟	7.27～11.22 84.1.9～8.31	2188	弥生時代中期後半～中世集落	7
②	1983	10	BG～BI18～21	**鹿田遺跡第２次調査** ：NMR－CT室	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落	7
⑩	1986	1	CN～CU27･28、 CT～CY19～27、 CX～DD16～25、 DD～DG22･23	**鹿田遺跡第３次調査** ：校舎	6.2～11.29	2390	中世の集落、古代の河道と橋脚	10
⑫	1987	3	DD～DF25、 DG～DI27･28	**鹿田遺跡第４次調査** ：校舎周辺の配管	11.2～11.21	30	古代の河道	10
⑬	1987	2	BB～BH35～42	**鹿田遺跡第５次調査** ：管理棟	10.6～88.3.2 88.3.23～3.31	1192	弥生時代中期後半～中世の集落	24
⑯	1990 1991	2 1	BW～CC67～71	**鹿田遺跡第６次調査** ：アイソトープ総合センター	11.20～91.6.30	690	弥生～古墳時代の集落、中世集落	40

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	調査期間	面積（㎡）	概　　要	文献
25	1997 1998	4 1	BR55～BX61、 BY56～57	**鹿田遺跡第７次調査** ：基礎医学棟	98.2.27～8.6	829	古墳時代初頭・中世の集落、近世の水田・溝	85
27	1998	4	BP～BS30～32	**鹿田遺跡第８次調査** ：RI治療室	7.28～9.1	165	古墳時代溝・中世溝	85
28	1998 1999	7 1	CD33～37、 CE･CF28～37、 CG～CJ20～37、 CK･CL25～37	**鹿田遺跡第９次調査** ：病棟	11.27～99.5.11	2088	弥生時代水田・溝、中世～近世集落	53
31	1999	3	CD･CE10～12、 DD～DF16～22	**鹿田遺跡第10次調査** ：共同溝関連	5.7～10.14	244.1	古代の杭列（河道内）、弥生時代ピット、近世溝	56
32	1999	4	CD～CM19～42	**鹿田遺跡第11次調査** ：病棟	8.19～12.22	2020	弥生時代水田畦畔、古代池状遺構、中世～近世集落	56
40	2000 2001	2 －	CO～CV35～44、 CN･CM38～41、 CN28～38	**鹿田遺跡第12次調査** ：エネルギーセンター	10.2～01.05.10	1897	弥生時代溝・河道、古墳時代・中世集落、近世土坑・溝	56 61
46	2002	3	BL～BR46～51	**鹿田遺跡第13次調査** ：総合教育研究棟	4.30～10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土器溜まり・溝中世の集落、近世土坑群	98
55	2003	1	CD～CM12～20	**鹿田遺跡第14次調査** ：病棟（Ⅱ期）	7.31～12.17	1331	弥生～古墳時代の畦畔・溝、中世の井戸・土坑・溝・近世のため池・土坑	71
56	2003	2	BQ～BS45･46	**鹿田遺跡第15次調査** ：総合教育研究棟外構工事	10.16～10.29	30.4	古墳時代初頭の井戸・溝、中世溝群	98
59	2004	1	AH～AI6･7、 AF12･13、 AN～AO4	**鹿田遺跡第16次調査** ：立体駐車場新営工事	10.21～11.8	49.15	近世～近代の畦畔・溝・畝・土坑、中世の土坑、弥生～古墳の河道	81
60	2006	1	BR～BY60～64	**鹿田遺跡第17次調査** ：総合研究棟（医学系）	7.10～11.14	642	古墳時代住居址、古代溝状遺構、中世井戸･溝・建物、近世土坑・溝	88
64	2007	1a	BT13～BY20	**鹿田遺跡第18次調査** ：中央診療棟	10.10～08.3.14	872.2	弥生時代後期～近世の集落、井戸・溝	92
65	2007	1b	CG～CI9･10	**鹿田遺跡第18次調査** ：防火水槽	10.16～11.1	43.2	古代後半井戸、近世入江状遺構・護岸施設	92
66	2007	1c	CM～CN9･10、 CO10･11	**鹿田遺跡第18次調査** ：用水路改修	12.27～08.1.16	56	弥生時代土坑・溝	92
76	2008	1	AW～AY22～23	**鹿田遺跡第19次調査** ：歯学部渡り廊下	6.26～9.12	80	弥生時代後期の「方形高まり」･貝塚・壺棺・土坑・溝、古墳時代土坑・溝、古代ピット、近世土坑	95
80	2009	1a	BZ～CC31～40	**鹿田遺跡第20Ａ次調査** ：中央診療棟（共同溝地点）	6.18～7.31、 8.5～24	632	弥生時代～近世の遺構・遺物	102
81	2009	1b	BS20～23、 BT～BW20～24、 BX～CD13～25	**鹿田遺跡第20Ｂ次調査** ：中央診療棟（本体工事地点）	10.15～11.2.22、 3.1～8	2482	弥生時代～近世の遺構・遺物	102

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	調査期間	面積（㎡）	概　　要	文献
①	1997	1･2	－	**福呂遺跡第１次調査** ：実験研究棟	97.5.10～20、 7.28～31	269	縄文時代早期・弥生時代中期・中世・近世集落	55
②	1997	3	－	**福呂遺跡第２次調査** ：実験研究棟新営に伴うスロープ部分工事	97.11.25～12.5	120	近世・中世・古代の集落	55

付表２－(2)　試掘・確認調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
(3)	1983	1	BH13	合併処理槽予定地	2.5	－	→津島岡大第２次調査：1983年度	1
4	1983	2	BF17	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5	－	－	1
5	1983	3	BE～BG14、 BE･BH15、BE18、 BF16～18、BC18	排水管埋設予定地	2.0	－	29ヶ所で試掘→津島岡大第２次調査：1983年度	1
6	1983	4	BF22･23	農場畜舎新営予定地	2.0～3.0	0.6	２ヶ所、土器片<1987年度工事立会>	1
(7)	1983	5	BC･BD15	大学事務局新営予定地	2.0～3.0	0.9	２ヶ所、→津島岡大第26次調査：2000年度	1
(8)	1983	6	BB10	保健管理センター新営予定地	2.0～3.0	0.8	→津島岡大第10次調査：1999年度	1
9	1983	7	BI16	津島宿舎新営予定地	0.9	0.9	土器片<1987年度工事立会>	1
10	1983	8	AW05	校舎新営予定地	3.0	1	土器片	1
12	1985	1	BE08	講義棟予定地	3.5	1.2	遺構など未確認<1986年度工事立会>	5
13	1985	2	AX02	研究棟予定地	2.6～3.4	1.2	３ヶ所、縄文～弥生土器出土	5
14	1985	3	AV･AW99～01	男子学生寮新営予定地	2.0～3.0	1	→津島岡大第３調査：1986年度	5
(17)	1986	3	BF･BG09	屋内運動場新営予定地	2.4、1.2～1.7	1.1	→津島岡大第４次調査：1986年度	6
(18)	1986	4	AY･AZ07	自然科学研究科棟新営予定地	1.6～3.2	0.6～0.8	→津島岡大第５次調査：1988年度	6
22	1987	4	AP02（土生地区）	外国人宿舎建設予定地	2.2～2.8	－	縄文時代・弥生時代・近世の遺構面	8
(23)	1987	5	AV11	総合情報処理センター新営予定地	2.0～3.0	2	→津島岡大第11次調査：1993年度	8
24	1987	6	AY09	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0～3.5	約1.0	中世・近世の遺物、古代・中世の水田<継続して調査>	8
25	1987	7	BD09	身体障害者用エレベーター建設予定地	2.5	0.7	縄文時代遺構、縄文・中世・近世土器<継続して調査>	8
29	1988	17	AX04･06、AW04	校舎建設予定地	2.0～3.5	－	→津島岡大第６・７次調査：1988年度	11
30	1988	19	BD18･19	動物実験飼育施設･遺伝子実験施設	2.3	1.1～1.2	→津島岡大第８次調査：1991年度	11

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
31	1988	20	BC29	国際交流会館	2.5	1.2	中世・近世の遺物出土 <1988年度工事立会>	11
33	1989	2	AZ･BA05	身体障害者用エレベーター	2.5	0.8	縄文時代後期・弥生時代早期の落込み、縄文時代後期～中世土器片 <継続して調査、面積38.5㎡>	14
34	1989	3	AZ17	合併処理槽設置予定地	4.0	1.6～2.0	中世～明治の水田の畦畔・溝 <1989年度工事立会>	14
35	1989	4	BD02	学生合宿所予定地	2.0～3.2	1	弥生時代早・前期の畦畔 <1989年度工事立会>	14
(36)	1989	5	AV･AW13	図書館新営予定地	3.0	1.4～1.6	→津島岡大第12次調査：1993年度	14
40	1990	3	BC02	学生合宿所ポンプ槽予定地	2.5	1.1	弥生時代前期畦畔、中世土器片	18
41	1990	6	AW･AX11	福利厚生施設予定地	3.9	1.4～1.6	→津島岡大第13次調査：1994年度	18
56	1993	3	BE～BF22～23	農学部汎用耕地実験実習施設	1.5	－	中～近世耕作土	30
65	1994	3	BD20	動物実験施設	2.0	0.9	GL－1.4mで黒色土、縄文土器１点出土 <盛り土保存>	33
71	1995	4	BE26	国際交流会館新営予定地	4.1･2.4	1.6	明治～中世の土層確認、以下は湿地状態、遺構・遺物無し（明治畝のみ） <工事立会>	38
72	1995	5	AW02･03	環境理工学部新営	2.4	1.2	→津島岡大第17次調査：1996年度	38
73	1995	6	BF07	ボクシング部ボックス移設	3.0	3	標高2.5mで黒色土、弥生～古墳時代の溝２条、古代１条	38
(90)	1998	9	AZ09	コラボレーション･センター新営に伴う試掘調査	2.7～3.4	1.3	→津島岡大第19次調査：1998年度	53
(91)	1998	10	AW02･03	校舎（Ⅱ期）新営に伴う調査	4.5	1.2	→津島岡大第22次調査：1998年度	53
92	1998	13	AW04	システム工学科棟新営に伴う調査	2.8	1	GL－1.8mで黒色土、縄文後期の遺構	53
93	1998	14	AU02･03･06、AV03	遺跡保護区整備に伴う調査	2.4～3.8	0.8～1.6	５ヶ所、TP１・３・５：微高地状、TP２・４は低湿地状、TP１で弥生溝、TP３で弥生溝・ピット、TP４で中世溝	53
(105)	1999	6	AZ15、BA14	総合校舎新営に伴う調査	2.7、3.5	0.8 1.1	→津島岡大第23次調査：1999年度	56
106	1999	7	AV08	電波暗室新営に伴う調査	1.2	0.2	現表土以下、基盤となる岩盤層	56
114	2000	6	AV00、AX00･02･03、AZ06、AW08	縄文～弥生時代における環境復元に伴う調査	2.6～3.2	1.7～0.9	６ヶ所掘削、縄文・弥生時代の微高地、古代溝を確認	61
115	2000	7	BB14	創立50周年記念館新営に伴う調査	2	0.8	→津島岡大第27次調査：2001年度	61
129	2002	5	BD15	事務局旧本部棟移転に伴う調査	2.1	－	黒色土の落ち検出	71
185	2009	2	AV14	学童保育室新営予定地	3.24	1.95	縄文層まで確認	102
186	2009	3	BF20	農学部構内植物工場新営予定地	北西3.28、南東2.33	北西2.3、南東1.1	縄文層まで掘削、溝・畦畔確認	102

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
(4)	1984	1	BU30･31	西病棟北側受水槽予定地	1.4	0.5～0.7	中世土器・包含層確認　<盛土保存>	2
(5)	1984	2	CT･CU25、CZ19･20･23･24	医療短期大学部校舎新営予定地	2.7	0.8～1.0	→鹿田第３次調査：1986年度	2
6	1985	4	AJ33、AI40、AJ･AK26	外来診療棟環境整備工事に先立つ範囲確認調査	2.2～3.0	0.9～1.4	弥生時代～中世の遺物	5
(17)	1990	5	BY･BZ68	アイソトープ総合センター予定地	2.3	1.2～1.3	→鹿田第６次調査：1990年度	18
(26)	1997	8	BT57	基礎医学棟	2.2	0.9	→鹿田第７次調査：1997年度	50
29	1998	11	CF･CG43･44、CH25･26、CK35･36、CK15	病棟新営に伴う調査	2.0～2.4	1	→鹿田第９次調査：1998年度	53
82	2009	2	CR70－71、CW75	学生サークル棟新営に伴う調査	北東2.12、南西2.29	北東0.9、南西0.7		102

＜倉敷地区＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
1	1990	4	－	資源生物科学研究所遺跡確認調査	2.5	0.7	中世後半以降の土器片	18
2	1998	12	－	バイオ実験棟新営工事に伴う調査	1.5	0.4	近世干拓地内、遺構未確認	53

＜東山地区＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
3	2006	1	－	附属小学校校舎建替え工事に伴う調査	3.0	0.3～0.5	４ヶ所、近世・近代溝３条、中世？畦畔	88
4	2008	1	－	附属中学校校舎建替え工事に伴う調査	2.3～2.4	1	２ヶ所、近代畦畔	95

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
3	1997	5･6	－	実験研究棟新営工事に伴う試掘調査	1.66～2.1	0.8	２ヶ所→福呂第２次調査：1997年度	50
5	2004	1	－	三朝宿泊所増築工事に伴う試掘･確認調査	1.3	0.5～0.9	２ヶ所、遺構・遺物・遺物包含層確認されず	81
6	2004	2	－	高圧線･電話線切替工事	1.0	0.85	１ヶ所、河床礫、段丘礫層確認	81

付表２－(3)　立会調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
11	1984	20	BI15～17	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設	1.0～2.2	1	溝・土坑、弥生土器・須恵器	2
19	1986	12	BE08･09	校舎新営	2.3	1.3	中・近世の溝・土器	6
20	1986	21	BG08	ハンドボールコート新設	0.2～2.0	0.8	黒色土確認	6
21	1986	26	BF07･08	校舎新営に伴う電気配管	1.8	0.9	中世包含層	6
32	1988	17	BG10･11	テニスコート夜間照明施設	2.2	1.5	GL－約２ｍで黒色土、西に向かう落ちを推定	11
37	1989	8	AZ08	自然科学研究科棟新営：工事用道路	1.4	－	弥生時代後期水田・溝	14
38	1989	10	AU05	校舎新営に伴う電柱架設	1.9	1	黒色土確認	14
42	1990	16 19	AV04～10	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅰ：電柱移設	0.4～3.0	0.6～1.4	５ヶ所、黒色土、条里南北溝	18
43	1990	20	BC02～04、 BD03･04	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅰ：学生合宿所給排水管設置	2.3	1.2	GL－2.3mで黒色土	18
46	1991	9	BC18	防火用水撤去	2	0.8	基盤層まで掘削、石鏃出土	21
47	1991	17	BB16	津島地区基幹整備（電気） ：ハンドホール･アース板	1.7～1.8	0.5	２ヶ所、明治層～淡灰色粘土層	21
48	1991	19	BD15	津島地区基幹整備（電気）：アース板	1.7	1	GL－1.5mで黒色土	21
49	1991	40	BC･BE･BF12	南北道路街灯設置	1.5	－	３ヶ所、GL－1.4mで古代層	21
52	1992	15	BD18	遺伝子実験施設ハンドホール設置	1.5	0.75～1.1	縄文後期層まで掘削、溝２本	25
53	1992	34	AV12	附属図書館北側駐車場整備	3	1.7	造成土以下は粘土層	25
57	1993	17	BB～BC10～12	保健管理センター新営に伴う外構工事ほか：電気配線	1.8	0.6～0.7	保健管理センター本調査と同じ層序、黒褐色土はGL－1.15～1.7m、その直下に基盤層	30
58	1993	19	BB11	保健管理センター新営に伴う旧棟改修：電気配線	1.1	0.8	弥生土器片、工法変更	30
59	1993	23	BA07	津島地区基幹整備 ：RI共同利用施設排水処理施設他設置	3.2	－	明治～中世層・暗褐色土層、古代溝？、縄文晩期?土器片	30
60	1993	28	BD～BE13	津島地区環境整備：南北道路沿水路ボックスカルバート敷設	1.5	1	近世～中世層を確認	30
61	1993	33	BB～BG12～13	津島地区環境整備：水銀灯設置	1.8	0.5～1.2	10ヶ所、近世～中世層まで掘削、一部で暗褐色土層を確認	30
62	1993	34	BD～BE12･13	津島地区環境整備：信号機設置	1.6	1	近世から中世層、一部で暗褐色土層	30
63	1993	39～ 41	BB05～07、 BC05･41	野球場バックネット･防球ネット改修	2.0～3.2	1	GL－1.2～2.0m付近で黒色土、以下は黄色砂～青灰色粘土	30
66	1994	9	BD･BE･BF04～07	陸上競技場照明灯設置	2	0.96	オーガー掘削（径80cm・深さ10m）、GL－1.92～2.0mで黒色土	33
67	1994	13	AV10、AW10、 AU11	総合情報処理センター新営電気工事	2.2	1.5	近世２面、中世（近世か？）１面、GL－1.7mで黒色土、近世溝	33
68	1994	20	BD20	焼却場	2.2	1.5	GL－1.9mで黒色土	33
76	1996	4	BC18	動物実験棟新営に伴う造成土取り	2.2	1.9	黒色土層付近まで掘削	44
77	1996	5	BD16～19	動物実験棟新営に伴うハンドホール設置工事	1.3	－	４ヶ所、造成土以下に５層確認	44
78	1996	12	AV02、AV03、 AV04、AV99、 AW02、AW04	サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営：外灯設置工事	1.0～1.5	0.76～1.1	６ヶ所、明治層２面・近世層２面・中世層？１面・弥生層？１面	44
79	1996	13	AV03～AW03	サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営：配管設置工事	2	0.95	弥生時代層まで掘削、古墳時代前期の遺構･遺物	44
80	1996	18	AW03	校舎新営予定地電柱移設工事	2	－	黒色土まで掘削	44
81	1996	25	AV13	附属図書館新営：雨水桝･外構工事	1.3	1	造成土以下に青灰色粘質土･黄褐色粘質土･灰褐色粘質土	44
82	1997	16	BB13～BH13	南北道路ガス管埋設工事	1.5	－	中世層まで掘削	50
83	1997	19	AW11～BA13	南北道路ガス管埋設工事	1.5	－	中世層	50
84	1997	24	BC12	福利厚生施設新営に伴う共同溝新設工事	2	0.8	GL－1.65mで黒色土、古代～近世の溝	50
94	1998	15	BA09	構内外灯設置工事	1.47	1	GL－1.42mで黒色土	53
95	1998	22	AZ09、BA09	コラボレーション･センター支障配管布設替工事	1.4	1	GL－1.4mで黒色土	53
96	1998	24	BB12、BC12	南福利街灯設置工事	1.4	0.95	中世層まで掘削	53
97	1998	31	AY06	校舎新営に伴うガス管埋設工事	1.2～1.4	0.65～ 0.95	中世層まで掘削、10ヶ所	53
98	1998	34	BC10	学生会館改修に伴うトラップ桝撤去工事	2.2	1.45	GL－1.7mまで灰褐色粘土層、GL－2.2mまで青灰色粘土層	53
99	1998	35	BA00	NTT電柱移設工事	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘質土	53
100	1998	41	AX03～AY07	実験排水管埋設工事	1.4	0.6～1.4	10ヶ所、５地点で中世層、２地点で古代層、１地点で古墳時代層まで掘削	53
101	1998	42	AU02	馬場移設に伴う樹木移植	2.2	1.1～1.3	GL－２ｍで弥生後期層、GL－2.2mで縄文基盤層	53
102	1998	44	AV03、AW03	校舎新営に伴う生活排水桝設置工事	1.97	1.4	古墳時代層まで掘削、須恵器・土師器	53
103	1998	48	AW03	校舎新営に伴うガス管埋設工事	1.45	1	中世層まで掘削	53
107	1999	8	AY00、AZ01･03	構内外灯設置工事	1.15～1.35	0.5～1.2	３ヶ所で黒色土（GL－0.85～１m）確認	56
108	1999	12	AZ08･09	コラボレーション･センター新営工事に伴うハンドホール	1.48～2.1	1.03～ 1.16	２ヶ所、１ヶ所で古墳時代層まで掘削	56
109	1999	13	AW02	校舎（Ⅱ期）新営に伴うスロープ設置工事	3.5	1.2	調査面積25㎡、黒色土下面まで調査、近代土坑・古代溝・縄文後期ピット	56
110	1999	42	AZ09	コラボレーション･センター新営に伴う排水桝	1.0～1.2	0.8～1.0	６ヶ所、１ヶ所で黒色土対応層まで掘削	56

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
116	2000	17	BA12	津島地区電柱工事	1.6	1	造成土下に灰色粘質土・暗茶褐色粘質土層	61
117	2000	23	AY09	校舎改修工事 ：理学部本館基礎補強工事	1.3	0.9	造成土下に暗青灰色粘質土・褐色粘質土・灰色粘質土	61
118	2000	28	AX10、AY10	校舎改修機械設備工事：電気	0.85～1.60	0.8～1.1	南側ハンドホールはGL－1.6mまで掘削、GL－1.52mで中世溝（南東から北西方向に向かって走行）	61
119	2000	42	AW08、AX08	精密応用化学科棟都市ガス改修工事	1.6～2.05	1.45	GL－1.82mで明灰褐色粘土（中世?）	61
120	2000	44	BA16	総合研究棟仮設電柱建柱工事	1.5～1.7	1	GL－1.4mで中世層？、軍庭園の築山、土塁を一部掘削	61
122	2001	4	AZ10	校舎改修電気設備工事	1.6	1.0～1.2	ハンドホール部分で中世溝	66
123	2001	11	BB～BC16	本部棟電柱設置工事	1.5～2.1	1.2～1.4	２ヶ所、GL－1.4mで灰色粘土、GL－2.1mまで谷部か？	66
124	2001	27	BB･BC13	本部棟車庫移設工事	0.5～1.6	1	２ヶ所、中世層まで掘削	66
125	2001	30	BB14	本部棟樹木移植	1.6	0.65～0.8	GL－1.4mに灰色粘質土層（古代）を確認	66
126	2001	31	BB14	本部棟車庫移設工事に伴う旧変電室基礎解体工事	1.05	0.45～0.75	12ヶ所掘削、中世層まで掘削	66
130	2002	29	BE15	校舎改修電気設備工事	1.8	1.5	３ヶ所、古代・古墳層まで掘削	71
131	2002	34	BC13～15	本部棟新設工事：排水桝･管路	1.2～2.5	0.7～1.2	突帯文土器・石器がまとまって出土、近世溝・弥生溝	71
132	2002	51	BB13	本部棟新営その他工事：雨水排水桝･管路	1.57	0.8	中世層と古代・古墳層を確認	71
133	2002	54	BB13･BD14	本部棟新営その他工事：外灯	0.95～1.9	0.8	２ヶ所で中世層と古代層まで掘削、GL－1.3mで黒色土	71
134	2002	55	BC07･09	一般教育棟Ｂ棟外灯設置工事	1.0～1.26	0.95	４ヶ所、中世層まで掘削	71
135	2002	57	BB～BC14～15	創立五十周年記念館新築工事：汚水排水	1.0～2.3	0.85～1.0	一部黒色土上面まで掘削	71
136	2003	1	BB13～15	創立五十周年記念館新築に伴う掘削 （雨水排水桝･管埋設工事）	1.3	0.7～0.8	中世層まで掘削	74
137	2003	4	AX06	総合研究棟新営機械設備工事 （ガス配管埋設工事）	1.4	0.9	古代層？まで掘削	74
138	2003	6	BC15	旧事務局庁舎改修電気設備工事	2.43	0.85	GL－1.9mで黒色土、GL－2.1mで縄文基盤層確認	74
139	2003	7	BB、BC18	農学部総合研究棟改修電気設備工事 （仮設電力･電話引き込み建柱工事）	1.7	0.7	径0.5m、GL－1.2m前後で黒色土層、GL－1.5～1.6m前後で縄文後期基盤層確認	74
140	2003	8	AX06～BA06	総合研究棟新営その他工事（雨水排水）	1.7	0.7～0.8	標高3.3～3.4mで黒色土、弥生～古代の東西溝多数、近世・近代の東西溝・畦畔	74
141	2003	14	AW、AX06、07	総合研究棟新営電気設備工事（外灯）	1.4	－	中世層まで掘削	74
142	2003	15	AW～AX06～07	総合研究棟新営その他工事（排水）	0.5～2.5	1.6	桝で縄文基盤層まで掘削した箇所あり、弥生溝	74
143	2003	17	BC～BD15	旧事務局庁舎改修電気設備工事 （外部給水･消火配管）	2.75	1.1	桝で、縄文基盤層確認	74
144	2003	21－1	BG～BH13	公共下水桝接続工事No.1区間 農学部合併処理槽	1.8	0.9	縄文基盤層まで掘削	74
145	2003	21－2	BE～BG10	公共下水桝接続工事No.2区間 体育館東～武道場西	1.95～2.25	0.8～0.9	桝で縄文基盤層、管路で弥生早・前期まで掘削、弥生溝・縄文土坑	74
146	2003	21－4	AZ16	公共下水桝接続工事No.4区間 文･法･経２号館西	2.45	1.5	縄文基盤層まで掘削、弥生溝確認	74
147	2003	21－5	BA10	公共下水桝接続工事No.5区間　理学部	1.9	0.7	中世頃の座主川を確認	74
148	2003	21－6	BG22	公共下水桝接続工事No.6区間 農学部４号館東	1.5～1.9	0.9～1.4	縄文基盤層まで掘削、弥生～古墳初頭ピット、近代畦畔状遺構	74
149	2003	21－7	BI16	公共下水桝接続工事No.7区間 津島宿泊所	1.15～1.3	0.8	中世層まで掘削	74
150	2003	21－8	BI15	公共下水桝接続工事No.8区間　南宿舎	2.0～2.45	1.1	縄文基盤層まで掘削	74
151	2004	1	BB～BD26	公共下水桝接続工事 留学生等宿泊施設	1.22～1.68	1.0	中世層まで掘削	81
152	2004	6	BB9･10	津島キャンパス環境整備 留学生センター西	0.5～1.15	0.4～0.6	弥生後期包含層・遺構・礫層確認	81
153	2005	3	AV08	工学部総合研究棟改修工事 （仮設電柱掘削取り付け）	8.5	1.5	GL=－0.9mまで造成土、以下、青灰～白灰色の粘質土３層を確認、「黒色土層」は確認されず	83
154	2005	5	AW09	工学部総合研究棟改修電気設備工事 （アース板設置）	1.8	－	基盤層～黒色土～明治の土層堆積確認	83
155	2005	9	BE02、BG07	キャンパス環境整備（門扉改修等）工事	1.0～1.3	0.7	東07地点：GL－0.7mで明治耕土と畦畔・溝、－１mで中世層確認、東08地点：近世畦畔、中世層確認	83
156	2005	13	BC～BE03、 BB･BC02	プール改修（排水管改修）工事	0.75～2.4	0.8～1.3	縄文基盤層～近代層の堆積確認、「黒色土」確認、弥生～古墳の溝多数、近世土坑、近代大畦畔・溝	83
157	2005	14	BB･BC04	サッカー場防球ネット設置工事	2.0～2.2	－	オーガーによる掘削、一部で「黒色土」確認	83
158	2006	2	AX10	工学部総合研究棟Ⅱ期改修工事：耐震工事に伴う支障物撤去･PC耐震柱基礎掘削	1.4～1.6	1.0	近代耕作土層以下、中世層まで５枚の層を確認、近世面で南北方向の溝	88
159	2006	3	AZ～BA02～04	教育学部公共下水桝接続工事	1.3～2.3	0.7～1.0	桝１箇所、深さ2.3m、配管、深さ1.05～1.92m、黒色土層あるいは基盤層まで掘削、東西方向の溝	88

付　表

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
160	2006	5	BA･BB02、BC02	プール改修配管接続工事	1.7	0.7～0.8	黒色土層あるいは基盤層まで、古墳時代頃の溝状遺構	88
161	2006	11	AX08～09	工学部総合研究棟Ⅱ期改修工事：耐震工事に伴うPC耐震柱基礎掘削	1.8	－	古墳～弥生層	88
162	2006	13	BF16	農学部２号館南電柱移設	2.0	－	中世層まで	88
164	2007	4	BA12	公共下水道接続工事（理学部他）	2.0	0.8～0.9	GL－1.6mで黒色土確認、弥生時代の溝	92
165	2007	8	AV･AX07･08	総合研究棟Ⅲ期改修：電気設備･外灯基礎及び管路掘削工事	1.4～1.7	1.2	近世～中世層確認	92
166	2007	10	AW07･08	総合研究棟Ⅲ期改修：外構桝･配管（東半部）	1.1～1.4	0.9	近世層確認、土坑１基	92
167	2007	13	BA～BC20	インキュベーション施設外構配管工事	1.2～1.4	0.6～0.8	縄文時代～近代土層確認、中世、近代の溝	92
169	2008	7	AZ09	理学部ヘリウム液化装置基礎工事：基礎杭設置	4	－	黒色土なし、GL－４m以下で礫層を確認	95
170	2008	21	AY03･AZ03･BA03	総合研究棟（教育系）改修電気設備工事：建柱掘削	2	－	３地点掘削し、北地点では黒色土みられず	95
171	2008	22	AY04	総合研究棟（教育系）改修電気設備工事：接地極埋設	1.7～1.78	－	古代層下に溝もしくは河道の埋土とみられる砂層を確認	95
172	2008	26	AZ03	総合研究棟（教育系）改修機械設備工事：都市ガス設備	1.2	－	GL－0.95mで黒色土を確認	95
173	2008	28	BB12	KDDI無線基地局新設工事：建柱	1.8	0.8～1.05	灰褐色砂質土層まで確認、黒色土未確認	95
174	2008	32	BB04	プール系統水道メーターボックス取設工事	0.9～1.5	－	中世層（？）まで確認	95
175	2008	33	BJ17	南宿舎電柱設置工事	2	－	およそGL－1.2～1.5mで黒色土確認	95
176	2008	39	AX04	大学生協東福利施設新築工事：ガス管	0.85～1.21	1	中世層まで確認	95
177	2008	40	AX05	大学生協東福利施設新築工事：外灯移設	1.1～1.2	0.68～0.95	２地点掘削し、古代層まで確認	95
178	2008	42	AW00～01	新技術センター公共下水道接続工事	0.85～1.75	0.7	中世～近代の里境を示すとみられる南北溝４条を検出　黒色土上面まで確認	95
179	2008	43	AY01	教育学部体育館他耐震改修工事：動物室	0.85	0.85	黒色土上面で弥生～古墳時代の水田畦畔を確認	95
180	2008	44	AY03、BA03	教育学部体育館他改修機械設備工事：仮電柱設置	1.2～1.7	－	２地点掘削し、北地点では中世層まで、南地点では東西溝の埋土を確認	95
181	2008	49	AY02	教育学部体育館他改修電気設備工事：接地極埋設	0.3～1.7	－	古代層まで確認	95
182	2008	52	BB10～11	大学会館他改修工事：一般教育講義棟ガス設備	0.7～1.2	0.55	GL－1.0m以下で礫層、土坑１基、溝？１条を確認	95
183	2008	53	AV04～06、AW04	工学部屋外ガス配管改修工事	0.8～1.48	0.8～1.1	一部で中世層まで確認	95
187	2009	6	BE－BF04～08	総合教育棟Ⅲ期（共通教育）改修工事：高圧ケーブル	管路0.7～0.8、桝1.3		桝２箇所：中世層および近世層まで	102
188	2009	14	BB10	環境整備（施設誘導案内板）新設工事	0.8～0.95	0.6	保健管理センター北東で弥生？遺構埋土確認	102
189	2009	16	AU06	工学部21号館（動物飼育室）改修工事：ガス管	0.8～0.9		一部弥生？包含層確認	102
	2009	17	AU06･07	工学部21号館（動物飼育室）改修工事：排水管	0.65～0.9、北東部2.2	1.25	北東部で河道埋土確認	102
190	2009	21①	BB12	南北道路信号機付け替え工事：西門南東	1.8	0.58～1.25	中世～弥生層まで掘削、底面で黒色確認	102
	2009	22	BA12	南北道路信号機付け替え工事：西門北東	2.0		縄文層まで掘削、黒色土確認	102
	2009	23	BA13	南北道路信号機付け替え工事：西門北西	2.05		縄文層まで掘削、黒色土確認	102
	2009	24	BD12	南北道路信号機付け替え工事：事務局前北東	1.95		縄文層まで掘削	102
191	2009	25	AY－AZ02－03	総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修工事：ガス管	0.8	－	弥生層確認	102
	2009	27	AY01･AZ03	総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修工事：電気設備	アース埋設1.65、管路0.8、外灯0.8～1.3	0.4	アース埋設：縄文層まで掘削、黒色土・中世以前の遺構埋土確認、管路：弥生包含層・遺構埋土確認、外灯：黒色土まで掘削	102
	2009	29	AY02－03	総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修工事：屋外排水	1.15	1	黒色土・弥生遺構埋土確認	102
	2009	30	AZ00－02	総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修工事：屋外排水	管路0.8～0.9、桝1.2･1.7	0.7	管路：包含層・畦畔・小溝確認、北側桝：縄文層まで掘削、黒色土確認、南側桝：縄文層まで掘削、黒色土無し	102
	2009	32	AZ00･AY－AZ01	総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修工事：電気設備	アース埋設1.7、管路0.8～0.9、外灯1.3	0.6	アース埋設：縄文層まで掘削、黒色土確認、管路：包含層・土師器小片確認、外灯：既設土内	102
192	2009	42	AX16	文法経ボイラー用煙突撤去工事	2.5	1.5	縄文層まで掘削、弥生中・後期溝１条確認	102
193	2009	48	BB16･BC17	総合研究棟（薬学系）改修工事：電気設備	管路1.45、アース板1.50～1.54	1.05	管路：近世層・近代溝確認、アース板：包含層（中世？）確認	102
194	2009	54	AU03	環境理工学部公共下水道接続工事	A：2.3･B：2.4	0.9	A：弥生～古墳層まで掘削、近代東西畦畔１条確認、B：黒色土上面まで掘削	102
195	2009	55	BC18	薬学部西水道管位置確認工事	2.7	0.55	岡山市教育委員会文化課対応、縄文層まで掘削、黒色土確認	102

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
3	1983	23	AO～AW22	外来診療棟蒸気配管埋設	1.3	－	弥生時代後期土器・分銅形土製品、貝集積	1
7	1985	6	AW～BH23、BH･BI24	外来診療棟関係屋外排水管埋設	1.3～1.7	0.7～1.3	中世・弥生の遺構・遺物	5
8	1985	12	AG31、AG24、AF23	基幹環境整備緑化工事：電気配線ハンドホール掘削	1.2～1.7	0.9～1.3	３ヶ所、中世包含層・ピット	5
9	1986	9	BI～BN4	記念館東側汚水管改修工事	0.8～1.3	0.8	中世包含層、土器出土	6
11	1986	24	CL～CR12、CR～CX13、CX～DA14	護岸及び囲障工事	2	0.8～1.0	中世包含層	6
14	1987	8	BC37	管理棟新営に伴う基礎杭確認	2.5		弥生時代包含層・遺構	8
15	1989	46	CE30･37･44、CJ･CK45、L28･29	旧管理棟跡地環境整備：外灯基礎	1.2～1.5	0.7～1.0	２ヶ所、中世層を確認	14
18	1992	29	BW71	アイソトープセンターL形側溝･集水枡	1.4～1.5	0.9	中世溝１条	25
19	1992	41	CI73	テニスコート脇電柱埋設	1.2	1	古代土器１点	25
20	1994	5	DH60～62	護岸改修工事	1.5	0.8	近世層以下はすべて遺構埋土の可能性あり、溝３条・ピット９基	33
21	1995	11	BG･BI18	鹿田地区基幹整備：附属病院連絡通路新設	1.5	1	造成土以下に茶褐色土・青灰色粘質土層、遺物なし	38
22	1995	14	CD07･08	鹿田地区基幹整備：液酸タンク設置工事	2.3	1	中世２面確認、溝３条、溝内から中世・古代の土師器出土	38
23	1995	17	CD08～CC11	鹿田地区基幹整備：附属病院液酸タンクU字溝埋設工事	1.23	0.85	包含層確認、中世土器細片、既設管・工事基礎などで区間全長の１／２程度は破壊	38
24	1995	23	DF56～67	防球ネット取設工事	3	0.8	径60cmを12ヶ所、その内４ヶ所で土器片・石器出土、調査区西寄りは、GL－２m以下は旧河道か	38
30	1998	36	BV73、CN78	校舎新営に伴う仮設電柱工事	1.2	1	中世層まで掘削	53
33	1999	15	BV65～71	研究棟新営に伴う給排水桝･管路	1.2～1.4	0.9	中世層まで掘削	56
34	1999	18	BU65	研究棟新営に伴う検水槽	2.2	1.1	面積8.2㎡、近世溝、中世溝・ピット	56
35	1999	27	BY42･43、BI43･44	基幹整備（電気設備）：地中配管	1.25～1.45	0.45～0.5	２ヶ所、中世層まで掘削、時期不明の遺構	56
36	1999	41	CF21～28、CF～CL28、CD～CF28～33	病棟新営に伴う共同溝解体	1.7	－	面積18㎡、鹿田11次調査３区南側部分で中世ピット	56
37	1999	46	CN46～DE49	病棟新営に伴う汚水桝･管路	2.3	1.2	古墳時代の井戸１基・土坑１基・中世溝等	56
38	1999	47	CM･CN･CP･CR･CT58、CV･DA･DC･DD･DF59	グラウンド防球ネットポール	2.0～2.3	－	11ヶ所、南側６ヶ所は河道、７～10ヶ所付近は微高地、最北端は河道	56
39	1999	48	BT51	病棟新営に伴う汚水検水桝	2	1	造成土以下７層確認、古墳時代層まで掘削か	56
41	2000	25	CD41～CN45	病棟新営その他工事：管路･雨水桝	1.6～1.8	－	溝と思われる遺構など確認	61
42	2000	26	CN15･21･27、CO31･42、CS45、DV45	電柱及び外灯の埋設工事	1.6	－	７ヶ所、灰白色土層・淡褐色砂質土層・暗褐色砂質土層を確認、微高地部か	61
43	2000	29	DI27	医学部ガス配管切り離し用バルブ取付工事	0.8～1.15	0.7	GL－0.85mで黄灰色粘質土	61
44	2000	47	DG～DJ28～67	鹿田団地南側用水路境界擁壁改修	2.1～2.3	1.3～1.5	幅120mの壁面調査、古代の遺構・河道	61
45	2001	37	BR～CA43、CA43～55、CA44～CL45、BR～CA55	総合教育研究棟埋蔵文化財発掘調査に伴う機械設置工事	1.65	0.7～0.9	中世層まで掘削、中世土器が多数出土した地点あり	66
47	2002	10	CH11～CN22	鹿田団地ガス配管埋設工事	1.0～1.3	0.87	中世層まで掘削	71
48	2002	19	BT･BU11	鹿田団地ガス配管埋設工事	0.5～1.8	－	２ヶ所、GL－1.22mまで掘削した地点で中世または古代層確認	71
49	2002	22	CQ41～42	エネルギーセンター棟新営その他工事：共同溝排水管	1.5	－	１ヶ所、包含層まで掘削	71
50	2002	25	CG41、CO34、CF43、CO38	エネルギーセンター棟新営その他工事：外灯	1.47～1.66	－	４ヶ所、中世層まで掘削	71
51	2002	27	CV36～45	エネルギーセンター棟新営その他工事：外溝	0.9～1.9	0.9	中世の井戸・柱穴・溝	71
52	2002	36	BI～BS45～53	総合教育研究棟新営その他工事	1.85～2.0	0.8～1.0	５ヶ所、中世層まで掘削	71
53	2002	52	DC67	本部棟新営その他工事：植採移植	1.25	－	中世層	71
54	2002	56	BG18	旧混合病棟グリーストラップ改修	1.68	－	底面で弥生～古墳層、土器小片	71
55	2003	5	BS～BZ45、CA～CO46、CO45	総合教育研究棟新営その他工事（屋外排水）	1.7	0.7～1.0	弥生中期?包含層まで掘削、近世土坑・中世ピット多数、低地部確認	74
56	2003	9	BL～BS45～53	総合教育研究棟外構工事（雨水･汚水･実験排水）	0.8～1.75	0.7～0.9	弥生中期包含層まで掘削した箇所あり、古墳時代溝、中世井戸、近世土坑等を確認	74
57	2003	10	BR～BS50～54	総合教育研究棟給水配管埋設工事	1.33	0.8	一部で中世層確認	74
58	2003	13	BR53、BL54	総合教育研究棟外構工事（外灯）	1.4	0.8	中世層まで掘削	74
60	2004	3	AF16、AF～AJ17、AJ9～16	医病構内支障ガス管配管替工事	1.0～1.9m	0.7～0.8	接続部で近世～近代の水田層、中世の畦畔を確認、弥生～古墳の河道と推定される砂層を確認	81
61	2004	5	AE4～16、AF～AI16、AI9～15、AJ～AO09	医病構内支障給水管配管替工事	0.9～1.9m	0.85	桝で中世?～近代の畦畔確認、弥生～古墳の河道と推定される砂層を確認	81
62	2005	3	DH～DJ18、DJ19	医学部変電所ピット周辺高圧ケーブル設置工事	1.1～2.5m	0.7～1.1	一部で弥生～近代層確認	83
63	2006	6	CT～CU45	エネルギーセンター棟新営に伴う工事	2.5	0.9	鹿田第12次調査地点と重複、同様の状況	88
67	2007	4	CC13～20、CD13～20	基幹環境整備（道路等）工事	1.2～2.2	0.9～1.2	基盤層まで掘削、中世東西・南北溝確認	92

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
68	2007	5	AS03～07、AV～AX07、AY·BB09	中診棟屋上防水改修その他工事	0.6～0.9、1.4、1.8	0.7	ガス管１：GL－1.8m、中世東西溝、古墳時代南北溝確認	92
69	2007	7	BT11	中央診療棟新営工事：ガス管切断工事	1.28	0.5	中世溝埋土確認	92
70	2007	10	CO42、CV36	基幹整備（電気設備）工事	1.3～1.65	1.3	中世層まで掘削、遺構埋土確認	92
71	2007	11	CG08、CF09·10、CG·CH1、CI11	環境整備（道路等）工事：ガス配管１	0.85～1.3	0.9	GL－0.85～1.3m、中世井戸（または墓）·ピットなど確認、GL－1.0～1.3m、中世溝·ピット確認	92
72	2007	17	CL12、CM13、CN14·15	環境整備（道路等）工事：ガス配管２	1.0～1.2	0.4	中世層、中世遺構埋土確認	92
73	2007	27	BT·BU65	総合研究棟（医学系）新営その他工事	1.35	1	中世層確認	92
74	2007	28	CJ7～CP12	用水路改修工事	1.7～2.0	0.6～0.8	包含層及び枝川東側で微高地確認	92
75	2007	30	BE33	高エネルギー治療室改修工事	1.4	0.6～0.7	中世～近代の畦畔·溝確認、弥生後期土器出土	92
77	2008	5	BT24～25	基幹整備（西病棟とりこわし他）工事：現場打ち排水枡	0.98～1.4	0.7	弥生基盤層を確認	95
78	2008	6	BQ24、BR24	基幹整備（西病棟とりこわし他）工事：ライトコート	0.75	0.5	湿地性堆積層を確認	95
79	2008	7	AO53～54、AL54～AO54、AL54～61、AL62～AP65	基礎医学棟一部とりこわしに伴う支障ガス配管移設工事	0.76～1.0	0.5	近世層まで確認、土坑２基	95
83	2009	3	CB30、CB40	鹿田遺跡第20Ａ次調査矢板打ち	0.8～0.9	0.7	中世層まで掘削	102

＜東山地区＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
1	1983	13	－	附属中学校新営	4.0～5.0	－	シルト層中	1
2	1997	29	－	附属小·中学校他囲障改修工事	1.2	0.79	GL－1.1ｍで近世水田層、溝１条	50

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合番号	年度	番号	構内座標	調　査　名　称	掘削深度（m）	造成土厚（m）	概　　要	文献
4	1997	18	－	実験研究棟新営に伴う電気埋設管路工事	1	－	GL－1.0ｍで中世包含層は東に向かい上昇	50

付表３　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要（2010年度現在）

種類	調査名・地区名	箱　数（１箱：約30リットル）							備　考（主要時期・特殊遺物）	文献
		総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
発掘	鹿田第１次調査（外来診療棟）	601	536	15.5	20	0.5	1	28	弥生中期～中・近世、木製短甲・人面線刻土器・ガラス滓等	7
〃	鹿田第２次調査（NMR-CT室）	108.4	99	0.4	4.5	0.5		4	弥生後期～中世、田舟·木簡等	〃
〃	鹿田第３次調査（校舎）	64.6	41	0.3	18	0.3		5	古代～中世、石帯	10
〃	鹿田第４次調査（配管）	4	2	0.3	0.5	0.2		1	古代、鹿角製品	〃
〃	鹿田第５次調査（管理棟）	117	88	2.5	6	1.5		19	弥生後期～中・近世	24
〃	鹿田第６次調査（アイソトープ総合センター）	62	59	0.5	1	1.5			中世、青銅製椀	40
〃	鹿田第７次調査（基礎医学棟）	78.3	72		1.3		1	4	弥生～近世、猿形木製品	53
〃	鹿田第８次調査（RI治療棟）	10	10						弥生～中世	53
〃	鹿田第９次調査（病棟Ⅰ期）	120.1	96	0.1	13		9	2	弥生～近世、木簡３点	56
〃	鹿田第10次調査（共同溝）	2	2						古代～近世	56
〃	鹿田第11次調査（病棟Ⅰ期）	74	66		4		2	2	弥生～近世、木簡１点	56
〃	鹿田第12次調査（エネルギーセンター）	147	77	1	54			15	弥生～近世、櫛	61
〃	鹿田第13次調査（総合教育研究棟）	317	255	24	10			28	弥生～近世	71
〃	鹿田第14次調査（病棟Ⅱ期）	66	54		3			9	中世～近世	74
〃	鹿田第15次調査（総合教育研究棟関連）	3	3						古墳初頭・中世	74
〃	鹿田第16次調査（立体駐車場エレベーター他）	1	1						弥生～近世	81
〃	鹿田第17次調査（総合研究棟（医学系））	111	68	4	8		1	30	弥生～近世	87
〃	鹿田第18次調査（中央診療棟関連）	184	116	19	18			31	弥生～近世	92
〃	鹿田第19次調査（歯学部渡り廊下）	375	136	1	4			234	弥生後期～近世、壺棺、線刻土器、蹄脚硯	95
〃	鹿田第20次調査（中央診療棟・共同溝）	382	201	81	71		4	25	弥生後期～近世、木簡、曲物	本書
〃	鹿田第21次調査（外来棟周辺他環境整備）	10	4	1	3			2	弥生後期、古代、中世、陽物形木製品	本書
〃	津島岡大第１次調査（NP-1）	5	0.5	0.5	4				弥生中期～古代	3
〃	津島岡大第２次調査（農学部合併処理槽・配管）	20.5	15	1.5				4	弥生早期～弥生前期	4
〃	津島岡大第３次調査（男子学生寮）	73	55	1.5	2	4.5		10	縄文後期～古墳初頭、古代～近世石製指輪、蛇頭状土器片	19
〃	津島岡大第４次調査（屋内運動場）	1	1						弥生早期～弥生前期 ＜試掘調査遺物を含む＞	6
〃	津島岡大第５次調査（大学院自然科学研究科棟）	89	75	3	1	8		2	縄文後期～古墳、古代～近世、耳栓・木製櫛（縄文）、堅果類	27
〃	津島岡大第６次調査（生物応用工学科棟）	54	38	1	9	6			縄文後期～近世、人形木器、アンペラ、人形土製品	35
〃	津島岡大第７次調査（情報工学科棟）	42.5	21	0.5	1			20	縄文後期～近世	35
〃	津島岡大第８次調査（遺伝子実験施設）	12.5	11	0.5				1	縄文後期～近世	32

種類	調査名・地区名	箱　数（1箱：約30リットル）							備　考（主要時期・特殊遺物）	文献
		総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
発掘	津島岡大第９次調査（生体機能応用工学科）	57.5	37	2.5	3			15	縄文後期～近世	47
〃	津島岡大第10次調査（保健管理センター）	89	80		7			2	弥生前期～近世	65
〃	津島岡大第11次調査（総合情報処理センター）	5.5	3	0.5				2	縄文後期～近世	36
〃	津島岡大第12次調査（図書館）	72	41	1	20			10	縄文後期～近世	65
〃	津島岡大第13次調査（福利厚生施設　北）	12.5	12	0.5					縄文後期・古墳前期・中世	41
〃	津島岡大第14次調査（福利厚生施設　南）	13	12					1	弥生～古墳	46
〃	津島岡大第15次調査（サテライトベンチャービジネスラボラトリー）	68	14	10	20			24	縄文後期～中世、縄文後期・弥生早期遺物、アンペラ、堅果類	72
〃	津島岡大第16次調査（動物実験棟）	0.3	0.3						縄文後期・弥生～中世	44
〃	津島岡大第17次調査（環境理工学部校舎Ⅰ期）	85	62	11				12	縄文後期～近世	77
〃	津島岡大第18次調査（南福利ポンプ槽）	1	1						縄文後期～近世	53
〃	津島岡大第19次調査（コラボレーション・センター）	34	24	1	4		2	3	縄文後期～近世	64
〃	津島岡大第20次調査（環境理工学部ポンプ槽）	1	1						縄文後期～近世	53
〃	津島岡大第21次調査（工学部エレベーター）	7	5	2					縄文中期～近世	64
〃	津島岡大第22次調査（環境理工学部校舎Ⅱ期）	38	27	4	3		1	3	縄文後期～近世、古代堰部材、曲げ物	77
〃	津島岡大第23次調査（総合研究棟）	95.5	25	0.5	60	2		8	縄文後期～近世、杭（縄文）、石棒	80
〃	津島岡大第24次調査（総合研究棟渡り廊下）	2.1	1	0.1	1				縄文後期～近世、杭（縄文）	80
〃	津島岡大第25次調査（農学部散水施設）	0.3	0.1		0.2				中・近世	61
〃	津島岡大第26次調査（事務局本部棟）	34	18		5		1	10	縄文後期～近世	76
〃	津島岡大第27次調査（創立五十周年記念館）	15	14	1					縄文中期～近世	68
〃	津島岡大第28次調査（自然科学系総合研究棟）	17	15	2					縄文後期～近世	71
〃	津島岡大第29次調査（農学部共同溝）	2.1	2	0.1					縄文後期～近世	71
〃	津島岡大第30次調査（岡山大インキュベータ）	37.2	16	0.1	18			4.1	縄文後期～近世	93
〃	津島岡大第31次調査（大学生協東エリア店舗）	8	7	1				1	縄文後期～近世	95
〃	津島岡大第32次調査（教育学部剣道場）	62	14	3				45	縄文後期～近世	100
〃	津島岡大第33次調査（薬学部講義棟）	12.6	11	1.5			0.1		縄文中期～近世	本書
〃	津島岡大第34次調査（国際交流会館）	1	1						飛鳥～近世	本書
〃	福呂遺跡第１次調査（実験研究棟）	10	9					1	縄文早期・弥生中期・中世	55
〃	福呂遺跡第２次調査（実験研究棟スロープ）	2.1	2				0.1		中世～近世	55
試掘確認	鹿田（駐車場）	1	1						弥生～中世	5
〃	津島北（男子学生寮）	1	0.7	0.3					縄文後期～弥生前期	〃
〃	津島北（自然科学研究科棟）	1	1						縄文後期～弥生前期	6
〃	津島土生（外国人宿舎）	1	1						縄文～中世	8
〃	津島北（身障者用エレベーター）	0.3	0.3						中・近世	〃
〃	津島南（身障者用エレベーター）	0.7	0.7						縄文・中世	〃
〃	津島北（校舎）	1	1						縄文～近世	11
〃	津島南（動物・遺伝子実験施設）	0.7	0.7						縄文～弥生、中・近世	〃
〃	津島南（国際交流会館）	0.3	0.3						中世	〃
〃	津島北（合併処理槽）	0.2	0.2						中・近世	14
〃	津島南（学生合宿所）	0.4	0.2					0.2	中世	〃
〃	津島北（身障者用エレベーター）	0.3	0.3						縄文	〃
〃	津島北（図書館）	0.8	0.8						古墳～中世	〃
〃	津島南（学生合宿所ポンプ槽）	0.4	0.4						縄文～中世	18
〃	倉敷（資源生物科学研究所）	0.1	0.1						近世	〃
〃	鹿田（アイソトープ総合センター）	1	1						中世～近世	〃
〃	津島北（福利厚生施設）	0.5	0.5						弥生？～中世	〃
〃	津島南（動物実験施設）	0.1	0.1						縄文？～近世	33
〃	津島北（環境理工Ⅱ期）	0.1	0.1						－	53
〃	津島北（システム工学科棟）	0.1	0.1						－	53
〃	鹿田（地域医療総合支援センター）	1	1						弥生・近世	本書
〃	東山（附属小学校校舎）	1.1	0.1					1		87
立会	83年度	2	2						分銅形土製品	1
〃	84年度	1	1						－	2
〃	85年度	1	1						－	3
〃	86年度	0.5	0.5						－	6
〃	87年度	0.5	0.5						－	8
分布	89年度　三朝･本島	0.3	0.3						－	14
立会	91年度・92年度	0.3	0.3						－	21・25
〃	93年度～99年度	0.8	0.8						－	30・33・38・44・50・53・56
〃	00年度	3	3						－	61
〃	02年度	8.5	2.5	6					弥生早期土器、中世、礎石	71
〃	03年度	2	2						－	74
〃	04年度	1	1						－	81
〃	05年度	1.1	0.1					1	－	83
〃	06年度	1.1	0.1					1	－	87
〃	07年度	0.5	0.5						－	92
〃	08年度	1	1						－	95

種類	調査名・地区名	箱　数（1箱：約30リットル）							備　考（主要時期・特殊遺物）	文献
		総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
立会	09年度	0.2	0.2						−	102
〃	10年度	4.2	0.2				4		近現代、陸軍関連金属器、電線	本書
		3955.7	2685.5	207.2	397.5	25	26.2	620.3		

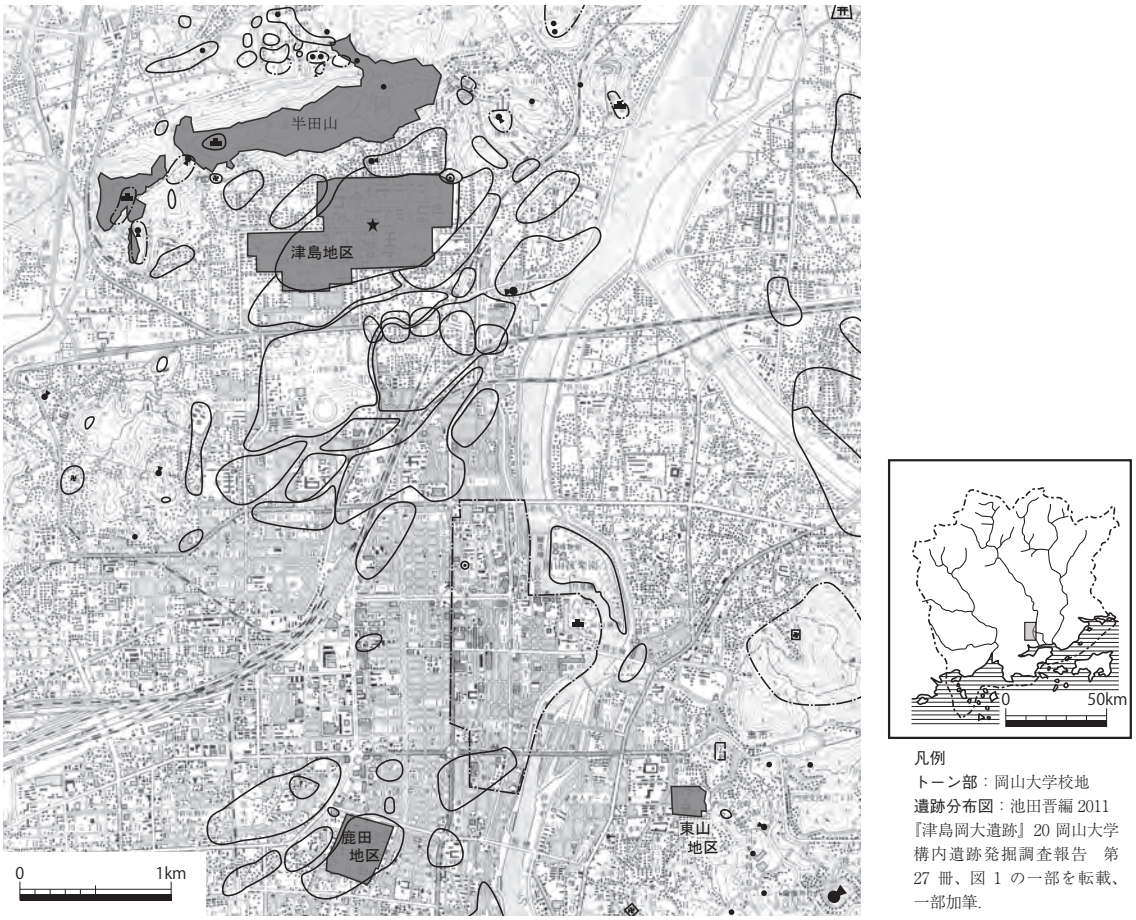
付表４　埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名　称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報１　1983年度	1985年２月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報２　1984年度	1985年３月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第１集	1985年５月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ（農学部構内BH13区他）岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第２冊	1986年３月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報３　1985年度	1987年３月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報４　1986年度	1987年10月

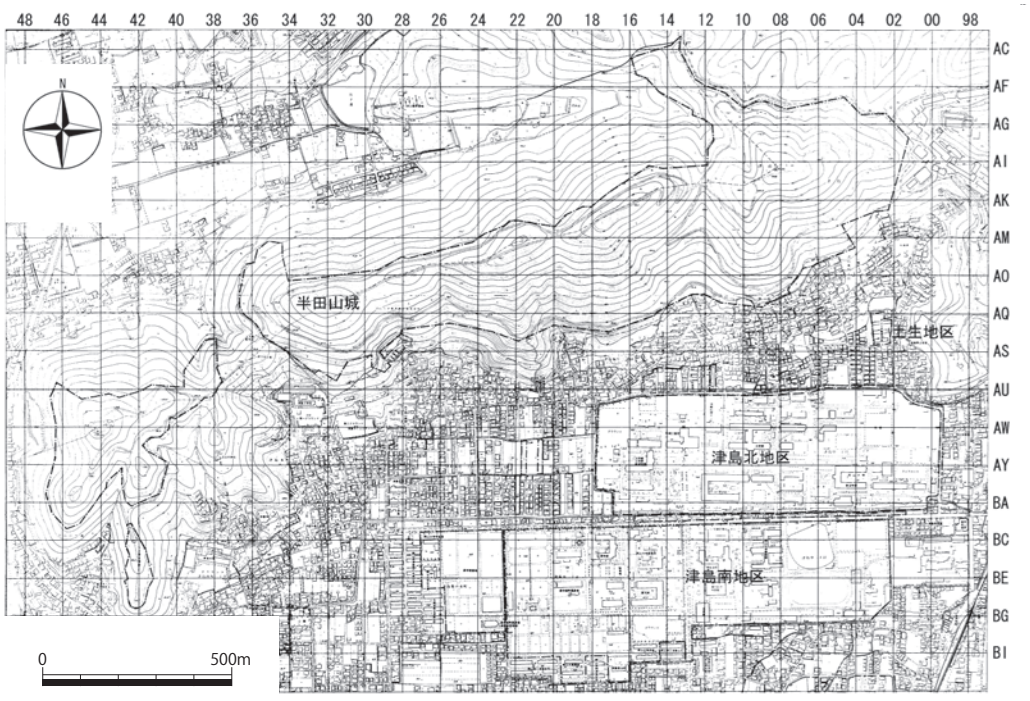
付表５　埋蔵文化財調査研究センター刊行物（2011年３月まで）

番号	名　称	発行年月日
7	鹿田遺跡Ⅰ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第３冊	1988年３月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報５　1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第１号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第４冊	1990年３月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報６　1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第２号	1989年８月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第３号	1990年２月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報７　1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第４号	1990年７月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第５号	1991年３月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第６号	1991年８月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報８　1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡３　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第５冊	1992年３月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第７号	1992年３月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報９　1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第８号	1992年８月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第９号	1993年３月
24	鹿田遺跡３　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第６冊	1993年３月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報 10　1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊	1994年３月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第11号	1994年３月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第12号	1994年10月
30	岡山人学構内遺跡調査研究年報 11　1993年度	1995年２月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第13号	1995年３月
32	津島岡大遺跡５　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第８冊	1995年３月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報 12　1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡６　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第９冊	1995年12月
36	津島岡大遺跡７　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第10冊	1996年２月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第15号	1996年３月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報 13　1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第11冊	1997年３月
41	津島岡大遺跡８　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第12冊	1997年３月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第17号	1997年３月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第18号	1997年９月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報 14　1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代　岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡９　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第13冊	1997年12月

番号	名　　称	発行年月日
47	**津島岡大遺跡10　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第14冊**	1998年３月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第19号	1998年３月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報 15　1997年度	1999年１月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第21号	1999年３月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第22号	1999年９月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報　16　1998年度	2000年１月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第23号	2000年３月
55	**福呂遺跡Ⅰ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第15冊**	2000年３月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報　17　1999年度	2000年８月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第24号	2000年９月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第25号	2001年３月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第26号	2001年８月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報　18　2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第27号	2002年３月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第28号	2002年９月
64	**津島岡大遺跡11　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第16冊**	2003年３月
65	**津島岡大遺跡12　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第17冊**	2003年３月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年３月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第29号	2003年３月
68	**津島岡大遺跡13　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第18冊**	2003年５月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第30号	2003年８月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第31号	2004年２月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年３月
72	**津島岡大遺跡14　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第19冊**	2004年３月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第32号	2004年９月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第33号	2005年３月
76	**津島岡大遺跡15　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第20冊**	2005年３月
77	**津島岡大遺跡16　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第21冊**	2005年３月
78	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第34号	2005年10月
79	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第35号	2006年３月
80	**津島岡大遺跡17　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第22冊**	2006年３月
81	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2004	2006年３月
82	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第36号	2006年10月
83	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2005	2007年３月
84	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第37号	2007年３月
85	**鹿田遺跡５　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第23冊**	2007年３月
86	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第38号	2007年10月
87	**津島岡大遺跡18　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第24冊**	2008年３月
88	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2006	2008年３月
89	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年　－自然と人間、地中に埋もれた命の対話－	2008年３月
90	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第39号	2008年３月
91	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第40号	2008年９月
92	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2007	2008年12月
93	**津島岡大遺跡19　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第25冊**	2009年３月
94	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第41号	2009年３月
95	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2008	2010年２月
96	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第42号	2010年２月
97	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第43号	2010年３月
98	**鹿田遺跡６　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第26冊**	2010年８月
99	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第44号	2010年12月
100	**津島岡大遺跡20　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第27冊**	2011年３月
101	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第45号	2011年３月
102	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2009	2011年３月

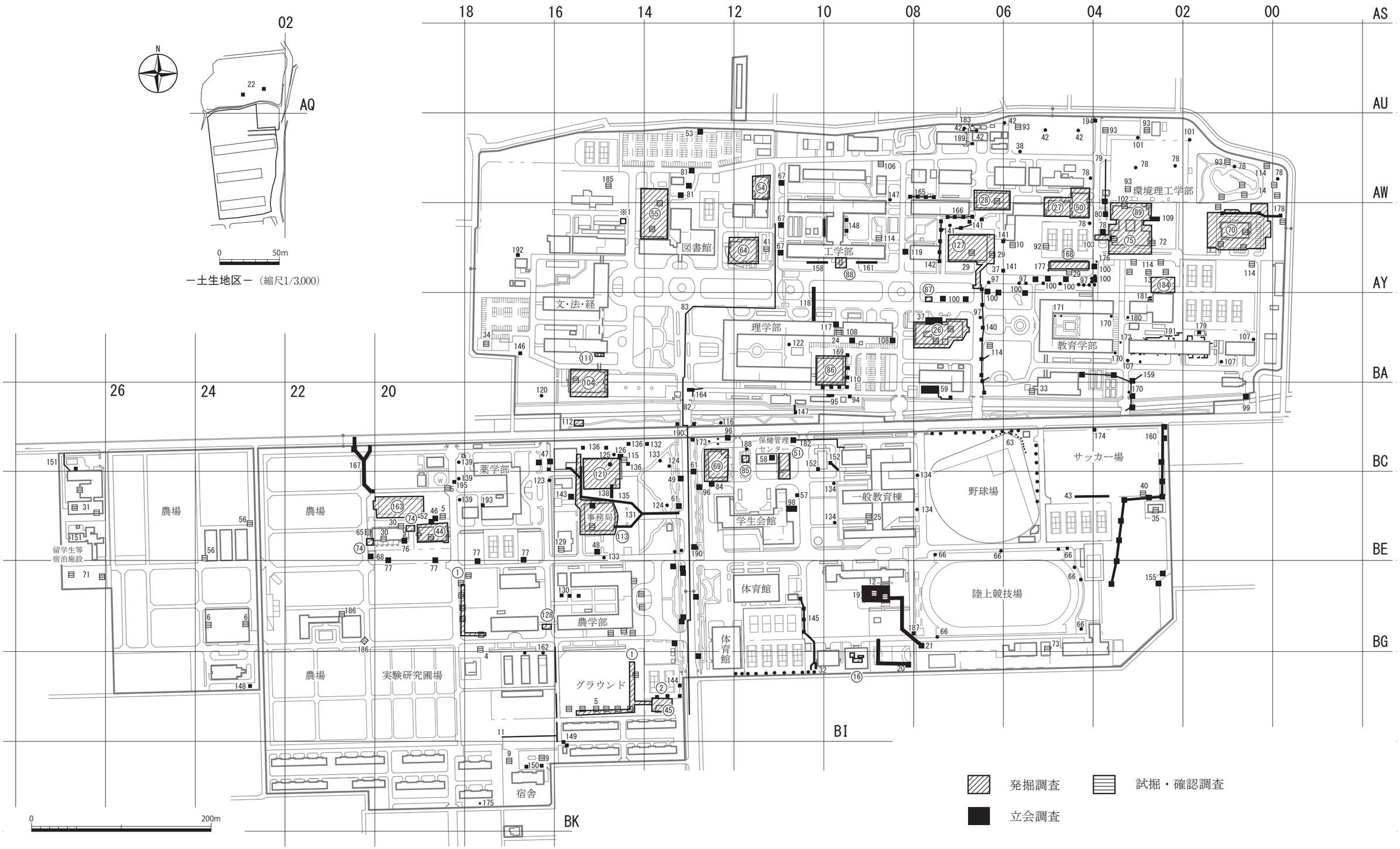


付図１　岡山大学の位置と周辺の遺跡分布（縮尺1/50,000・縮尺1/3,750,000）



付図２　津島地区全体図（縮尺1/20,000）

－土生地区－（縮尺1/3,000）

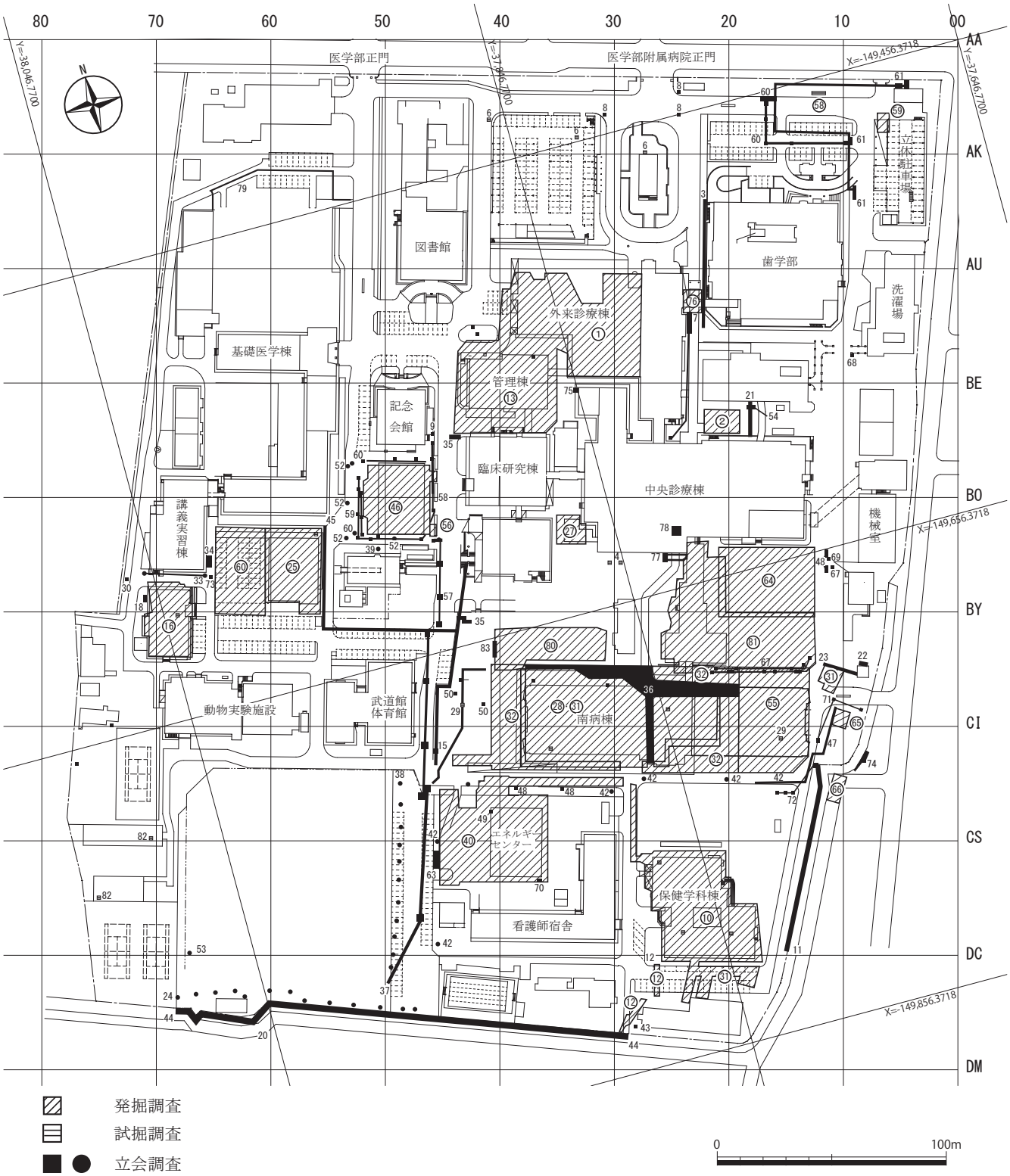


発掘調査　　試掘・確認調査

立会調査

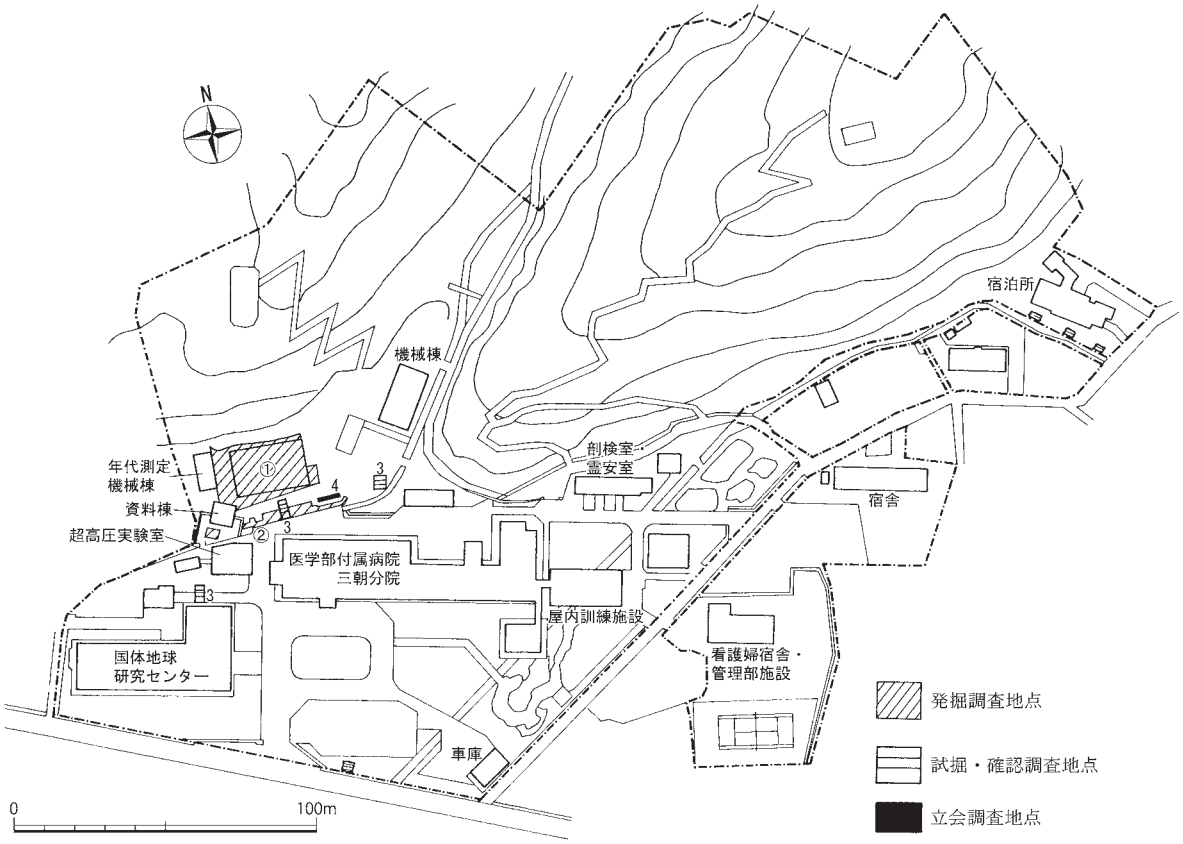
※番号は付表２の総合番号に対応する。

付図３　2009年度までの調査地点【１】－津島地区－（縮尺1/4,000）

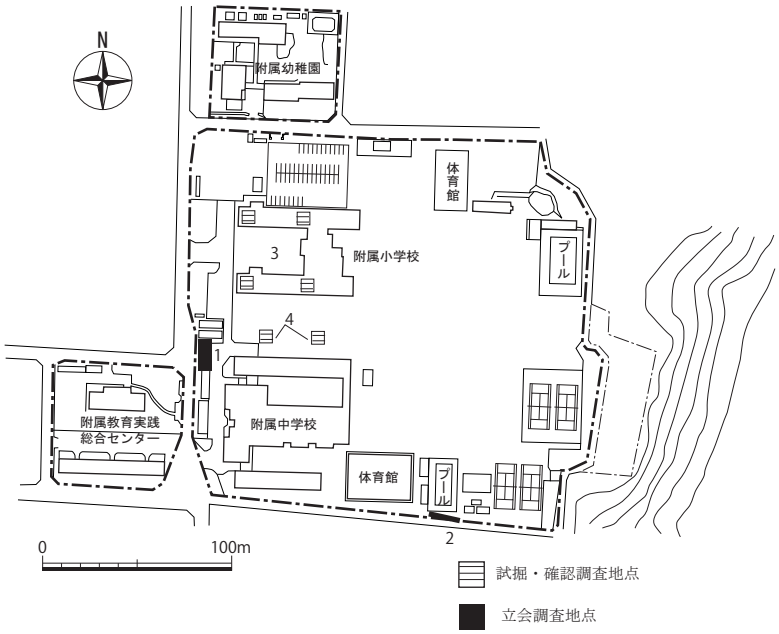


※番号は付表２の総合番号に対応する。

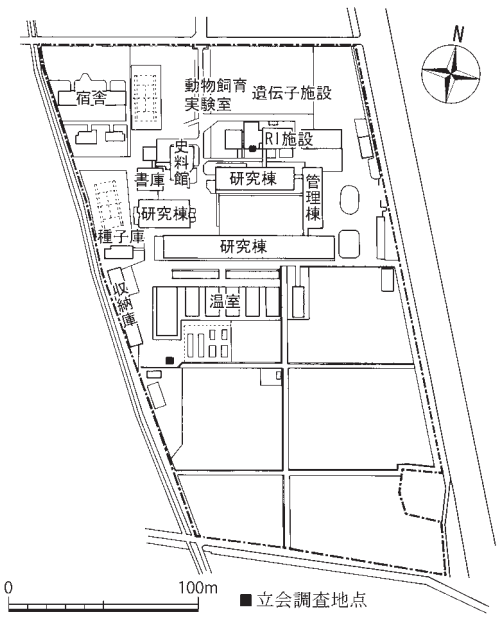
付図４　2009年度までの調査地点【２】－鹿田地区－（縮尺1/2,500）



付図５　2009年度までの調査地点【３】
－三朝地区－（縮尺1/2,500）



付図６　2009年度までの調査地点【４】
－東山地区－（縮尺1/4,000）



付図７　2009年度までの調査地点【５】
－倉敷地区－（縮尺1/4,000）

第Ⅱ部

岡山大学構内遺跡発掘調査報告

第１章　津島岡大遺跡第34次調査

―国際交流会館新営に伴う発掘調査―

第２章　鹿田遺跡第21次調査

―外来診療棟周辺他環境整備に伴う発掘調査―

第１章　津島岡大遺跡第34次調査

―国際交流会館新営に伴う発掘調査―

第１節　調査の経緯と経過

１．調査に至る経緯

２．調査体制

３．調査の経過

第２節　調査の記録

１．調査地点の位置

２．層序と地形

３．遺構と遺物

第３節　自然科学的分析

１．植物珪酸体分析

２．花粉分析

第４節　結語

例　言

1．本報告は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、国際交流会館新営に伴って実施した津島岡大遺跡第34次調査の発掘調査報告である。
同調査地点は、岡山県岡山市北区津島中三丁目１番１号に所在する。
津島岡大遺跡第34次調査地点は津島地区構内座標AU・AV13・14区に位置し、発掘調査期間は2010年７月30日～９月28日、調査面積は1590㎡を対象とした。
2．発掘調査は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われ、報告書作成に関しても運営委員会の指導を得た。委員・幹事諸氏に御礼申し上げる。
3．本報告作成にあたっては、石器石材の同定において鈴木茂之氏（岡山大学大学院自然科学研究科）にご教示頂いた。記して感謝申し上げる。また、株式会社古環境研究所に植物珪酸体分析および花粉分析を依頼し、その成果を本報告に収録した。
4．調査時の遺構実測・写真撮影は光本順が行った他、陶澤真梨子・奥原このみ・黒田祐介（以上、岡山大学大学院社会文化科学研究科修士課程）が補佐した。
5．報告書作成にあたっての主な担当は以下の通りである。
＜遺物＞土器・石器の整理・実測・浄写・観察表：山本悦世・光本・西本尚美
遺物写真：南健太郎
＜遺構＞浄写：西本
6．本報告の執筆分担は目次に示した。
7．編集は、新納泉（副センター長）・山本悦世（調査研究室長）の指導のもとに、光本が担当した。
8．本報告を持って正式なものとする。
9．本報告に掲載した調査の記録・出土遺物はすべて当センターで保管している。

凡　例

1．本報告で用いる高度値は海抜標高であり、方位は国土座標第Ⅴ座標系（世界測地系）の座標北である。
方位に関しては、本報告では調査時に使用した座標を用いる。
2．遺物番号は、遺構別に番号を付すが、土製品にはT、石器にはSをつけて通し番号とする。
3．遺物に関するデータは観察表にまとめ、実測図と組み合わせて掲載している。
観察表の表記基準は以下の通りである。
①　内外面の色調を併記する場合は、「内面/外面」の順序で表示する。
②　胎土は、微砂：砂粒径0.5mm未満、細砂：同0.5～１mm未満、粗砂：同１～２mm未満、細礫径２mm以上を基準とする。
③　法量の単位は「cm」である。複元値には*付きの数字で表し、残存値には（　）を付した。
4．遺構は、挿図などで以下のように記号で種類を表記する場合がある。
土坑：SK、溝：SD
5．土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnで表記した。
6．基本土層の本文表記は〈　〉を使用した。

第１節　調査の経緯と経過

１．調査に至る経緯

岡山大学津島キャンパスにおいて、国際交流会館を2010年度に新営する計画が立てられた。建設場所は津島北地区の北東部で、岡山大学附属図書館北側の駐車場箇所にあたる。

工事計画として示された掘削面積は1590㎡であった。建築工法については、ベタ基礎工法が提案された。これは、可能な限り地下の遺物包含層に掘削が及ばない形が模索された結果であった。ベタ基礎工法で施工するにあたり、当該地点の造成土と包含層の厚さ、および遺跡の状況をより正確に把握する必要があった。そのため、2010年４月23～28日の期間に当センターで試掘・確認調査を実施した。３箇所のトレンチによる試掘・確認調査の結果、調査予定地点における造成土厚の推定に必要なデータが得られた。また、試掘・確認調査地点では遺構・遺物が乏しかったものの、南に近接する第12次調査地点（図書館地点）の調査成果[1)]と関連する、弥生時代早期～前期の黒色土層に対応する土層が見つかった他、旧地形としては北～西部にかけて土地が低くなることが予想された。

この試掘・確認調査のデータに基づき、工事掘削の深さについては地表の基準標高から約2.3mとなり、掘削深度は中世層上面までで収められることとなった。こうした遺跡のデータおよび建築工法を受け、次のような方針で発掘調査を実施することとなった。当該地点については遺構・遺物が希薄と予想されることと、工事掘削深度が中世層上面でおさまることから、平面調査としては中世層上面までとした。あわせて中世以前の層位データを得るために、調査区南辺を中心に部分的な断面調査を実施することとした。また、調査をより効率的に実施するため、機械による表土掘削と並行して、それが終了した箇所については発掘調査を順次実施することとなった。機械掘削については、近代層上面と近世層上面でそれぞれ遺構の有無を確認しながら、工事に必要な掘削深度まで実施することとした。調査には、調査研究員２名が担当することとなった。

註

１）山本悦世・岩崎志保編2003『津島岡大遺跡』11　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

２．調査体制

【発掘調査：津島岡大遺跡第34次調査】（発掘調査年度：2010年度）

調査主体　岡山大学（学長　千葉喬三）

調査担当　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（センター長　北尾善信）

調 査 員　光本　順（助教、調査主任）、山本悦世（教授、調査研究員）

運営委員会

センター長	北尾　善信	環境管理センター長	沖　　陽子
副センター長	新納　　泉		（調査研究専門委員）
大学院社会文化科学研究科教授	久野　修義	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本　悦世
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚　愛二		（調査研究室長）
大学院自然科学研究科教授	柴田　次夫	事務局施設企画部長	山下　隆幸

【報告書刊行】（報告書刊行年度：2011年度）

運営委員会

センター長	北尾　善信	環境管理センター長	沖　　陽子
副センター長	新納　　泉		（調査研究専門委員）
大学院社会文化科学研究科教授	久野　修義	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本　悦世
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚　愛二		（調査研究室長）
大学院自然科学研究科教授	柴田　次夫	事務局施設企画部長	秋山　明寛

３．調査の経過

2010年７月30日に機械掘削を開始し、それと並行して発掘調査を実施した。機械掘削が最終的に完了したのは９月７日、発掘調査の完了は９月28日である。

機械掘削・発掘調査は調査区北半（以下、北区）の東端から始めた。北区において中世層上面で確認した遺構は鋤溝のみであった。断面調査として、調査区東壁および北壁において、弥生時代早～前期の「黒色土」層まで掘り下げを実施し、包含層堆積状況の検討を行った。また古代の条里遺構の推定ラインを予想して調査区北壁際の一部を掘り下げたが、同遺構は確認されなかった。

調査区南半（以下、南区）の機械掘削は８月19日から開始した。調査区東辺を機械掘削中、近世土坑が壁際に存在することが判明した。その後、南区内の平面調査で中世層上面を検出した際に、東西方向に並ぶ近世の土坑を確認した。調査区中央付近については、近世層上面で土坑２基を検出した。近世土坑は南区において10基を確認した。南区南壁沿い・東壁沿いにおいて土層断面の調査を実施し、前者では「黒色土」層～縄文時代層まで、後者では黒色土層まで掘り下げを行い、層序の記録を行った。南区南壁については、雨の影響により西半の一部

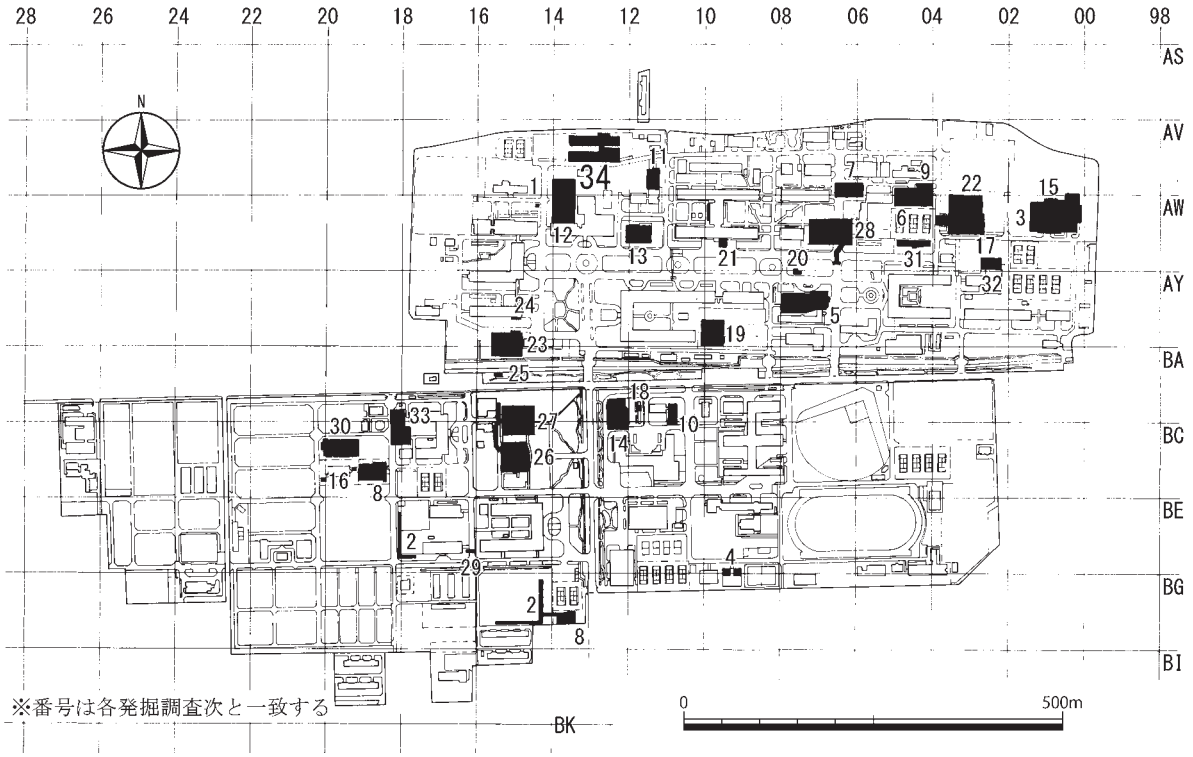


図28　津島岡大遺跡構内座標と各調査地点（縮尺1/10,000）

の壁が崩落したため、最終的な記録をとることができなかった一方で、弥生時代の溝数条を確認した。また、南区南壁・東壁の調査において、「黒色土」層上面の畦畔を確認した。

調査最終日の９月28日には、㈱古環境研究所に依頼して、南区南壁の土壌サンプル採取を実施した。

第２節　調査の記録

１．調査地点の位置

本調査地点は、岡山大学津島キャンパス北地区の北東部、構内座標ではAU・AV13・14区に位置する。

本調査地点にもっとも近接する既往の調査地点は、附属図書館の発掘調査（第12次調査）[1]である。同調査では縄文時代の遺構や弥生時代前期の水田が検出されるとともに、旧地形の様相も明らかにされた。すなわち、図書館地点の調査区は南半が高く、北半へ向かって標高を低くし、調査区外の南方に想定される微高地頂部と、北方に想定される低湿地部の中間にあたるものとして位置付けがなされた。この成果に基づけば、本調査地点においては、縄文時代以降の低位部の存在と、図書館地点と同様の縄文時代・弥生時代遺構の広がりが確認される可能性が予測された。また津島キャンパス内における条里遺構の研究[2]から、古代の南北条里が本調査地点内（13-20ラインから東へ５ｍ付近）を通ることも予想された。

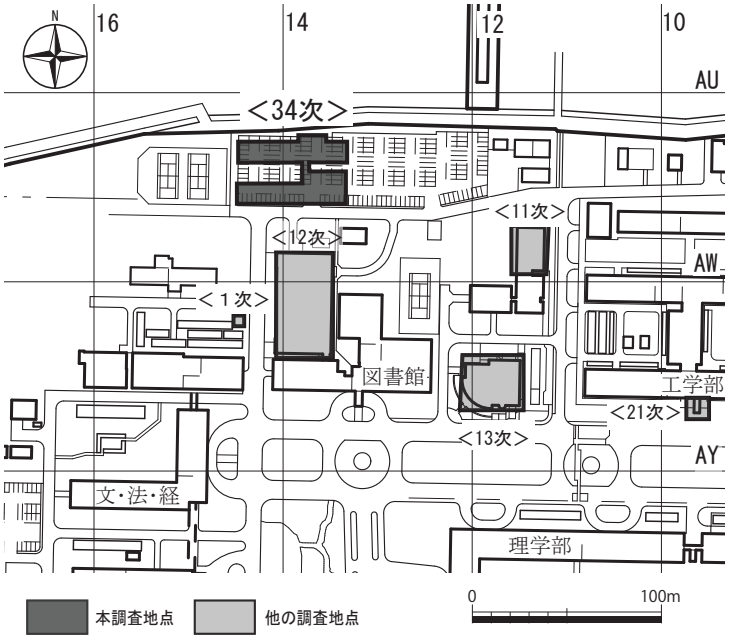


図29　調査地点の位置（縮尺1/4,000）

註

１）山本悦世・岩崎志保編2003『津島岡大遺跡』11　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

２）池田　晋2009「津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構」『津島岡大遺跡』19　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　pp.63-72

２．層序と地形

⑴　層序（図30～32）

調査地点内の区割りとして「北区」「南区」という呼称を用いる（図30）。層序については、北区北壁・東壁および南区東壁・南壁において実施した断面調査の成果に基づく。なお、柱状図Ｊ以西については断面調査のための掘削を行ったものの、その後の壁面の崩落により記録化はなし得なかった。

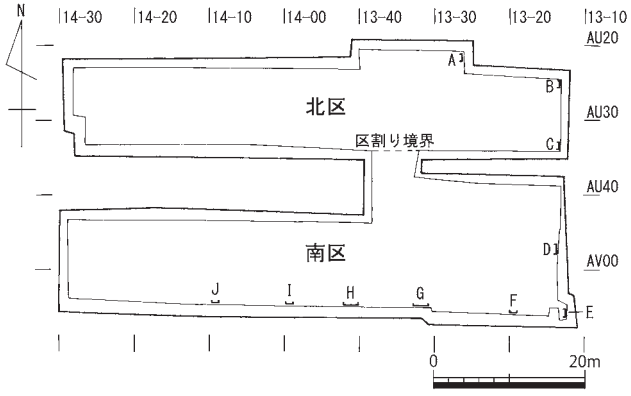
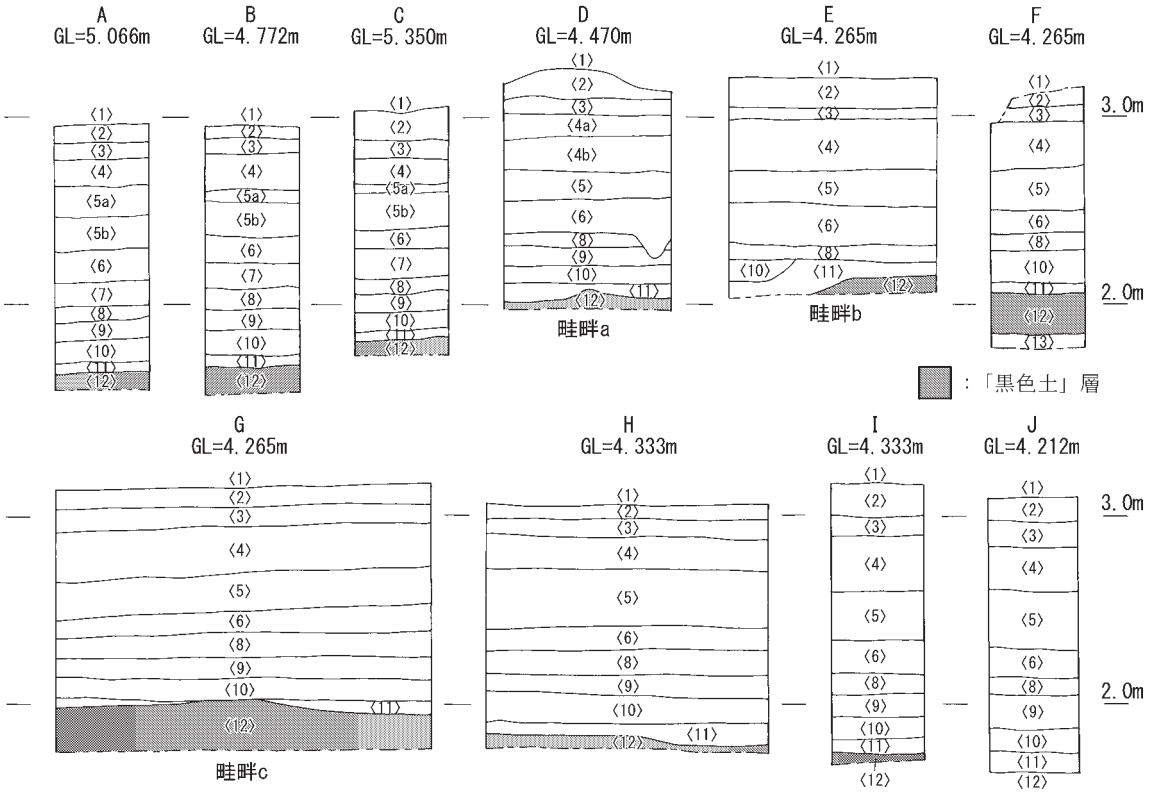


図30　調査区区割りと土層断面の位置（縮尺1/1,000）



層位	時期	北区		南区
		北端 柱状図A	東壁 柱状図B・C	東・南壁 柱状図D～J
〈1〉	近代	造成土	造成土	造成土
〈2〉	近代	青灰色粘質土（砂利多）	青灰色粘質土（砂利多）	青灰色粘質土（砂利多）
〈3〉	近代	淡緑灰色砂質土（砂利・Fe多）	淡緑灰色砂質土（砂利・Fe多）	暗灰色砂質土（砂利多）
〈4a〉	近世	淡灰黄色砂質土（Fe多）	淡灰黄色砂質土（Fe多）	淡黄灰色砂質土（砂利）
〈4b〉	近世			暗緑灰色砂質土（砂利）
〈5a〉	中世	灰色弱粘質土（Fe多、Mn）	灰色砂質土（Fe多）	淡緑灰色粘質土（Fe多）
〈5b〉	中世	灰色粘質土（Fe多、Mn）	灰色弱粘質土（Fe多）	
〈6〉	飛鳥	暗灰色粘質土（Fe多、Mn）	暗灰色粘質土（Fe多）	暗灰色粘質土（Fe多）
〈7〉	弥生～古墳	暗灰黄色粘質土（Fe多、Mn）	暗灰黄色粘質土（Fe・Mn多）	－
〈8〉	弥生後期	暗灰色粘質土（Mn多）	暗灰色粘質土（Mn多・Fe）	暗灰褐色粘質土（Fe多、Mn）
〈9〉	弥生中・後期	暗黄灰色粘質土（Mn多・Fe）	淡灰色粘質土（Fe・Mn）	淡灰色砂質土（Fe・Mn多）
〈10〉	弥生前・中期	暗黄灰色粘質土（Fe多、Mn）	淡灰黄色粘質土（Fe多）	淡黄灰色砂質土（Fe多、Mn）
〈11〉	弥生前期	暗灰色粘質土（Fe）	暗灰色粘質土（Fe多）	淡灰褐色砂質土（Fe多）
〈12〉	弥生早～前期	黒褐色粘質土（Fe）（黒色土）	黒褐色粘質土（Fe多）（黒色土）	黒褐色砂質土（Fe多）（黒色土）
〈13〉	縄文後期	－	－	黄灰色～淡茶褐色砂質土

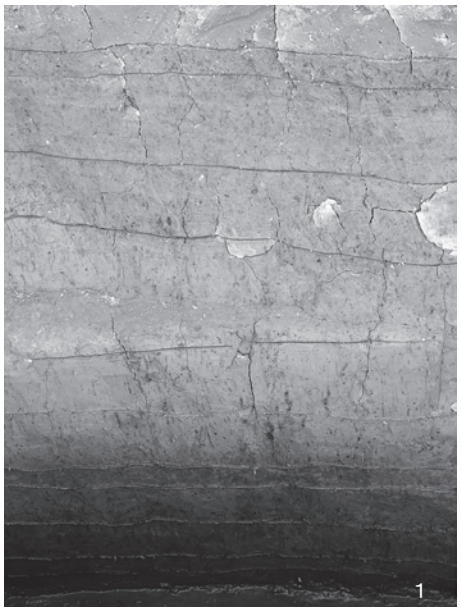
図31　調査区土層断面(1)（縮尺1/40）

〈１層〉　1907～1908年に実施された旧日本陸軍駐屯地造営に伴う造成土、および岡山大学設置以降の造成土を一括した層である。現地表面の標高は、調査区北辺で約5.0m、南辺で4.3m前後となり、北側が南に比べて高くなる。この比高は、〈２層〉以前の土層の状況とは逆となるため、造成によって意識的に形成されたものと考えられる。

〈２層〉　青灰色粘質土で、上面には畝溝がのこる。近代耕作土と考えられる。上面標高は北区で2.95～3.00m、南区で3.20～3.30mを測る。

〈３層〉　北区では淡緑灰色砂質土、南区では暗灰色砂質土を呈する。〈２層〉同様に砂利を多く含む。上面標高は北区で2.90m、南区で3.05～3.10mを測る。〈２層〉との土質の類似性から、近代耕作土と考えられる。

〈４層〉　北区では淡灰黄色砂質土となり鉄分を多く含む。一方、南区の一部では〈４ａ層〉・〈４ｂ層〉に分層した。〈４ａ層〉が淡黄灰色砂質土で、〈４ｂ層〉が暗緑灰色砂質土となる。上面標高は北区で2.72～2.86m、南区で2.80～



１．柱状図Ａ（西から）
２．柱状図Ｃ（西から）
３．柱状図Ｄ（西から）
４．柱状図Ｅ（西から）
５．柱状図Ｇ（北から）
６．柱状図Ｊ（北から）

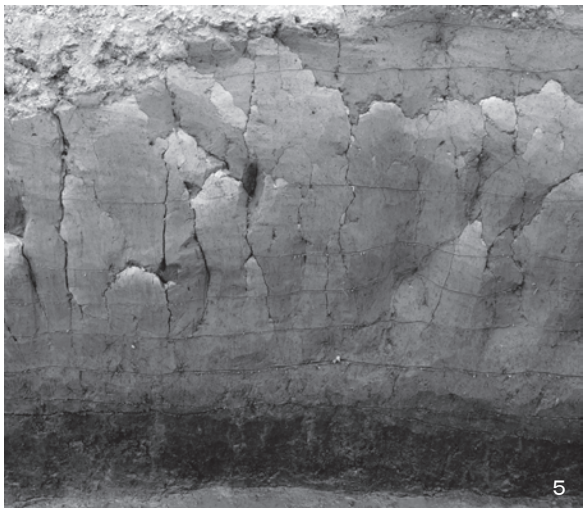


図32　調査区土層断面(2)

2.99mを測る。近世に属する土坑群の多くは、本層から掘り込まれている。本層は近世耕作土と考えられる。

〈５層〉　北区では〈５ａ層〉〈５ｂ層〉に区分した。〈５ａ層〉は灰色弱粘質土～砂質土で鉄分が多く、マンガンも含まれる。〈５ｂ層〉は灰色粘質土を基調とし、鉄分を多く含む。一方、ひとつの層として認識した南区〈５層〉は淡緑灰色粘質土で、鉄分を多く含む。上面標高は北区で2.50～2.60m、南区で2.60～2.77mを測る。南区においては西方が低くなる。時期については、13～14世紀初めの土師質土器椀小片が含まれるため、鎌倉時代の包含層と考えられる。津島岡大遺跡における中世後半の造成層に相当し、灰色を基調とする色調および土質から耕作土と考えられる。なお、本調査地点における通常の平面調査については、工事掘削がおよぶ本層上面までにとどめた。

〈６層〉　北区・南区ともに暗灰色粘質土となり、鉄分を多く含む。〈５層〉同様に色調および土質から耕作土と考えられる。北区の本層中から７世紀前半の須恵器が出土しているため、本層の時期は飛鳥時代に相当する。上面標高は、北区で2.28～2.45m、南区で2.28～2.60mを測る。

〈７層〉　北区において認識した暗灰黄色粘質土である。鉄分が多く含まれるほか、マンガンも含まれる。上面標高は2.15～2.40mを測り、北側に向かって低くなる。本層もまた耕作土としての性格が色調･土質から推定される。出土遺物がないため本層の時期は明確でないが、層序から弥生～古墳時代に相当するものと考えられる。

〈８層〉　北区において暗灰色粘質土、南区において暗灰褐色粘質土を呈する。色調が全体に黒みがかっており、鉄分・マンガンを多く含む特徴的な土層である。本層は、湿地状の土地において堆積した泥炭層の一種であるものと推定される。上面標高は、北区で1.99～2.15m、南区で2.13～2.39mを測る。時期については出土遺物がみられないが、層序から弥生時代後期頃に属するものと考えられる。

〈９層〉　北区において暗黄灰色～淡灰色粘質土、南区において淡灰色砂質土となり、北区が粘質、南区が砂質となる。こうした粘質/砂質の傾向は、本層以下で認められるもので、旧地形の影響によるものと考えられる。鉄分･マンガンを含む。上面標高は、北区で1.93～2.05m、南区で2.05～2.29mを測る。時期については出土遺物がみられず明確でないが、層序から弥生時代中～後期頃に属するものと考えられる。

〈10層〉　北区において暗黄灰色～淡灰黄色粘質土、南区において淡黄灰色砂質土となり、〈９層〉同様に北区が粘質、南区が砂質となる。鉄分が多く、マンガンも含まれる。上面標高は、北区で1.80～1.87m、南区で1.95～2.18mを測る。時期については出土遺物がみられず明確でないが、層序から弥生時代前～中期頃に属するものと考えられる。

〈11層〉　北区において暗灰色粘質土、南区において淡灰褐色砂質土をなす。鉄分を多く含む。上面標高は、北区で1.65～1.76m、南区で1.75～2.11mを測る。本層は「黒色土」の上層にあたるものである。南区の溝１～６は本層から掘り込まれたものである。時期については出土遺物がみられないため明確でないが、図書館地点との対比から弥生時代前期に属するものと考えられる。なお、南区南東隅（柱状図Ｅ）では、本層の整形による畦畔の可能性がある層の盛り上がりが認められた。しかし、それは北側への〈10層〉の落ちを伴う一方で、〈10層〉の南側への落ちが南壁では確認しえておらず確実なものとはいえない。

〈12層〉　北区において黒褐色粘質土、南区において黒褐色砂質土をなす。弥生時代早期～前期の「黒色土」層に該当する。上面標高は、北区で1.61～1.69m、南区で1.63～2.06mを測る。北区の上面標高は北端部（柱状図Ａ）が最も低く、南端部（柱状図Ｃ）にかけて徐々に標高を高くする。南区の本層上面標高に関しては、東壁において2.00～2.06mを測る。また南区南東隅に位置し、かつ畦畔がみつかった柱状図Ｅから、同じく畦畔が認められる柱状図Ｆまでの上面標高は1.97～2.06mとなる。一方、柱状図Ｇの畦畔西端から柱状図Ｊまでは1.63～1.98mとなり、その中では柱状図Ｇ付近が最も高く、柱状図Ｊ付近が最も標高を低くする。こうした標高データをみると、畦畔がみつかった南東部の柱状図Ｄ～Ｇ間で標高が高い微高地状の土地をなすのに対し、それより以北・以西において低位部を呈するものと考えられる。なお柱状図Ｊ以西の堆積状況については、調査壁面の崩落により記録を行い得ず判然としないものの、〈12層〉上面までの掘削を目指した結果、深度が深くなったことも崩落の一因

であったものと考えられる。したがって、柱状図Ｊ以西も低位部が続くものと考えられる。本層の土質は、こうした地形に対応し、微高地状部分において砂質が強く、低位部に至ると粘性が強くなる傾向がうかがえた。ただし両者を層位的に分層することは困難であった。本層上面において、本層を削り出すことで構築された畦畔を南区南東部で確認した（柱状図Ｄ・Ｅ・Ｇ）。本層での遺物の出土はみられなかった。本層の時期については「黒色土」の時期として従来から位置づけられてきた弥生時代早期～前期の範疇と捉えたい。

〈13層〉　南区南壁の柱状図Ｆ付近における掘削においてのみ確認した。黄灰色～淡茶褐色砂質土である。上面標高は1.75～1.82ｍを測る。遺物は出土していないが、津島岡大遺跡における縄文時代後期層と考えられる。

⑵　地形

調査区の断面調査の結果に基づくと、弥生時代早期～前期の〈12層〉段階の地形については、本調査地点の北東～南西にかけて「低位部」が広がり、南区南東部を中心に「微高地状」を呈することが判明した。すわなち、低位部が北東から南西にかけて湾曲するように広がる地形が推定される。このあり方は、縄文時代後期の〈13層〉段階の地形を反映しているものと推定されるが、〈13層〉を確認しえたのが柱状図Ｆ付近のみであるため判然とはしない。

旧地形に由来する土地の高低差は、近代の〈２層〉段階まで継続し、近現代の造成土である〈１層〉によって失われた。ただし、７世紀に属する〈６層〉段階までは高低差が20～30㎝を測るが、中世の〈５層〉以降になると10～20㎝程度に変化し、土地の起伏がいくぶん解消される傾向がみられる。

旧地形が生じた要因としては、大学敷地北縁部分にあたる本調査地点の立地、すなわち半田山山裾に近接するという立地上の特徴が挙げられる。本調査地点において検出した近世土坑群の東西列が、13-40ラインから13-50ラインにかけて屈折する状況（図33）も、弥生時代の微高地状の土地と低位部の位置関係を踏襲したものと考えられる。また本調査地点西方の大学キャンパスの敷地境界が、北東から南西へ屈折する状況も、弥生時代の旧地形と対応する。したがって、立地に起因した旧地形の影響は、現代にまで何らかの形で反映されているものと考えられる。

縄文時代～弥生時代の地形に関して図書館地点（第12次調査）と比較すると、同地点の縄文時代後期層の上面標高は北半で1.65ｍ、南半で2.1～2.2ｍであり、「黒色土」層では北半で2.0ｍ、南半で2.4ｍとなる。本調査地点南東部の〈13層〉〈12層〉の上面標高は、図書館地点北半における縄文時代後期層および「黒色土」層の標高と類似するものといえる。したがって、本調査地点南区南東部の微高地状の土地は、図書館地点北半から続く一連の土地であり、図書館地点南方の自然堤防よりも標高が低くなる緩斜面の北西部分にあたるものと考えられる。

３．遺構と遺物

本調査地点においては、〈５層〉上面（鎌倉時代）までの平面調査の過程で鋤溝と近世の土坑11基、また調査区壁面の調査の際に畦畔１面と弥生時代の溝６条を検出した。調査区内の包含層の残存状況について

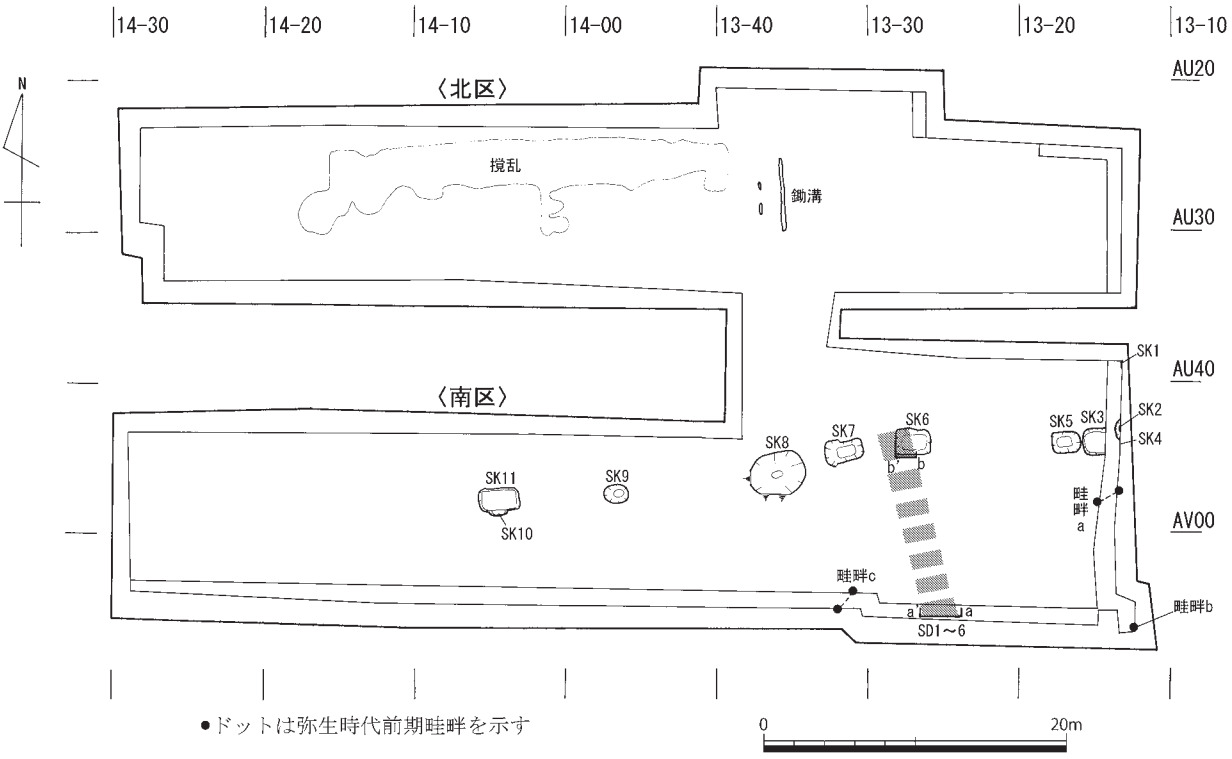
表７　検出遺構一覧

ａ．土坑

番号	時期	上面形	長辺/短辺（ｍ）	底面高（標高ｍ）	深さ（ｍ）	断面形
1	近世	－	残1.81/残0.32	2.35	0.47	擂鉢形
2	近世	多角形	2.15/－	1.78	1.07	擂鉢形
3	近世	隅丸長方形	残2.56/2.80	2.25	0.56	箱形
4	近世	－	－/1.85	2.48	0.44	擂鉢形
5	近世	隅丸長方形	1.95/1.38	2.00	0.58	箱形
6	近世	隅丸長方形	1.84/1.64	1.82	0.70	箱形
7	近世	隅丸長方形	2.53/1.70	2.03	0.80	箱形
8	近世	円形	3.72/3.00	1.75	1.04	擂鉢形
9	近世	円形	1.52/1.26	2.31	0.26	擂鉢形
10	近世	隅丸長方形	－/1.10	2.02	0.56	箱形
11	近世	隅丸長方形	2.58/1.55	1.75	0.83	箱形

ｂ．溝

番号	時期	長さ（ｍ）	幅（ｍ）	底面高（標高ｍ）	深さ（ｍ）	断面形	方向
1	弥生前期	12.9	N: 0.17、S: 0.49	N: 1.76、S: 1.99	N: 0.11、S: 0.08	皿形	S→N
2	弥生前期	12.9	N: 0.63、S: 0.43	N: 1.81、S: 2.02	N: 0.12、S: 0.06	皿形	S→N
3	弥生前期	12.9	N: 0.38、S: 0.41	N: 1.85、S: 2.05	N: 0.08、S: 0.03	皿形	S→N
4	弥生前期	12.9	S: 0.34	S: 1.96	S: 0.09	皿形	－
5	弥生前期	12.9	S: 0.34	S: 1.72	S: 0.28	逆凸形	－
6	弥生前期	12.9	S: 1.00	S: 1.75	S: 0.42	逆凸形	－



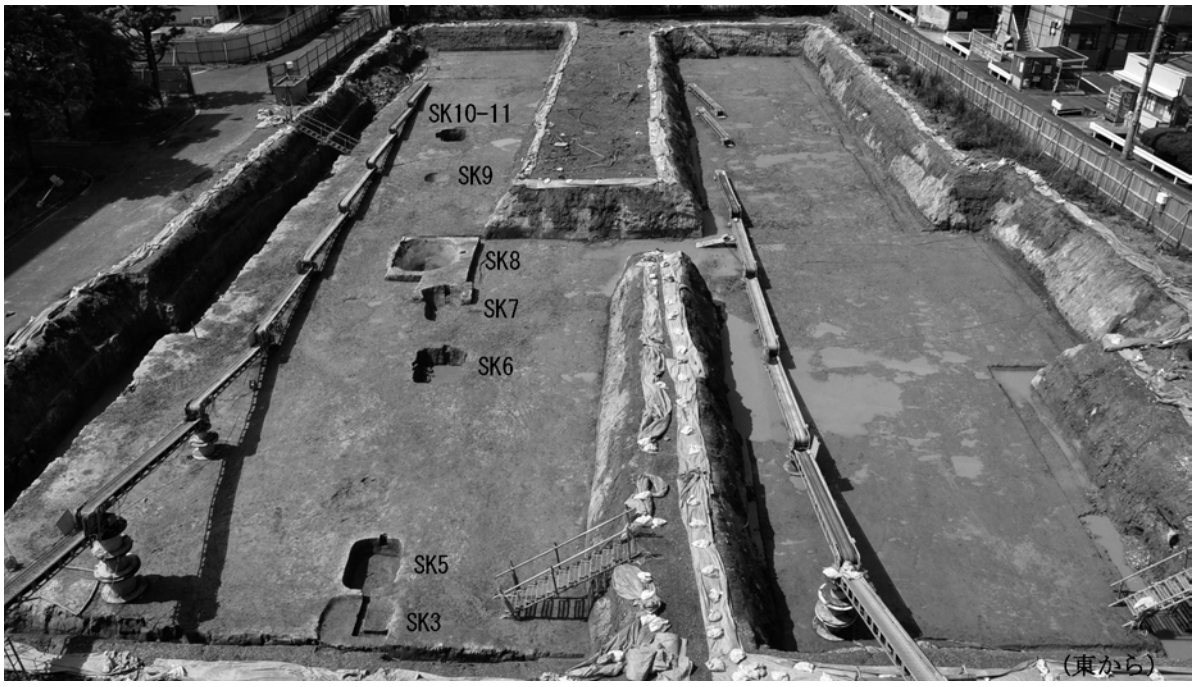


図33　検出遺構全体図（縮尺1/500）

は、北区西半の北辺において近現代の掘削によって近代以前の包含層が失われていたものの、それ以外は良好に遺存していた。以下では弥生時代および近世の遺構に関して説明を行いたい。なお鋤溝については、北区中央付近の〈５層〉上面おいて、一部明確なものを記録した。鋤溝は南北方向にのび、最長のもので最大長4.78m、最大幅0.22m、深さ６㎝を測る。浅いものでは、最大幅0.13～0.18m、深さ２㎝となる。鋤溝埋土は淡灰白色砂質土である。土質からみれば鋤溝は〈５層〉に伴うものと考えられる。条里遺構の研究から予想された、古代の南北

条里（13-20ラインから東へ５ｍ付近）については、北区・南区の断面調査で検討したが、該当する位置に溝や畦畔等の遺構は見出せなかった。

⑴　弥生時代の遺構・遺物

ａ．畦畔（図30～33）

南区南東の壁面において、「黒色土」である〈12層〉上面につくられた畦畔を三箇所確認した（畦畔ａ～ｃ）。これらは、調査区壁面における断面形状から畦畔として蓋然性が高いと判断したものである。なおこれら以外の、周辺における細かな凹凸や傾斜もまた、本来は畦畔をなす可能性は存在する。

畦畔ａ・ｃは、北東から南西にのびる。畦畔ｂは南区南東コーナー（西壁・南壁）においてみつかったもので、それと対応する畦畔が周辺に認められなかったことから、これについても北東から南西方向にのびるものと考えられる。こうした畦畔の方向は、〈12層〉の微高地状緩斜面の平面形に沿ったものと考えられる。なお、これらの畦畔の断面図（図30：柱状図Ｄ・Ｅ・Ｇ）は畦畔を斜めに切った状態を示す。

畦畔は、いずれも〈12層〉を削り出す形でつくられている。畦畔周囲の〈12層〉の上面標高は畦畔ａ付近で2.03m、ｂで2.07m、ｃで1.94mとなる。畦畔頂部の標高は、畦畔ａで2.08m、ｂで2.16m、ｃで2.02mである。畦畔の高さはａで５㎝、ｂで９㎝、ｃで８㎝を測る。推定しうる畦畔の幅は、畦畔ａが0.29m、畦畔ｃで0.48mとなる。〈12層〉および上層の〈11層〉から遺物が出土していないため、これら畦畔の時期については特定しえないが、津島岡大遺跡における「黒色土」上面畦畔の時期である弥生時代前期中頃～後半が推定される。

ｂ．溝（図33・34、表７）

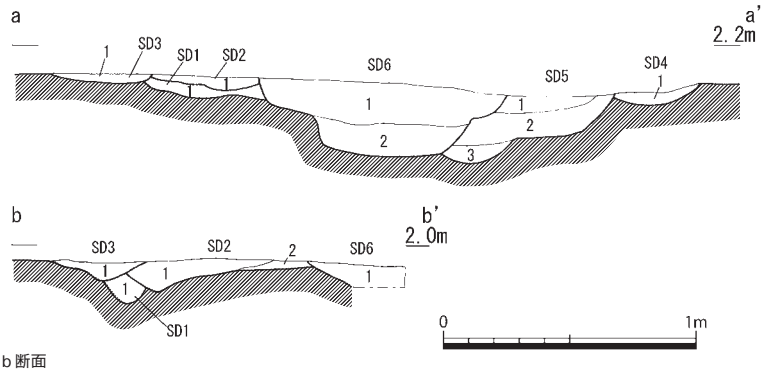
溝１～６　調査区南壁および近世の土坑６の壁面において、６条の溝を確認した。２つの箇所でみつかった溝群は、その位置関係と掘り込み面、断面形状、切り合い関係から一連のものと考えられる。土坑６底面では平面的にも溝が認められたが、溝の方向については南東－北西方向であり、調査区南壁の溝群へとのびることを示唆した。

調査区南壁（ａ断面）では溝１～６、土坑６壁面（ｂ断面）では溝１～３・６が認められる。溝群の掘り込み面は、上面が溝２・３による削平のため不明である溝１を除けば、いずれも〈11層〉である。溝群の上面標高は、南のａ断面で2.00～2.09m、北のｂ断面で1.91～1.94mとなる。〈11層〉段階の地形については、南区南東部が微高地状、その周辺が低位部となる〈12層〉でみられた状況を踏襲している。溝群は、微高地状の土地を縦断しながら低位部に向かってのびる。溝１～３では溝の底面標高を断面ａ・ｂで比較しうる（表７）。いずれもａ断面では底面標高が高く深さが浅いのに対し、ｂ断面では底面標高が低く、かつ深くなる。すなわち溝１～３に関しては、南の微高地状緩斜面から、北の低位部方向へと傾斜する形となる。

溝群の切り合い関係としては、次の３パターンが認められる。すなわち溝１→溝２→溝３、溝１→溝２→溝６、溝４→溝５→溝６である。こうした切り合い関係からは、溝６および溝３が相対的に新しく、溝１が古いことがわかる。溝３に関しては溝１・２の後に作られたことは明らかであるが、溝４～６との前後関係は不明である。また溝４に関しても、溝５・６の前に構築された一方で、溝１～３との前後関係は不明である。

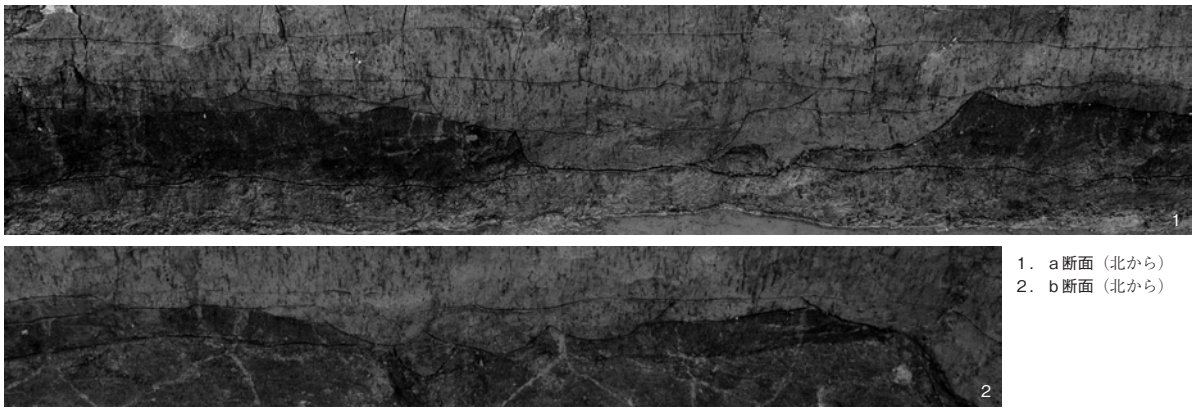
断面形状については、溝１～４が浅い皿形となるのに対し、溝５・６は深い逆凸形を呈する。埋土に関しては、いずれの溝も、粗砂ないしは微砂が多く含まれる。ａ断面においては、溝１～４が淡・暗灰褐色砂質土となるのに対し、溝５・６は灰色を強めた色調であり、かつ黄灰色砂ブロックが含まれる。またｂ断面では、溝１～３が淡・暗灰色砂質土で灰色砂ブロックや〈12層〉（黒色土）に由来する黒色砂ブロックを含むのに対し、溝６が暗黄灰色砂質土で暗灰色粘土ブロックを含む。

このように、切り合い関係や断面形状、埋土の状況をみると、溝１～４と溝５・６とで差異が認められる。それを勘案すれば、構築順序については溝１→溝２→溝３の後に、溝５→溝６が位置づけられる。溝４については、前者の構築のまとまりの中で捉えられる。溝群から遺物は出土していないが、掘り込み面から考えれば時期とし



ａ断面
溝１
１．暗灰褐色砂質土（Mn多、粗砂）
溝２
１．淡灰褐色砂質土（Fe・Mn多、粗砂多）
溝３
１．淡灰褐色砂質土（Fe多、粗砂）
溝４
１．淡灰褐色砂質土（Fe多、粗砂多）
溝５
１．灰色砂質土（微砂・黄灰色砂ブロック）
２．灰色砂質土（微砂多、黄灰色砂ブロック多）
３．暗灰色粗砂
溝６
１．暗灰色砂質土（Fe・黄灰色砂ブロック多、微砂）
２．暗灰色砂質土（Fe・黄灰色砂ブロック・微砂多）

ｂ断面
溝１
１．暗灰色砂（黒色砂ブロック・粗砂多）
溝２
１．暗灰色砂質土（黒色砂ブロック・灰色砂ブロック）
２．淡灰色砂質土（黒色砂ブロック・灰色砂ブロック）
溝３
１．淡灰色砂質土（Fe・Mn・灰色砂ブロック多）
溝６
１．暗黄灰色砂質土（Fe・暗灰色粘土ブロック・粗砂多）



１．ａ断面（北から）
２．ｂ断面（北から）

図34　溝１～６（縮尺1/30）

ては弥生時代前期後半～末の範疇が想定される。本溝群は図書館（第12次調査）地点ではみつかっていないため、同地点北東から第13次調査（福利厚生施設北棟）地点にかけてのびるか、途切れるものと推定される。

(2)　近世の遺構・遺物

ａ．土坑（図35～39）

南区において、近世に属する土坑を11基検出した。検出面は土坑７・８が〈４層〉であるが、土坑１～３・５・６・９～11は〈５層〉上面である。調査区東壁を観察すると、土坑の掘り込み面は土坑１～３が〈４層〉、土坑４が〈３層〉である。したがって土坑の本来の掘り込み面は〈４層〉ないしは〈３層〉であるものと考えられる。なお土坑４は調査区東壁のみで確認したものである。それは断面形から溝である可能性もあるが、平面調査において溝に該当する埋土が見つからなかった点と、土坑２・３上方に切り合う形で構築されることから、土坑の範疇で捉えた（図36）。また、土坑３に関しては、〈５層〉上面で平面を検出した他、隣接する調査区東壁においても類似する埋土が認められた。平面形と底面標高を検討した結果、後者についても土坑３に属するものと判断した（図36・38）。近接して東西に並ぶ土坑３・５に関しては、平面的には何れも〈５層〉で検出したが、土坑３本来の掘り込み面である〈４層〉上面では両者は切り合い関係を有していたものと考えられる。

土坑は南北・東西の列状をなして分布する。南北列は土坑１・２からなる。土坑２に関してはその位置が西側の土坑３よりも北側に寄るため、南北列のひとつを構成するものと考えられる。調査区東壁際において検出した土坑１・２の平面的な中心は、東壁内にあるものと考えられる。検出状況から、土坑１の中心の方が土坑２より

図35　土坑１～８全景

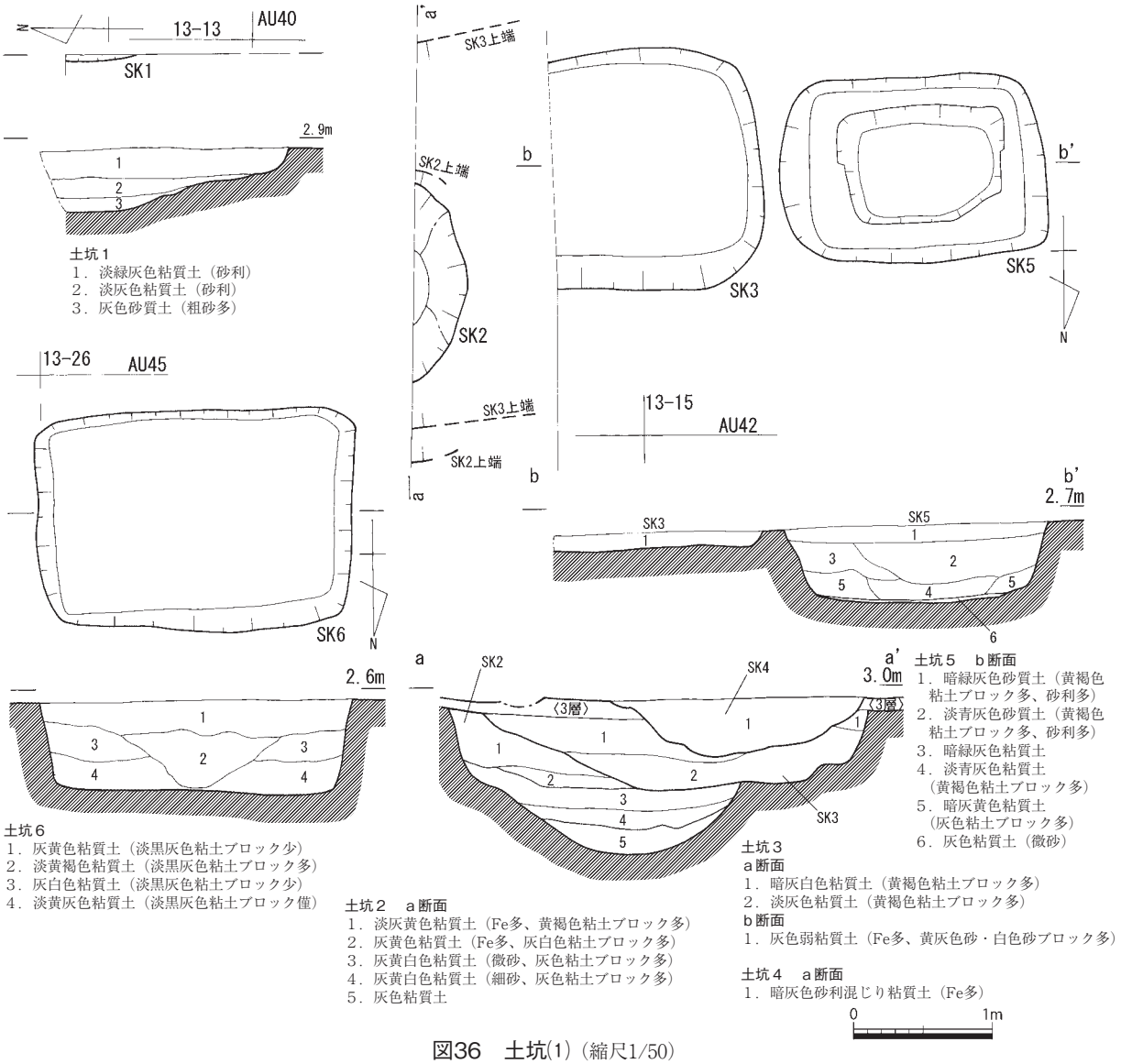
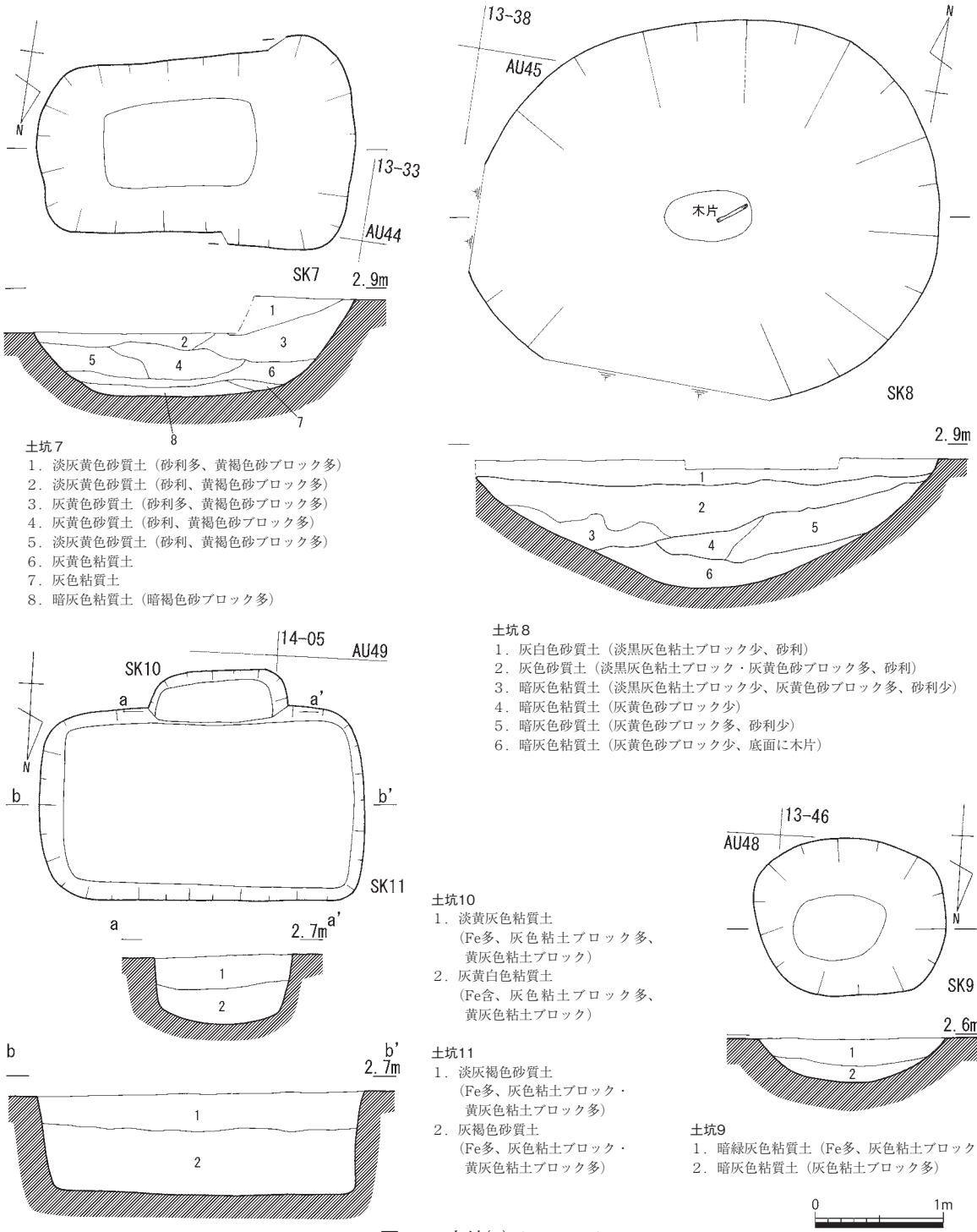


図36　土坑(1)（縮尺1/50）



土坑７
1．淡灰黄色砂質土（砂利多、黄褐色砂ブロック多）
2．淡灰黄色砂質土（砂利、黄褐色砂ブロック多）
3．灰黄色砂質土（砂利多、黄褐色砂ブロック多）
4．灰黄色砂質土（砂利、黄褐色砂ブロック多）
5．淡灰黄色砂質土（砂利、黄褐色砂ブロック多）
6．灰黄色粘質土
7．灰色粘質土
8．暗灰色粘質土（暗褐色砂ブロック多）

土坑８
1．灰白色砂質土（淡黒灰色粘土ブロック少、砂利）
2．灰色砂質土（淡黒灰色粘土ブロック・灰黄色砂ブロック多、砂利）
3．暗灰色粘質土（淡黒灰色粘土ブロック少、灰黄色砂ブロック多、砂利少）
4．暗灰色粘質土（灰黄色砂ブロック少）
5．暗灰色砂質土（灰黄色砂ブロック多、砂利少）
6．暗灰色粘質土（灰黄色砂ブロック少、底面に木片）

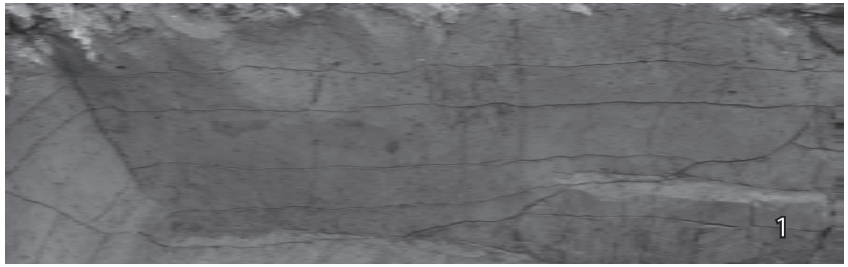
土坑10
1．淡黄灰色粘質土
（Fe多、灰色粘土ブロック多、黄灰色粘土ブロック）
2．灰黄白色粘質土
（Fe含、灰色粘土ブロック多、黄灰色粘土ブロック）

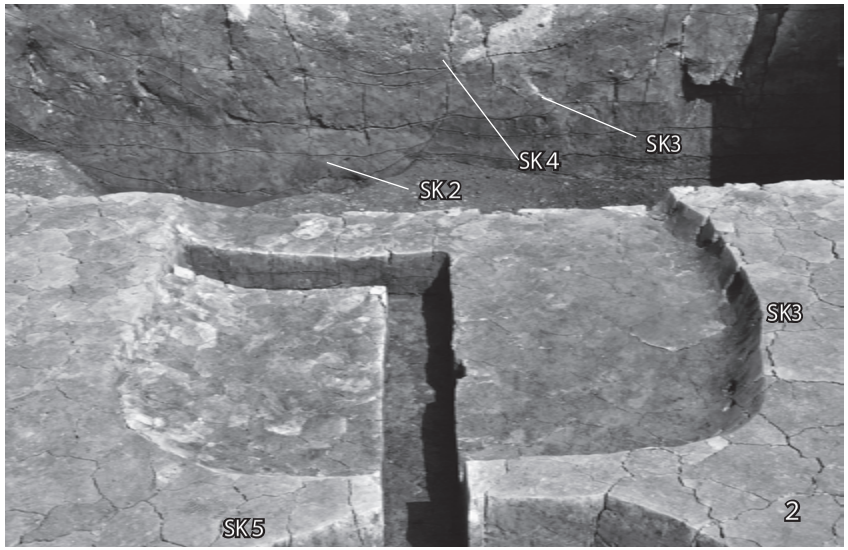
土坑11
1．淡灰褐色砂質土
（Fe多、灰色粘土ブロック・黄灰色粘土ブロック多）
2．灰褐色砂質土
（Fe多、灰色粘土ブロック・黄灰色粘土ブロック多）

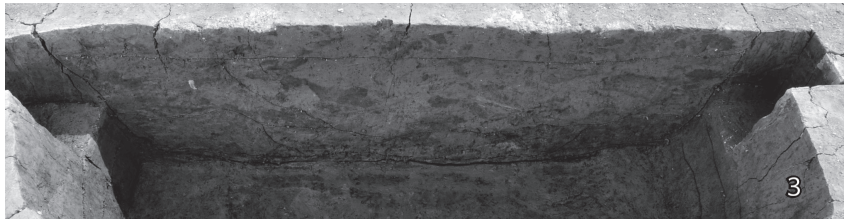
土坑9
1．暗緑灰色粘質土（Fe多、灰色粘土ブロック多）
2．暗灰色粘質土（灰色粘土ブロック多）

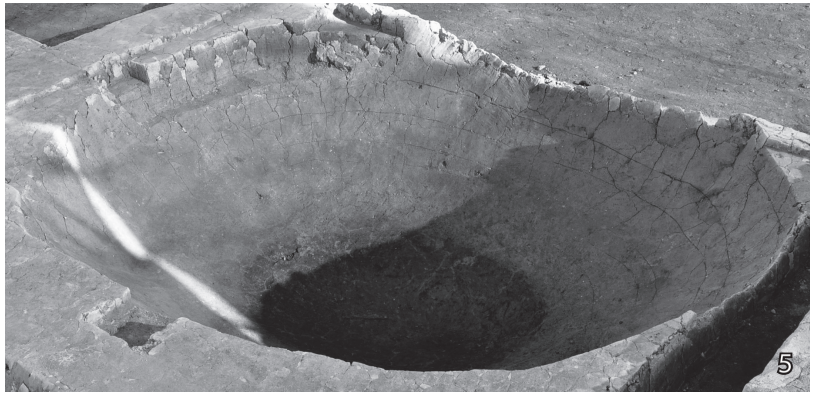
図37　土坑(2)（縮尺1/50）

も東壁寄りに位置する。したがって、南北列の方向はやや東に振った形になるものと推定される。土坑２上面の復元規模が2.5m、土坑１のそれが2.7m前後と推定すると、南北列は13-10ラインの西側に構築された土坑群と考えられる。北区ではこの南北列は検出されていない。その要因については、北区においてもともと構築されていないか、あるいは列の軸が東に振れたため調査区外に土坑が位置するためと考えられる。土坑２の南方にも南北列は認められないが、これに関しては列が存在していなかったものと考えられる。









１．SK１断面（西から）
２．SK３平面およびSK２～４断面
３．SK５断面（北から）
４．SK６断面（北から）
５．SK８断面（南から）
６．SK８平面（北西から）

図38　土坑(3)

表８　土坑分類表　＊番号は土坑番号を示す

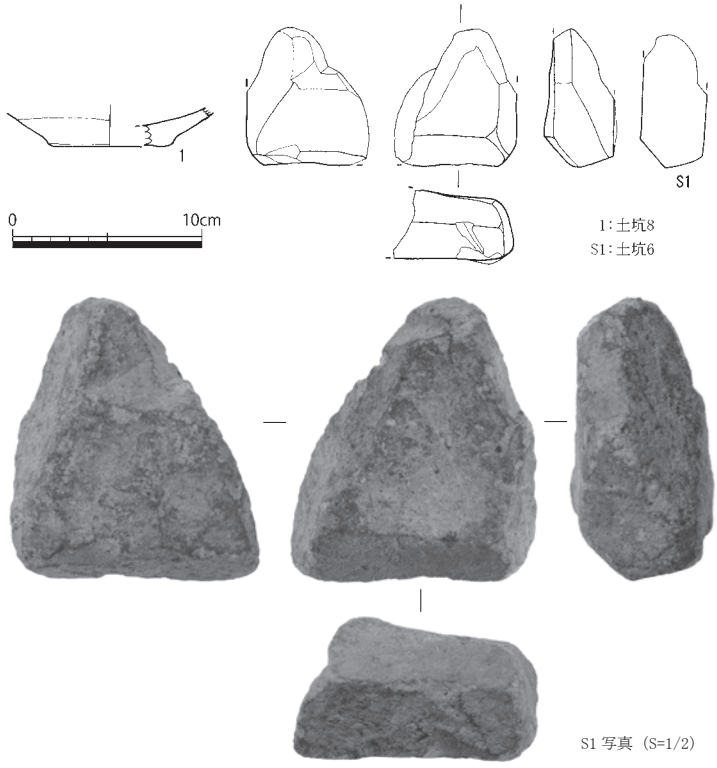
平面形 / 断面形	隅丸長方形	円形	多角形	不明
箱形	３・５・６・７・10・11	－	－	－
擂鉢形	－	８・９	２	１・４

一方、東西列は土坑３～11で構成されるが、その列は次の列ａ～ｃのように細分しうる。列ａは土坑３～６までの東西方向の列であり、AU44ラインを中心軸とする。土坑３は、南北列と推定した土坑２を壊す形で構築されたものであり、東西・南北列の交点にあたるものと考えられる。列ｂは土坑７・８からなり、列ａから南西方向に屈折する列である。列ｃは土坑９～11からなるほぼ東西方向を指向する列で、AU48ラインを中心軸とする。このように列ｂにおいて東西列が屈折する様相は、弥生時代早期～前期まで遡る旧地形、すなわち調査区南東隅が微高地状で、その周辺が低位部からなる土地と対応する。列ａ～ｂにおける列の屈折については、旧地形にみられた微高地状の土地周縁部に当たる。旧地形の影響は、土坑群が構築された〈４層〉や〈３層〉段階まで土地の高低差を伴って継続するものである。土坑の配列にも、こうした旧地形の影響が及んだものと推定される。なお、土坑の東西列に対応する東西溝や畦畔等の遺構は検出されていない。

こうした土坑の配列に関しては、中世～近代の条里[1)]との関連性が注意される。南北列については、13-05ラインに想定されている中世～近代の南北条里との関連性が考えられる。これは、現在の岡山大学津島キャンパスの中心を通る「南北道路」中央に位置するものである。一方で、東西列に関しては該当する条里は存在しない。

土坑の平面形･断面形については、表９のようにまとめることができる。平面形を隅丸長方形、円形、多角形、不明、断面形を箱形と擂鉢形に区分した。結果、組み合わせとしては「隅丸長方形･箱形」「円形･擂鉢形」「多角形･擂鉢形」「不明・擂鉢形」となる。このうち、「隅丸長方形・箱形」がもっとも多く、６基からなるが、いずれも東西列に属する。東西列には他にも「円形・擂鉢形」となる土坑７・８が認められる。南北列の土坑１・２については断面形が擂鉢形をなす。土坑２の平面形については、検出した標高2.1ｍのレベルにおいては、一辺0.4～0.5ｍの４つの辺が認められた。少なくとも土坑２下半に関しては、平面が８～10角形の掘り形を呈するものと推定される。土坑の規模は、検出面によって異なるが、〈４層〉で検出した土坑８は長さ3.72m、幅3.00mを測り、本土坑群中でもっとも大型となる。いずれの土坑からも、設置された桶等の容器はみつかっていない。

埋土については、全体としては灰黄色、緑灰色、灰色を主体とし、微砂・粗砂・砂利の他、各種の粘質・砂質ブロックを多く含む。特徴的な埋土として、「黒色土」である〈12層〉に由来する淡黒灰色粘土ブロックが土坑６・



番号	種類・器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	形態・手法　他	胎土	色調
1	唐津焼・椀	－	6.6	－	内外：乳白色施釉、1/4残	微砂	橙淡褐

番号	種類・器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	形態・手法　他	石材	色調
S1	石造物	5.9	7.2	3.9	屋根のコーナー部分。切妻形か。前面は２面加工。側面は３面加工。		乳黄

図39　土坑出土遺物（縮尺1/4）

８において認められた。〈12層〉の深さまでの掘削を確認した土坑は、土坑２・６・８であり、土坑５に関しても、〈12層〉近くまで土坑の掘削が及んだ可能性がある。土坑６・８に関して〈12層〉のブロックが含まれることは、土坑掘削時の埋土と土坑を埋める際の埋土とが同じであった可能性を示唆する。

いずれの土坑からも、遺物がほとんど出土しておらず、土坑の時期を示すような遺物は少ない。土坑８からは唐津焼と考えられる椀が１点（図39-1）出土した。また、土坑６からは石造物の一部である可能性がある流紋岩製石製品１点（図39-S1）の他、近世瓦小片１点が出土した。土坑群の時期については、検出面と出土遺物から近世の範疇で捉えられる。

土坑群の機能については判然としない。断面形が擂鉢形を呈するものに関しては水溜の機能、「隅丸長方形・箱形」については墓としての機能も果たしうる形状である。

註

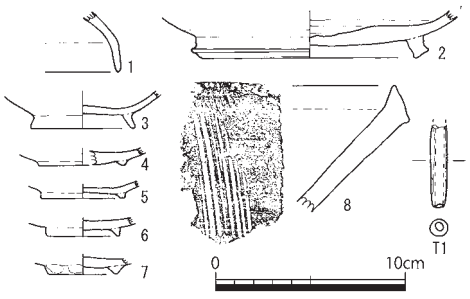
１）池田　晋2009「津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構」『津島岡大遺跡』19　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　pp.63-72

⑶　包含層出土遺物・遊離遺物（図40）

調査区全体でコンテナ（約28ℓ）１箱分の遺物が出土した。その多くは〈５層〉上面および〈４層〉から出土した土器小片である。

１は北区東側溝〈６層〉、２は土坑６埋土、３～８・Ｔ１は南区〈５層〉上面から出土した。１の須恵器杯蓋は７世紀前半（TK217型式）、２の須恵器高台付杯身は７世紀後半（TK48型式）に相当するものと考えられる[1)]。７世紀代の須恵器としては､他に北区〈５層〉において１と同型式と考えられる杯蓋片と杯身片が各１点出土している。また、２と同一となる可能性のある口縁部小片が土坑６から出土している。３～７は土師質高台付杯身の底部である。３が13世紀、４～７が14世紀初頭と考えられる。８の備前焼擂鉢は14世紀初頭に属するものと考えられる。

こうした包含層出土遺物および遊離遺物は、従来から言及されてきた津島岡大遺跡における諸活動と関連するものと考えられる。津島岡大遺跡においては、これまで６世紀末・７世紀初頭を中心に道路状遺構が出現することや[2)]、中世後半における土地造成の実施[3)]が指摘されてきた。本調査地点の須恵器は、７世紀代における土地造成等の活動との関連の中で理解されるものと考えられる。また13～14世紀初頭の土器に関しては、〈５層〉の造成時期を示しているものと考えられる。　（光本　順）



註

１）田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

２）光本　順2005「古墳時代後期から中世における遺構群の変遷」『津島岡大遺跡』15　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　pp.79-86

３）山本悦世・岩崎志保編2003『津島岡大遺跡』11　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

番号	種類・器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	形態・手法　他	胎土	色調
1	須恵器・杯蓋	－	－	－	内外：回転ナデ	細砂	灰
2	須恵器・高台付杯身	－	12.4	－	内・外（杯部）：回転ナデ、外（底部）：回転ヘラケズリ後ヨコナデ、1/4残	細砂	淡灰白
3	土師質土器・椀	－	5.5	－	内外：磨滅、貼り付け高台、1/2残	細砂	淡灰褐
4	土師質土器・椀	－	4.5	－	内外：摩滅、貼り付け高台、黒斑、1/2残	微砂	乳灰
5	土師質土器・椀	－	4.4	－	内外：磨滅、貼り付け高台、高台1/1残	微砂	乳黄灰
6	土師質土器・椀	－	3.9	－	内：摩滅、外：ナデ、貼り付け高台、高台1/1残	微砂	乳橙灰
7	土師質土器・椀	－	3.6	－	内：磨滅、外：ナデ、貼り付け高台、高台1/1残	細砂	乳褐
8	備前焼・擂鉢	－	－	－	内：ヨコナデ後、卸目、外：ヨコナデ	微砂	暗赤灰

番号	種類・器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	形態・手法　他	胎土	色調
T1	土錘	（4.4）	0.9	0.9	磨滅不明瞭	微砂	暗橙褐

図40　包含層出土遺物および遊離遺物（縮尺1/4）

第３節　自然科学的分析

津島岡大遺跡第34次調査地点では、縄文時代～近代までの包含層を対象に、植物珪酸体分析・花粉分析を実施した。土壌サンプル採取地点は南区南壁である（図41）。土壌サンプルの採取は、2010年９月28日に㈱古環境研究所・杉山真二氏が行い、同研究所により分析がなされた。

以下では、植物珪酸体分析・花粉分析結果を収載する。

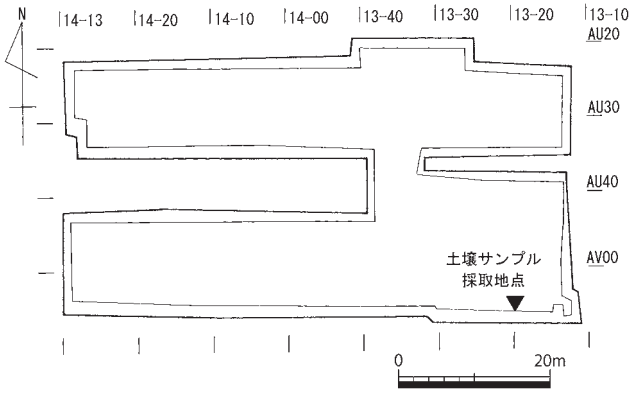


図41　土壌サンプル採取地点（縮尺1/1,000）

１．植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

ａ．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また､イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

ｂ．試料

分析試料は、南区南壁の２層～12層から採取された計16点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。このうち、〈２層〉と〈３層〉は近代、〈４層〉は近世、〈５層〉は中世、〈６層〉は飛鳥時代、〈８層〉は弥生時代後期、〈10層〉は弥生時代前～中期、〈11層〉は弥生時代前期、〈12層〉は弥生時代早期～前期、〈13層〉は縄文時代とされている。

ｃ．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試

表９　津島岡大遺跡第34次調査における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	南区南壁															
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
イネ科	Gramineae																	
イネ	*Oryza sativa*		164	28	43	43	36	34	55	49	33	7	14	19	7	7		
ムギ類（穎の表皮細胞）	*Hordeum-Triticum*（husk Phytolith）		7															
ヨシ属	*Phragmites*					7			7		7		7	13	7	7	7	7
シバ属	*Zoysia*		43			7												
キビ族型	Paniceae type										7	7	7	13	7	7	7	
ススキ属型	*Miscanthus* type		7		6		14						14	6				
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		21		6	7	7	7	7	28	13	7	14	13	21	7	7	13
タケ亜科	Bambusoideae																	
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		14		6	7	7	7	7		7	14	21	19	14	42	42	33
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		128	21	61	57	36	74	7	7	53	51	82	63	221	146	133	125
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		7	7	31	7				7	7	14	7		7	14	7	20
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		29	63	61	36	21	34	14	35	33	22	21	76	76	49	84	46
未分類等	Others		107	91	117	108	36	141	42	105	112	166	240	157	214	195	244	145
その他のイネ科	Others																	
表皮毛起源	Husk hair origin		57	7	25	22		34			13	7	14	13	14	7		13
棒状珪酸体	Rodshaped		71	21	49	50	21	34	21	56	26	58	41	76	103	49	42	26
未分類等	Others		121	42	43	86	36	27	69	28	59	51	69	113	131	70	63	53
樹木起源	Arboreal																	
その他	Others		7		6				21	14	7	7	7	6	7	14	7	7
（海綿骨針）	Sponge spicules			7	31	14	43	34	28	70	7							
植物珪酸体総数	Total		785	281	455	437	214	389	249	328	375	412	555	585	827	612	642	488
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出																		
イネ	*Oryza sativa*		4.83	0.83	1.26	1.26	1.05	0.99	1.63	1.44	0.97	0.21	0.40	0.56	0.20	0.20		
ヨシ属	*Phragmites*					0.45			0.44		0.42		0.43	0.79	0.43	0.44	0.44	0.42
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.09		0.08		0.18						0.17	0.08				
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		0.17		0.07	0.08	0.08	0.08	0.08		0.08	0.17	0.24	0.22	0.16	0.48	0.49	0.38
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		0.62	0.10	0.29	0.28	0.17	0.35	0.03	0.03	0.25	0.24	0.40	0.30	1.06	0.70	0.64	0.60
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		0.05	0.05	0.23	0.05				0.05	0.05	0.11	0.05		0.05	0.10	0.05	0.15
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		0.09	0.19	0.18	0.11	0.06	0.10	0.04	0.10	0.10	0.06	0.06	0.23	0.23	0.15	0.25	0.14
タケ亜科の比率（%）																		
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		18		9	16	26	15	52		16	29	32	29	11	34	34	30
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		67	29	38	53	54	66	21	18	53	42	53	40	71	49	45	47
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		6	15	30	10				27	10	19	7		3	7	4	12
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		9	55	24	21	20	19	27	55	21	11	8	30	15	10	18	11
メダケ率	Medake ratio		85	29	47	69	80	81	73	18	69	70	85	70	81	83	79	77

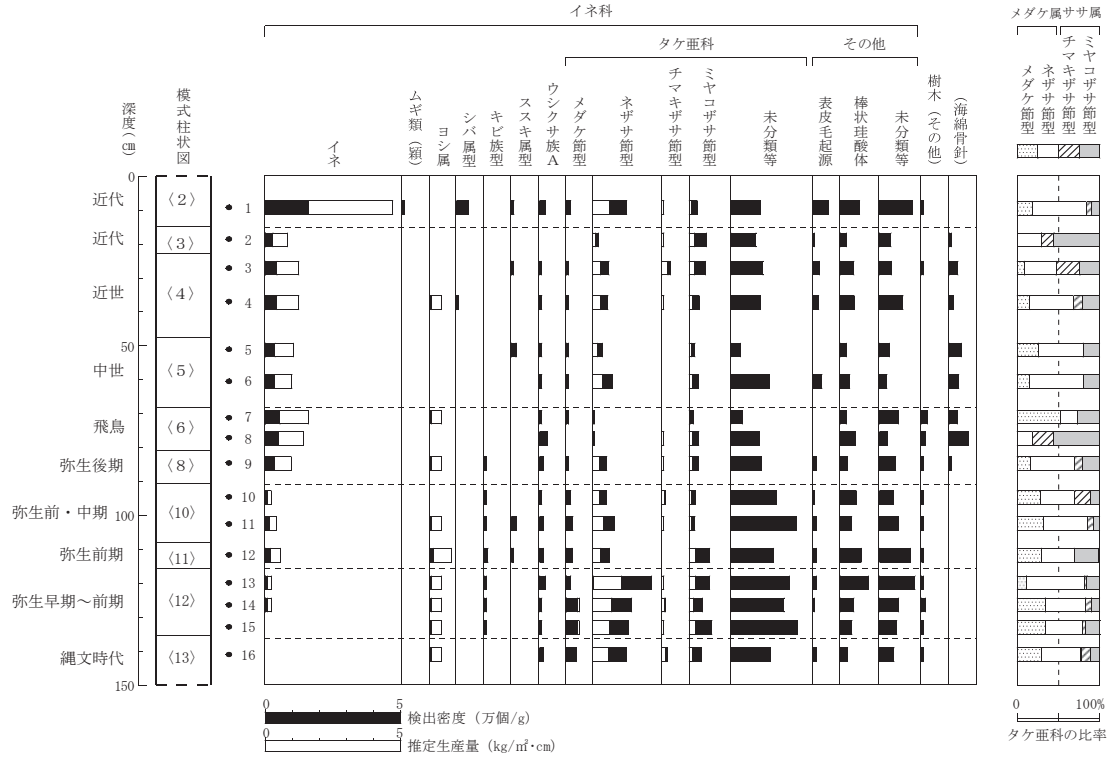


図42　津島岡大遺跡第34次調査：南区南壁における植物珪酸体分析結果

料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

ｄ．分析結果

表９および図42に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕　イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヨシ属、シバ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕　メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕　表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕　その他

ｅ．考察

⑴　稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料１gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

南区南壁では、〈２層〉（試料１）から〈13層〉（試料16）までの層準から採取された計16点について分析を行った。その結果、〈２層〉（試料１）から〈12層〉（試料13、14）までの各層からイネが検出された。このうち、〈２層〉（試料１）では密度が16,400個/gとかなり高い値であり、〈６層〉（試料７）でも5,500個/gと高い値である。また、〈３層〉（試料２）、〈４層〉（試料３、４）、〈５層〉（試料５、６）、〈８層〉（試料９）でもおよそ3,000個/g以上と比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能

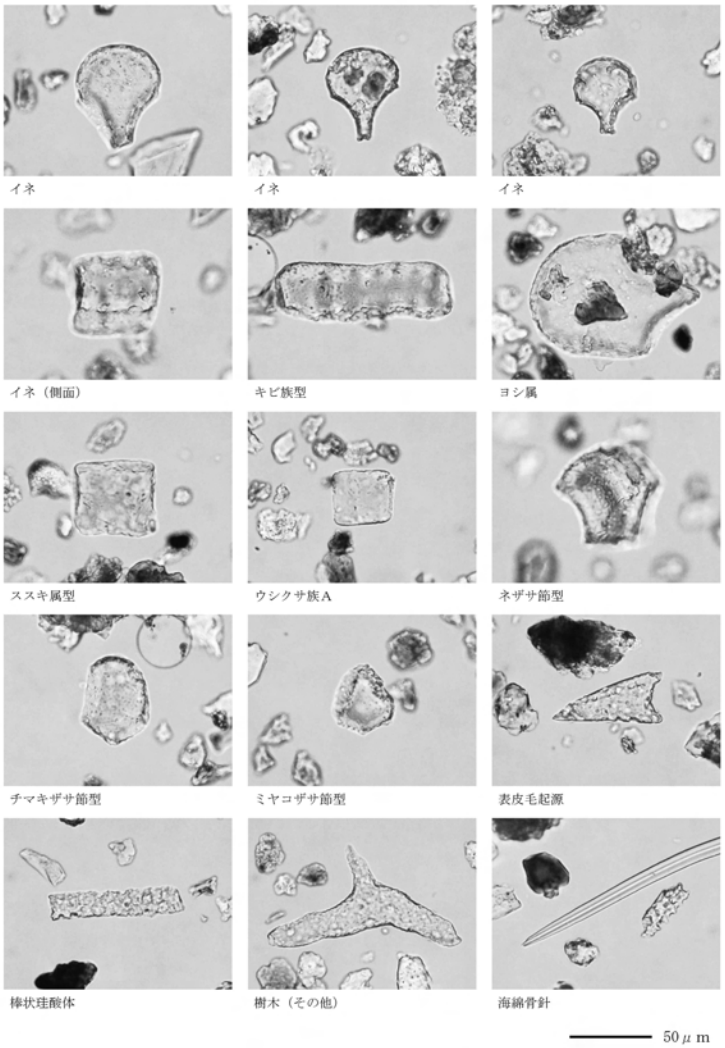


図43　津島岡大遺跡第34次調査の植物珪酸体（プラント・オパール）

性が高いと考えられる。

〈10層〉（試料10、11）、〈11層〉（試料12）、〈12層〉（試料13、14）では、密度が700～1,900個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

⑵　イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類（穎の表皮細胞）は、〈２層〉（試料１）から検出された。密度は700個/gと低い値であるが、穎（籾殻）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

⑶　植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。下位の〈13層〉ではネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、樹木（その他）なども認められた。〈12層〉ではネザサ節型がやや増加し、イネ、キビ族型が出現している。〈11層〉から〈10層〉にかけてはネザサ節型が減少し、ススキ属型が出現している。〈７層〉から〈６層〉にかけては、イネが増加し、イネ科の各分類群は減少している。〈５層〉から〈３層〉にかけても、おおむね同様の結果であるが、ヨシ属、キビ族型などのイネ科や樹木（その他）はほとんど見られなくなっている。〈２層〉ではイネが大幅に増加し、シバ属が出現している。おもな分類群の推定生産量によると、〈12層〉から〈11層〉にかけてはネザサ節型が優勢であり、〈７層〉より上位ではイネが優勢となっている。

以上の結果から、〈13層〉（縄文時代）から〈12層〉（弥生時代早期～前期）にかけては、メダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類を主体としてキビ族やウシクサ族なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺にはヨシ属が生育するような湿潤なところも分布していたと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと考えられる。〈12層〉上部では少量ながらイネが検出されることから、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

〈11層〉（弥生時代前期）から〈10層〉（弥生時代前～中期）にかけては、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられ、何らかの原因でメダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類は減少したと推定される。

〈８層〉（弥生時代後期）から〈６層〉（飛鳥時代）にかけては、稲作が本格化したと考えられ、竹笹類などのイネ科植物はあまり見られなくなったと推定される。〈５層〉（中世）から〈２層〉（近代）にかけては、継続的に稲作が行われていたと考えられ、〈２層〉の時期にはムギ類の栽培も行われていたと推定される。

ｆ．まとめ

植物珪酸体分析の結果、〈２層〉（近代）から〈８層〉（弥生時代後期）にかけては、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、〈10層〉（弥生時代前～中期）から〈12層〉（弥生時代早期～前期）にかけても、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、〈２層〉ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

〈13層〉（縄文時代）から〈12層〉（弥生時代早期～前期）にかけては、メダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類を主体としてキビ族やウシクサ族なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺にはヨシ属が生育するような湿潤なところも分布していたと推定される。その後、〈７層〉より上位では、稲作の本格化に伴って竹笹類などのイネ科植物はあまり見られなくなったと考えられる。

文献

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント･オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

２．花粉分析

株式会社 古環境研究所

ａ．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査

表10　津島岡大遺跡第34次調査における花粉分析結果

分類群		南区南壁															
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
Arboreal pollen	樹木花粉																
Abies	モミ属						2	1	1	1		1	1				
Tsuga	ツガ属					1	3	3	1	1			2				
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	56	2			15	15	6	9	8	1	2	4			1	
Cryptomeria japonica	スギ	3			1	24	32	18	34	16	1	3	7				
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	1			5	19	10	18	10			3			1	
Salix	ヤナギ属							1	3								
Juglans	クルミ属					1											
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ					1											
Platycarya strobilacea	ノグルミ						1		1	2							
Alnus	ハンノキ属					1	2	2		1	1	1					
Betula	カバノキ属							1	4	2		2	1				
Corylus	ハシバミ属					1	3	3					1				
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ					6	14	10	6			1	1			1	
Castanea crenata	クリ		2			7		3	6	8	1	6	2			2	
Castanopsis	シイ属	1		1		20	41	35	48	22	4	5	12		4	4	1
Fagus	ブナ属					1			2				1				
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	7			1	77	67	55	73	35	4	11	30	2	10	10	2
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	3		1		37	89	50	64	19	4	7	14	1		1	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ	1				1		3	2	2			1				
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属－ムクノキ						1	2				1					
Acer	カエデ属						1										
Aesculus turbinata	トチノキ					1	1	1		4	3	3	1				
Sapindus	ムクロジ属								1								
Vitis	ブドウ属							1									
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ							1									
Oleaceae	モクセイ科					1											
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉																
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科			1	1	17	4	8	4	5	1	2	10		1		
Rosaceae	バラ科							1	2			1					
Leguminosae	マメ科	1							2	2	1						
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属－ガマズミ属							2									
Nonarboreal pollen	草本花粉																
Sagittaria	オモダカ属					1	3	3	5	1							
Gramineae	イネ科	203		4	5	144*	118	91	107	122	19	30	104	8	11	31	6
Oryza type	イネ属型	71	1			8	14	29	16	3			2		1		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2				13	20	15	15	29	9	7	2	1	1	2	
Aneilema keisak	イボクサ					1											
Monochoria	ミズアオイ属						1	2	1								
Polygonum	タデ属							1									
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節							1									
Rumex	ギシギシ属	1				1	1	2									
Fagopyrum	ソバ属	2				2		1									
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科					2	1			2							
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1				2					1	1	5				
Ranunculus	キンポウゲ属																2
Cruciferae	アブラナ科	163*	7			1	1		1			2			1		
Cayratia japonica	ヤブガラシ							1	1								1
Rotala	キカシグサ属	1				2	1										
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		1				6	3		1			1		1	1	
Apioideae	セリ亜科						1	2	3	2	1	2	4				
Labiatae	シソ科					1							1	1			
Solanaceae	ナス科									1							
Plantago	オオバコ属	1															
Valerianaceae	オミナエシ科					1											
Lactucoideae	タンポポ亜科	2				1	1			4	1						
Asteroideae	キク亜科	1				1	3	2	2	18	1	7	1	1	2	4	1
Artemisia	ヨモギ属	4	1	1	1	37	22	38	27	60	9	16	22	27	22	57	13
Carthamus tinctorius	ベニバナ					1											
Fern spore	シダ植物胞子																
Monolate type spore	単条溝胞子	1	2		3	2	9	4	3	23	1	16	13	3	4	4	1
Trilate type spore	三条溝胞子					9	5		2	14	1	5	7	1	4	3	
Arboreal pollen	樹木花粉	72	5	2	2	200	291	206	273	131	19	43	81	3	14	20	3
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	0	1	1	17	4	11	8	7	2	3	10		1		
Nonarboreal pollen	草本花粉	452	12	5	6	436	193	191	178	243	41	65	142	38	39	95	23
Total pollen	花粉総数	525	17	8	9	653	488	408	459	381	62	111	233	41	54	115	26
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	3.3 ×10^4	1.0 ×10^2	5.6 ×10	6.3 ×10	9.0 ×10^3	1.3 ×10^4	8.4 ×10^3	1.2 ×10^4	4.5 ×10^3	3.9 ×10^2	6.9 ×10^2	1.6 ×10^3	2.9 ×10^2	3.8 ×10^2	5.7 ×10^2	1.8 ×10^2
Unknown pollen	未同定花粉	2			1	14	9	8	14	18	3	8	12	4	4	4	
Fern spore	シダ植物胞子	1	2		3	11	14	4	5	37	2	21	20	4	8	7	1
Helminth eggs	寄生虫卵																
Ascaris (*lumbricoides*)	回虫卵	2															
Total 計		2															
Helminth eggs frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	1.4 ×10															
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物		(+)	(+)	(+)		(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(++)	(++)	(+)

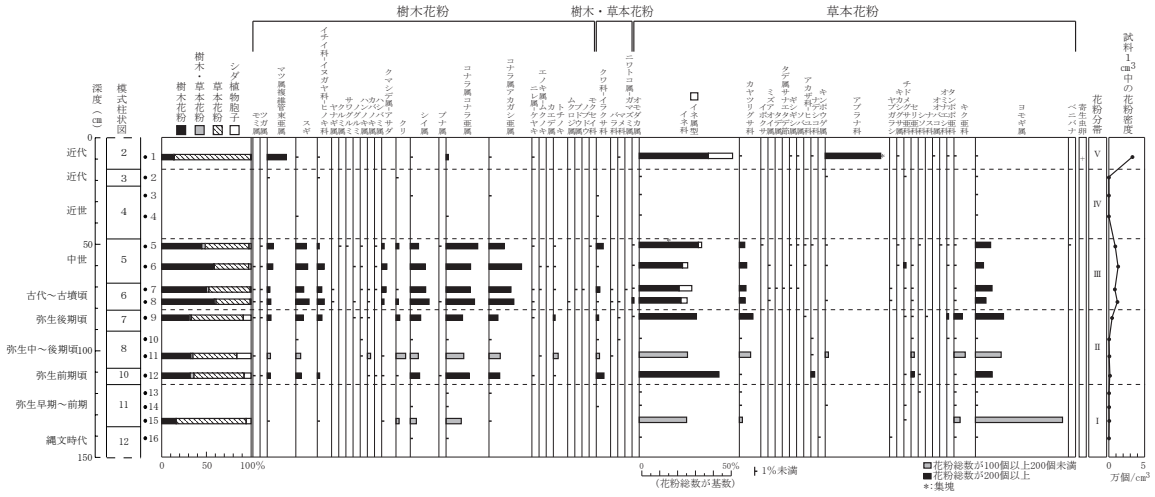


図44　津島岡大遺跡第34次調査：南区南壁における花粉ダイアグラム

においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

b．試料

分析試料は、南区南壁の〈２層〉～〈13層〉から採取された計16点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

c．方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から１cm^{3}を秤量
２）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
３）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
４）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

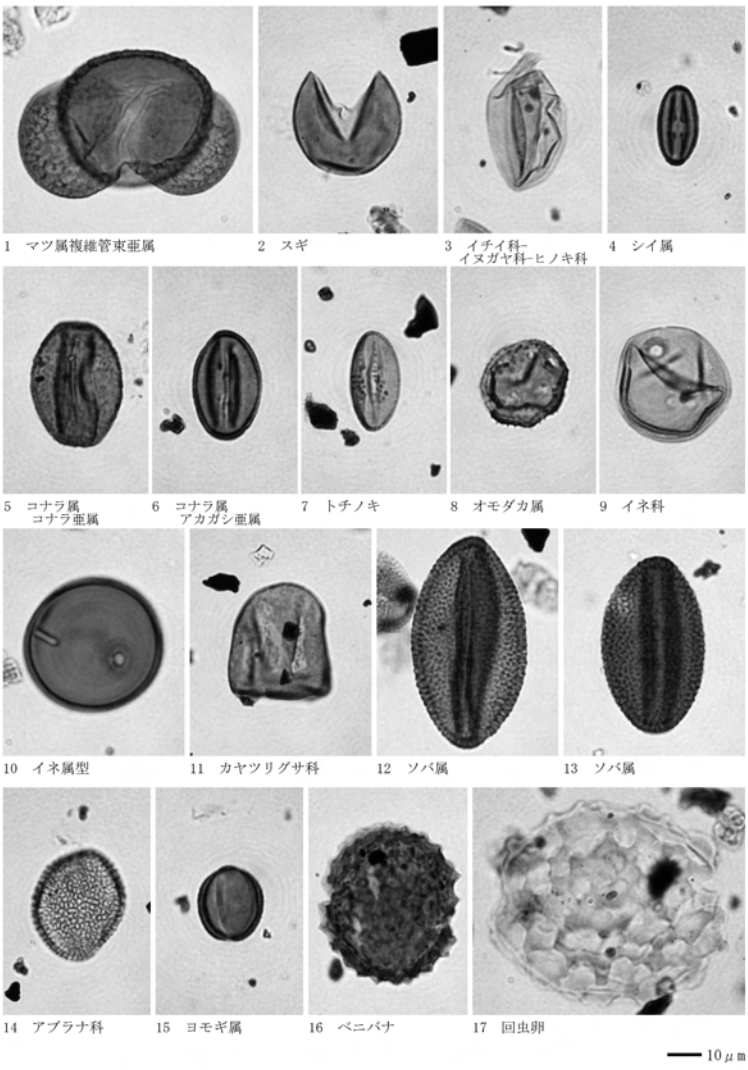


図45　津島岡大遺跡第34次調査の花粉・寄生虫卵

６）再び氷酢酸を加えて水洗処理
７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

ｄ．結果

⑴　分類群

出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの４、草本花粉26、シダ植物胞子２形態の計58である。また、寄生虫卵１分類群が検出された。分析結果を表４に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、ノブドウ、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕　クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕　オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ヤブガラシ、キカシグサ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物胞子〕　単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕　回虫卵

⑵　花粉群集の特徴

花粉組成の変化から下位よりⅠ帯～Ⅴ帯の５帯の花粉分帯を設定した。以下に各分帯ごとに特徴を記載する。

１）Ⅰ帯：〈13層〉～〈12層〉　〈12層〉（試料16）では、花粉がほとんど検出されなかった。〈12層〉下部（試料15）では花粉密度が低く、草本花粉が約85％を占める。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科が優勢で、カヤツリグサ科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、シイ属などが認められた。〈12層〉上部（試料13、14）でも、おおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。なお、試料14ではイネ属型が認められた。

２）Ⅱ帯：〈11層〉～〈８層〉　花粉密度がやや高くなり、樹木花粉が約30％を占めるようになる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優勢で、カヤツリグサ科、キク亜科などが伴われる。また、〈11層〉（試料12）と〈８層〉（試料９）ではイネ属型が認められた。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が優勢で、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などが伴われる。

３）Ⅲ帯：〈６層〉～〈５層〉　花粉密度が比較的高くなり、樹木花粉の占める割合が50％前後に増加している。草本花粉では、イネ属型が増加し、オモダカ属、ソバ属などが出現している。また、〈５層〉（試料５）ではベニバナが認められた。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギがやや増加している。

４）Ⅳ帯：〈４層〉～〈３層〉　イネ科、ヨモギ属、クワ科－イラクサ科などが検出されたが、いずれも少量である。

５）Ｖ帯：〈２層〉　花粉密度が高く、草本花粉が約85％を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、アブラナ科（集塊あり）が優勢であり、ソバ属なども認められた。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属が優勢で、コナラ属コナラ亜属なども認められた。また、寄生虫卵の回虫卵が少量検出された。

ｅ．花粉分析から推定される植生と環境

〈13層〉（縄文時代）では、花粉がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

〈12層〉下部（弥生時代早期～前期）の堆積当時は、ヨモギ属やイネ科などの草本類が生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺地域にはナラ類（コナラ属コナラ亜属）やシイ属などの樹木が分布していたと推定される。〈12層〉上部では、花粉があまり検出されないが、〈12層〉下部とおおむね同様の状況であったと考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。なお、イネ属型の花粉が部分的に少量認められることから、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。これは、植物珪酸体分析で同層準からイネが出現していることと符合している。

〈11層〉（弥生時代前期）から〈８層〉（弥生時代後期）にかけては、カヤツリグサ科がやや増加していることから、堆積環境の湿潤化が示唆される。また、イネ属型の花粉が部分的に少量認められることから、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。当時は周辺地域にナラ類、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）、シイ属、クリ、スギ、マツ属（アカマツ・クロマツ）など多様性のある森林植生が分布していたと推定される。

〈６層〉（飛鳥時代）には稲作が本格化したと考えられ、〈５層〉（中世）にかけても継続的に稲作が行われていたと推定される。また、当時はソバやベニバナ（染色や薬用に利用）などを栽培する畑作も行われていたと考えられる。周辺地域の森林植生は、大きく変遷することはなかったと考えられる。〈４層〉（近世）から〈３層〉（近代）にかけては、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

〈２層〉（近代）では、集約的な稲作が行われおり、近隣ではアブラナ科やソバなどを栽培する畑作も行われていたと考えられる。アブラナ科には、アブラナ（ナタネ）、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれている。同層では寄生虫卵の回虫卵が検出されることから、人糞施肥の影響も示唆されるが、低密度であることから集落周辺などの人為環境における通常の生活汚染に由来する可能性が考えられる。当時は周辺地域にマツ林（アカマツ・クロマツ）が二次林または里山として成立していたと推定される。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

第４節　結語

津島岡大遺跡第34次調査地点では、〈５層〉（中世層）上面までの平面調査と、調査区壁面における断面調査を実施した。結果、地形復元のためのデータの他、弥生時代の畦畔・溝、鎌倉時代の鋤溝、近世の土坑群といった遺構を確認した。また、自然科学的分析として縄文時代～近代までの地層に関する植物珪酸体分析・花粉分析を実施し、環境復元のためのデータを得た。

①地形復元

調査区北壁・東壁・南壁の断面調査において、弥生時代早～前期の「黒色土」層まで掘り下げを行い（南壁の一部では縄文時代後期層まで）、近代までの地形の様相が判明した。弥生時代の地形としては、図書館（第12次調査）地点から連なる微高地状の緩斜面が調査区南東部にみられ、その周辺が低位部となる様相が明らかとなった。こうした地形による土地の高低差は、明治時代の旧陸軍による造成以前の段階まで継続した。断面調査で明らかとなった弥生時代前期畦畔の分布や、近世土坑群の東西列の配置状況といった遺構の様相も、こうした地形復元データと整合的である。

②環境復元

本調査地点で実施した縄文時代後期～近代までの植物珪酸体分析・花粉分析の成果は、津島岡大遺跡における既往の分析データ[1)]と符号するものと考えられる。植物珪酸体分析の成果からは、〈12層〉（「黒色土」層）からイネのプラントオパールが出現するという、従来と同様のデータが得られた。花粉分析の成果によると、〈12層〉下部は、ヨモギ属やイネ科などの草本類が生育する比較的乾燥した環境であり、周辺にはナラ類（コナラ属コナラ亜属）やシイ属などの樹木が分布していたことが推定されている。また、〈12層〉上部では花粉量が少なく、その要因として「乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解された」（89頁）可能性が指摘されている。こうした花粉分析結果に関しても、既往の成果と同様であるが、「黒色土」の成立要因や性格については、より学際的方法から今後明らかにしていく必要がある。

③弥生時代の遺構

調査区南東部の微高地状緩斜面において、〈12層〉上面に構築された畦畔を確認した。また〈11層〉上面で微高地状緩斜面から低位部方向にのびる６条の溝を確認した。畦畔については、時期を示す遺物は認められなかったが、図書館地点でみつかった弥生時代前期畦畔と一連のものと考えられる。すなわち本調査地点では、弥生時代前期畦畔の北縁部分がみつかったものと考えられる。図書館地点では「黒色土」上層にも前期畦畔が検出されているが、本調査地点における断面調査ではそれに該当する確実なものは確認されなかった。溝群は、「黒色土」上面の畦畔より後に構築されたものである。この点において図書館地点の上層の畦畔との関連が注目されるが、それとの先後関係については不明である。しかしながら微高地側から低位部方向へと底面が傾斜する溝の存在は、弥生時代前期段階の排水路の存在を窺わせるものとして注目しうる。

④近世の遺構

南区において、南北および東西に列をなす土坑11基を検出した。南北列に関しては、調査区の外部に推定される中世～近世の南北条里との関連性が窺われた。また、東西列については条里との関連性は薄いものであったが、旧地形に由来する土地の起伏に沿って列の並びが屈折する様相が明らかとなった。（光本）

註

１）山本悦世2006「構内遺跡における発掘調査資料の自然科学的分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』pp.７-17
山本悦世2008「津島岡大遺跡における植物珪酸体分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』pp.20-23

報告書抄録

ふりがな	おかやまだいがくまいぞうぶんかざいちょうさけんきゅうせんたーきよう2010							
書名	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010							
掲載箇所	第Ⅱ部第１章　津島岡大遺跡第34次調査－国際交流会館新営に伴う発掘調査－							
編著者名	光本　順（編著）、㈱古環境研究所							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530　岡山県岡山市北区津島中三丁目１番１号							
発行年月日	2012（平成24）年３月16日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 世界測地系	東経 世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
津島岡大遺跡	岡山県岡山市北区津島中三丁目１番１号	33201		34度 41分26秒	133度 55分09秒	20100730 ～0928	1590㎡	国際交流 会館新営
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
津島岡大遺跡 第34次 調査地点	田畑	弥生時代前期		畦畔、溝				
	田畑	飛鳥時代				須恵器		
	田畑	鎌倉時代		耕作痕		土師器		
	田畑	近世		土坑		陶磁器、石製品		

第２章　鹿田遺跡第21次調査

―外来診療棟周辺他環境整備に伴う発掘調査―

第１節　調査の経緯と経過
１．調査に至る経緯
２．調査体制
３．調査の経過
第２節　調査の記録
１．調査地点の位置
２．第21次調査Ａ・Ｂ地点
⑴　層序と地形
⑵　遺構と遺物
３．第21次調査Ｄ地点
⑴　層序と地形
⑵　包含層出土遺物
第３節　自然科学的分析
１．鹿田遺跡第21次調査で出土した
木製品の樹種
第４節　結　　語

例　言

1．本報告は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、外来診療棟周辺他環境整備に伴って実施した鹿田遺跡第21次調査の発掘調査報告である。
同調査地点は、岡山県岡山市北区鹿田町２丁目５番１号に所在する。
鹿田遺跡第21次調査地点は、鹿田地区構内座標においてＡ地点：AD～AF30・31区、Ｂ地点：AG・AH30・31区、Ｃ地点：AP・AQ26・27区、Ｄ地点：AS・AT25～28区に位置する。発掘調査期間は2010年11月18日～12月９日、調査面積は120.1㎡（Ａ地点：21.2㎡、Ｂ地点：22.0㎡、Ｃ地点：17.5㎡、Ｄ地点：59.4㎡）を対象とした。
2．発掘調査は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われ、報告書作成に関しても運営委員会の指導を得た。委員・幹事諸氏に御礼申し上げる。
3．本報告作成にあたっては、木材の樹種同定を能城修一氏（森林総合研究所）に依頼し玉稿を頂いた。また石器石材の同定において鈴木茂之氏（岡山大学大学院自然科学研究科）、近世陶磁器に関して乗岡実氏（岡山市教育委員会）、鎌倉時代の種子圧痕について小西猛朗氏（元九州大学教授）にご教示頂いた。記して感謝申し上げる。
4．調査時の遺構実測・写真撮影は光本順が行った。
5．報告書作成にあたっての主な担当は以下の通りである。
＜遺物＞土器・石器の整理・実測・浄写・観察表：山本悦世・光本・西本尚美
木器の整理・実測・浄写・観察表：山本・光本・西本
遺物写真：南健太郎
＜遺構＞浄写：西本
6．本報告の執筆分担は目次に示した。
7．編集は、新納泉（副センター長）・山本悦世（調査研究室長）の指導のもとに、光本が担当した。
8．本報告を持って正式なものとする。
9．本報告に掲載した調査の記録・出土遺物はすべて当センターで保管している。

凡　例

1．本報告で用いる高度値は海抜標高であり、方位は国土座標第Ⅴ座標系（世界測地系）の座標北である。
方位に関しては、本報告では調査時に使用した座標を用いる。
2．遺物番号は、遺構別に番号を付すが、土製品にはＴ、石器にはＳをつけて通し番号とする。
3．遺物に関するデータは観察表にまとめ、実測図と組み合わせて掲載している。
観察表の表記基準は以下の通りである。
①　内外面の色調を併記する場合は、「内面/外面」の順序で表示する。
②　胎土は、微砂：砂粒径0.5mm未満、細砂：同0.5～１mm未満、粗砂：同１～２mm未満、細礫径２mm以上を基準とする。
③　法量の単位は「cm」である。複元値には*付きの数字で表し、残存値には（　）を付した。
4．遺構は、挿図などで以下のように記号で種類を表記する場合がある。
土坑：SK、溝：SD
5．土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnで表記した。
6．基本土層の本文表記は〈　〉を使用した。

第１節　調査の経緯と経過

１．調査に至る経緯

2010年度に岡山大学病院の正面玄関を中心とした環境整備の実施計画が立てられた。環境整備の対象は、外来診療棟の玄関付近や歩行者通路、ロータリーである。そのうち、病院正門付近（鹿田キャンパス敷地北辺）の歩行者通路に設置される雨よけの庇部分、および外来診療棟玄関付近において、上屋構造物の基礎を設置するための掘削が一定面積でなされることとなった。すなわち病院正門付近では２箇所の掘削が予定され、その合計面積は43.2㎡（21.2㎡・22.0㎡）である。また外来診療棟玄関付近においても２箇所の掘削が予定され、その合計は76.9㎡（17.5㎡・59.4㎡）である。

これら合計４箇所の工事掘削については、包含層および遺構・遺物に影響を及ぼす可能性が存在するものと判断された。そのため、発掘調査を実施することとし、調査員１名が調査にあたることとなった。

２．調査体制

【発掘調査:鹿田遺跡第21次調査】（発掘調査年度：2010年度）

調査主体　岡山大学（学長　千葉喬三）

調査担当　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（センター長　北尾善信）

調 査 員　光本　順（助教、調査主任）

運営委員会

センター長	北尾　善信	環境管理センター長	沖　　陽子
副センター長	新納　　泉		（調査研究専門委員）
大学院社会文化科学研究科教授	久野　修義	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本　悦世
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚　愛二		（調査研究室長）
大学院自然科学研究科教授	柴田　次夫	事務局施設企画部長	山下　隆幸

【報告書刊行】（報告書刊行年度：2011年度）

運営委員会

センター長	北尾　善信	環境管理センター長	沖　　陽子
副センター長	新納　　泉		（調査研究専門委員）
大学院社会文化科学研究科教授	久野　修義	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本　悦世
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚　愛二		（調査研究室長）
大学院自然科学研究科教授	柴田　次夫	事務局施設企画部長	秋山　明寛

３．調査の経過（図46・47）

調査地点名については、以下、北から南へ順に、病院正門付近をＡ・Ｂ地点、外来診療棟玄関付近をＣ・Ｄ地点と呼称する。調査経過については地点ごとに概述する。なお、近接する位置関係にあり、堆積する包含層が類似するＡ・Ｂ地点については、ひとつにまとめて報告する。

Ａ・Ｂ地点　Ａ・Ｂ地点の表土掘削は、2010年11月15～17日にかけて実施した。表土掘削の過程で、Ａ地点では調査区東辺に現代の攪乱が認められた他、南西隅において素焼土管を使用した近現代の井戸が確認された。Ａ・

Ｂ地点の発掘調査は11月18日に開始し、12月９日に調査を終了した。Ａ・Ｂ地点では、層序に共通性がみられたため、包含層の掘り下げをほぼ同時に進めていった。

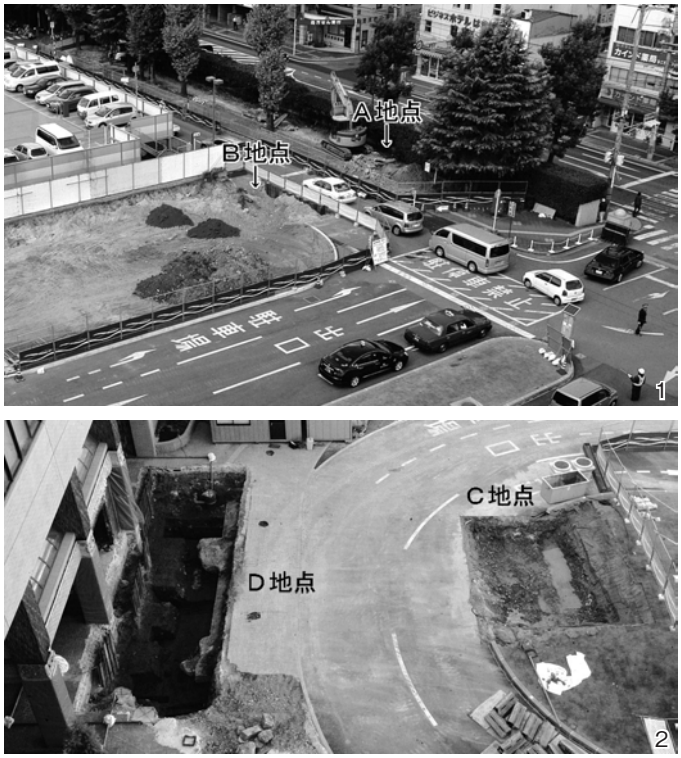
Ｂ地点における〈７層〉(中世層)上面精査の際に、ピット状の窪みが南北に連なる形で存在することが判明した。Ｂ地点の調査区北壁・南壁断面を精査した結果、〈６層〉から掘り込まれた溝状遺構の存在を認識し、ピット状の窪みもそれに伴うものと観察された。さらにこの溝状遺構がＡ地点の西半にも存在することが明らかとなった。こうした両地点にまたがる中世の溝状遺構の全景写真を11月30日に撮影した。

その後、Ａ・Ｂ地点において〈８層〉以下の調査を実施した。その結果、東西方向にのびる平安時代の河道を両地点で確認した。河道の調査では、湧水層近くまで掘り下げを行う過程で、平安時代の土器に加え、弥生時代後期土器片も出土した。そのため、下層に弥生時代の河道が存在することが推定された。しかしながら、湧水のため弥生時代河道の調査は困難であったことから、12月９日にＡ・Ｂ地点の調査を終了した。

Ｃ地点　Ｃ地点の表土掘削は、11月15日に実施した。その結果、工事掘削に必要となる地表から約80㎝の深さで、調査区全面にコンクリート基礎が広がることが判明した。工事に必要な掘削深度がコンクリート上面までで収まるため、Ｃ地点に関しては11月15日の表土掘削のみで調査を終了した。

Ｄ地点　Ｄ地点の包含層については、外来診療棟建物と隣接することから、その建物基礎によって損なわれている可能性を調査前に想定していた。そのため、11月15日に重機による表土掘削を開始した調査区東端部分において、まず包含層の残存状況を確認することとした。その結果、地表面から1.6ｍの深さまで掘削したものの、その範囲において包含層は確認されず、かつての建物工事の際の埋土が認められた。また工事に必要な掘削深度が造成土・既設埋土内に収まる可能性が高い一方で、調査区南半では工事に支障となる雨水・汚水配管が東西に横断する形で存在することが判明した。

調査区東端以外においても包含層の残存状況を確認するべく、以下の方針で調査を継続することとした。すなわち調査区全体の表土を工事掘削深度まで掘削し、配管を調査区外に移設した後に、改めて包含層の確認作業を実施することとした。

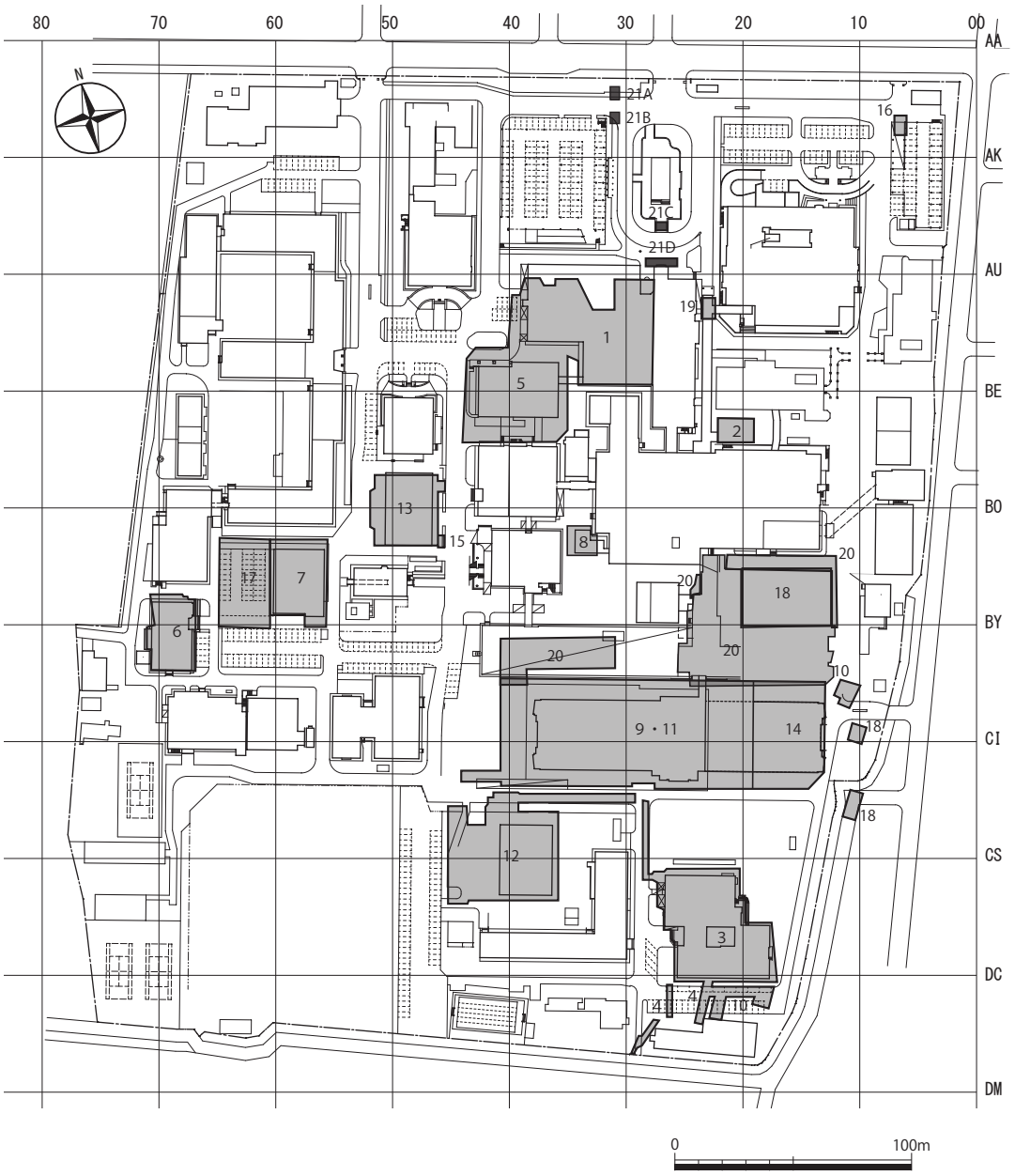


1．21Ａ・Ｂ地点調査開始写真（南東から）　2．21Ｃ・Ｄ地点調査終了写真（東から）

図46　調査状況

配管移設後の11月25日に、重機による調査区中央付近の試し掘りを実施した。その結果、工事掘削深度よりも深い標高において部分的に包含層が残存するものの、攪乱もまた深くまで及ぶ状況、すなわち、包含層の残存状況は悪いものの、建物基礎によって完全に失われてはいないことが判明した。工事掘削深度内には包含層が存在しないものの、当該地点の包含層の残存状況、ならびに建物基礎による遺跡の破壊状況の把握を目的として、部分的な発掘調査を実施することとした。手順としては、まず調査区北側2/3の範囲において部分的な発掘調査を実施し、その結果を踏まえ、南側1/3の発掘の是非を検討することとした。

11月29日に、調査区北側の攪乱を重機によって除去した後に発掘調査を開始した。発



1　第１次調査：外来診療棟
2　第２次調査：NMR-ＣＴ室
3　第３次調査：医療短期大学部【校舎】
4　第４次調査：医療短期大学部【配管】
5　第５次調査：管理棟
6　第６次調査：アイソトープセンター
7　第７次調査：基礎研究棟
8　第８次調査：ＲＩ治療室
9　第９次調査：病棟
10　第 10 次調査：共同溝関連
11　第 11 次調査：病棟
12　第 12 次調査：エネルギーセンター
13　第 13 次調査：総合教育研究棟
14　第 14 次調査：病棟
15　第 15 次調査：総合教育研究棟【外構】
16　第 16 次調査：立体駐車場エレベーター
17　第 17 次調査：基礎研究棟
18　第 18 次調査：中央診療棟
19　第 19 次調査：渡り廊下
20　第 20 次調査：中央診療棟関連
21　第 21 次調査：外来診療棟周辺他環境整備
※建物名称は調査次の呼称による。

図47　発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

掘調査では、包含層の堆積状況を確認するため、調査区西側および東側にサブトレンチを設定した。サブトレンチを掘り下げる過程において、西サブトレンチでは完形に近い弥生時代後期の台付鉢が１点、東サブトレンチでは同時期と考えられる壺破片が、ともに低湿地層とみられる土層中から発見された。他の土器が周囲に存在するか否かを検討するためにサブトレンチを拡張したが、弥生土器が密集する状況は認められないことを確認した。これらサブトレンチにおける土層の検討から、本調査区は南側に広がる弥生時代以降の微高地に隣接する低位部にあたるという知見が得られた。サブトレンチ以外の箇所についても精査を実施したが、弥生時代後期土器の出土はみられたものの、遺構は確認されなかった。

このように、調査区北側2/3の範囲内において調査を実施した結果、Ｄ地点については遺構が希薄であり、包含層の堆積状況、攪乱の状況、および旧地形に関するデータが得られたものと判断した。そのため、南側1/3については現状保存とすることとし、12月９日に本調査地点の調査を終了することとした。

第２節　調査の記録

１．調査地点の位置（図48）

鹿田遺跡第21次調査地点は、鹿田キャンパス北辺に４箇所に分かれて位置する。構内座標は、AD～AF30・31区、Ｂ地点：AG・AH30・31区、Ｃ地点：AP・AQ26・27区、Ｄ地点：AS・AT25～28区である。

既往の調査地点との関係をみてみよう。Ｂ地点南周辺に位置する1985年の試掘確認調査・立会調査[1]では、弥生～古墳時代の河道や中世包含層が確認された。４箇所の調査地点の東側にあたる第16次調査（立体駐車場）[2]においても同様である。

外来診療棟玄関付近（Ｃ・Ｄ地点）については、南に近接する外来診療棟地点（第１次調査）[3]で弥生時代中期後半以降の集落が濃密に確認されたほか、南東の歯学部渡り廊下地点（第19次調査）[4]においては弥生時代後期～古墳時代初頭の盛土状遺構が確認されてきた。こうした弥生時代以降の遺構・遺物が、外来診療棟玄関付近の工事予定地にまで及ぶことが予想される一方で、外来診療棟建物基礎によってすでに遺跡が大きく損なわれている可能性も想定された。

なお、以下で記す調査成果では、前節の調査の経過で述べたように、表土掘削のみで調査を終了したＣ地点を除いて記述する。ま

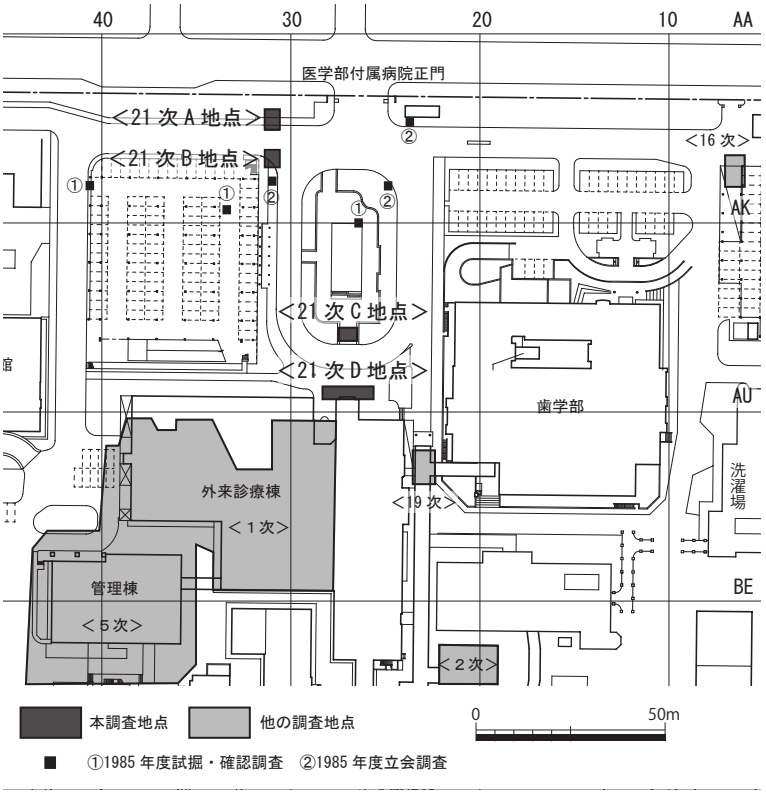


図48　調査地点位置図（縮尺1/2,000）

た一連の遺構や河道を検出したＡ・Ｂ地点をまとめて報告し、その後にＤ地点の報告を行う。

註　１）山本悦世1987「医学部附属病院基幹環境整備工事に先立つ範囲確認調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』３、岡山大学埋蔵文化財調査室、pp.14-15
山本悦世1987「医学部附属病院基幹環境整備緑化工事―電気配線ハンドホール掘削―に伴う立会調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』３、岡山大学埋蔵文化財調査室、ｐ.21
２）高田貫太2006「鹿田遺跡第16次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.18-22
３）吉留秀敏・山本悦世編1988『鹿田遺跡』Ⅰ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第３冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
４）野崎貴博2010「鹿田遺跡第19次調査（歯学部渡り廊下新営）」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.31-35

２．第21次調査Ａ・Ｂ地点

⑴　層序と地形（図47・50、表10）

ａ．層序

〈１層〉　造成土で、主に1917（大正６）年の岡山医学専門学校が鹿田キャンパスに移転された際のものである。上面標高はＡ地点で2.40m、Ｂ地点で2.32m、厚さはＡ地点で1.25m、Ｂ地点で1.13mを測る。なお、Ａ地点では、本層上面から掘り込まれた近現代の井戸がみつかった。

〈２層〉　暗青灰色砂質土で、Ｂ地点の一部に残存していたものの、多くは〈１層〉の造成の際に失われていた。上面標高は1.45mとなる。鹿田遺跡における近代耕作土に相当するものと考えられる。

〈３層〉　緑灰色砂質土で、色調・土質ともに〈２層〉と類似する。上面標高はＡ地点で1.30m、Ｂ地点で1.34mとなる。〈２層〉同様に近代耕作土と考えられる。

〈４層〉　淡緑灰色砂質土で鉄分を多く含む。上面標高はＡ地点で1.07～1.25m、Ｂ地点で1.25～1.27mとなる。本層以下の層に関してはいずれもＡ地点北辺が低く、Ｂ地点南辺が高い。時期については14世紀前半の土師質土器椀小片を含む層であり、鎌倉時代に属するものと考えられる。

〈５層〉　淡黄灰色砂質土で鉄分・マンガンを多く含む。上面標高はＡ地点で0.95～1.10m、Ｂ地点で1.03～1.13mとなる。時期については14世紀前半の土師質土器椀小片を含む層であり鎌倉時代に属する。

〈６層〉　灰黄白色砂質土で鉄分・マンガン・白色微砂を多く含む。上面標高はＡ地点で0.81～0.95m、Ｂ地点で0.92～1.04mとなる。本層上面において溝状遺構（溝１）が構築されている。時期については13世紀後半の土師質土器椀小片を含む層であり、鎌倉時代に属する。

〈７層〉　灰黄色砂質土で、鉄分と白色微砂を多く含む。上面標高はＡ地点で0.75～0.83m、Ｂ地点で0.75～0.92mとなる。出土遺物はほとんどみられないが、土質から本層の時期は上層の鎌倉時代に近いものと考えられる。

〈８層〉　暗灰色粘質土で白色微砂を含み、層上面に凹凸がみられる。土質から、下層の河道埋土の上に堆積した湿地的様相の土層と考えられる。上面標高はＡ地点で0.60～0.67m、Ｂ地点で0.61～0.81mとなる。８世紀末～９世紀前半の土器を含むため、本層の埋没時期は平安時代前半と考えられる。

〈９層〉　淡灰黒色粘質土で有機質を多く含むほか、灰白色微砂を含む。土質と堆積状況から、河道埋土と考えられる。上面標高はＡ地点で0.45～0.52m、Ｂ地点で0.47～0.75mとなる。出土遺物から、時期は平安時代前半に属すると考えられる。

〈10層〉　暗灰色砂質土で白色微砂を多く含み、河道埋土と考えられる。上面標高はＡ地点で0.30～0.35m、Ｂ地

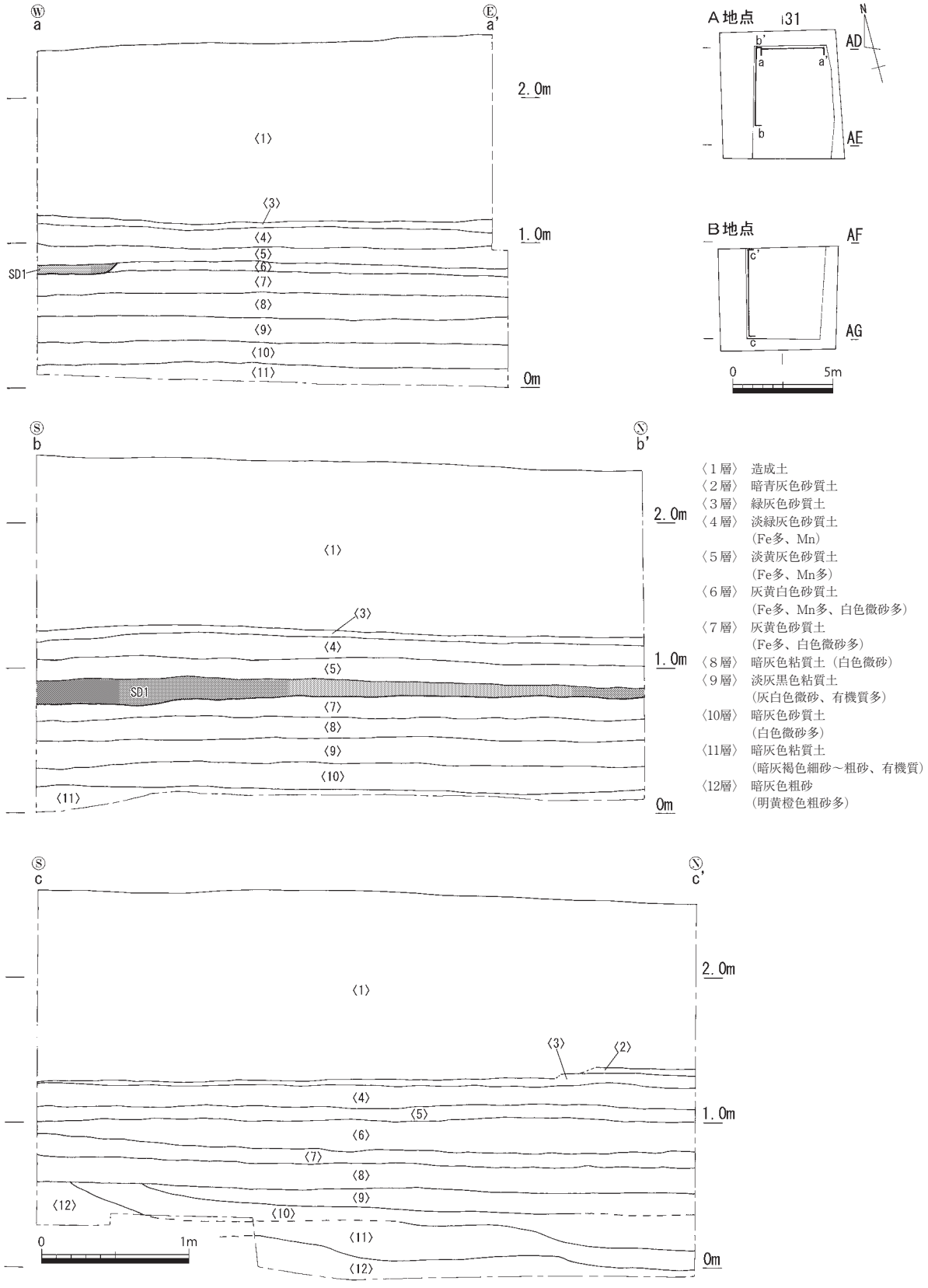


図49　21Ａ・Ｂ地点の調査区の土層(1)（縮尺1/40、1/300）

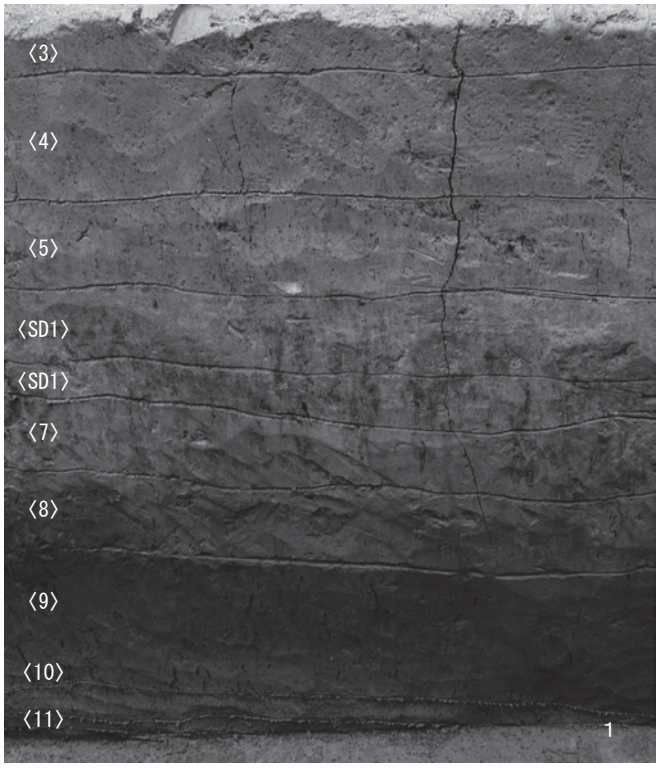
点で0.25～0.66mとなる。遺物は出土していないが、上下層の時期から本層も平安時代前半に属するものと考えられる。

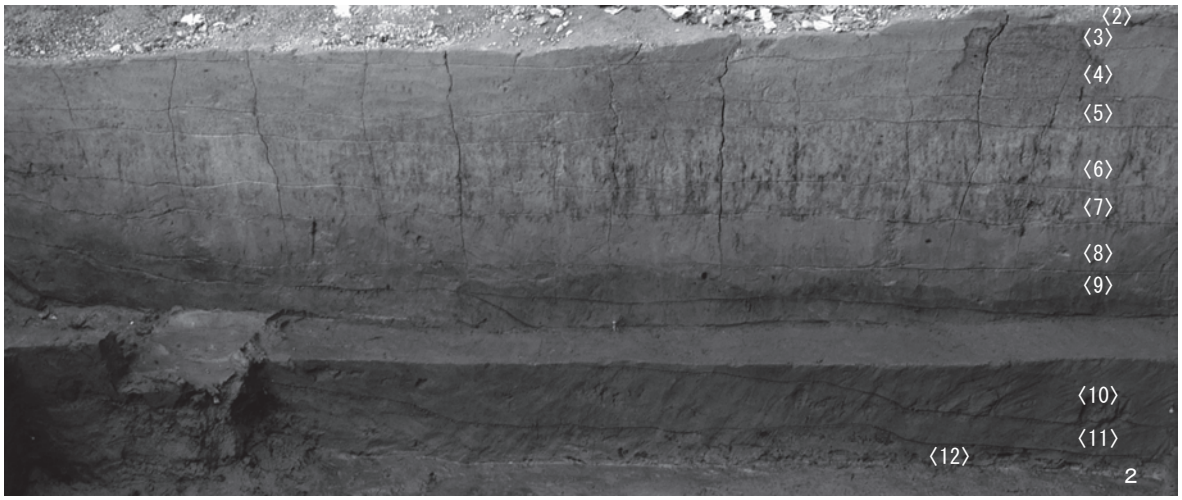
〈11層〉　暗灰色粘質土と暗灰褐色細砂～粗砂が互層となる層で、有機質を含む。土質・堆積状況から河道埋土と考えられる。上面標高はＡ地点で0.12～0.23m、Ｂ地点で0.09～0.66mとなる。９世紀前半の土器が出土しており、本層の埋没時期は平安時代前半に属すると考えられる。

〈12層〉　暗灰色粗砂で明黄橙色粗砂を多く含み、河道埋土と考えられる。Ｂ地点において確認した層であるが、層下面は未確認である。上面標高は－0.02～0.39mとなる。８世紀末の土器および弥生後期土器が出土した。出土遺物から、本層の最終的な埋没時期は平安時代前半と考えられるが、弥生後期土器の存在から河道自体は当該期にまで遡るものと考えられる。なおＢ地点で本層を部分的に掘り下げようとしたものの、湧水のため掘り下げることができなかったため、本層を発掘停止面とした。

ｂ．地形

Ａ・Ｂ地点は、弥生時代に遡る旧河道が位置する関係で、低位部としての地形的特色を有する。Ａ・Ｂ地点では、平安時代前半の河道と鎌倉時代以降の包含層がみつかった。Ｂ地点で発掘停止面とした河道内埋土である〈12層〉からは弥生時代後期末の壺片等が出土しているため、平安時代の河道は、弥生時代以来の河道の上に形成されていたものと考えられる。平安時代の河道は東西方向に伸びるものである。当該期の河道肩はみつかっておらず、河道底については湧水の影響で確認しえなかった。ただし、土層堆積状況からＢ地点が河道南岸に近い位置にあたり、Ａ地点





1．ｂ断面：21Ａ地点西壁（東から）
2．ｃ断面：21Ｂ地点西壁（東から）

図50　21Ａ・Ｂ地点の調査区の土層(2)

表11　本調査地点と第１次調査地点の標高差

	第21次調査Ａ・Ｂ		第１次調査	
近代	1.45m	〈２層〉	1.60～1.90m	水田面
鎌倉	1.07～1.27m	〈４層〉	1.50～1.80m	遺構
	0.95～1.13m	〈５層〉		
	0.81～1.04m	〈６層〉		
平安	0.60～0.81m	〈８層〉	1.50～1.70m	遺構

南辺が河道最深部に近いものと考えられる。推定河道幅は８ｍ以上となる。

この河道が生み出す比高の影響により、後の〈４層〉段階までＡ地点・Ｂ地点間の標高に差異が生じており、Ｂ地点がＡ地点よりも高くなる。両地点で土地標高が均質化するのは近代の〈３層〉段階である。

本調査地点の地形的特徴を、外来診療棟地点（第１次調査）との比較で検討したい（表11）。河道出土遺物は、後述のように出土遺物から外来診療棟地点でみつかった８世紀後半～９世紀前半の集落と同時期の所産である。したがって、この河道は鹿田遺跡において集落が営まれていた時期の時間幅の中で利用され、かつ埋没したものと考えられる。同地点における８世紀後半～９世紀前半の遺構の上面標高は1.50～1.70mとなる。Ａ・Ｂ地点において河道が埋没し、最終的に湿地化した段階である〈８層〉の上面標高が0.60～0.81mであるため、河道が完全に埋没した９世紀前半においても集落とＡ・Ｂ地点との比高は１ｍ前後を測り、本調査地点の土地の低さがうかがえる。外来診療棟地点との比高は近代の〈２層〉段階まで徐々に縮小しつつも継続する。なお、近代の造成によって形成された現地表面の高さに関しては外来診療棟地点では明確ではないが、同地点で造成土が1.2m前後存在したことから考えれば、造成後も0.4mほど本調査地点が低い状況を推定しうる。

以上のように、弥生時代以来の居住域であった外来診療棟地点と比較すると、本調査地点の弥生時代～平安時代の河道は、鹿田遺跡の北縁をなすものと考えられる。

⑵　遺構と遺物

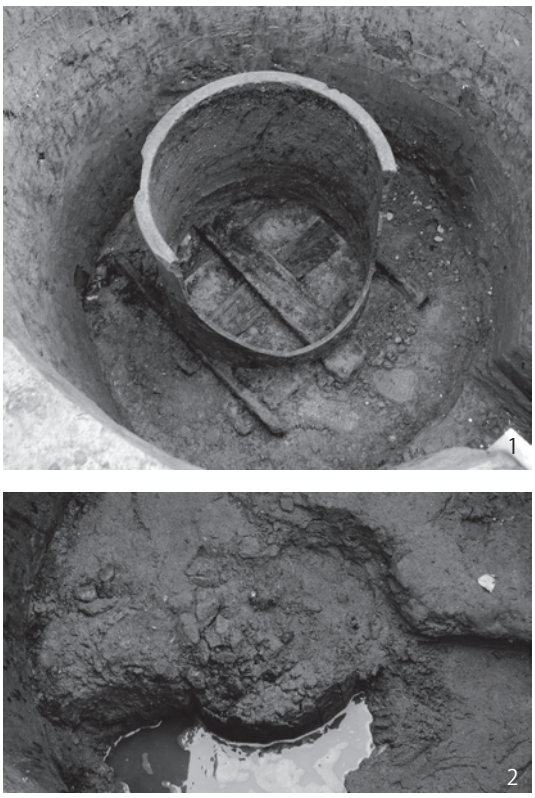
Ａ・Ｂ地点では、平安時代前半の河道に伴う遺物を発見するとともに、鎌倉時代の溝状遺構１条を検出した（表12）。低位部である本調査地点には居住地を示す遺構は認められない。それは本調査地点が通時代的に集落の周辺部であったことを示唆する。〈４層〉～〈12層〉まで、一定量の遺物が出土しているが、出土量は集落により近いＢ地点の方がＡ地点よりも多い。

なおＡ地点南西隅の造成土である〈１層〉掘削の際に、近現代の井戸１基がみつかった（図51）。井戸の掘り形は円形で、〈２層〉上面における径は1.43mを測る。底面標高は－0.50mである。本井戸は底に集水施設として紡錘形の樽（高さ0.60m、径0.46m）を据え、樽の上に板敷きを設置し、その上に素焼きの土管（径0.52m、高さ0.57m）を３個程度重ねて井側とするものであった。板敷きは６枚の板を格子状に組んだもので、土管の沈下、およびそれによる樽の崩壊を防ぐためのものと考えられる。本井戸は、格子状の板敷きの空隙に手押しポンプ等の管先端を挿入する形で使用されていたものと推測する。

表12　Ａ・Ｂ地点検出遺構一覧

ａ．溝

番号	時期	長さ（m）	幅（m）	底面高（m）	深さ（m）	断面形
1	鎌倉時代	15.1	2.82	N：0.73、S：0.73	N：0.23、S：0.29	皿形



１．近現代井戸の井側と板敷き（北東から）
２．板敷きの下の樽（東から）

図51　近現代の井戸（Ａ地点）

ａ．平安時代の遺構・遺物（図52・53）

河道の遺物　Ａ・Ｂ両地点において検出した東西方向にのびる河道関連の層である〈８層〉～〈12層〉からは、平安時代前半の丹塗りの土師器皿２点（図53－３・４）や高杯１点（５）、杯身２点（１）、須恵器杯身２点（２）、須恵器小片５点、陽物形木製品１点（Ｗ１）、墨書を有する板材１点（Ｗ２）、礫が出土した。土器については、13号ポリ袋で１袋分であり、その多くはＢ地点から出土した。図示した１・２・５が〈８層〉、４が〈11層〉、３が〈12層〉からの出土である。３・５が８世紀末、１・２・４が９世紀前半と考えられる。したがって〈11層〉～〈８層〉段階の河道は９世紀前半に埋

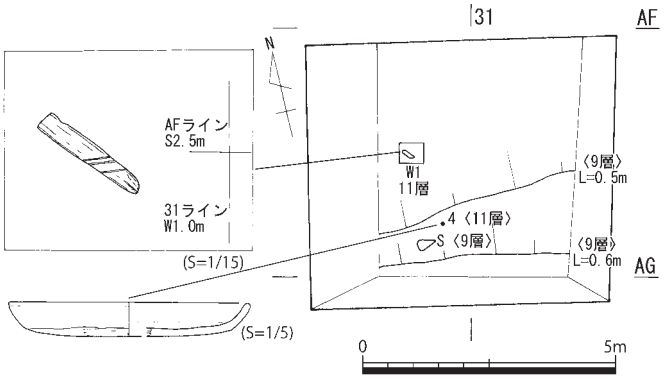
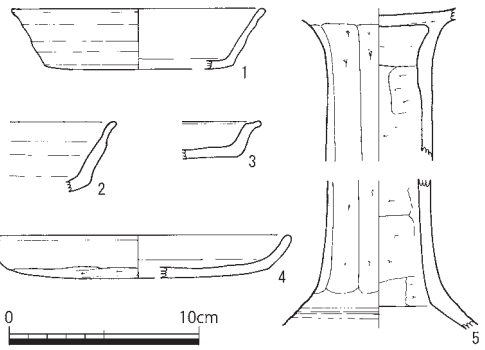
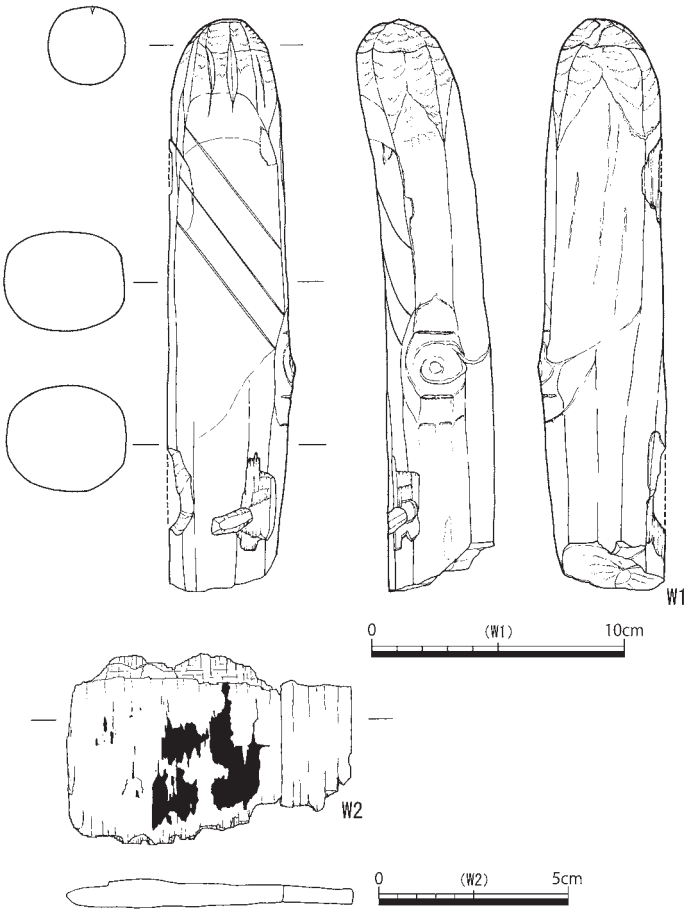


図52　21Ｂ地点河道内遺物出土状況（縮尺1/150）

陽物形木製品出土状況（東から）





番号	種類・器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法　他	胎　土	色調　内面／外面
1	土師器・杯身	＊13.4	＊10	3.3	ヨコナデ、底部ナデ、内外丹塗り、1/4残	微砂、比較的均質	淡(灰)褐、赤橙(丹)
2	須恵器・杯身	－	－	－	ヨコナデ、底部ナデ	微砂、	灰
3	土師器・皿	－	－	－	口縁端部は屈曲し面をもつ、ヨコナデ、内外丹塗り	微砂、均質、赤色粒	淡灰褐、赤橙（丹）
4	土師器・皿	＊16.2	＊13.8	2.2	ヨコナデ、底部ケズリ、内外丹塗り、1/5残	微砂	淡灰褐、赤橙（丹）
5	土師器・高杯	－	－	－	脚柱部内外ケズリ・８面形、杯部ナデ、脚裾部ナデ・沈線２条、外面丹塗り	微砂、均質	淡灰褐／赤橙（丹）

番号	器　種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	樹種	木取り	特　徴
Ｗ１	陽物形木製品	(21.8)	4.8	4.0	サクラ属	丸木	全体形：先端部は先細、上方に若干の反り。断面形：中央部はやや扁平、先端と基部は丸みを保つ。側面の丸みはやや弱い。線刻：上面先端部寄りに３条の線状刻みが平行。加工：木の節部分はカット。先端部は炭化、敲打による加工。先端上面には３条の亀裂があるが、本来のものかどうかは不明確。
Ｗ２	墨書を有する板材	(5.1)	(7.5)	0.8	スギ	板目	四周欠損、片面に墨書有り。

図53　河道内出土遺物（縮尺1/4、1/3、1/2）

没したものと考えられる。〈12層〉については出土土器から８世紀末に埋没した可能性が考えられる。なお図52で表示した〈９層〉の礫には加工は認められなかった。Ｂ地点では陽物形木製品と墨書を有する板材が各１点出土した。陽物形木製品は先端が南東に向いた状態で、〈11層〉のごく緩やかな斜面部から出土した。陽物形木製品については、邪悪なものの侵入を防ぐまじない具として、古代の道の祭祀に使用されたものと推定されている[1)]。陽物形木製品の出土は、河道が集落内外の境界域として意味していたことを示唆する。板材はＢ地点北半から出土した。板材については、墨書の内容については赤外線カメラで観察したものの、全体的に滲んでおり、判読しえなかった。反対側の面には墨書の痕跡は認められない。これらの木製品については層序と出土土器から、９世紀前半に河道に持ち込まれたものと考えられる。

註

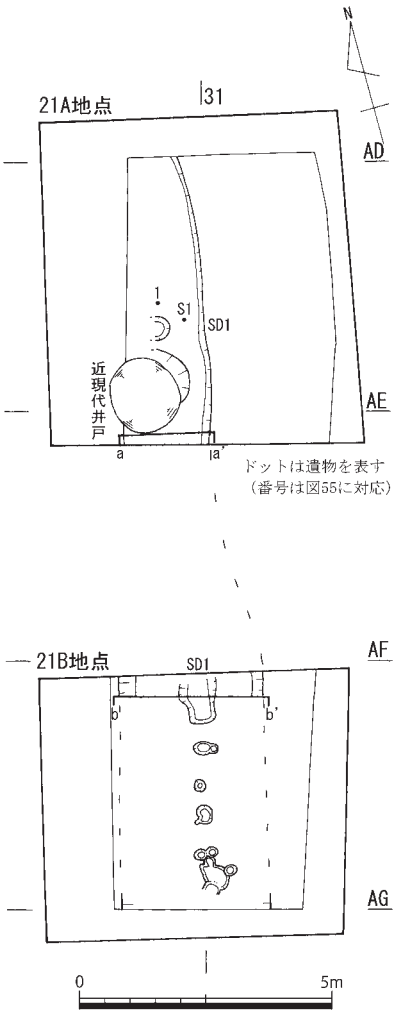
1）平川南2006「道祖神進行の源流―古代の道の祭祀と陽物形木製品から」『国立歴史民俗博物館研究報告』133、pp.317-350

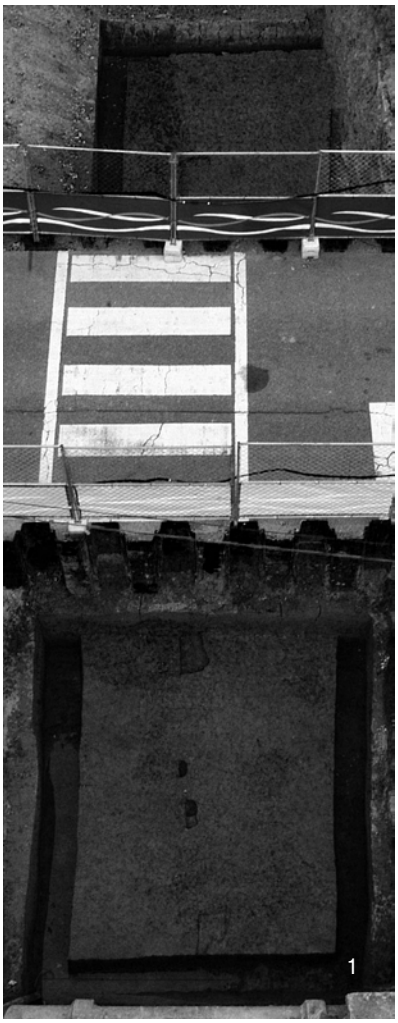
ｂ．鎌倉時代の遺構・遺物

（図54・55）

溝１　鎌倉時代の道路の可能性がある溝状遺構を、Ａ・Ｂ両地点において検出した。検出面は〈６層〉である。

規模は、現状の長さ15.1m、幅2.82m、深さはａ断面で0.23m、ｂ断面で0.29mを測る。本遺構の平面形については、Ａ・Ｂ両地点



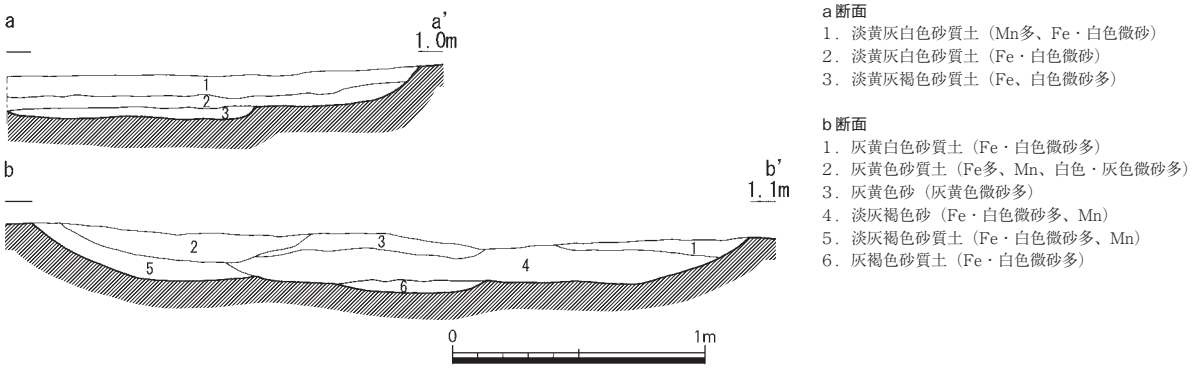


１．溝１（南から）　２．溝１（西から）

図54　21Ａ・Ｂ地点の鎌倉時代遺構（縮尺1/150）

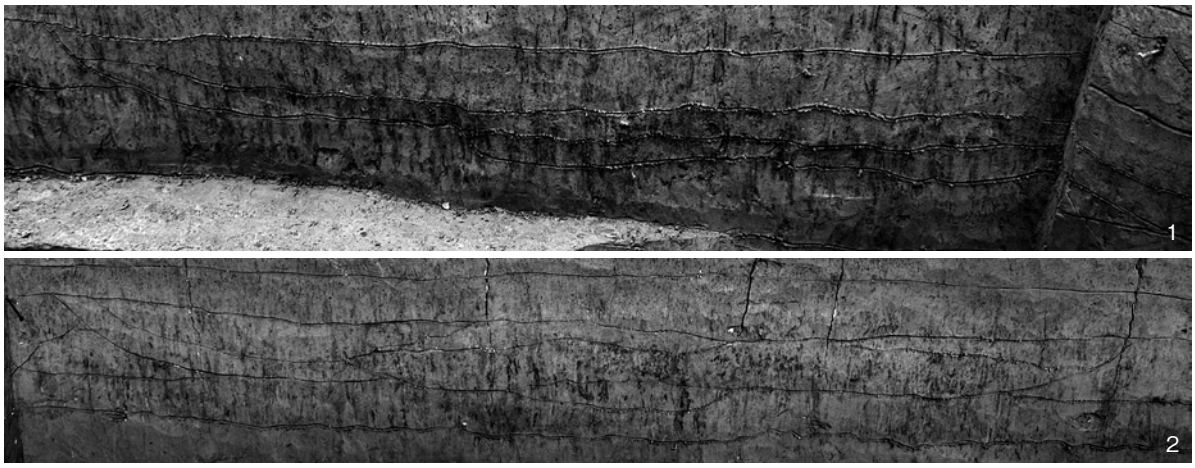
での検出状況を比較すると、Ｂ地点における本遺構は調査区中央に位置し、かつ鹿田地区の地割りにほぼ沿うのに対し、Ａ地点での本遺構は調査区の西半に位置し、かつ北端が座標北方向に振れる傾向がうかがえる。したがって、Ａ・Ｂ地点の間において、本遺構が座標北方向へと屈折するものと考えられる。

断面形は溝全体が幅広で浅い皿形を呈する。埋土は白色微砂を含む灰白色を基調とする砂質土である。ｂ断面６層（灰褐色砂質土）はピット状の窪みの埋土を示すが、他の埋土と同様に白色微砂を多く含む土質である。溝の中央底面には、ピット状のやや不定型な窪みが認められる。窪みは不整円形が主体をなしており、Ａ地点で２箇所、Ｂ地点で11箇所が確認される。Ａ地点では、南半に径0.5m・深さ３㎝、径1.2m・深さ４㎝の円形の窪みが認められる。Ｂ地点では、径0.2～0.35m、深さ３～８㎝の円形ないしは楕円形の窪みが主体をなす。一方で、北辺には長さ0.75m・幅0.70m・深さ４㎝の長方形状の窪みや、南辺には長さ0.6m・幅0.5m・深さ５㎝の不整方

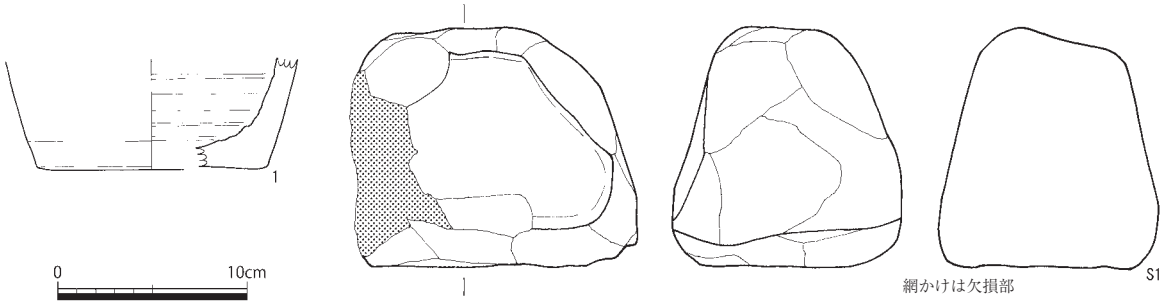


ａ断面
1．淡黄灰白色砂質土（Mn多、Fe・白色微砂）
2．淡黄灰白色砂質土（Fe・白色微砂）
3．淡黄灰褐色砂質土（Fe、白色微砂多）

ｂ断面
1．灰黄白色砂質土（Fe・白色微砂多）
2．灰黄色砂質土（Fe多、Mn、白色・灰色微砂多）
3．灰黄色砂（灰黄色微砂多）
4．淡灰褐色砂（Fe・白色微砂多、Mn）
5．淡灰褐色砂質土（Fe・白色微砂多、Mn）
6．灰褐色砂質土（Fe・白色微砂多）



１．ａ断面（北から）　２．ｂ断面（南から）



番号	種類・器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	形態・手法　他	胎　　土	色　　調
1	瓦質・壺	－	＊12.2	－	ヨコナデ、1/4残	微砂、均質	灰／灰黒、断面：白

番号	種類・器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大高（cm）	重量（g）	石材	形態・手法　他
S1	石造物	14.0	12.4	12.6	3323	花崗岩	屋根の一部、片側短側面欠損、底面・片側長側面は平滑な加工、他の面は粗い加工痕を残す

図55　溝１（縮尺1/30、1/4）

形状の窪みも認められる。

遺物は、高台付土師質土器椀小片が含まれていた他、Ａ地点では瓦質壺片（図55－１）や石造物の一部（Ｓ１）が出土した。本遺構の所属時期は、瓦質壺片およびその他の土師質土器小片から13世紀末頃と考えられる。

本遺構の性格については、浅い皿形をなす断面形状、および底面の凹凸から、通常の溝よりもむしろ道路の整地にかかわる遺構であることが推定される。また本遺構の走行方向は、鹿田地区の地割りから岡山平野の条里地割りへと屈折するものと考えられる。本地点付近が鎌倉時代の地割りの変換点にあたるものと推定される。

なお、本遺構を検出した〈６層〉（Ｂ地点）からは、大麦の圧痕を有する土師質土器片が出土した（巻末図版）。

３．第21次調査Ｄ地点

Ｄ地点においては、遺構は確認されていないが、層序の検討から地形に関するデータが得られたほか、弥生時代後期の土器が出土した。

⑴　層序と地形（図56・57）

Ｄ地点では、包含層の堆積状況を確認するために調査区西端および東端においてサブトレンチを設定した。層序については、これらサブトレンチの所見に基づく。

ａ．層序

〈１層〉　現代建物による攪乱土である。上面標高は3.26～3.32ｍで、厚さは1.92～2.17ｍである。

〈２層〉　暗緑灰色砂質土で両サブトレンチにおいて確認した。上面標高は1.25ｍとなる。遺物は出土していないが、土質から鹿田遺跡の近代層とは異なるものであり、層序から中世～近世層と推定される。

〈３層〉　西サブトレンチでは淡緑灰色砂質土、上面標高は1.09ｍとなる。東サブトレンチでは〈３ａ層〉と〈３ｂ層〉に区分した。〈３ａ層〉は淡灰褐色砂質土で、鉄分が多くマンガンも含む。上面標高は1.15ｍとなる。〈３ｂ層〉は灰茶褐色砂質土で鉄分を多く含む。上面標高は0.86ｍである。いずれの層からも遺物は出土していない。本層の時期については、中世層である可能性ものこるが、東サブトレンチにおいて褐色系の色調を帯びる点から、鹿田遺跡第１次調査地点（外来診療棟）における弥生時代～古墳時代の包含層である可能性が考えられる。

〈４層〉　灰色粘土である。上面標高は西サブトレンチで0.67～0.73ｍ、東サブトレンチで0.72～0.76ｍとなる。土質から湿地状の土層と考えられる。本層より以下の層は、湿地または河道堆積層となる。遺物は出土していないが、下層の土質との類似性から判断すれば、弥生時代後期後半～古墳時代の包含層と推定される。

〈５層〉　暗灰色粘土である。上面標高は西サブトレンチで0.57～0.63ｍ、東サブトレンチで0.65～0.77ｍとなる。土質から湿地状の土層と考えられる。下位の〈６層〉同様の粘土層であることから、本層の時期については弥生時代後期後半の範疇と考えられる。

〈６層〉　暗灰褐色粘土である。上面標高は西サブトレンチで0.53ｍ、東サブトレンチで0.55～0.59ｍとなる。土質から湿地状の土層と考えられる。両サブトレンチにおいて弥生時代後期後半の土器が出土したことから、本層の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

〈７層〉　暗灰色粘土で、有機質を少量含む。上面標高は西サブトレンチで0.34～0.39ｍ、東サブトレンチで0.35～0.40ｍとなる。土質から湿地状の土層と考えられる。遺物は出土していないが、上層と同様の粘土層であり、層序から本層は弥生時代後期に帰属するものと推定される。

〈８層〉　灰色砂質土である。本層以下の層については、東サブトレンチの掘り下げにより確認した。上面標高は0.21～0.26ｍとなる。土質から河道堆積層である可能性がある。遺物は出土していないが、層序から弥生時代中～後期と考えられる。

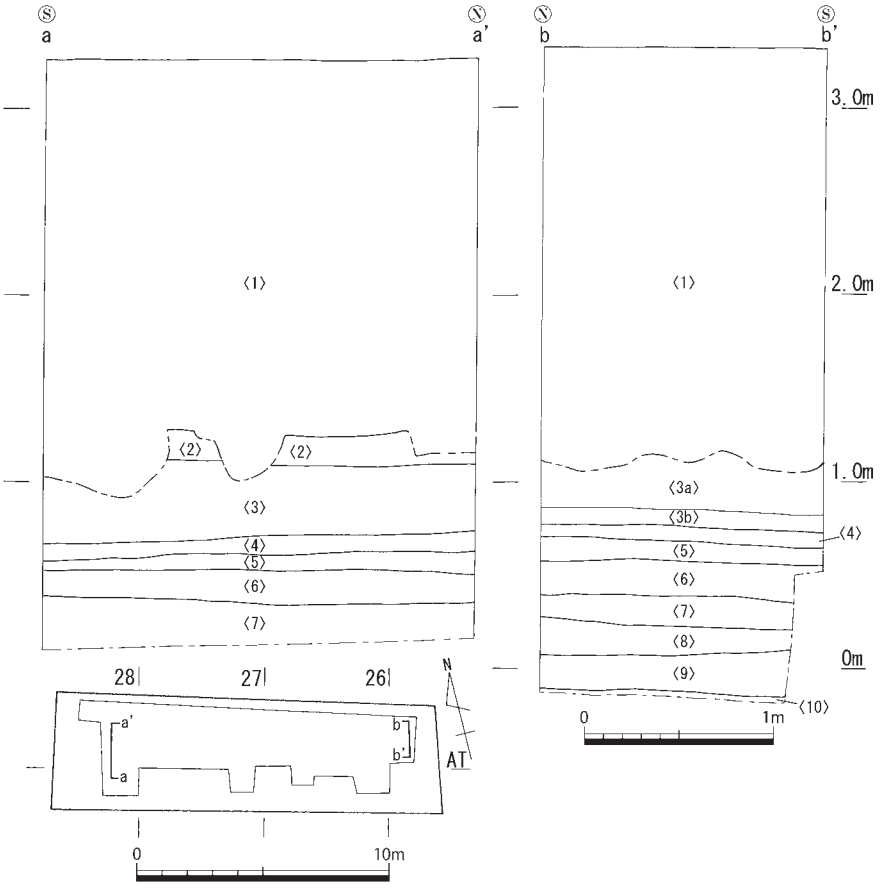
〈９層〉　暗灰色砂混じり粘質土である。上面標高は0.06～0.10ｍとなる。砂混じりの粘質土であることから河道

堆積と考えられる。遺物は出土していないが層序から弥生時代中～後期と考えられる。

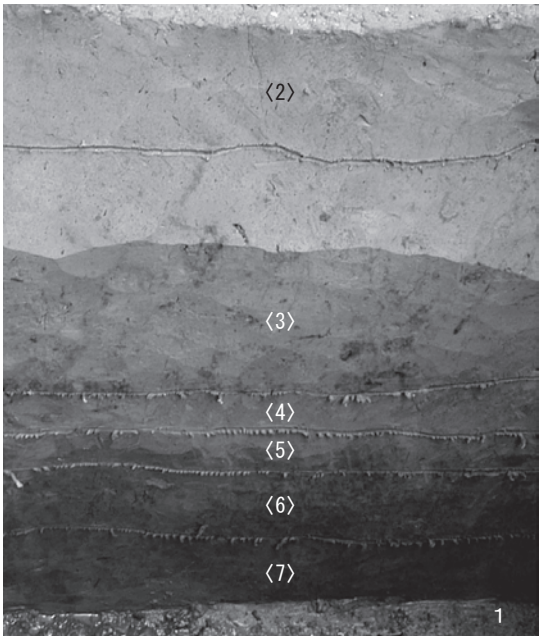
〈10層〉　暗灰茶褐色細砂で、有機質を多く含む。上面標高は－0.15～－0.10mとなる。砂層であることから河道堆積と考えられる。遺物は出土していないが、層序から弥生時代中～後期と考えられる。

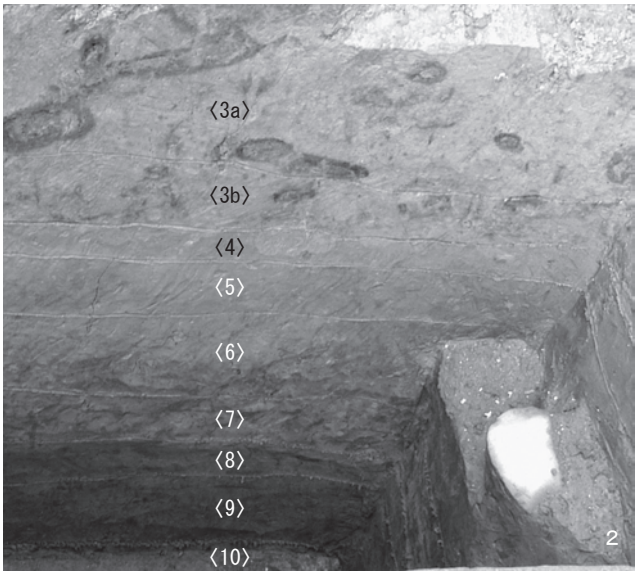
ｂ．地形

本調査区では弥生時代後期を中心とする低湿地および河道が存在していたことが判明した。〈４層〉～〈12層〉は湿地または河道堆積層であり、これらは弥生時代後期を中心に古墳時代まで降る可能性があるものである。こうした低湿地・河道の存在は、外来診療棟地点（第１次調査）[1)]の微高地の端が同地点と本調査地点との間に位置していたことを示唆する。外来診療棟



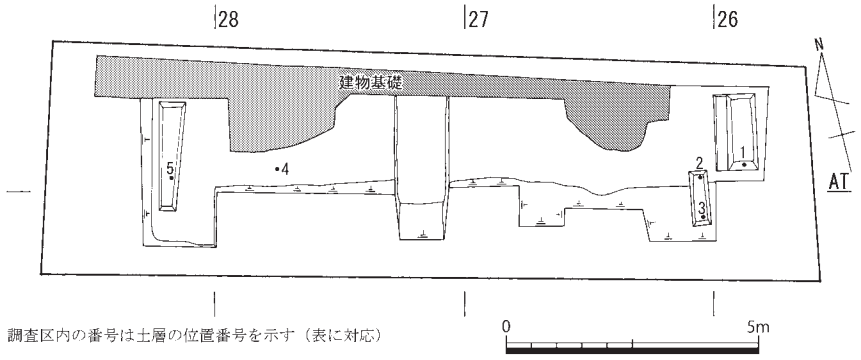
〈１層〉　攪乱土
〈２層〉　暗緑灰色砂質土
〈３層〉　淡緑灰色砂質土（Fe）
〈３ａ層〉　淡灰褐色砂質土（Fe多、Mn）
〈３ｂ層〉　灰茶褐色砂質土（Fe多）
〈４層〉　灰色粘土
〈５層〉　暗灰色粘土
〈６層〉　暗灰褐色粘土
〈７層〉　暗灰色粘土
〈８層〉　灰色砂質土
〈９層〉　暗灰色砂混じり粘質土（灰褐色微～細砂）
〈10層〉　暗灰茶褐色細砂（植物遺体多）





１．ａ断面：21Ｄ地点西サブトレンチ（東から）
２．ｂ断面：21Ｄ地点東サブトレンチ（西から）

図56　21D地点の調査区の土層（縮尺1/40、1/300）



調査区内の番号は土層の位置番号を示す（表に対応）

1．完掘状況（西から）

図57　21D地点平面図（縮尺1/150）

出土遺物の内訳

位置番号	器種	下端標高（m）	図
1	弥生土器壺片	0.580	－
2	弥生土器壺片	0.490	－
3	弥生土器甕片	0.515	－
4	弥生土器高杯	0.804	58－2
5	弥生土器台付鉢	0.434	58－3

地点の弥生時代中期後半～古墳時代初頭の包含層（Ⅴ層）の上面標高が1.8m前後であり、本調査地点で弥生時代後期後半～古墳時代頃の湿地層と推定した〈４層〉上面と比較すると、両者は１ｍ程度の比高がある。なお外来診療棟地点における弥生時代の無遺物の基盤層（Ⅵ層）の標高は1.1m前後となる。

歯学部渡り廊下地点（第19次調査）[2]における弥生時代後期～古墳時代初頭層（８層）の低位部箇所の上面標高が0.55mであり、弥生時代後期土器が出土した〈６層〉の標高と一致する。したがって、本調査地点でみつかった低位部層は、外来診療棟の微高地周辺に形成された低位部と一連をなすものと評価しうる。

註

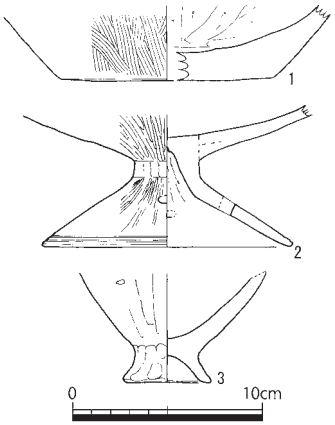
１）吉留秀敏・山本悦世編1988『鹿田遺跡』Ⅰ　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第３冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

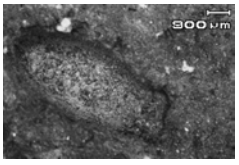
２）野崎貴博2010「鹿田遺跡第19次調査（歯学部渡り廊下新営）」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.31-35

(2)　包含層出土遺物（図57・58）

本調査地点では、包含層および攪乱土から弥生時代後期土器片が出土した。出土量は13号ポリ袋で２袋分相当である。図57の位置番号１～３・５は〈６層〉出土である。位置番号４については、出土レベルとしては〈３層〉に相当するが、建物基礎下の松杭の間で出土したため、原位置をとどめない可能性が高い。図示した高杯（図58－２）、台付鉢（３）の時期は、弥生時代後・３期に相当するものと考えられる。攪乱土中からは弥生時代後期の壺底部片（１）の他、同時期の破片が出土している。周辺における当該期の遺構等の存在を示唆する。

〈６層〉出土土器については、外来診療棟を中心とする調査区南方に広がる微高地から、低位部である本調査地点へと流れてきたものと推定される。　（光本）





３の外面にみられる圧痕

番号	種類・器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	形態・手法　他	胎　土	色　　調
1	弥生土器・壺	－	＊11	－	内面：ケズリ、外面：タテハケ、底部：ケズリ後ナデ、1/5残	微砂	内面／外面：淡黄白
2	弥生土器・高杯	－	＊13.2	－	内面：磨滅、外面：ミガキ、3/4残、脚裾下端に沈線、円孔４ケ所	微砂、均質	内面／外面：乳橙～明橙褐
3	弥生土器・台付鉢	－	4.6	－	内面：ナデ、外面：磨滅、圧痕、脚台部押圧、ナデ、体部・脚台部ススス	微砂角閃石	内面／外面：灰褐

図58　21D地点出土遺物（縮尺1/4）

第３節　自然科学的分析

第21次調査Ｂ地点で出土した墨書を有する板材（図53－Ｗ２：標本番号OKUF-1373）および陽物形木製品（図53－Ｗ１：OKUF-1372）について、森林総合研究所木材特性研究領域・能城修一氏に依頼し、樹種同定を行った。

１．鹿田遺跡第21次調査で出土した木製品の樹種

能　城　　修　一（森林総合研究所木材特性研究領域）

１．スギ　Cryptomeria japonica（Ｌ．ｆ．）Ｄ．Don　スギ科　図59：１ａ－１ｃ（枝・幹材、OKUF-1373）

樹脂道を欠く針葉樹材。早材仮道管の径は大きく、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は多い。黒褐色の樹脂をもつ樹脂細胞が早材の終わりから晩材に散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は孔口が水平に開くごく大型のスギ型で１分野に２個。

２．サクラ属（広義）　Prunus ｓ．ｌ．　バラ科　図59：２ａ－２ｃ（枝・幹材、OKUF-1372）

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に２～３個複合して斜めに連なる傾向をみせて散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性にちかい異性で６細胞幅位。

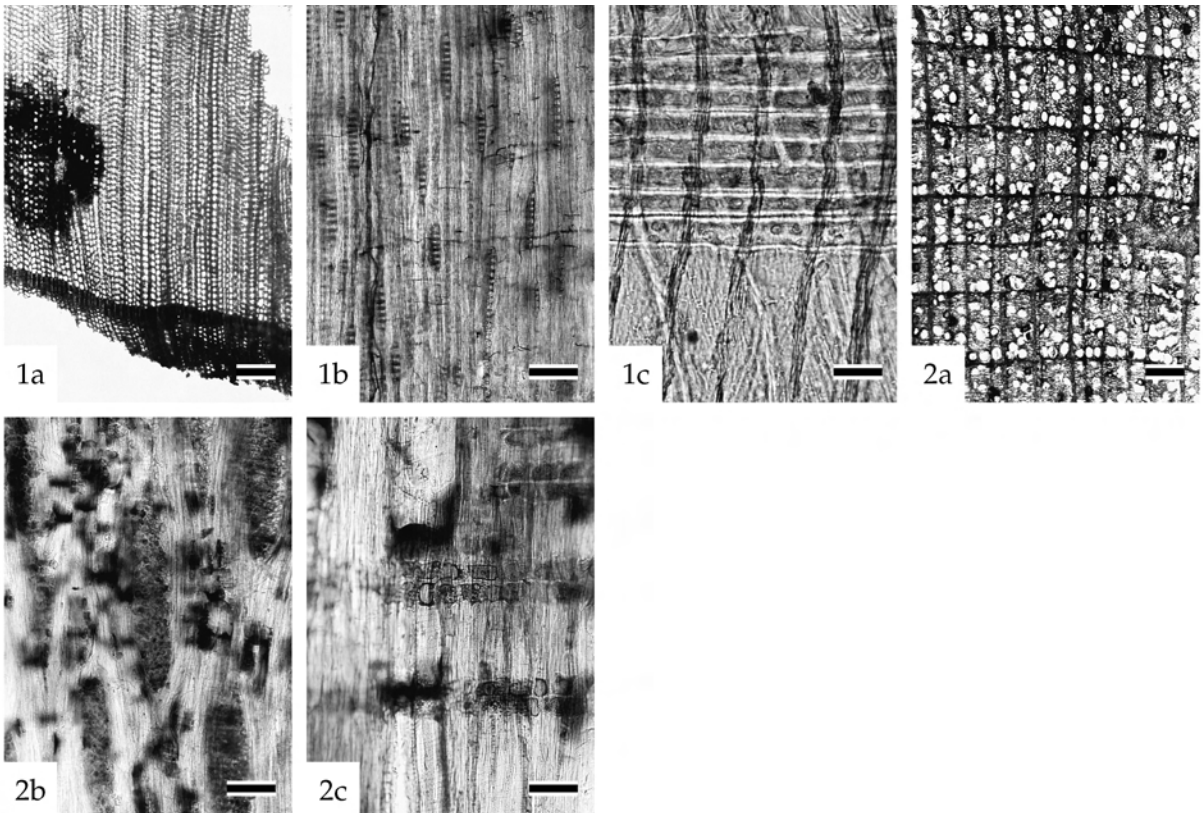


図59　鹿田遺跡第21次調査で出土した木材の光学顕微鏡写真

１ａ－１ｃ：スギ（枝・幹材，OKUF-1373），２ａ－２ｃ：サクラ属（広義）（枝・幹材，OKUF-1372）．ａ：横断面（スケール＝200μｍ），ｂ：接線断面（スケール＝100μｍ），ｃ：放射断面（スケール＝25（１ｃ），50（２ｃ）μｍ）．

表13　鹿田遺跡第21次調査で出土した木材の樹種

標本	No	PL.番号	樹　種　名	製　品　名	木取り	出土場所	本文中掲載番号	時　　代
OKUF-	1372	図59－２	サクラ属	陽物形木製品	丸木	河道	図53－Ｗ１	平安時代前半（９c前）
OKUF-	1373	図59－１	スギ	墨書を有する板材	板目	河道	図53－Ｗ２	平安時代前半（９c前）

第４節　結　　語

鹿田遺跡第21次調査Ａ・Ｂ地点およびＤ地点の調査では小規模な調査であったものの、弥生時代の地形復元のためのデータや、地割りと密接に関連する鹿田遺跡周縁部における平安時代・鎌倉時代の遺構と遺物の様相が明らかとなった。以下、地点ごとに成果をまとめる。

【21次調査Ａ・Ｂ地点】

平安時代

８世紀末～９世紀前半における東西方向の河道の存在が明らかとなり、当該期の集落構造を考える上で重要な成果となった。こうした河道は、周辺における既往の発掘調査や試掘･確認調査の成果とも一致するものである。本調査地点でみつかった平安時代前半の河道が、南の外来診療棟地点を中心とする当該期の集落と外界との境界域となっていたことが、Ｂ地点における陽物形木製品の出土から推定された。Ａ地点の遺物量と比較して南のＢ地点の方が相対的に多いことも、そうした推定を裏付けるものといえる。標高の低い本調査地点の河道と、外来診療棟地点周辺の微高地との間で形成された地形的差異を基盤として、平安時代前半の鹿田荘の領域は構築されていたものと考えられる。

なお本河道は弥生時代に遡る河道の上に形成されたことが、出土した弥生土器から推定された。

鎌倉時代

道路に関連するものと推定される、幅広で浅い溝状遺構がみつかった。本遺構の軸方向がＢ地点では鹿田キャンパスの平安時代に遡る条里と一致するのに対し、Ａ地点では本遺構が西半に偏り、かつ座標北方向へと振れることが判明した。このことから、Ａ・Ｂ地点の間において、地割りが変化することが推定された。Ａ地点における本遺構の方向は、鹿田遺跡の北方の郡衙領の条里の里境と一致するとともに、さらにそれを北に伸ばせば、岡山大学津島キャンパスの南北道路に到達するものと考えられる[1)]。このことから、本遺構は本調査地点付近が鎌倉時代の鹿田荘の境界に位置していたことを示すものとして重要である。

【21次調査Ｄ地点】

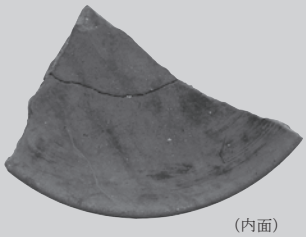
層位データの取得を目的とする部分的な調査を実施したＤ地点においては、弥生時代～古墳時代の河道層・低位部層を確認した。これは、現代の建物基礎によって本来は存在していたと推定される上半の層位が失われていたものの、当該地点周辺の微地形を復元する上で重要な成果と考える。調査開始前には、本地点にまで外来診療棟地点の弥生時代の微高地が広がる可能性も想定していたものの、そうした微高地が本地点にまでは広がらないことが確認された。また、本調査地点の弥生時代の低位部が、歯学部渡り廊下地点の低位部と標高を等しくすることも判明した。一方で、本地点におけるサブトレンチでみつかった弥生時代後期土器の量は少ないものであったが、このことは盛土状遺構から北の低位部にかけて多量の弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が廃棄されていた歯学部渡り廊下地点とは異なるものと考えられる。本調査地点の層位と遺物の様相は、弥生時代後期頃の鹿田遺跡における土地利用の一端を示すものと評価しうる。（光本）

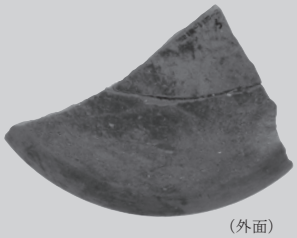
註

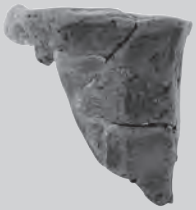
１）池田　晋2011「旭川西岸の条里と津島岡大遺跡」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』第45号、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

図版１　土器・木製品・石製品

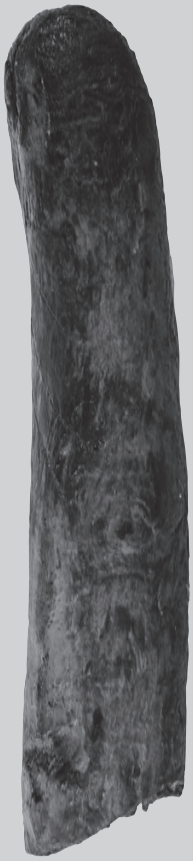
〈21 次調査Ａ・Ｂ地点〉平安時代前半河道　図 53


（内面）


（外面）
4



（土器　Ｓ＝1/3）
5



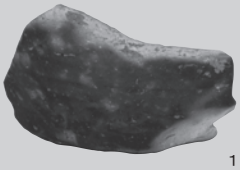
Ｗ１（Ｓ＝1/2）

Ｗ２（Ｓ＝2/3）

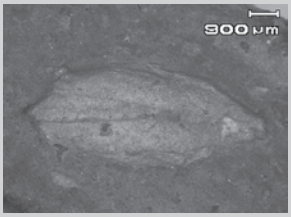
Ｗ２墨書部分拡大（縮尺任意）

〈21 次調査Ｂ地点〉鎌倉時代

溝１　図 55


1

Ｓ１
（土器・石製品　Ｓ＝1/3）



〈６層〉土師質土器
大麦の圧痕

〈21 次調査Ｄ地点〉

包含層　図 58

2

3
（土器　Ｓ＝1/3）

報告書抄録

ふりがな	おかやまだいがくまいぞうぶんかざいちょうさけんきゅうせんたーきよう2010							
書名	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010							
掲載箇所	第Ⅱ部第２章　鹿田遺跡第21次調査－外来診療棟周辺他環境整備に伴う発掘調査－							
編著者名	光本　順（編著）、能城修一							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530　岡山県岡山市北区津島中三丁目１番１号							
発行年月日	2012（平成24）年３月16日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 世界測地系	東経 世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
鹿田遺跡第21次調査Ａ地点	岡山県岡山市北区鹿田町２丁目５番１号	33201	県2288	34度39分08秒	133度55分15秒	2010 11.18～ 12.09	21.2㎡	外来診療棟周辺他環境整備
鹿田遺跡第21次調査Ｂ地点				34度39分08秒	133度55分15秒		22.0㎡	
鹿田遺跡第21次調査Ｃ地点				34度39分06秒	133度55分16秒		17.5㎡	
鹿田遺跡第21次調査Ｄ地点				34度39分06秒	133度55分15秒		59.4㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
鹿田遺跡第21次調査ＡＢ地点	河道	平安時代				陽物形木製品、墨書を有する板材、土師器、須恵器		
	溝	鎌倉時代		溝状遺構		瓦質土器		
鹿田遺跡第21次調査Ｄ地点	包含層	弥生時代				弥生時代後期土器		

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University
Printed in Okayama, Japan

2012年3月16日　印刷
2012年3月16日　発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2010

編集・発行　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市北区津島中三丁目１番１号
（086）251－7290
印刷　友野印刷株式会社

（表紙）　平安時代の陽物形木製品
　　：鹿田遺跡第21次調査（B地点）

（裏表紙）　戦国時代の猿形水滴（軟質施釉陶器）
　　：鹿田遺跡第20次調査（B地点）